

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 6 冊

岸の上遺跡 I

2019. 3

香川県教育委員会

序文

岸の上遺跡は、丸亀市飯山町川原に所在する遺跡であり、国道 438 号道路改築事業に伴い新たに存在が確認された遺跡です。

平成 25 年度から発掘調査が実施され、これまでに、弥生時代から近世までの遺構・遺物が見つかっています。

今回報告を行うのは、遺跡の中でも最も北側の部分に当たります。微高地から低地に向かって地形が下がる地点であり、各時期の遺構面が、河川の堆積に覆われることにより、良好な状態で残存していました。

古墳時代後期には微高地の縁辺に掘立柱建物が築かれました。これは倉庫としての機能が考えられ、2 棟が並んだ状態で見つかっています。各棟の大きさをみても県内の同時期の建物と比べ突出した規模を有しています。

古代には、大型の溝が掘削されます。溝の埋土からは各時期の土器のほか、残りの良い木製品が多量に出土しました。木製品には多種の祭祀具のほか、県内の古代遺跡では 2 例目となる木簡が 3 点も出土しました。岸の上遺跡を横断するように、古代の基幹道路である南海道の推定ラインが通っており、出土遺物や検出された遺構から、遺跡の所在する讃岐国鷓足郡の中でも重要な場所であることがうかがえます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財の理解と関心が深められる一助となれば幸いです。

なお、最後になりましたが、今回の発掘調査に際しては、地元関係者を始め、多数の方のご理解とご協力をいただきました。最後になりますがお礼申し上げます。

香川県埋蔵文化財センター 所長
西岡 達哉

例言

1. 本報告書は、国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴い実施した、香川県丸亀市飯山町川原に所在する岸の上遺跡の報告である。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、発掘調査・整理作業は香川県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本報告書で報告する範囲の発掘調査期間と担当者は次のとおりである
期間：平成 26 年 11 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日、平成 27 年 4 月 1 日～6 月 30 日
担当：西村尋文、小野秀幸、真鍋貴匡（平成 26 年度）
佐藤竜馬、西村尋文、信里芳紀、竹内裕貴（平成 27 年度）
4. 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の関係機関や地元の方々のご協力を得た。記して謝意を表したい。
地元水利組合、大久保徹也、近藤武司、谷 梢、奈良文化財研究所史料研究室
5. 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施し、編集・執筆は竹内が担当した。
6. 本報告書で用いる座標系は国土座標（世界測地系）第Ⅳ系である。方位の北は国土座標系Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
7. 本書においては、遺構は次の略号により表示する。
SB 建物 SP 柱穴 SD 溝 SK 土坑 SE 井戸 SX 不明遺構 SZ 畦畔 SA 柵列
8. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高（単位m）である。
9. 遺構断面図中の色調及び観察表の一部の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。
10. 各資料の年代決定に際して参考にした文献及びそのほかの参考文献は本文末に掲載した。

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 整理作業の経過	1
第3節 調査体制	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法と調査区の設定	5
第2節 基本層序	5
第3節 4区の調査成果	12
第4節 5区の調査成果	60
第5節 6区の調査成果	95
第4章 自然科学的分析の成果	
第1節 岸の上遺跡における植物珪酸体分析	112
第2節 岸の上遺跡出土木製品の樹種同定	118
第3節 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定	121
第5章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	130
第2節 SD4028 出土木簡と木製品について	135
遺物観察表	139
写真図版	

插图目次

第1図	遺跡の位置	1	第38図	SD4028 木樋出土状況	32
第2図	周辺遺跡分布図	4	第39図	SD4028・SD4030・SD6006 断面	33
第3図	調査区割	5	第40図	SD4028 上層・最上層出土遺物	34
第4図	5区調査区西壁土層断面	7～8	第41図	SD4028 中層出土遺物1	35
第5図	6区調査区西壁土層断面図	9～10	第42図	SD4028 中層出土遺物2	36
第6図	6区調査区北壁土層断面図	11	第43図	SD4028 下層出土遺物1	37
第7図	2a層・3a層・3b層・4層・5層出土遺物	12	第44図	SD4028 下層出土遺物2・最下層出土遺物	38
第8図	4区1面平面	13	第45図	SD4028 再掘削流路出土遺物	38
第9図	SD4001 出土遺物	14	第46図	SD4028 層位不明遺物	39
第10図	SD4002 出土遺物	14	第47図	SD4028 中層出土木器1	40
第11図	SD4005 出土遺物	14	第48図	SD4028 中層出土木器2	41
第12図	SD4011 平・断面 出土遺物	15	第49図	SD4028 中層出土木器3	42
第13図	SE4001 平・立面	16	第50図	SD4028 下層出土木器1	44
第14図	SE4001 出土遺物1	17	第51図	SD4028 下層出土木器2	45
第15図	SE4001 出土遺物2	18	第52図	SD4028 下層出土木器3	46
第16図	SX4002 出土遺物	19	第53図	SD4028 層位不明木器	47
第17図	SX4004 出土遺物	19	第54図	SD4030 出土土器	47
第18図	SX4006 平・断面	20	第55図	SD4030 出土木器	47
第19図	SD4004 出土遺物	21	第56図	4区2面平面	48
第20図	SD4007 出土遺物	21	第57図	SD4017 平・断面	49
第21図	SD4009 平・断面	21	第58図	SP4013 平・断面	49
第22図	SD4010 出土遺物	22	第59図	4区3面 平面	51
第23図	SD4024 平・断面	22	第60図	SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平・断面	52
第24図	SD4024 出土遺物	22	第61図	SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平・断面(2)	53
第25図	SD4025 出土遺物	22	第62図	SB4002 平・断面	54
第26図	SD4021 平・断面	23	第63図	SB4003 平・断面	55
第27図	SD4021 出土遺物1	25	第64図	SB4003 平・断面(2)	56
第28図	SD4021 出土遺物2	26	第65図	SB4003(SP4053) 平面・出土遺物 SB4002 出土遺物	56
第29図	SK4001 平・断面	27	第66図	3面土器溜り	57
第30図	SK4002 平・断面	27	第67図	4区土器溜まり出土遺物	57
第31図	SP4017 平・断面	27	第68図	SD4100, SD4031, SD4033, SD5020 平・断面	58
第32図	SP4024 平・断面	27	第69図	SD4019 出土遺物	59
第33図	4区1面 柱穴群平面・出土遺物1	29	第70図	SD4018 平・断面	59
第34図	4区1面 柱穴群出土遺物2	30	第71図	SX4008 平・断面	59
第35図	SP4035 平・断面	31	第72図	SD4032 平・断面・出土遺物	59
第36図	SP4035 出土遺物	31	第73図	4区遺構外出土遺物	60
第37図	SD4028・SD4030・SD6006 平面	32	第74図	5区1面 平面	61

第 75 图	SD5001 平·断面	62	第 113 图	SZ5013 平·断面	89
第 76 图	SD5002 平·断面	63	第 114 图	5 区 3 面 平面	90
第 77 图	SD5004 平·断面	64	第 115 图	SD5017 平·断面	91
第 78 图	SD5007A·B 平·断面	65	第 116 图	SD5020 出土遺物	91
第 79 图	SK5002 出土遺物	66	第 117 图	SD5019 平·断面	91
第 80 图	SK5003 平·断面	66	第 118 图	SD5021 平·断面	91
第 81 图	SK5003 出土遺物	66	第 119 图	SD5023 平·断面	92
第 82 图	SX5005 平·断面	66	第 120 图	SK5018 平·断面	92
第 83 图	SX5007 出土遺物	66	第 121 图	SA5001 平·断面	92
第 84 图	SX5008 平·断面	66	第 122 图	SA5002 平·断面	93
第 85 图	SX5008 出土遺物	68	第 123 图	SP5033 平·断面	93
第 86 图	SX5009 出土遺物	69	第 124 图	SP5038 平·断面	93
第 87 图	SX5010 出土木器	69	第 125 图	SP5042 平·断面	93
第 88 图	SD5003, SD5005 平·断面	70	第 126 图	SP5043 平·断面	93
第 89 图	SD5003 出土遺物 1	72	第 127 图	SP5044, SP5045, SP5046 平·断面	93
第 90 图	SD5003 出土遺物 2	73	第 128 图	SP5047, SP5048 平·断面	93
第 91 图	SD5005 出土遺物	74	第 129 图	SP5049, SP5050 平·断面	94
第 92 图	SD5006 出土遺物	74	第 130 图	SP5051, SP5052 平·断面	94
第 93 图	SD5008 平·断面	75 ~ 76	第 131 图	SP5053 平·断面	94
第 94 图	SD5008 出土遺物 1	78	第 132 图	SP5054 平·断面	94
第 95 图	SD5008 出土遺物 2	80	第 133 图	SP5055 平·断面	94
第 96 图	SD5008 出土木器	81	第 134 图	SP5057, SP5058 平·断面	94
第 97 图	SK5004, SK5008 平·断面	82	第 135 图	SX5011 平·断面	94
第 98 图	SK5004 出土遺物	82	第 136 图	SX5012 平·断面	95
第 99 图	SK5005 出土遺物	82	第 137 图	5 区遺構外出土遺物	95
第 100 图	SK5007 平·断面	82	第 138 图	5 区遺構外出土木器	96
第 101 图	SK5007 出土遺物	82	第 139 图	6 区 1 面 平面	97
第 102 图	SK5010 出土遺物	83	第 140 图	SK6001 出土遺物	98
第 103 图	SK5001 平·断面	83	第 141 图	SD5003 平·断面	98
第 104 图	SK5017 出土遺物	83	第 142 图	SK6002 平·断面	98
第 105 图	5 区 2 面 平面	84	第 143 图	SK6003 出土遺物	98
第 106 图	SD5009 出土遺物	85	第 144 图	SK6004 出土遺物	98
第 107 图	SP5007 平·断面	85	第 145 图	SD6004 出土遺物	99
第 108 图	SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 平·断面 1	86	第 146 图	SD6005·SD6006·SK6004 出土遺物	99
第 109 图	SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 断面 2	87	第 147 图	SD6006 出土木器	99
第 110 图	SZ5006 平·断面	87	第 148 图	SD6007 出土木器	100
第 111 图	SZ5008 平·断面	88	第 149 图	SE6001 平·断面	100
第 112 图	SZ5009 平·断面	88	第 150 图	SE6001 出土遺物	100

第 151 図	SE6001 出土木器	101	第 167 図	6 区遺構外出土遺物	111
第 152 図	SD6003 出土遺物	102	第 168 図	岸の上遺跡 4-4 区西壁における植物珪酸体分析結果	116
第 153 図	SD6008 出土木器	103	第 169 図	岸の上遺跡の植物珪酸体	117
第 154 図	SP6008 平・断面	103	第 170 図	岸の上遺跡出土木材	120
第 155 図	6 区 3 面 平面	104	第 171 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 1	127
第 156 図	SD6011 平・断面	105	第 172 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 2	128
第 157 図	SD6013 平・断面	106	第 173 図	岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および 走査型電子顕微鏡写真 3	129
第 158 図	SD6014 平・断面	107	第 174 図	遺構の変遷 1	132
第 159 図	SD6015 平・断面	107	第 175 図	遺構の変遷 2	133
第 160 図	SK6005 平・断面	108	第 176 図	遺構の変遷 3	134
第 161 図	SK6006 平・断面	108	第 177 図	SD4028 出土木簡 1 赤外線写真	135
第 162 図	SP6001 平・断面	108	第 178 図	SD4028 出土木簡 2 赤外線写真	136
第 163 図	SP6007 平・断面	108	第 179 図	SD4028 木簡出土地点	137
第 164 図	SX6002 平・断面	108			
第 165 図	SX6003 平・断面	109			
第 166 図	SX6004 平・断面	109			

表目次

表 1	岸の上遺跡における植物珪酸体分析結果	115	表 5	土器観察表	139
表 2	樹種同定結果	118	表 6	瓦観察表	158
表 3	岸の上遺跡出土木製品・木材の 樹種同定結果一覧	121	表 7	木器観察表	160
表 4	岸の上遺跡出土木製品・木材の 樹種同定結果	125～126	表 8	石器観察表	162

写真図版目次

図版 1	遺構写真 1 調査地遠景 (南から) 6 区 3 面全景 (直上から)		SP4044	検出状況
図版 2	遺構写真 2 6 区 3 面全景 (南から) 6 区 SD4028 土層断面 (南東から)		SP4053	検出状況
図版 3	遺構写真 3 6 区 調査区西壁 (SD4028 部分) SD4028 木簡出土状況 SD4028 木簡出土状況 2 SD4028 木製品出土状況 SD4028 土師器出土状況		SP4053	断面及び遺物出土状況
図版 4	遺構写真 4 6 区 SD5030、SP6003 検出状況 (南から) 4 区 SB4002、SB4003 検出状況 (北から)		SP5056	検出状況
図版 5	遺構写真 5 SP6003 断面 SP5008 断面 SP4056 断面		SD4019	断面
		図版 6	遺構写真 6 4-2 区 1 面完掘状況 (南から) SD4005、SD4006 完掘状況 SD4004 断面 SE4001 検出状況 SE4001 断面 SD4017 断面 4 区 土器だまり検出状況	
		図版 7	遺構写真 7 5 区 1 面完掘状況 (東から) SX5008 断面 SD5003 下層足釜出土状況 SD5003 完掘状況	

図版 8	遺構写真 8 5 区 2 面完掘状況（南から） SZ5001 検出状況 SZ5002 検出状況 SZ5013 土器出土状況 5 区 畦畔検出状況	SD5008 縦断面 SD5008 底面の状況 5 区 2 面北半 完掘状況
図版 9	遺構写真 9 4 区 SD4021 柱穴群完掘状況（北から） SD4021 完掘状況 4 区 SD4021 断面 SD4030 断面 SD4031 断面	図版 11 遺構写真 11 5 区 3 面完掘状況 5 区 3 面完掘状況（遠景）
図版 10	遺構写真 10 SD5008 完掘状況（南から） SD5008 断面（南から） SD5008 土器出土状況 SD5009 断面（西から）	図版 12 遺構写真 12 5 区 3 面南側 遺構検出状況（東から） 6 区 1 面完掘状況
		図版 13 遺構写真 13 6 区 西壁土層 6 区 北壁土層
		図版 14 遺構写真 14 5 区 西壁土層 5 区 西壁土層 2
		図版 15～図版 30 出土遺物写真 1～16

付図目次

付図 1	岸の上遺跡 I	1 面	平面図
付図 2	岸の上遺跡 I	2 面	平面図
付図 3	岸の上遺跡 I	3 面	平面図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

平成24年度、国道438号（飯山工区）の建設に伴い、域内の埋蔵文化財の確認が行われた。その結果、丸亀市飯山町川原付近において、遺構・遺物が確認されたため、これらを「岸の上遺跡」として周知した。

国道の整備事業に伴い実施された発掘調査は、平成25年度～平成30年度までの間に、断続的に行われている。

岸の上遺跡として調査を行った範囲の中で、本書で報告する部分については、平成26年11月～3月、平成27年4月～6月の期間で調査を行った範囲の一部であり、岸の上遺跡の範囲のうち、北側の部分にあたる2,225㎡である。



第1図 遺跡の位置

第2節 整理作業の経過

出土遺物の洗浄・注記作業については、平成29年度までに完了した。報告書作成のための整理作業（出土遺物の接合・抽出・実測・製図、遺構図の製図等）は平成29年6月より開始し、翌年3月まで行った。整理作業の対象とした遺物は28リットル入りコンテナで92箱に上った。

第3節 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制については、次のとおりである。

平成 26 年度発掘調査体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田 宏	総括	所長	真鍋 昌宏
	副課長	川上 泰		次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	前田 和也(兼)
	副主幹	松下 由美子		主任	俣野 英二
文化財グループ	主事	和木 麻佳		主任	寺岡 仁美
	課長補佐	片桐 孝浩		主任	中川 美江
	主任文化財専門員	山下 平重		主任	高木 秀哉
	主任文化財専門員	松本 和彦	調査課	課長	岩崎 昌平
				主任文化財専門員	森 格也
				文化財専門員	西村 尋文
				技師	小野 秀幸
				嘱託	真鍋 貴匡
				嘱託	今井 由佳
				嘱託	藤井 菜穂子
				嘱託	名倉 美保
				嘱託	井上 加奈子
				嘱託	脇 恵

平成 27 年度発掘調査体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田 宏	総括	所長	真鍋 昌宏
	副課長	小柳 和代		次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	前田 和也(兼)
	副主幹	松下 由美子		主任	中川 美江
文化財グループ	主事	和木 麻佳		主任	寺岡 仁美
	課長補佐	片桐 孝浩		主任	丸尾 麻知子
	主任文化財専門員	山下 平重		主任	岩崎 昌平
	主任文化財専門員	乗松 真也	調査課	調査課長	高木 秀哉
				主任文化財専門員	森 格也
				技師	佐藤 竜馬
				嘱託	竹内 裕貴
				嘱託	井上 加奈子
				嘱託	藤井 菜穂子
				嘱託	脇 恵

平成 29 年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	小柳 和代	総括	所長	増田 宏
	副課長	片桐 孝浩		次長	森 格也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	森 格也(兼)
	課長補佐	中川 聡朗		副主幹	齋藤 政好
文化財グループ	副主幹	松下 由美子		主任	高橋 範行
	課長補佐	片桐 孝浩(兼)		主任	丸尾 麻知子
	主任文化財専門員	信里 芳紀		主任	岩崎 昌平
	主任文化財専門員	乗松 真也		主任	横井 隆史
			資料普及課	資料普及課長	古野 徳久
				技師	竹内 裕貴
				嘱託	青屋 真理
				嘱託	川井 佐織
				嘱託	小早川 真由美
				嘱託	西本 智子
				嘱託	宮崎 直子

第2章 周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

岸の上遺跡の位置する丸亀平野は、土器川・金倉川による扇状地が主体となる。岸の上遺跡は丸亀平野の東部に位置する。

調査地の東側 300 mには大東川、1.5km 西側には県内唯一の一級河川である土器川が流れ、両河川に挟まれる形で遺跡は立地している。周辺に残る地割をみても、条里型の地割をよく残しており、岸の上遺跡を横断する形で古代南海道も復元されている(金田 1989)。

岸の上遺跡の調査ではその条里型地割の一部がとらえられたほか、遺跡の北には河道跡が確認される。

このほかにも遺跡の南側にも河道の埋没痕跡を地形で確認できる部分もある。

ここで、現在の景観から復元できる調査地周辺の状況を整理しておきたい。

まず、岸の上遺跡の西側および南側に、条里型地割と合致する方向に沿わない地割の乱れが認められる。この箇所は現在も地形の起伏が確認できる埋没河道の痕跡である。それ以外にも、数か所の地割の乱れが周辺に見られる。これらは方向から土器川の旧河道にあたる部分の開発が周囲に比べ遅れ、その形が残された跡である。これらの流路が調査地の南北に流れ、それらに挟まれる形で岸の上遺跡は立地している。調査地西には「真時」といった地名が存在し、周囲に遺跡の存在も確認されるのに対し、岸の上遺跡付近は川原と呼ばれており、河道や低地に囲まれた微高地上に岸の上遺跡は位置している。

第2節 歴史的環境

調査地周辺における遺跡の状況を中心にまとめる。

旧石器時代、縄文時代については、明確な遺構は確認されていないものの、岸の上遺跡の北側で調査された北岸南遺跡では、縄文時代の石器が確認されている。今回調査でも、この時期に相当する石鏃が見ついている。

弥生時代については、先述の北岸南遺跡において弥生時代の遺構・遺物が見ついているほか、遺跡の北に位置する飯野山の東側裾付近の、東坂元北岡遺跡や東坂元三ノ池遺跡等で遺構・遺物が確認されている。さらに北上すると、現在の坂出市川津町付近では、下川津遺跡において弥生時代前期、後期～終末期の遺構・遺物が多く確認されているほか、川津一ノ又遺跡などでも、弥生時代中期～後期の遺構が確認される。弥生時代以降の集落が多少の位置の立地の変更はあるものの、存続している状況が確認できる。また、飯野山の山頂についても、当該期の土器が採集されており、いわゆる高地性集落としての可能性が考えられているが、実態は明らかではない。

続く古墳時代については、消失したものも多いが、特に、古墳時代中期～後期以降の古墳が認められる。調査地から東の坂出市との境界には、古墳時代中期～後期の古墳群である城山古墳群、終末期の古墳である弥栄古墳群などが所在する。飯野山の東西裾付近にも古墳群が確認されるほか、岸の上遺跡から南東の丘陵上にも古墳群が点在する。

それとは対照的に、この時期の集落は、岸の上遺跡のほかは、近隣では確認されていない。遺跡の東を流れる大東川の下流域の川津遺跡群においては、古墳時代後期以降の集落が下川津遺跡などで確認される。岸の上遺跡の南の名遺跡において、古墳時代の建物などが検出されている。

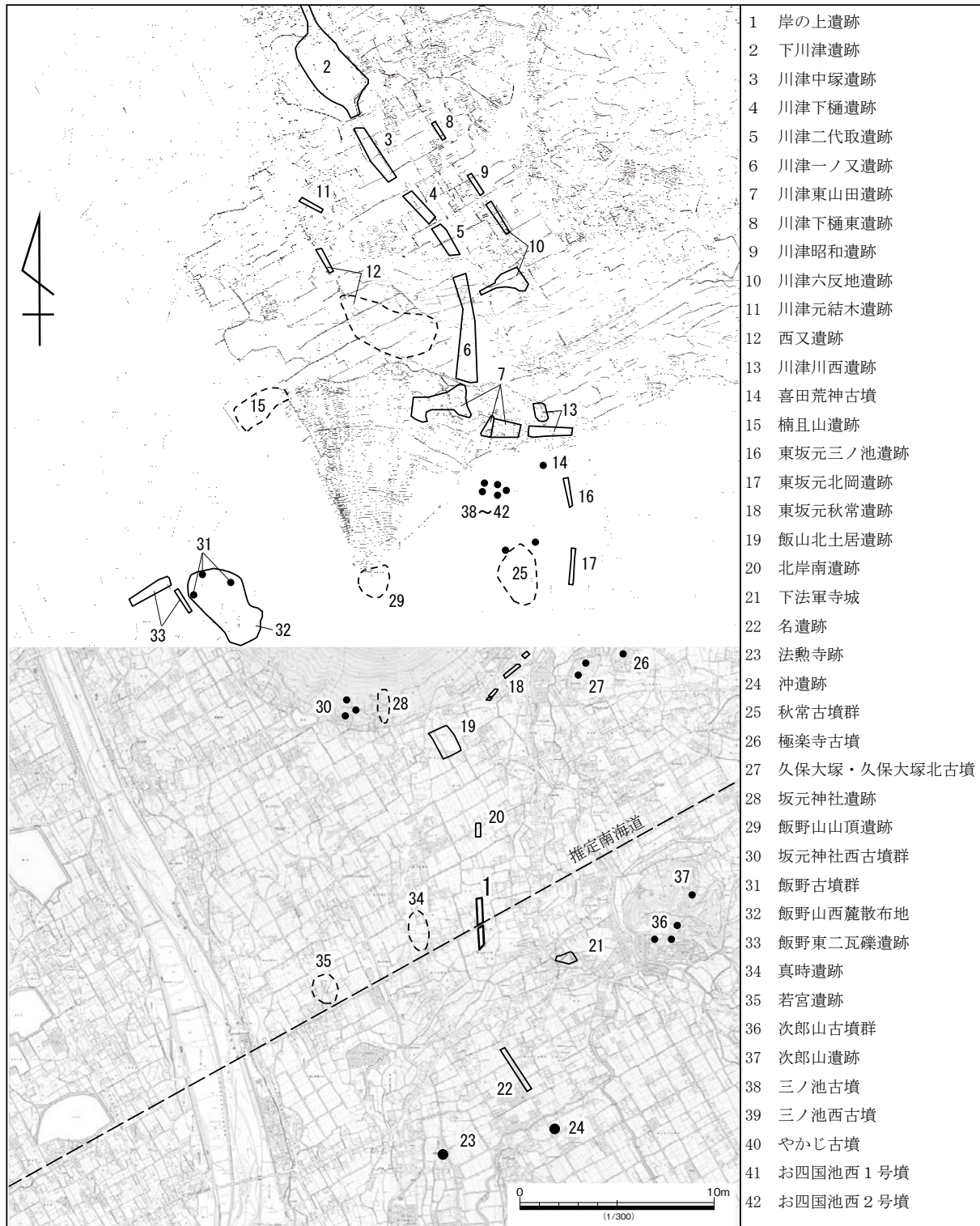
古代以降については、ちょうど岸の上遺跡の中央部分を横断するように、南海道が施工されたと考えられる。丸亀平野の南海道については、土器川以東においては、発掘調査にて確認された事例はないが、岸の上遺跡のこれまでの発掘調査において、道路側溝と考えられる遺構が発見されている。

また、それ以外の遺跡として特筆すべきは、岸の上遺跡から南約700 mに、古代寺院である法勲寺が存在する。7世紀末の瓦が採集されており、岸の上遺跡などの官衙的な性格を持つ遺跡との関連が注目される。

このほか、下川津遺跡やその周辺の遺跡においては、古代以降の建物が多く確認されており、特に下川津遺跡では大型のものも含め、通常の集落とはやや異なる配置の建物が検出されているほか、官衙遺跡でしばしばみられる遺物が多く見ついている。川津一ノ又遺跡でも、同様に規格性を持って並んだ建物群が見ついている。

中世以降については、遺跡の北側、飯野山の南麓付近の飯山北土居遺跡や東坂元秋常遺跡で、居館の堀や屋敷地が確認されている。調査地の近隣の中世の状況は不明であるが、島田寺や下坂神社などは、中世にさかのぼる可能性もある。

近世以降においては、この地域は大部分が耕作地とされ、寺社のほかは広大な田が広がる景観が形成されていたと考えられる。



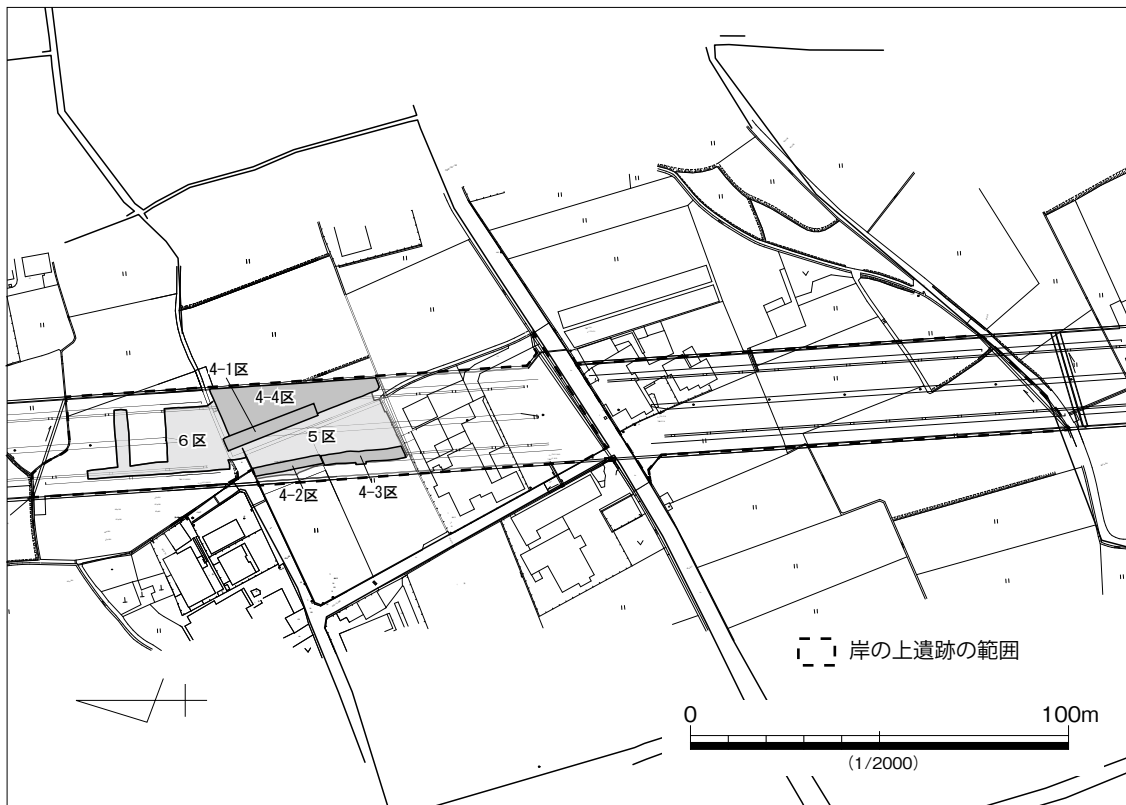
(丸亀市・宇多津町・坂出市都市計画図の一部を縮小して使用)

第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と調査区の設定

岸の上遺跡の調査区割については、現状の地割を踏襲する形で調査区を設定し、調査工程の都合によりさらにそれらを細分している。調査区の配置については、第3図に示した。これらは調査時の名称を踏襲しており、今回はその中でも、岸の上遺跡の北側にある4～6区の報告を行う。特に4区については、調査時点で4-1区～4-4区まで細分されているが、今回は4区として一括して報告する。また、今回報告範囲より南に位置する調査区については、本報告書では報告しない。



第3図 調査区割

第2節 基本層序

今回報告を行う4～6区の基本的な層序について整理を行う。調査区の南北方向の堆積を示す5・6区の西壁の断面を第4・5図に示し、調査区の東西の堆積については、北端にあたる6区の北壁の断面を第6図に示している。以下に、これらの断面をもとに基本層序について説明する。

基本層序とその理解

岸の上遺跡は、弥生時代～近世までの遺構が確認されるが、それぞれが大別3面の遺構面に分かれて存在している。立地と環境の項でも説明したが、岸の上遺跡は南北端の標高がいずれも下がることから、その部分については堆積状況が近隣の遺跡より比較的残っていたといえる。

各層位の大まかな堆積とその年代について整理し、遺構面の解釈を行いたい。遺跡内の大別の層位に

については、現在の表土も含めて、1～5層に大別し、それらをさらに細分している。1～5層として取り上げた遺物のうち、図化可能なものについては、第7図に示した。

1層は表土及び近現代の耕作土である。

2層とした層については、粒径の粗い粗砂や礫を多く含む。2層は2a層・2b層に細分でき、それらの堆積後の遺構の年代や、2層中に含まれる遺物の年代を考えると、8世紀前半までには堆積していたものと考えられる。調査区の中でも、地形が下がってゆく北へ向かうにつれて、2層の層厚は厚くなる。この2層の上面において、1面が形成される。

3層としたものは褐色の細粒砂を中心としている。この上面を2面とし調査を行った。遺構はあまり形成されていないが、4、5区において畦畔が確認できたことから、水田として利用されたと考えた。詳細は第4章にて報告するが、植物珪酸体分析からも短期間、もしくは残存状況は良好ではない水田耕作の可能性も想定される。3層から出土した遺物については、7世紀前半の年代が考えられる。上面に形成される水田の畦畔からも、同時期の須恵器が確認されており、7世紀前半代に堆積し遺構面が形成されたのち、8世紀初頭までに遺構面が埋没したと想定される。3a層、3b層に細分される。

4層は黒褐色の粘質土を主体とする。4層の上面より弥生時代中期～古墳時代の遺構が形成されており、3面とした。5層からの出土遺物として、弥生土器壺の口縁が出土している。おそらく弥生時代前期のものであり、3面の遺構の年代のうち、これらをさかのぼるものが確認できないため、この土器の年代が4層の堆積年代に近いものとする。

5層は黄色のシルト層を主体とする。近隣の遺跡においても基盤層としてよく見られるものであり、この層中からの明確な遺物の出土は見られない。周辺の調査や、この上面での遺構検出時に出土した資料から（第7図-6）、縄文時代に形成された層と考える。

以上の大別層位をもとに、遺構面は3面確認された。なお、調査時に各遺構面に帰属している遺構を検出できておらず、下層の遺構面で検出した遺構については、遺物や遺構の性格から報告において帰属面を変更している。各遺構面で検出された遺構の年代幅についてはおおむね以下の通りである。

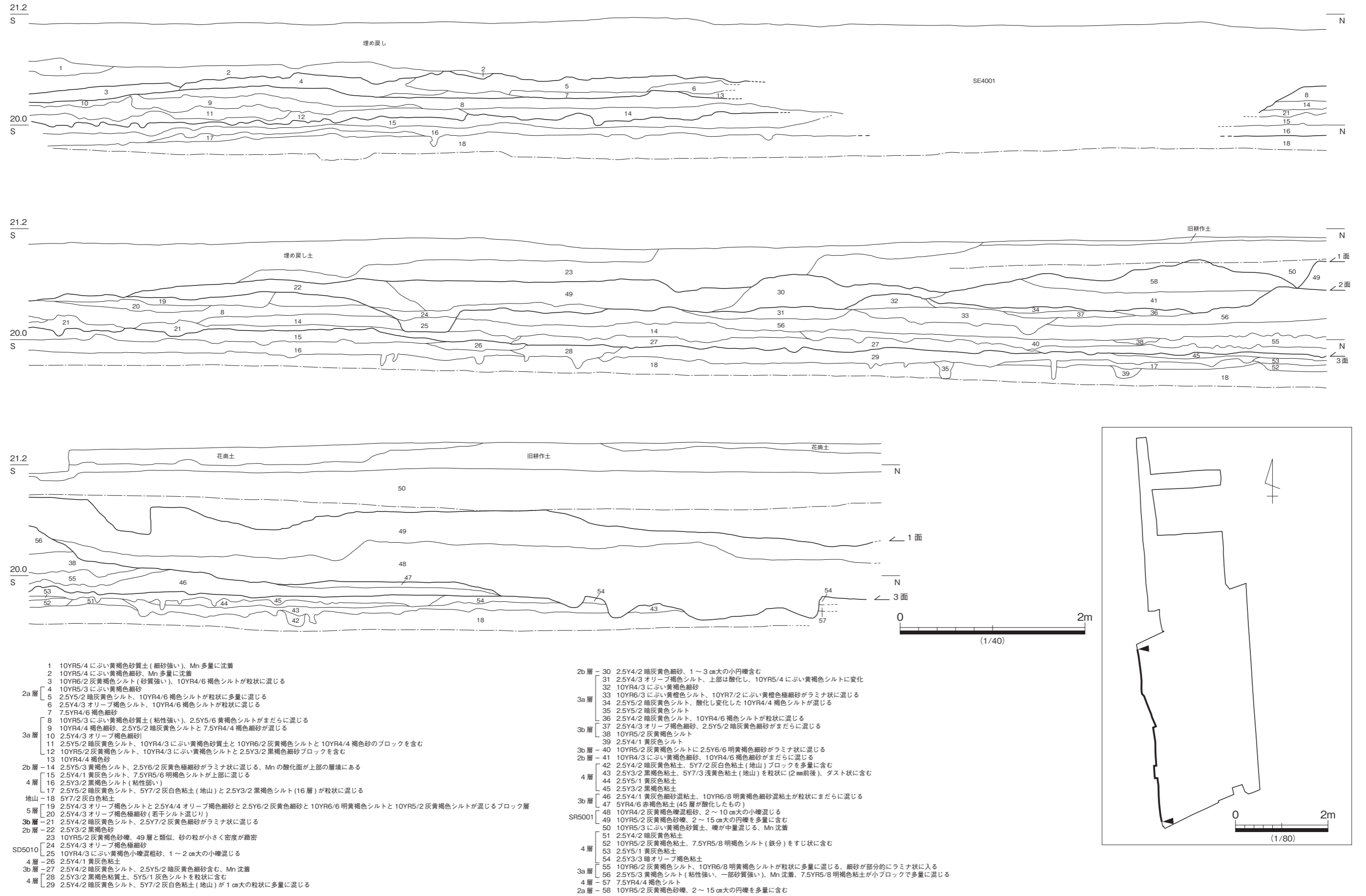
1面…古代～近世

2面…古墳時代終末期

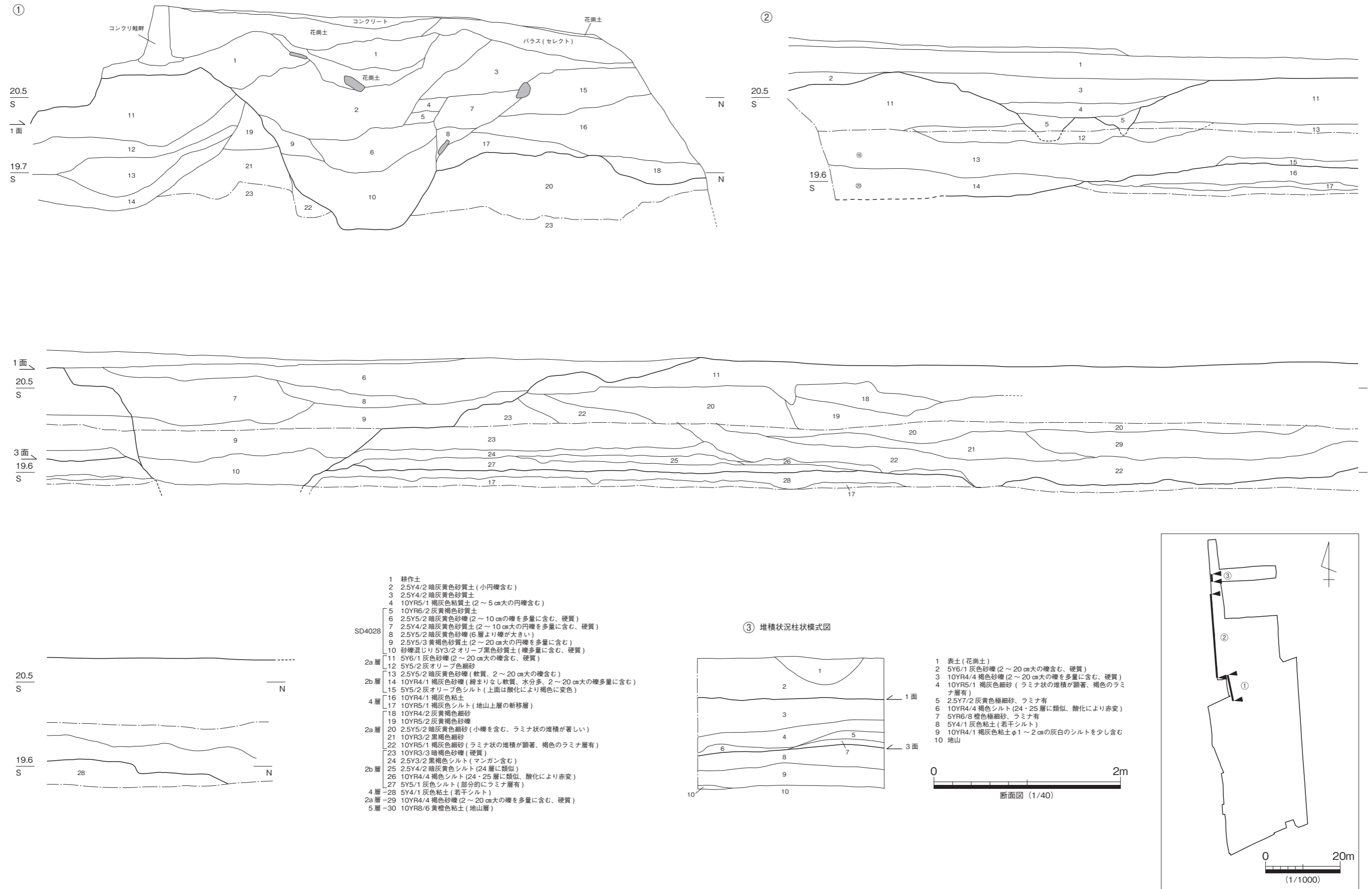
3面…弥生時代中期～古墳時代後期

なお、次節以降の報告に際しては、遺構をさらに大別し、その年代ごとに報告を行う。また、時期が不明なものについては最後に報告する。時代については、1面から報告を行うため、近世から順に時代をさかのぼる順に報告を行う。

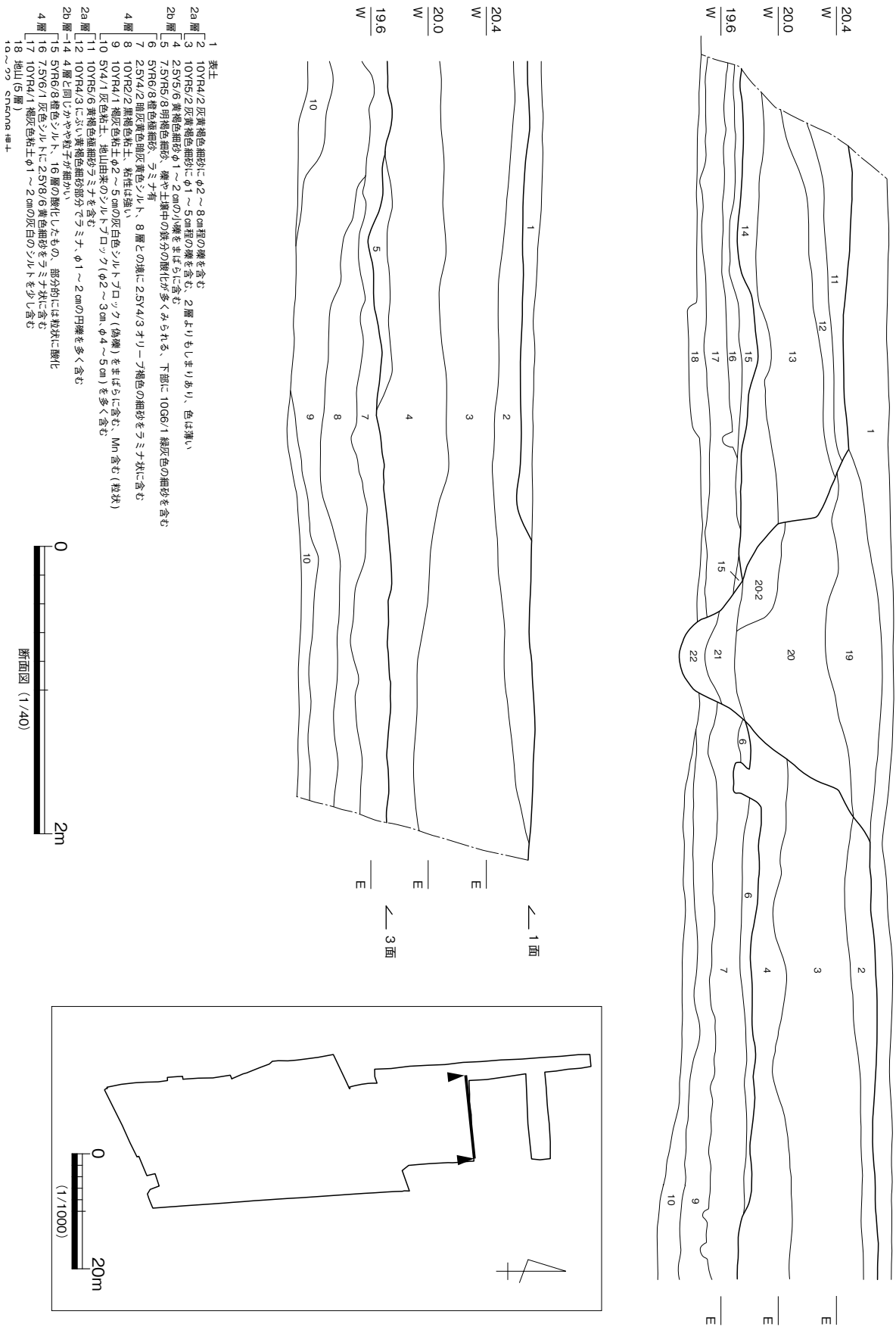
遺物については、遺構の埋没年代と一致しないものについても多数存在したが、残りの良いものは掲載を心掛け、その中でも古代に属するものは特に掲載するよう心掛けた。



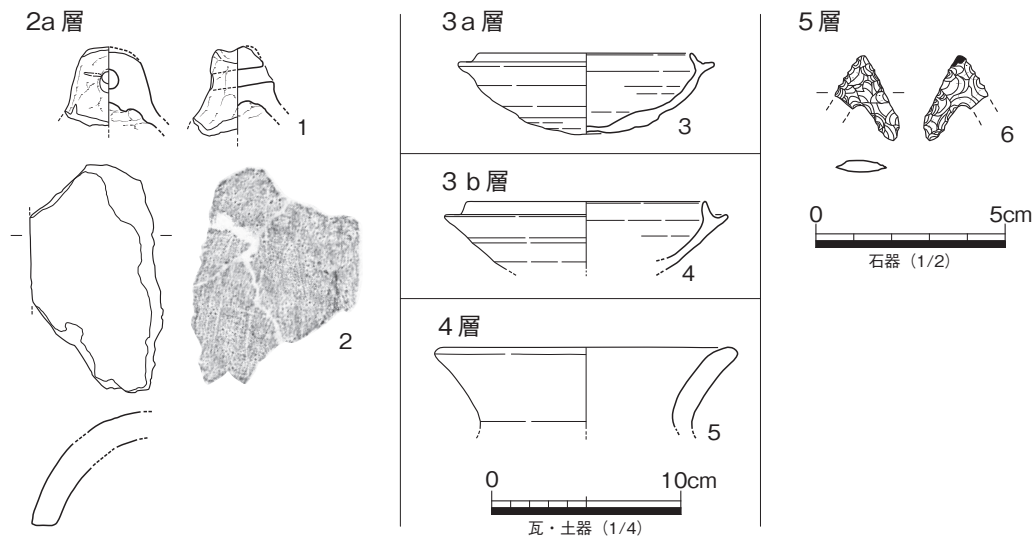
第4図 5区調査区西壁土層断面



第5図 6区調査区西壁土層断面図



第6図 6区調査区北壁土層断面図



第7図 2a層, 3a層, 3b層, 4層, 5層出土遺物

第3節 4区の調査成果

4区については、基本層序の中で述べた1～3面が確認された。4区は先述のとおり調査工程の都合から4-1～4-4区に分けて調査を行い、4-2、3区については、4区のほかの区画と異なり5区の西側に位置しているが、調査時の遺構名称を踏襲し、4区として報告する。

【1面の遺構】(第8図)

1面については、古代～近世の遺構が検出された。近世・中世・古代の順に報告を行う。

(1) 近世の遺構

溝

SD4001 4-2区の中央部で検出された。検出長は短い東西方向に流れていることが確認できる。隣接する5区に延長が明瞭に確認されないため、土坑状に収まる長楕円形の遺構となる可能性も考えられる。出土遺物は第9図に示した。

7は須恵器甕である。口縁部が垂直に立ち上がり、頸部から肩部にかけての張りが強い。

小片のため図化できていないが、出土遺物の年代から、18世紀後半以降の埋没が想定される。

SD4002 4-3区の中央部で検出された。南北方向に延びる溝であり、西側の肩のみが検出されている。出土遺物は古代のものが多く、遺構の検出面や方向から考えても近世以降の遺構となる可能性が高い。出土遺物は第10図に示した。

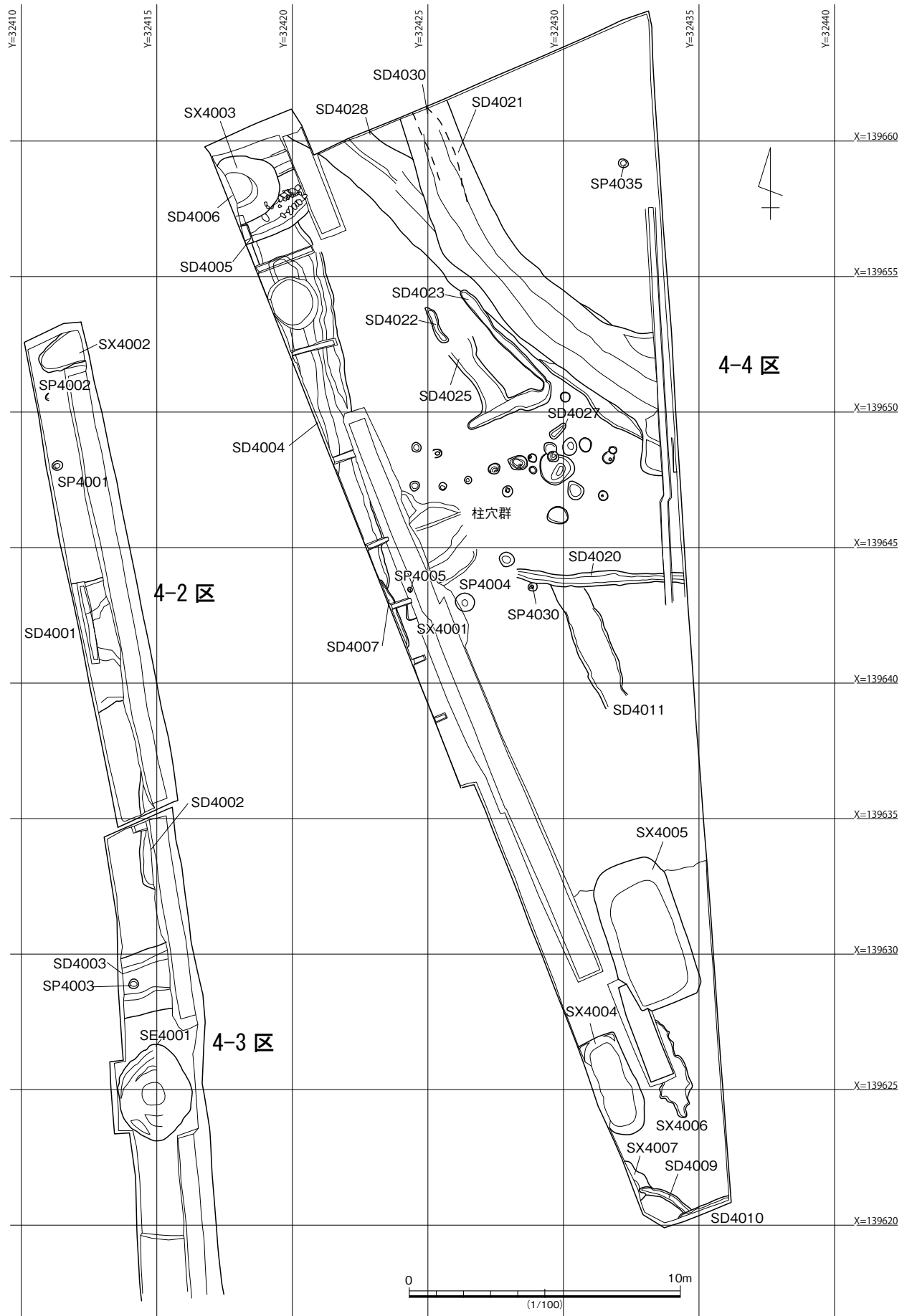
8は土師器皿である。口縁部が屈曲しながら内湾し、端部が立ち上がる。内面に左上がりのミガキによる暗文が残るほか、外面には横方向のミガキを施す。

9は土師器竈である。底部付近の破片であり、端部を断面T字状に拡張する。

10は土師器甌である。口縁部が直線的に外方に延び、端部をやや外方につまみ出す。

SD4003 4-3区の南側で検出された。東西方向に延びる溝であり、埋没年代を特定するような遺物の出土は見られないが、中世以降の開削・埋没が想定される。

SD4005 4-4区の北側で検出された。東西方向に延びる溝である。南側の肩に、礫混じりの裏込めを持つ石列が確認され、溝の護岸を行っている可能性が考えられる。出土遺物は第11図に示した。



第8図 4区1面平面

11は不明土製品である。板状の粘土の両面に線刻を施し焼成する。刻書が読み取れる部分からは、「無量」などの文字が確認でき、仏教に関連する遺物と考えられる。

12は蛸壺であり、穿孔の部分のみが残存する。頂部にナデによる凹みが確認できる。

13は陶器碗である。中国産の白磁であり、口縁部を玉縁状に肥厚させる。

14～17は平瓦である。いずれも古代に属する瓦であり、凹面には布目を残す。端面を垂直にするものと(17)、斜めにするもの(14)がみられる。

18は丸瓦である。凹面には布目残り、凸面には縄叩きの後ナデを施す。

出土遺物の中で、明確に近世以降に下るものは見られないが、遺構の方向や構造から、近世のものであると判断した。

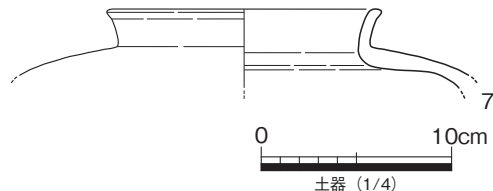
SD4006 4-1区の北側で検出された。SD4005と同様の方向と位置にあたるが、SD4005に後出することから、SD4005埋没後に機能した地境の溝と考えられる。

SD4011 (第12図) 4-4区で検出された。条里方向に合致する溝であるが、深度も浅く流水の痕跡も確認できないため、水路としての機能は想定しがたい。出土遺物は第12図に示した。

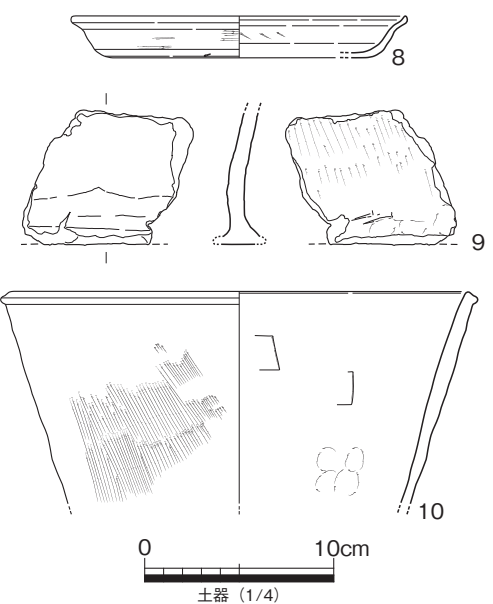
19は土師質土器足釜である。口縁端部は丸くおさめ、下方に下がる突帯を巡らせる。

出土遺物からは中世後半の年代が想定できるが、遺構の深度や方向から考えても、近世に下る可能性が高い。

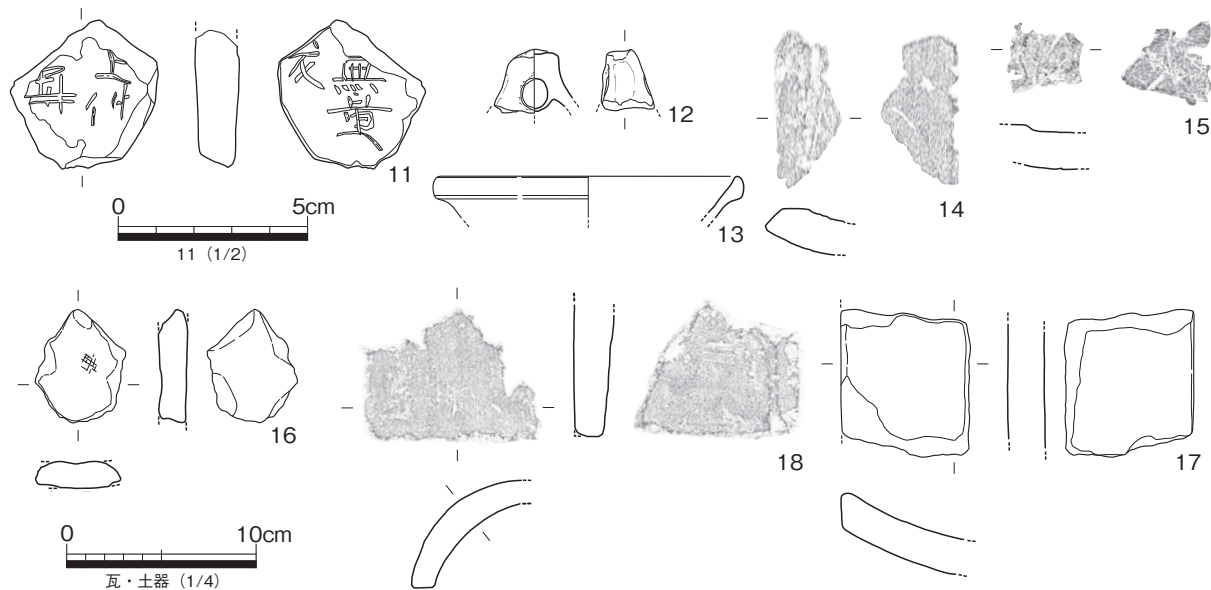
SD4020 4-4区中央で検出された。東西方向に延びており、深度は浅い。SD4011を切ることから、それに後出する近世の溝であると考えられる。



第9図 SD4001 出土遺物



第10図 SD4002 出土遺物



第11図 SD4005 出土遺物

井戸

SE4001 (第13図) 4-3区で検出された。検出時は直径3mほどの堀方を持ち、中心部には底面に向けすぼまる石組みを持ち、それを井戸側としている。石組は一重であり、その裏込土には小礫も含め礫を比較的多く混ぜる。深度は2mほどである。

出土遺物は、裏込め土、井戸埋土からそれぞれ出土しており、第14・15図に示した。

20～26は裏込め土(1層)出土の遺物である。

20は土師質土器摺鉢である。外面にはユビオサエの痕跡を残し、内面には摺目が1単位確認できる。

21は平瓦である。凹面、凸面共にナデにより調整を消している。

22は須恵器甕である。体部片であり、外面には格子叩きを施す。

23は土師質土器鍋である。口縁端部を上方につまみ出し、内面には横方向のハケを施す。

24、25は土師質土器足釜である。口縁部下に下方を向く突帯を巡らせる。

26は土師質土器鍋である。やや内傾する口縁部に、貼り付けによって把手を取り付け、穿孔を施す。

27、28は層位不明の遺物である。

27は白磁碗である。体部の破片であり、やや立体感に乏しい蓮弁を持つ。

28は平瓦である。凹面には糸切痕を残し、凸面にはナデを施す。

29～38は井戸埋土(3層)出土の遺物である。

29は土師質土器足釜である。脚部の取り付く部分であり、内面は斜め方向のハケ、外面は長いストロークのナデを施す。

30は土師質土器皿である。底部は回転へら切りによって切り離し、外面には回転ナデを施す。

31は土師質土器摺鉢である。内面に間隔をあけた摺目を持ち、外面にはユビオサエの痕跡が残る。

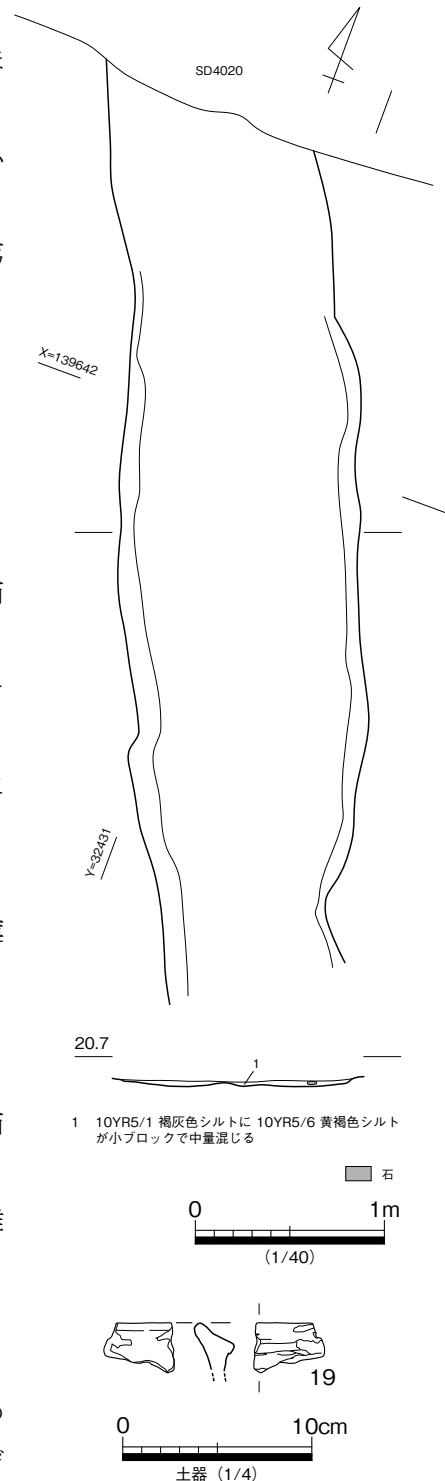
32～35は丸瓦である。いずれも凹面にはコビキ痕を残し、そののちにナデやケズリを施すものがある。凸面は叩きの痕跡をナデによって消している。

36は軒丸瓦である。凸面には瓦当に垂直にストロークの長いナデを施す。文様は珠文と巴文であり、中近世に多く見られる文様構成である。

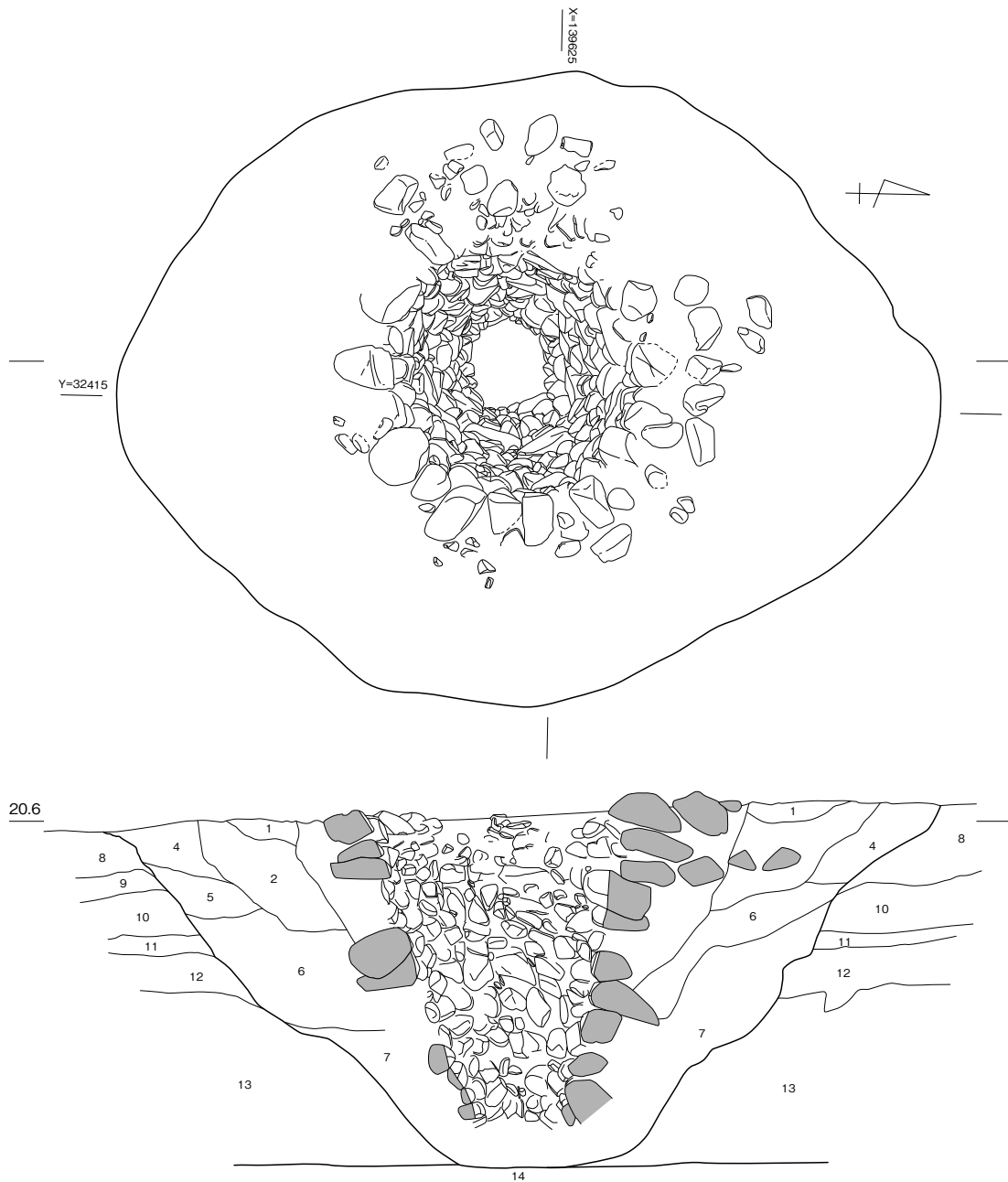
37、38は平瓦である。凹面には糸切痕(コビキA)を残し、凸面はナデにより叩きなどの調整を消している。出土遺物から、SE4001は近世以降に埋没したと考えられる。

柱穴

SP4001・SP4002 4-2区で検出された。柱穴間の間隔は広くなるが、SP4001とSP4002が組み合う可



第12図 SD4011 平・断面 出土遺物



- 1 10YR6/8 明黄褐色砂礫混じり粘質土、8層と基盤層の混合土、10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質シルトを多含する他φ1～3cmの小礫多含
- 2 10YR5/2 灰黄褐色礫混じり細砂質シルト、地山層混成土
- 3 10YR5/1 褐灰色礫混じり細砂質シルト、8層地山
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘性砂質シルト
- 5 10YR5/2 灰黄褐色粘土混じり砂礫、2層に比べ黄色系地山ブロック少ない、この下底部が滞水層上面、Fe分沈着
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂礫混粘性シルト、Fe層以下グライ化し、7.5Y4/1 灰色を呈する黄色地山ブロックを含む
- 7 10Y4/1 灰色砂混じり粘質土～細砂
- 8 10YR6/2 灰黄褐色砂礫
- 9 10YR7/1 灰白色シルト
- 10 10Y7/1 灰白色シルト～細砂
- 11 10YR6/1 褐灰色 Feシルト
- 12 10YR5/1 褐灰色粘土
- 13 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土
- 14 5Y5/4 オリーブ色粘土シルトの固結が進み不透水層となる

0 1m
(1/30)

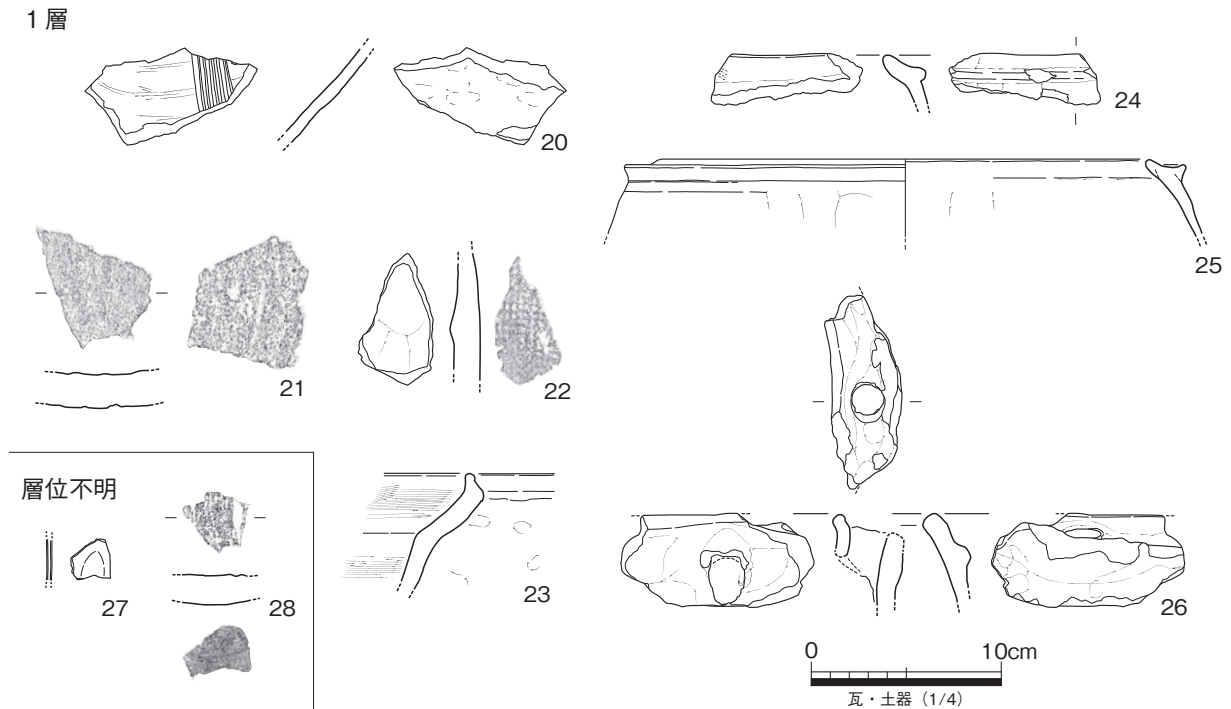
第13図 SE4001 平・立面

能性が高い。その場合、柱穴の並びが現在の地割と同一の方向を示すことから、近世の遺構であると判断した。

SP4003 4-3区で検出された。SD4003を切ることから、近世以降の遺構である可能性が高い。

不明遺構

SX4001 4-1区で検出された。大半がトレンチによって切られており、詳細は不明である。



第14図 SE4001 出土遺物 1

SX4002 4-2区北端で検出された。平面楕円形の浅い遺構である。出土遺物は古代のものが多いが、遺構の検出面や、ほかの遺構との切り合いからも、近世の遺構であると判断した。出土遺物は第16図に示した。

39は灰釉陶器壺である。体部の破片であり、体部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。

40は平瓦である。端部は残存していないが、凹面にはナデ、凸面にはケズリを施す。

SX4004 4-2区南端で検出された。南北方向に長い長楕円形の平面形を呈する。地境の近辺にあることや、その平面形態や出土遺物から、近世に掘削された廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第17図に示した。

41は須恵器壺である。口縁部に2条沈線を施す。

42は土師器甕である。外反する口縁を持ち、口縁端部は面を持つ。

43は須恵器横瓶である、口縁端部は内湾し、体部は樽状の形態をもつ。焼成がやや甘く、内外面に多くユビオサエの痕跡を残す。

44は丸瓦である。凸面には縄叩きの後ケズリ、凹面にはナデを施す。

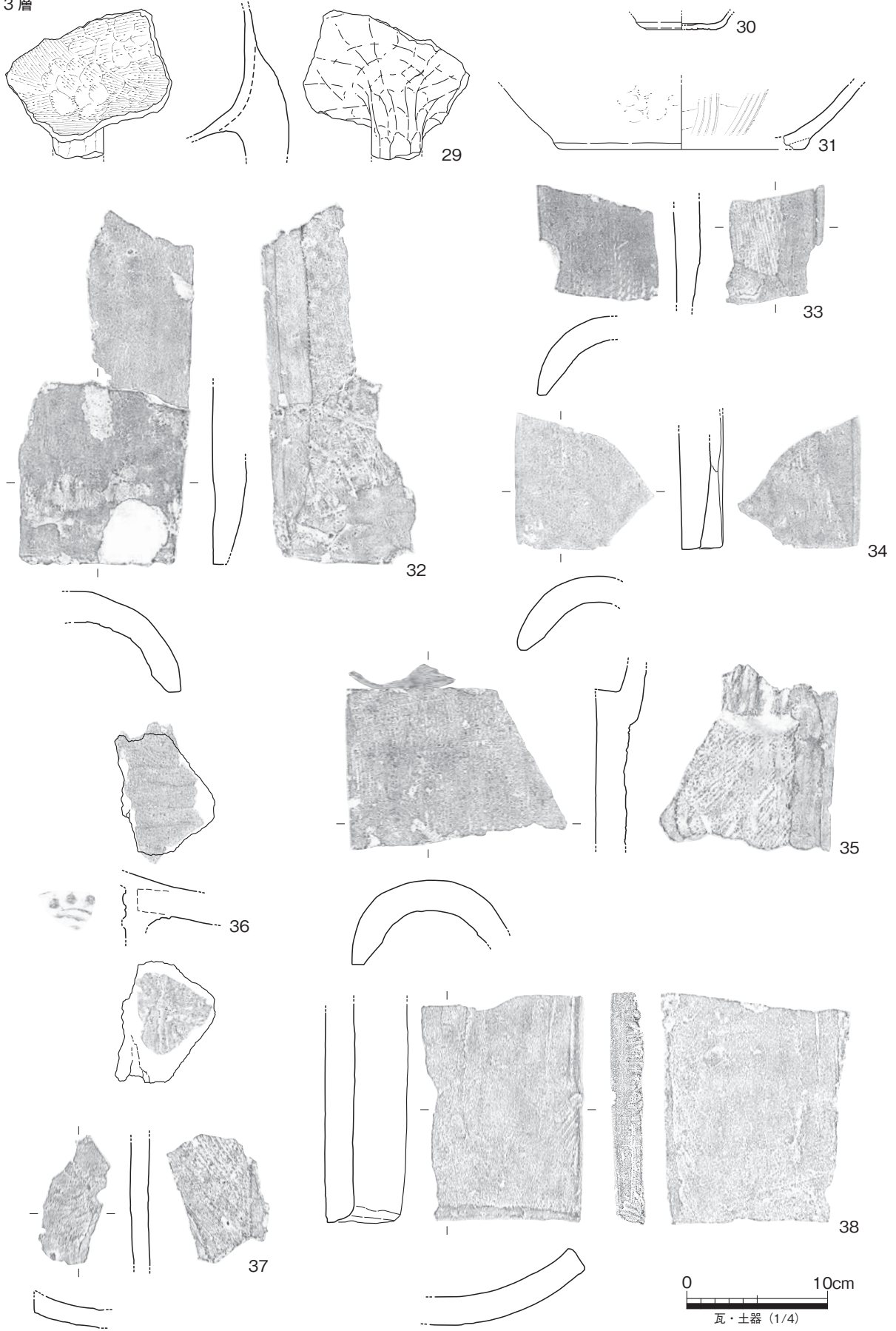
45は焙烙である。岡本産の焙烙であり、体部下半にはほとんど調整の痕跡もみられず、体部上半との境界が明瞭となるため、下半は型による成形の可能性が高い。胎土に雲母を含むといった特徴からも、岡本産の可能性が高い。大きく開く口縁部をもち、端部にやや丸みをもたせる。

出土遺物から、近世の遺構であると考えられる。

SX4005 4-4区で検出された。平面形態は隅丸の長形状を呈し、埋土は礫を多く含む。調査地周辺の地割と同一の方向で掘削されていることから、近世の廃棄土坑であると判断した。

SX4006 (第18図) 4-4区南端で検出された。平面形態は不整形であり、深度も0.1mほどと浅い。時期を示す遺物は出土していないが、長軸の方向がSX4005と同一方向であることから、近世の遺構であると判断した。

3層



第 15 图 SE4001 出土遺物 2

SX4007 4-4区南端で検出された。大半が調査区外に広がり、詳細は不明である。

(2) 中世の遺構

溝

SD4004 4-1区で検出された。南北方向に延びる溝であり、調査区を挟み5区にも続いており、

SD5001と一部連続する可能性もある。遺構の大半は5区に続くが、これらはおおむね現在の地割と合致している。出土遺物については、大半が古代の土器であるが、少量中世後半の土器を含む。出土遺物から中世の遺構であると判断した。出土遺物は第19図に示した。

46は土師質土器皿である。外面に細かい単位の手捺を施す。

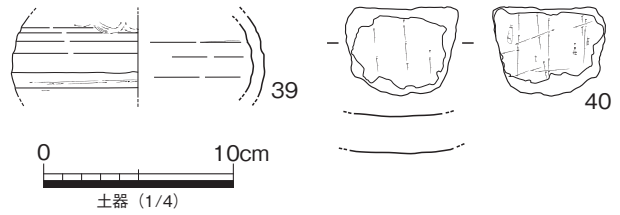
47は土師質土器杯である。やや内湾気味の口縁部を持ち、内外面とも回転手捺を施す。底部はヘラ切りによって切り離す。

48は土師器碗である。口縁端部がやや肥厚する。

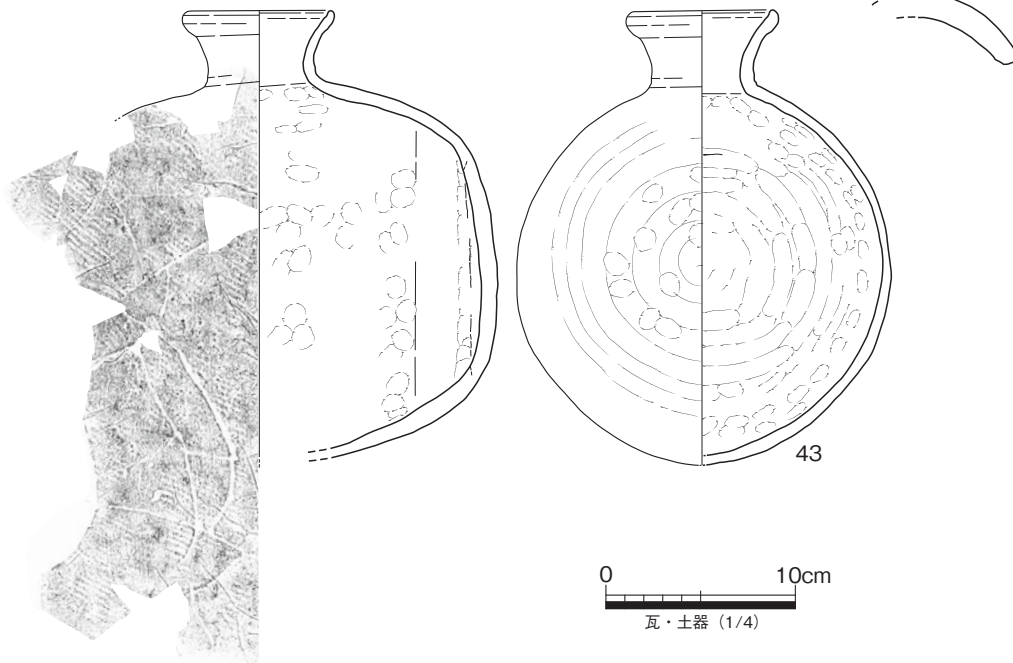
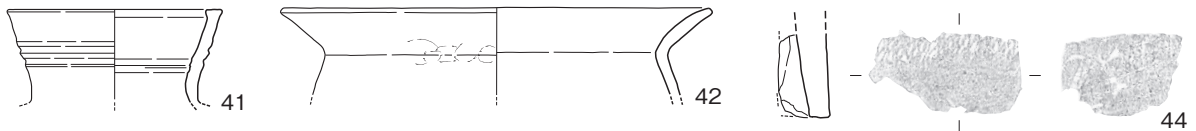
49は青磁碗である。龍泉窯産であり、外面には蓮弁を表現する。

50は白磁碗である。底部の破片である。

51は白磁皿である。口縁端部でやや屈曲する。



第16図 SX4002 出土遺物



第17図 SX4004 出土遺物

52は須恵器碗である。西村産の碗であり、口縁端部のみ残存している。

53は土師器碗である。体部で屈曲し、口縁端部にかけて外反する形態を呈する。西村型土器碗と考えられる。

54は須恵器碗である。西村産の須恵器碗であり、内面に横方向のミガキを施す。

55～57は土師器碗である。いずれも高台が残存している。55、56は高台の先端がとがり、やや外方に踏ん張る形態を呈する。57は断面U字型の高台を貼り付ける。西村型土器碗の可能性が高い。

58は瓦器碗である。和泉産の瓦器碗であり、高台は低い断面V字状のものが取り付く。体部外面にはユビオサエの痕跡が残り、内面にはミガキをまばらに施す。

59は須恵器甕である。亀山焼の甕であり、59-1～6は同一個体であると考えられる、いずれも外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す。

SD4007 4-1区で検出された。SD4004を切っているが、詳細は不明である。出土遺物は第20図に示した。

60は須恵器碗である。西村産の須恵器であり、口縁端部のみ残存する。

SD4009 (第21図) 4-4区で検出された。小規模な溝であり、やや湾曲しつつ北西方向に延びる。足釜の脚部片などが出土しており、中世後半の遺構である可能性が高い。

SD4010 4-4区で検出された。SD4009を切る溝である。出土遺物は第22図に示した。

61は土師質土器足釜である。外面にほぼ水平方向に取り付く突帯が巡り、口縁部は垂直に立ち上がる。

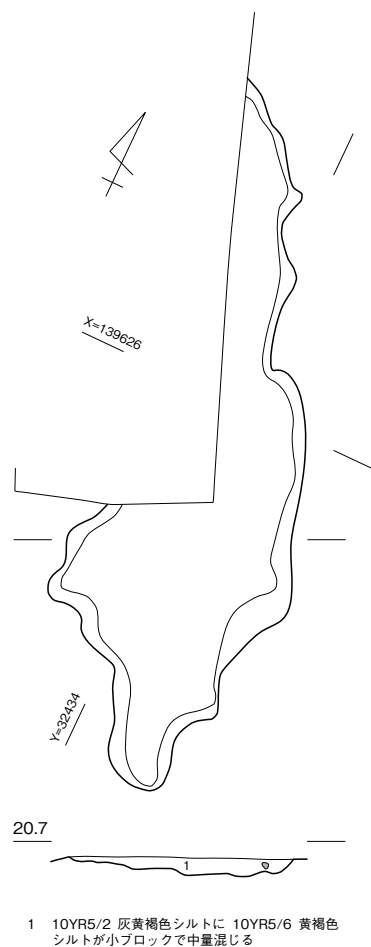
SD4022・SD4023・SD4024・SD4025 (第23図) 4-4区で検出された。調査時はそれぞれを個別の遺構として検出したが、本来的には同一の遺構であったと考えられる。溝の幅に対して、深度は0.1mほどと浅い。SD4023が、SD4021と同方向に延びており、近似する時期の遺構である可能性が高いことから中世の遺構であると判断した。出土遺物は、第24・25図に示した。

62は土師質土器皿である。口縁部にかけて外反し、口縁端部にはナデにより面を作る。底部の切り離し方法は、切り離し後にナデを行い不明である。

63は土師質土器杯である。体部外面には回転ナデ、内面には不定方向のナデを施す。

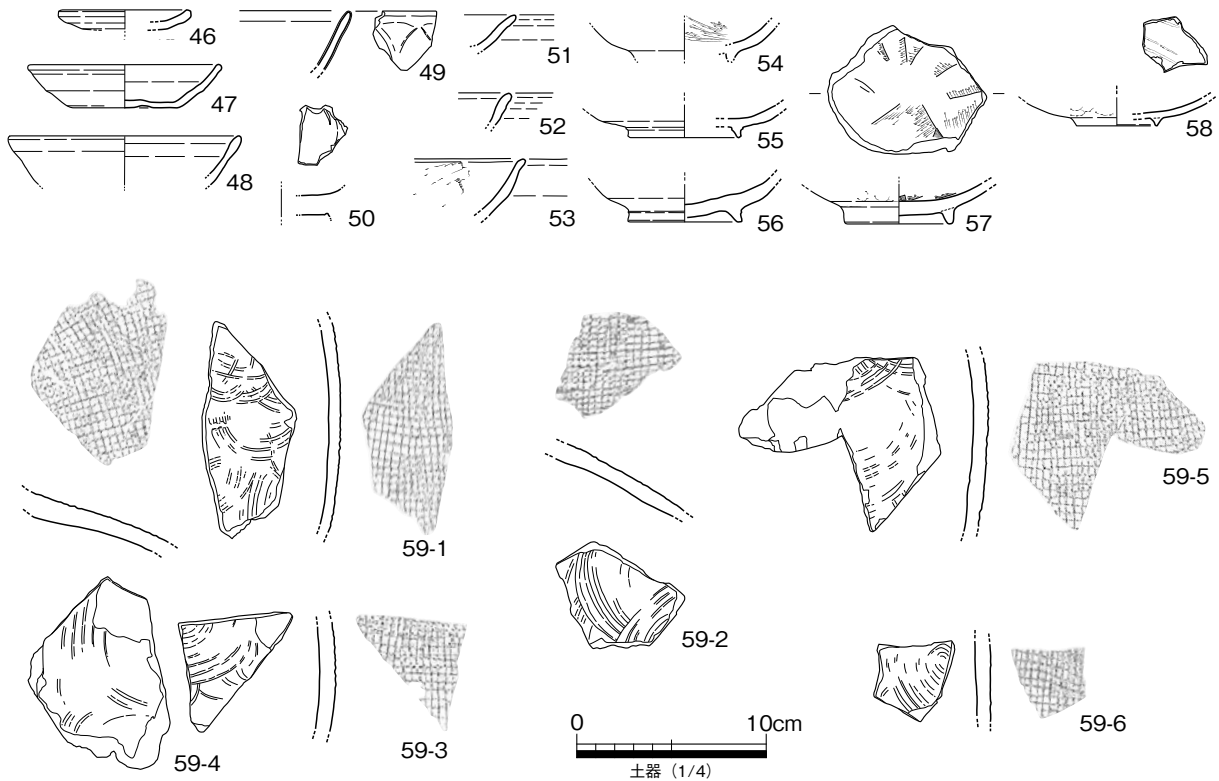
64は土師器碗である。断面台形状の高台をもち、高台はやや外方に広がる。

SD4021 (第26図) 4-4区北側で検出された。湾曲しながら北西方向に流下する溝であり、6区にも延長が確認できる。深度は0.5mほどであるが最大幅は2mを測り、埋土からは顕著な流水の痕跡は確認されなかった。溝の規模や、流下の方向から、灌漑に伴う水路としての機能が考えられる。出土遺物



0 1m
(1/40)

第18図 SX4006 平・断面



第19図 SD4004 出土遺物

は第27・28図に示した。

65は瓦器碗である。和泉産であり、口縁部が大きく開く。

66は黒色土器碗である。高台が外方に踏ん張る形態を呈する。

67は土師器甕である。口縁部がやや肥厚する。

68～72は土師質土器皿である。68は口縁部がやや内湾する。69、70、72は口縁部が直線的に外方へ開く。いずれも底部は回転ヘラ切りによって切り離す。71は急角度で立ち上がる。底部はヘラ切りによって切り離す。

74～76は土師器碗である。いずれも断面U字状の高台がやや外方に開くように貼り付けられる。

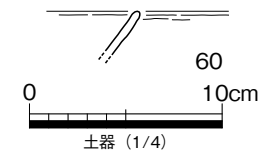
77は黒色土器碗である。外方に強く開く高台を貼り付け、高台高が低い。口縁部も外方に大きく開く。

78は白磁皿である。外縁は細かい単位のナデが残る。見込みには圏線を持つ。

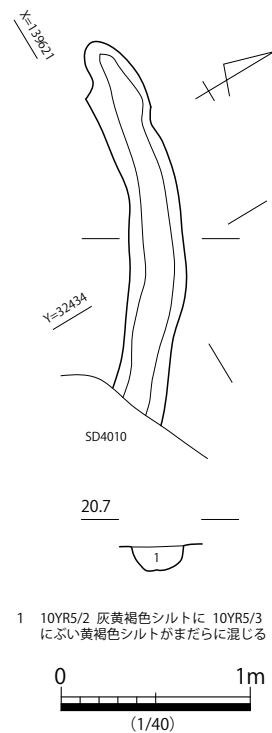
79は土師質土器杯である。口縁部が外反し、体部には細かい単位のナデを施す。

80、81は土師質土器碗である。胎土は精良であり、口縁部下に沈線を施す。体部下半にはユビオサエの痕跡が残る。81は吉備系の白色土器碗であり、やや浅い器形を持つ。

82は須恵器碗である。西村産の須恵器であり。口縁部が外反する。内



第20図 SD4007 出土遺物



第21図 SD4009 平・断面

外面ともに横方向のミガキを施す。

83、85、87～89は瓦器碗である。いずれも和泉産の瓦器碗である。83は断面台形の低い高台を持つ。85は外方に広がる高台を持ち、体部下半にユビオサエの痕跡を持つ。87は体部中位で屈曲し、口縁端部まで直線的に伸びる。内外面に密にミガキを施す。88は低い高台をもち、不整方向のミガキを見込みに施す。89は口縁部に強いヨコナデを施し、高台は外方に大きく開く。

84は黒色土器碗で、内面のみ黒化する黒色土器A類の碗である。高台のみ残存するが、高台は低く、見込みに密にミガキを施す。

86は陶器碗である。いわゆる山茶碗である。底部を回転糸切りによって切り離れたのちに、断面三角形の高台を貼り付ける。口縁部はやや外反する。

90は須恵器蓋である。口縁部のみ残存し、端部は屈曲するが、明瞭な面をもたず丸みを帯びる。

91は須恵器皿である。口縁部が外反し、端部が細くとがる。内面に火襷が残る。

92は須恵器杯である。高台を持つ杯Bであり、口縁部まで直立気味に立ち上がる。高台は低く、やや外方に踏ん張る形態を呈する。

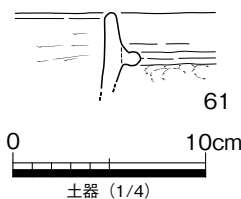
93は土師器高杯である。浅い杯に断面多角形状の脚部がとりつく形態が想定される。口縁端部はやや上方に曲がり、内面には右上がりのミガキを施す。

94、95は須恵器平瓶である。94は口縁部であり、口縁端部は丸くおさめる。95は把手の部分である。

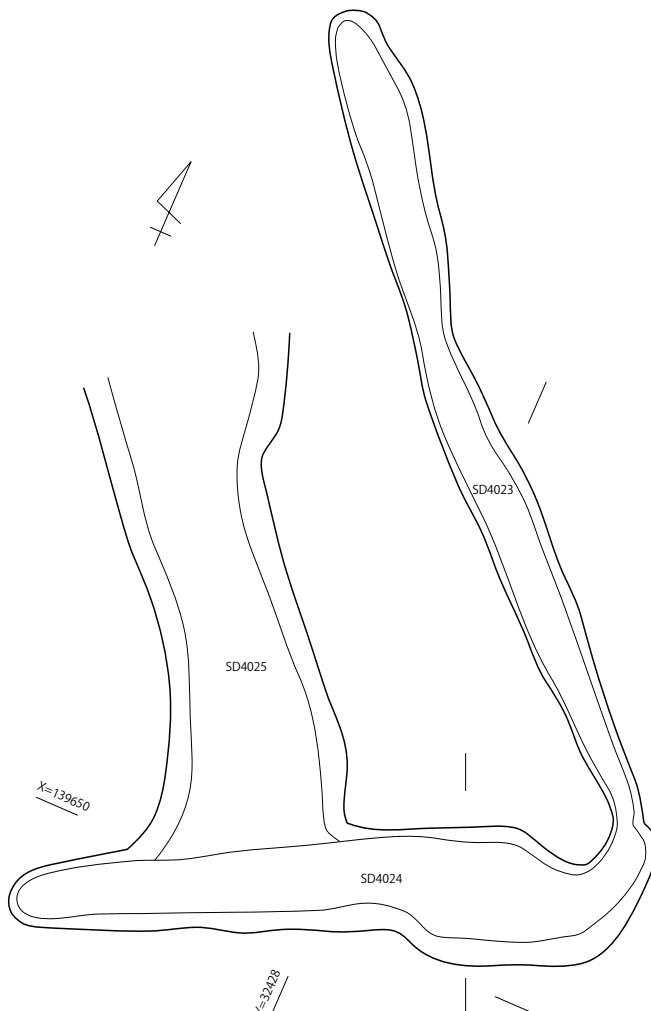
96は蛸壺である。穿孔部上面に、穿孔方向に直行する形でナデを施しへこませる。

97は不明土師器である。底部の破片であるが、器種などは不明である。

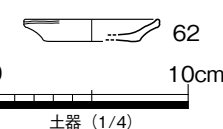
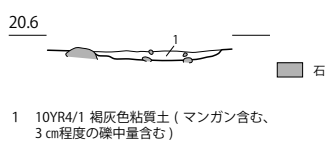
98は須恵器甕である。外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す体部の破片であるが、内面に墨の痕跡を残すことから、硯として転用されたものと考えられる。



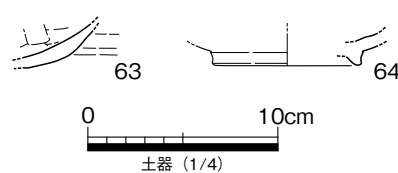
第22図 SD4010 出土遺物



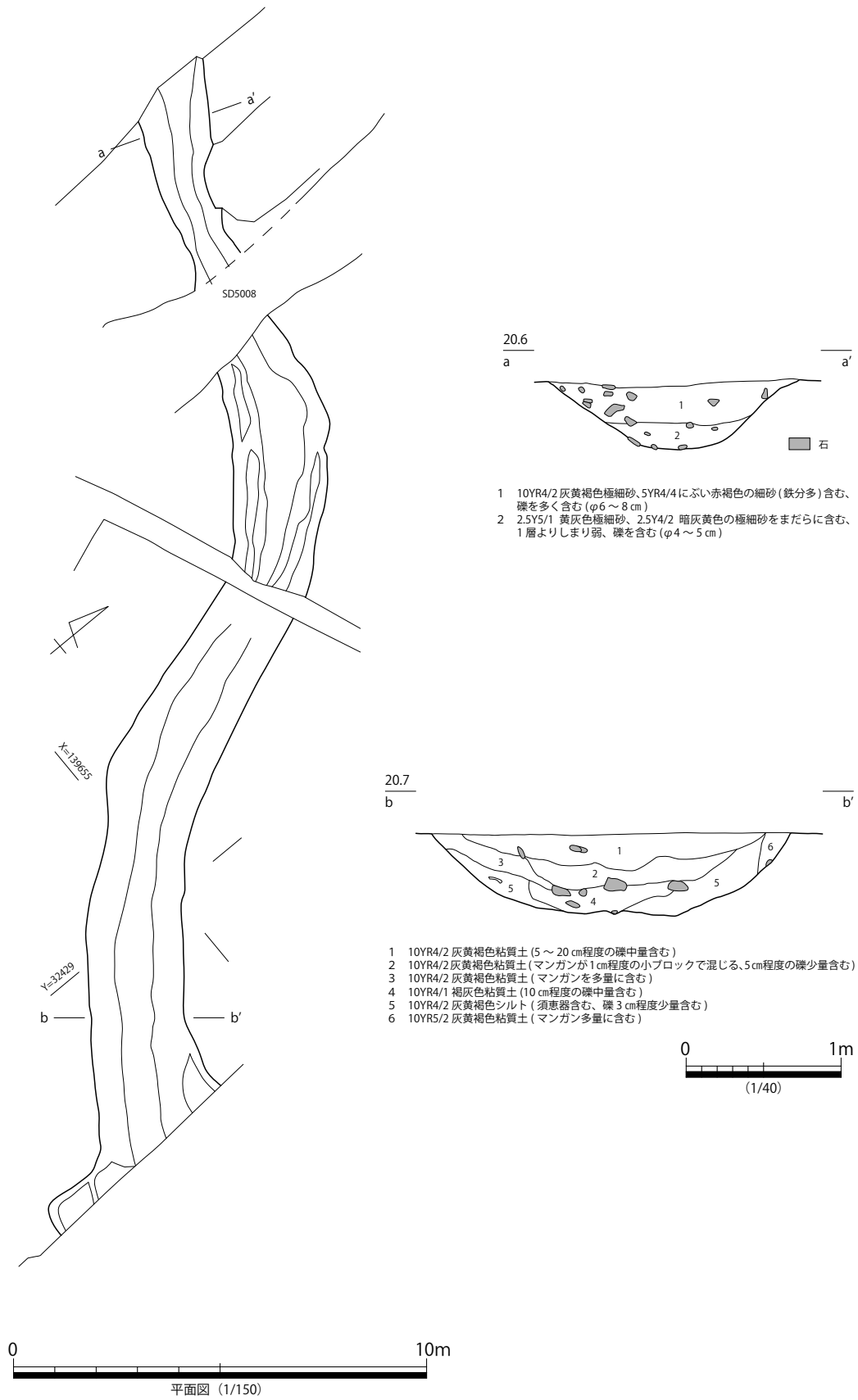
第23図 SD4024 平・断面



第24図 SD4024 出土遺物



第25図 SD4025 出土遺物



第26図 SD4021 平・断面

99、100 は須恵器壺である。99 は口縁部であり、口縁端部に向けて外反する形態を呈する。100 は体部である。内面に回転ナデの痕跡を残す。

101 は土師器甕である。口縁部下に水平に伸びる罫を巡らせる。口縁端部はナデにより、内方・外方に少しつまみ出したような形態を呈する。

102 は須恵器甕である。頸部から口縁部が残存しており、内面には同心円状の当て具痕が残る。

103 は須恵器鉢である。外面には格子タタキとヨコナデの痕跡が残る。摺鉢の底部である可能性が高い。

104～108 は土師器甕である。いずれも厚い器壁を持ち、口縁部が屈曲し、外方に直線的に伸びる形態をもつ。104 はややとがり気味の口縁端部を持つ。105 は体部が袋状となる。105～107 は口縁端部に面を持ち、107 は端部をやや上方につまみ出す。108 は口縁端部が欠損しているが、口縁端部のつまみ出しが強い。

109 は須恵器甕である。体部の破片であるが、外面に平行叩きを施し、内面は叩きの痕跡をヨコナデによって消している。

110 は平瓦である。凸面に格子叩き、凹面には布目を残す。

111、112 は丸瓦である。111 は凸面の調整は不明であるが、凹面には布目を残し、端面はナデを施す。

112 は凸面にナデ、凹面には布目を残し、端面はケズリによって面取りを行う。

SD4021 の出土遺物は、古代の遺物も含みながら、最新段階の遺物の年代観を参照すると、中世前半の埋没が想定される。特に瓦器椀などの年代を評価すれば、13世紀前半の埋没が想定される。溝自体の流下方向が、中世後半以後の遺構に見られるような地割とはかなり異なった方向を示すことや、時期的に遡るが、SD4028 といった古代の水路と同様の方向性を示し、それらよりやや低地へ向かう北側に位置することから、低地の埋没に伴い、古代の水路の方向を踏襲しながら、地形に合わせて開削された水路と考えられる。

土坑

SK4001 (第 29 図) 4-4 区で検出された土坑である。SD4021 に直交する方向に集中する柱穴群に切られている。径 1.3 m 程の掘方を持つ。出土遺物は第 33 図に示した。

113 は土師質土器皿である。小皿であり、口縁部付近でやや屈曲し、端部は垂直気味に立ち上がる。

114、115 は瓦器椀である。いずれも和泉産の瓦器椀であり、114 は内外面ともにミガキを施す。115 は体部下半にユビオサエの痕跡を残す。

116 は土師器甕である。口縁部で屈曲し直線的に外方へ延びる。口縁端部はやや肥厚するが、端面を明瞭に持つ。

出土遺物からは、中世前半に埋没した遺構であると考えられる。

SK4002 (第 30 図) SK4001 のすぐ南で検出された径 0.8 m 程の浅い土坑である。出土遺物は第 33 図に示した。

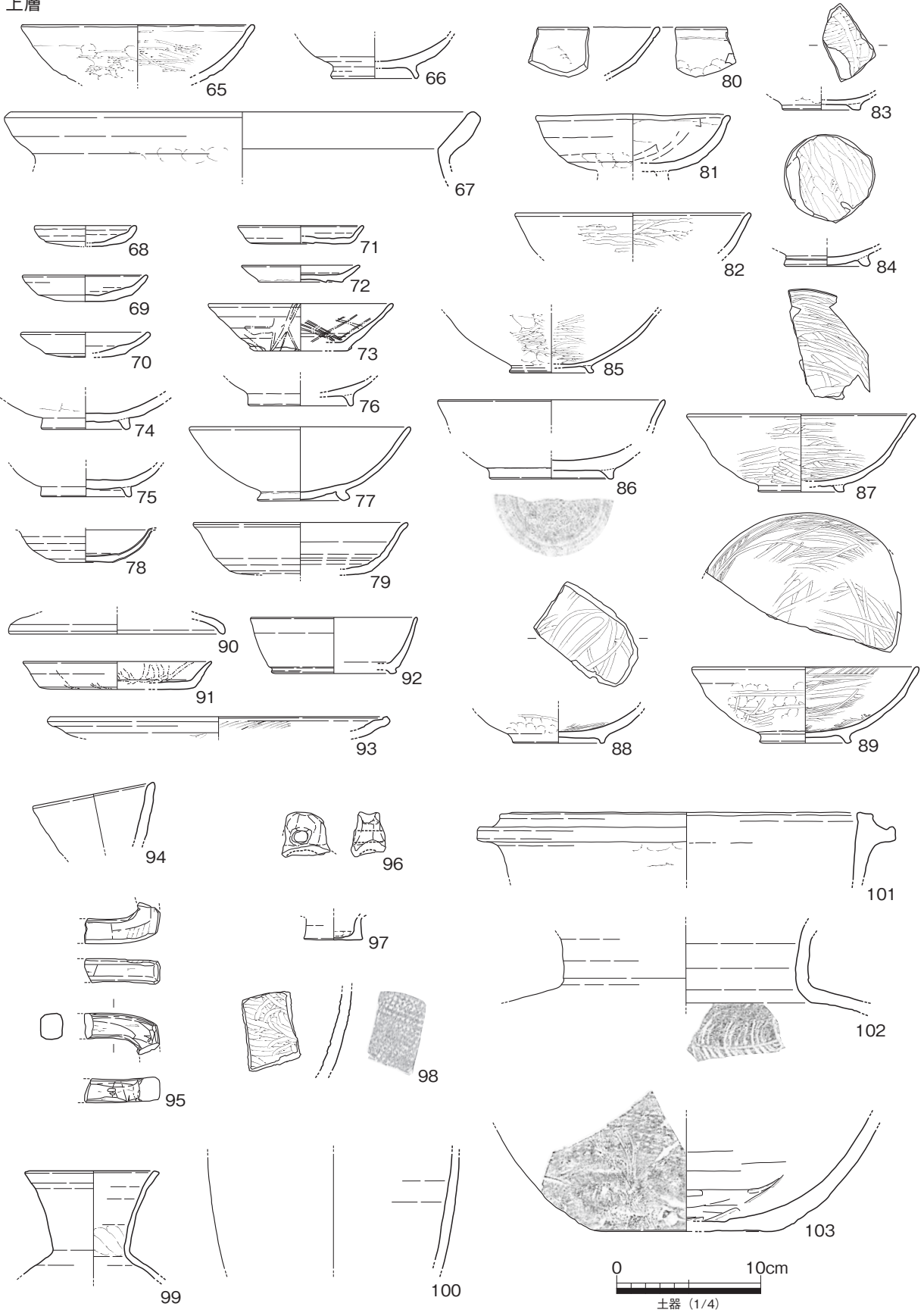
117 は土師器高杯である。脚部の破片であるが、断面多角形の脚部に、浅い杯がとりつく形態の高杯となることが想定される。

118 は瓦器椀である。和泉産の瓦器椀であり、外面にはヨコナデとユビオサエの痕跡を残し、内面には横方向のミガキを施す。

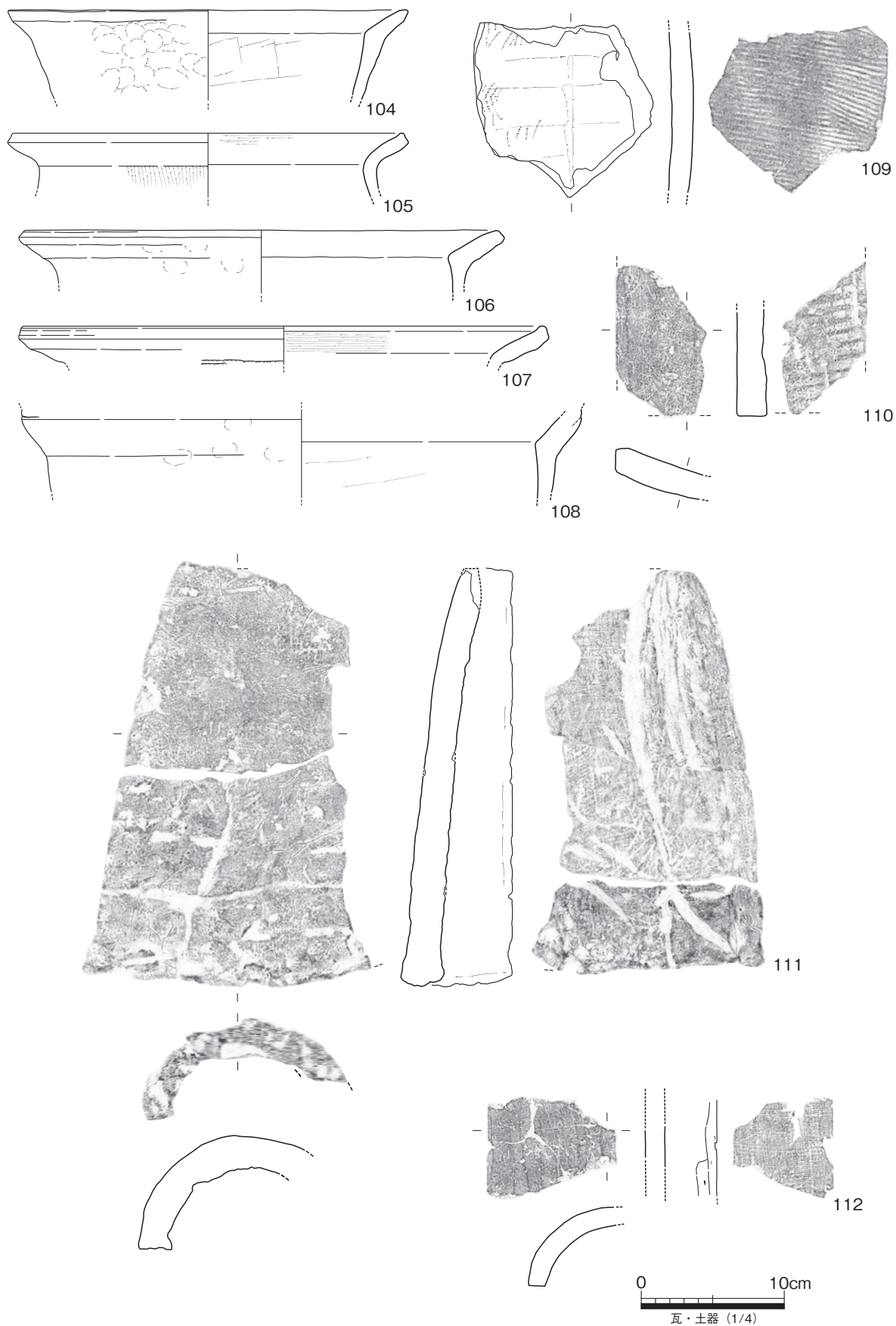
出土遺物からは、中世前半の遺構であると考えられる。

柱穴

上層



第27図 SD4021 出土遺物 1



第 28 図 SD4021 出土遺物 2

柱穴は4-4区で集中して検出された。それらは建物などを構成するようなものとはならないが、柱穴の集中する範囲が、SD4021などの溝と同一の方向に分布することから、大半が中世前半にあたりと考えられる。

SP4004 (第33図) 4-4区で検出された。SD4021に直交する方向に集中する柱穴群の一つである。直径は0.3mを測る。出土遺物は第33図に示した。

119は土師質土器皿である。小皿であり、底部が平坦でなく丸みを帯びる。

120、121は土師器椀である。いずれも焼成は不良であるが、西村型の土器椀に類似する。

SP4006 (第33図) 柱穴群よりやや南で検出された。径0.3mの柱穴である。出土遺物も第33図に示した。

122、123は瓦器椀である。いずれも和泉型の瓦器椀であり、口縁部にヨコナデを施し、やや外反気味の口縁部形態を呈する。123は強いヨコナデを施し、ミガキはやや粗となる。

SP4007 (第33図) 柱穴群の

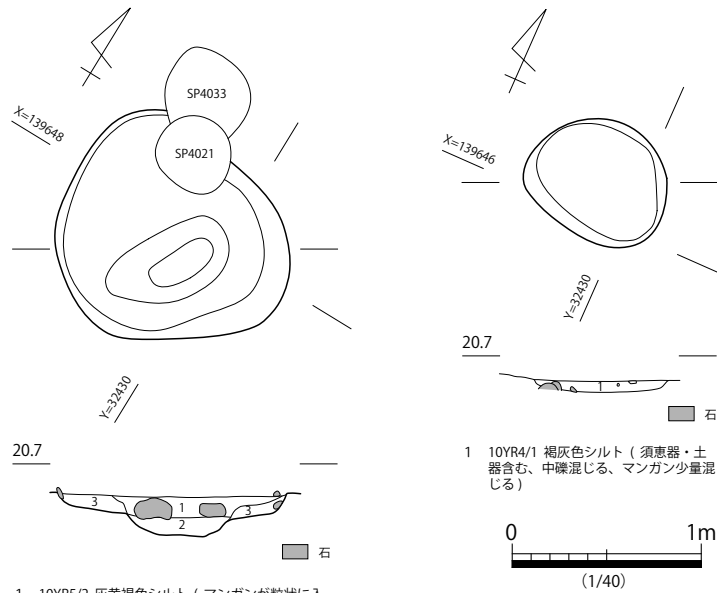
西側で検出された、径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

124は灰釉陶器椀である。体部のみが残存する。

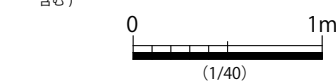
SP4016(第33図) 柱穴群の西側で検出された。径0.3m程の柱穴である。出土遺物は第34図に示した。

125、126は土師質土器皿である。いずれも底部はへら切りによって切り離すが、125は全体に丸みを持ち、126は底部との境界が明瞭で口縁部は直線的に伸びる。

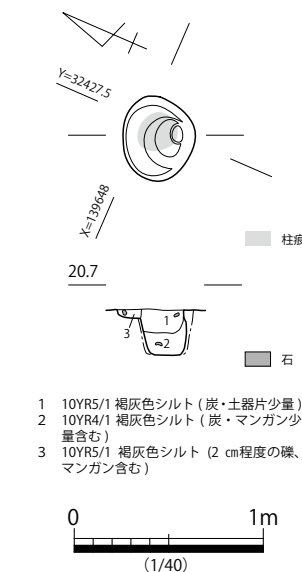
SP4017 (第31図) 柱穴群の中央部付近で検出された柱穴である。2段掘り状の形態を呈するが、掘方は径0.45m程となる。出土遺物は第34図に示した。



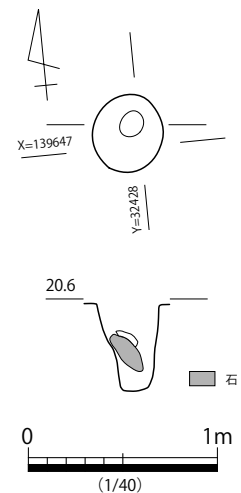
第30図 SK4002 平・断面



第29図 SK4001 平・断面



第31図 SP4017 平・断面



第32図 SP4024 平・断面

127 は瓦器椀である。和泉型の瓦器椀であり見込みには密にミガキを施す。

128 は土師器椀である。外面に回転ミガキを施す西村型の土器椀である。

SP4018 (第 33 図) SP4017 の東側で検出された柱穴である。SP4017 と同様 2 段掘り状の形態を呈する。出土遺物は第 34 図に示した。

129 は土師質土器皿である。浅い器形に大きく開く口縁部を持つ。底部の切り離し方法は摩滅により不明である。

130 は土師器甕である。口縁部がくの字状に屈曲し、直線的に外方へ延びる形態を呈する。口縁部は外面がやや肥厚し、端部は不明瞭ながら面を持つ。

SP4021 (第 33 図) 柱穴群東側で検出された。径 0.3 m 程の柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

131 は瓦器椀である。和泉型の瓦器椀であり、口縁部がやや内湾する。

SP4022 (第 33 図) 柱穴群東側で検出された。径 0.6 m 程の柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

132 は黒色土器椀である。外面にはヨコナデ、内面には横方向のナデを施す。

SP4024 (第 32 図) 柱穴群中央で検出された。径 0.3 m 程の柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

133 は土師器鍋である。丸みを帯びる体部から、口縁部は屈曲し外方に開く。口縁端部はナデにより面を持つ。

134 は平瓦である。凸面に縄タタキ、凹面に布目を残す。側面まで布目の痕跡が確認できる。

SP4025 (第 33 図) 柱穴群の東端で検出された。SP4026 に切られる柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

135 は土師器椀である。口縁部は内湾気味となる。調整は摩滅により不明である。

SP4026 (第 33 図) 柱穴群の東端で検出された小柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

136 は土師器椀である。明瞭ではないが、口縁端部付近がヨコナデによりややへこんでいる。

SP4027 (第 33 図) 柱穴群の東側で検出された、平面形態が不整形な遺構であるが、周囲の遺構の状況から柱穴と判断した。出土遺物は第 34 図に示した。

137 は土師質土器皿である。器高は低いが、口縁部は強く外反する。底部はへら切りによって切り離す。

138、140 は土師器椀である。いずれも外面にヨコナデの単位が確認できる。西村型の土器椀の可能性が高い。

139 は土師質土器杯である。口縁端部はやや先細りの形態を呈する。

SP4029 (第 33 図) 柱穴群の南で検出された。径 0.6 m 程の柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

141 は土師器椀である。外面にヨコナデの単位が数単位確認できる。胎土の特徴はやや異なるが、西村型の土器椀に類似する。

SP4030 (第 33 図) 柱穴群の南で検出された小柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

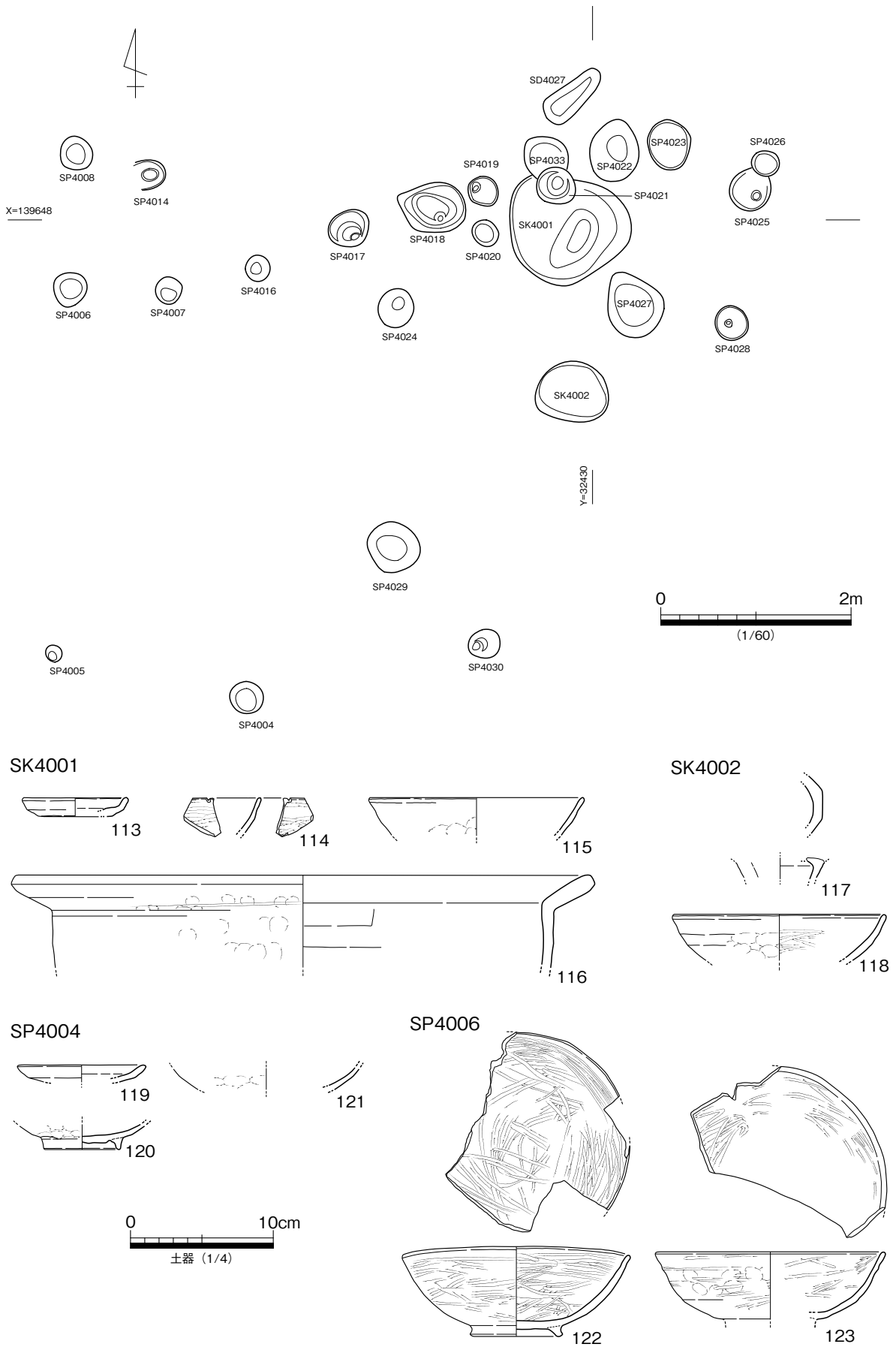
142 は土師質土器杯である。口縁部の開きが強く、端部が先細りする。

143 は瓦器椀である。和泉産の瓦器椀であり、内面には不整方向のミガキが残る。

SP4033 (第 33 図) 柱穴群の東側で検出された。SP4021 に切られる柱穴である。出土遺物は第 34 図に示した。

144 は瓦器椀である。外面に、比較的密に横方向のミガキが施される。

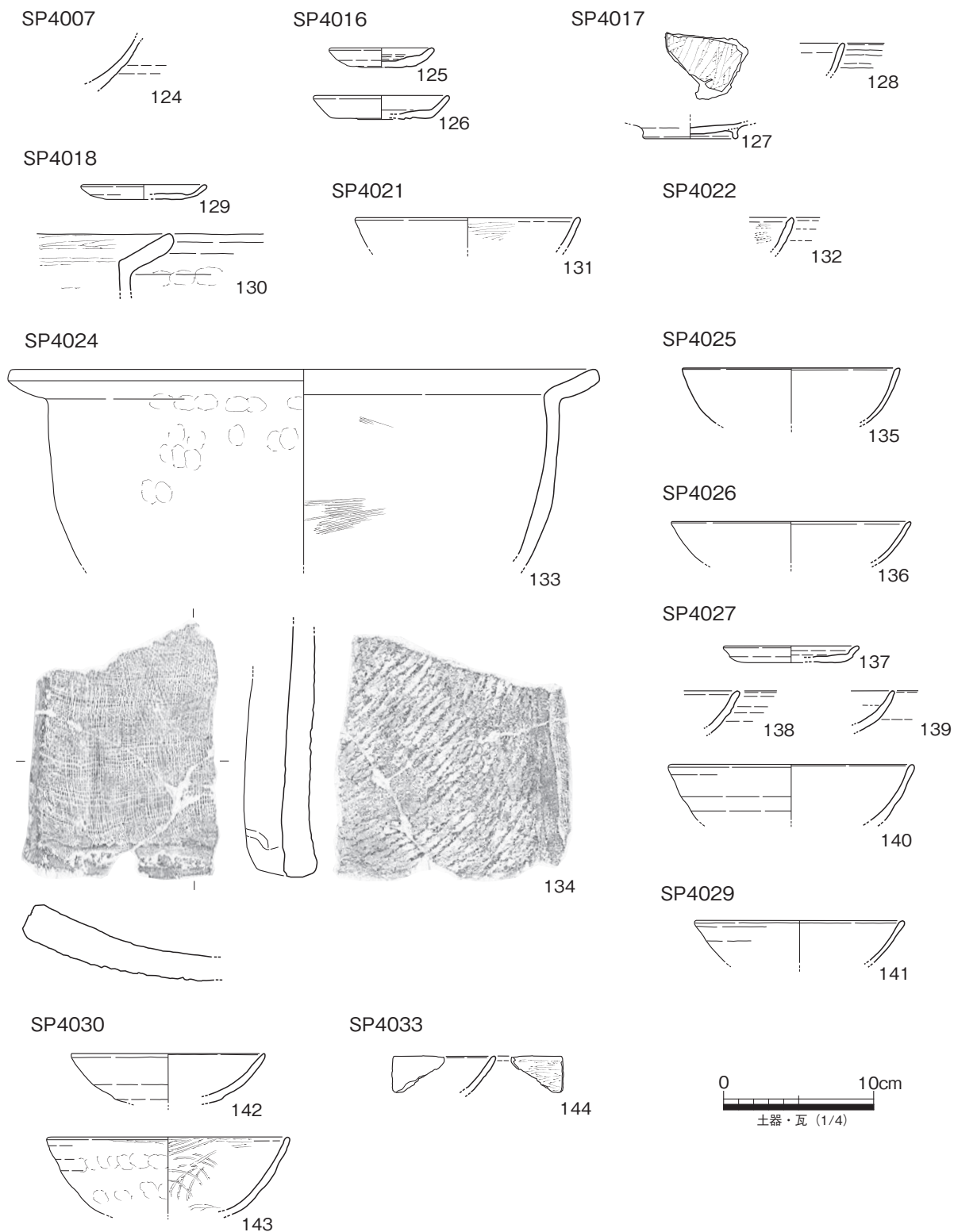
SP4035 (第 35 図) 直径 0.3 m、深さ 0.1 m ほどの柱穴である。中心に須恵器壺 (148) を据えられたような状態で検出した。出土遺物は第 36 図に示した。



第33図 4区1面 柱穴群平面・出土遺物1

145 は土師質土器皿である。底部の切り離し方法は不明である。口縁部は、直線的に外方へ大きく開く。
 146、147 は土師器碗である。146 は口縁端部のみ残存する。147 は外面に細かい単位のナデを施し、下部にはケズリ状の調整の痕跡が確認される。

148 は須恵器壺である。口縁端部を上方につまみ出す。体部上半に回転ナデ、下半に回転ヘラ削りを施す。
 柱穴群の年代については、出土土器の傾向から、おおむね中世前半にまとまるようである。その中で



第 34 図 4 区 1 面 柱穴群出土遺物 2

も、和泉型の瓦器の年代を参考にすれば、13世紀前半ごろの年代が考えられる。

(3) 古代の遺構

溝

SD4028 (第37～39図) 4-4区北側で検出された溝である。調査時は3面で検出されているが、1面まで掘り込み面が上がる。北西方向に流下し、平面形態は、ほぼ直線的に流れる。断面図作成位置から最大幅は3.4mとなり、最大深度1.6mを測る大型の溝である。溝の断面の形態はほぼV字状となり、底面付近はかなり幅が狭くなる。

埋土は大別して3層に分けられる。最上層・上層は、礫を多く含む褐色系統の細粒砂を中心とし、中層は灰色～黒色の極細砂、ないしはシルトで構成される。下層は黒色・灰色の粘質土からなり、部分的に粒径の粗い堆積物の層が混じるほか、ラミナが確認できる部分もあり、下層については流水の痕跡が認められる。

なお、中層において、木樋と考えられる木製品が流下方向に平行して検出されており、中層埋没段階で、掘り直しが行

われている (SD6006 や5～12層相当の溝) ことが明らかである。中層堆積後～上層堆積までにはある程度の時間差が想定される。

出土遺物は第40～53図に示した。

最上層出土遺物

149は須恵器蓋である。杯の蓋であり、口縁端部に面をもち、外面上半には回転ヘラケズリを施す。径3.3cmほどの低いつまみがとりつく。

上層出土遺物

150、152～154、156、157は須恵器杯である。150は口縁部が直線的に立ち上がり。外面には回転ナデを施す。底部については、へら切りのにちに、ナデを施す。152は口縁部が外反する。153は底部がやや丸みを帯びる。154、157は高台がとりつく杯である。154は断面方形の高台がやや外方に開く。156は高台が外方に開く。157は高台が欠損している。見込みには細かいナデの痕跡を残し、底部にはミガキを施す。

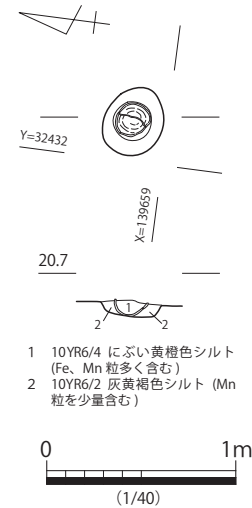
153は土師器杯である。内外面ともに回転ナデを施し、底部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。

158は須恵器壺である。長頸壺の口縁部が欠損したものであり、体部下半に回転ヘラケズリを施す、高台は貼り付けであり、底部には爪による圧痕が残る。

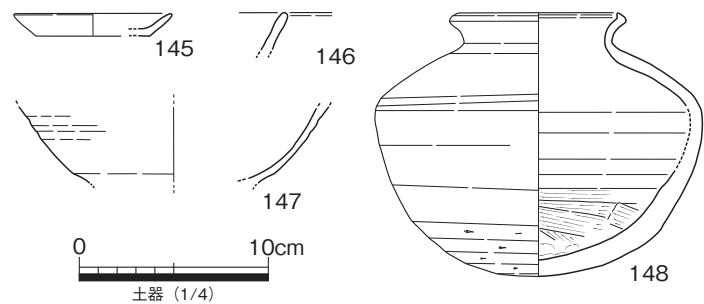
159は須恵器甕である。口縁端部が垂直気味に立ち上がる形態を呈する。

160は土師器鍋である。鉢状の体部に、外方へ大きく開く口縁部を持つ。口縁端部はナデにより面を持つ。

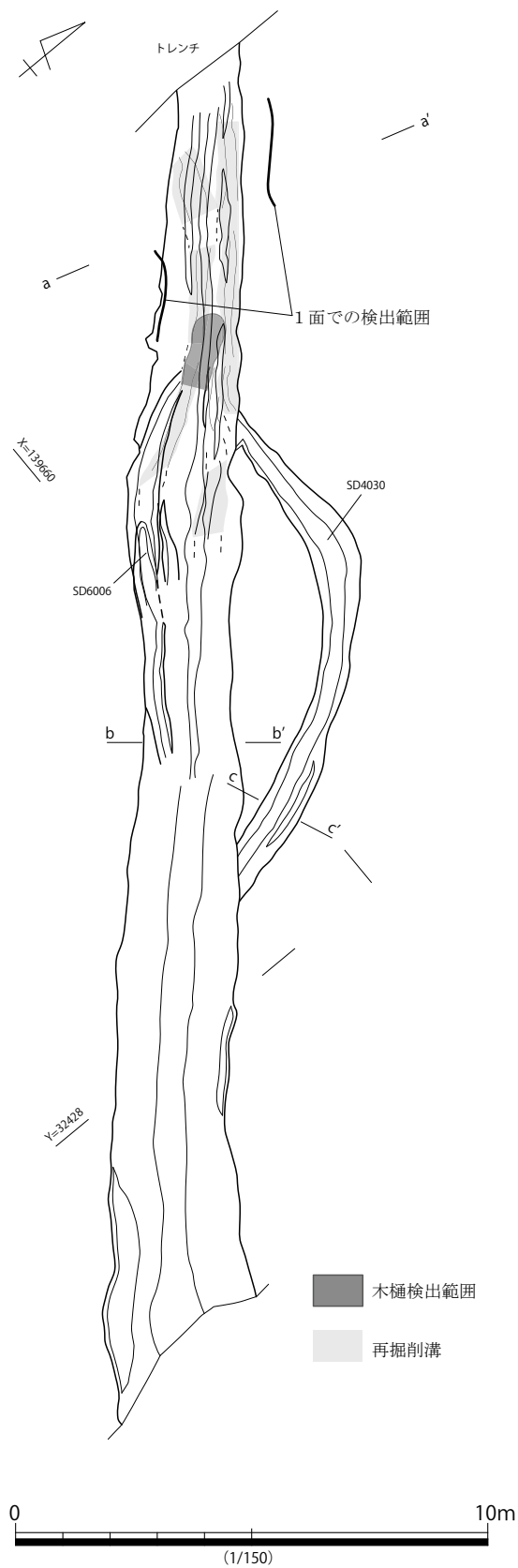
161は丸瓦である。凸面にはナデ、凹面には布目を残す。端面については、ケズリによって面取りを行う。



第35図 SP4035 平・断面



第36図 SP4035 出土遺物

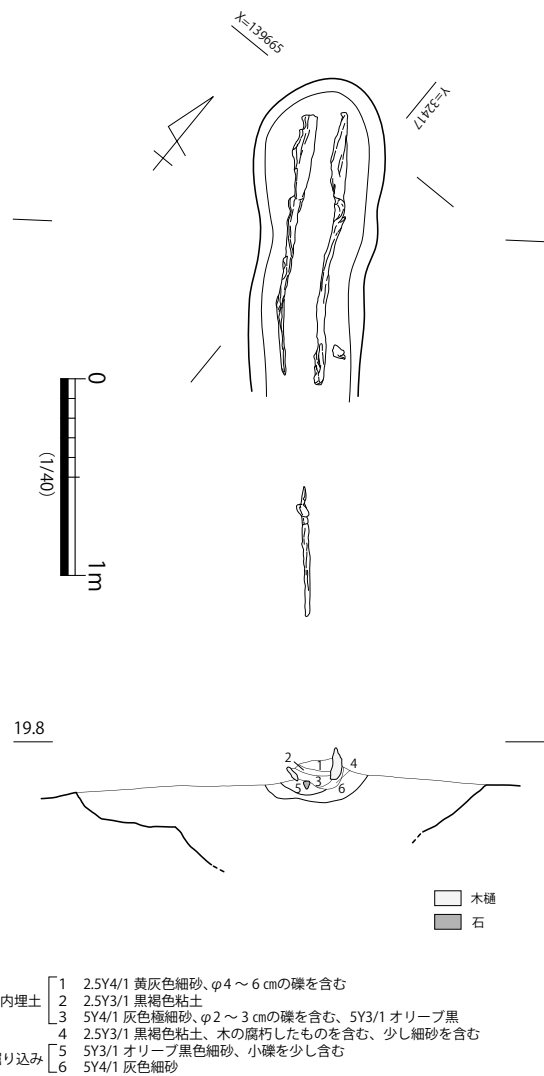


第 37 図 SD4028・SD4030・SD6006 平面

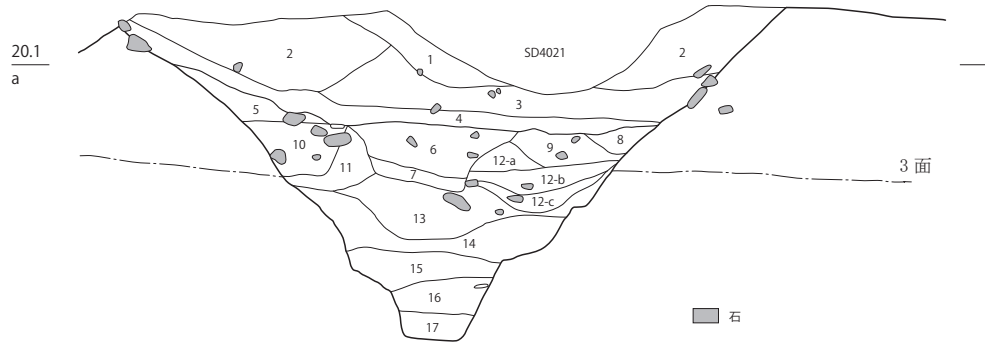
中層出土遺物

162～167は須恵器蓋である。いずれも杯に伴う蓋であるが、162は宝珠形つまみがつりつき、高台を持つ杯Hの蓋である。口縁部にかえりをもち、外面上半には回転ヘラケズリを施す。163はかえりを持つ杯Gに伴う蓋であり、外面は全面ナデを施し、天井部が高くなる。164、165は宝珠形つまみを持つ蓋である。高台を持つ杯Bに伴うものであり、口縁端部をナデにより面を作り、端部をやや下方につまみ出す。166、167は扁平なつまみを持つと想定される。167は外面上部にのみ回転ヘラケズリを施す。

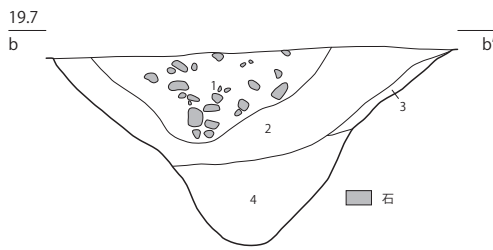
168～176は須恵器杯である。168～172は高台を持たない杯Aであり、169、171は直線的に伸びる口縁部を



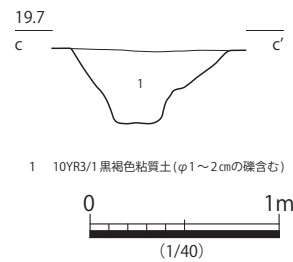
第 38 図 SD4028 木槨出土状況



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂に 10YR3/4 暗褐色細砂を含む、φ1～2 cmの礫を含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂に 10YR3/4 暗褐色細砂を含む、φ4～5 cmの礫を多く含む
- 上層 3 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂、φ1～2 cmの小礫を含む
- 4 2.5Y4/1 黄灰色極細砂土壌中の鉄分が酸化したものやφ3～4 cmの礫、帯状に黒色の焼土を含む炭化物を含む
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂、礫を少し含む
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色極細砂、φ4～5 cmの礫を含む
- 7 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂、少し大きい礫を含む
- 8 5Y5/1 灰色細砂に酸化した Fe を多く含む、しまりなく粗い粒子
- 9 5Y5/1 灰色極細砂にφ4～5 cmの礫、5Y3/1 オリーブ黒色の粘土ブロックを含む
- 中層 10 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂、φ6 cmへの礫を含む
- 11 2.5Y4/1 黄灰色極細砂、鉄をわずかに含むほか、オリーブ褐の細砂を帯状に含む
- 12-a 5Y3/1 オリーブ黒色極細～シルト、礫含まない
- 12-b 5Y3/1 オリーブ黒色極細～シルト、2.5GY6/1 オリーブ灰色細砂をラミナ状に含む
- 12-c 5Y3/1 オリーブ黒色極細～シルト
- 13 5Y4/1 灰色極細砂、大きい礫(φ10 cm以上)を含む
- 14 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂と 5Y2/1 黒色粘土をラミナ状に含む
- 15 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂、5Y2/1 黒色の粘土、地山由来の黄色ブロックを含む、φ2～3 cmの礫を含む
- 下層 16 5Y4/1 灰色中粒砂、φ2～3 cmの礫を多く含む
- 17 5Y5/1 灰色粘土、部分的に細砂・小礫を含む



- 1 10YR2/2 黒褐色砂礫 (粘質強、1 cm～10 cm程度の礫多量に含む)
- 2 10YR4/1 褐色細砂
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (細砂多量に含む)
- 4 10YR6/1 褐色細砂 (1 cm程度の礫多量に含む、5～7 cm程度の礫少量含む、粘土のブロック 10 cm程度含む、青灰色シルトブロック含む、暗灰色シルトがラミナ状に入る)



第39図 SD4028・SD4030・SD6006 断面

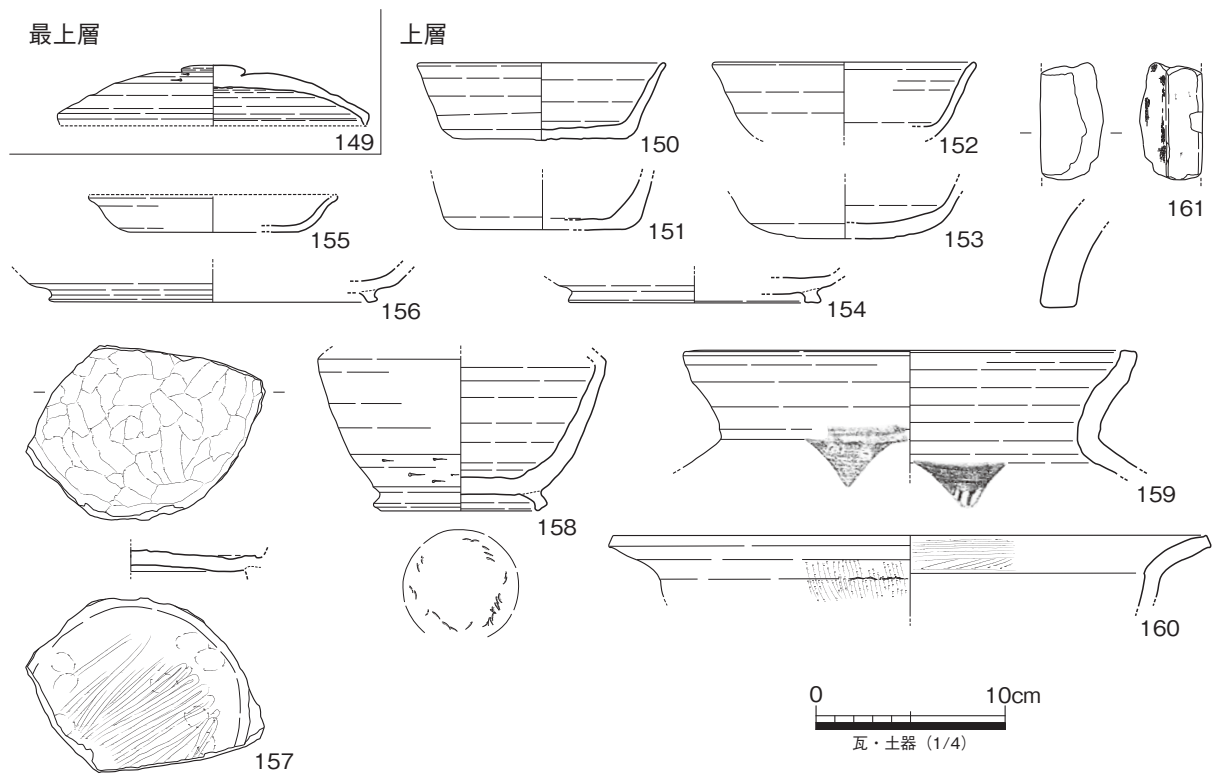
もつ。169 はやや丸みを帯びる底部を持つ。172 は底部径が 9cm を測り、底部はヘラ切りによって切り離している。173～176 は高台を持つ杯 B であり、173 は方形の高台が貼り付けられ、174 は断面台形の高台がやや外方に踏ん張るように貼り付けられる。175 は高台が外方に広がるが、端部がやや内突する。176 は高台径 14.2cm を測るやや大きめの杯である。高台は断面方形で、やや外方に踏ん張る。見込みには不定方向の板ナデを施す。

177 は須恵器蓋である。口径 25.6cm を測り、法量からも皿に伴う蓋であると考えられる。口縁端部はナデにより面を持つ。

178 は須恵器盤である。底部との境界に回転ヘラケズリを施す。

179、183 は土師器皿である。179 は口縁端部が上方に立ち上がる。破片のため口径は不明である。183 は口縁部が端部付近で外反する。口縁部内面には、横方向のミガキを密に施す。

180～182 は土師器杯である。180 は直線的にのびる口縁部であり、口縁端部内面には横方向のミガキを施す。181 は口縁端部が内側に肥厚し、外面底部付近にはケズリを施す。182 は口縁端部を少し内側



第40図 SD4028 上層・最上層出土遺物

に折り返し、外面底部付近にはケズリを施す。口縁部内面には見込み放射状にミガキを施す。

184は蝸壺である。穿孔部分の上部に穿孔方向と直交する形でナデを施し、へこみを作り出している。

185は須恵器はそうである。口縁部が欠損しており、楕円形の体部に穿孔を持つ。体部外面下半には、回転ヘラケズリを施す。

186、187は須恵器高杯である。いずれも脚部と杯部の一部が残存しており、屈曲を持ち直線的に外方へ広がる杯部を持つ。

188、189は須恵器壺である。いずれも短頸壺であり、188は直立気味に短く立ち上がる口縁部をもち、肩が強く張る。189は体部中央に凹線状の凹みをもつ。

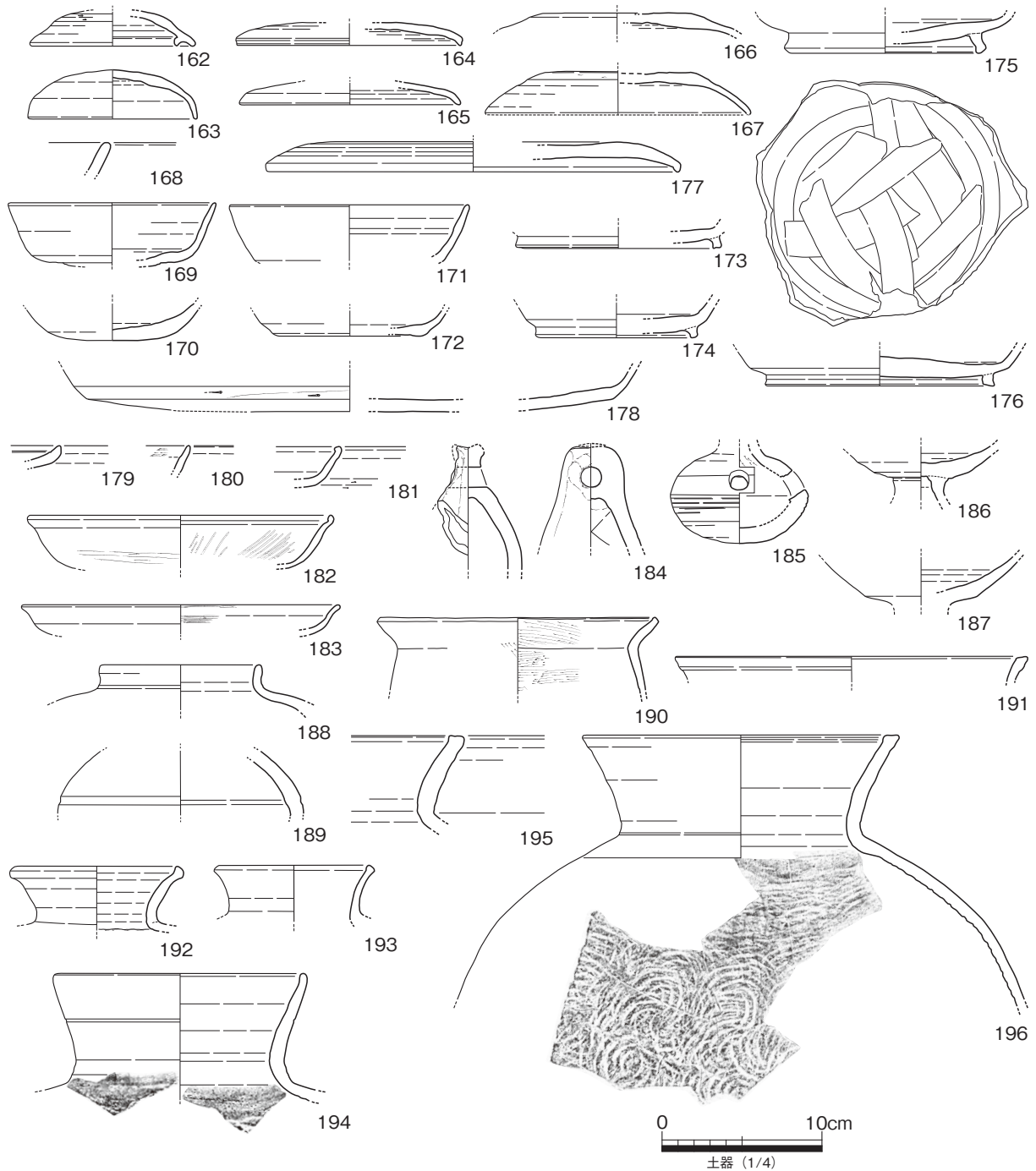
190は土師器甕である。くの字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部はナデにより、やや上方に摘み上げたような形態を呈する。

191は須恵器甕の口縁部の破片である。残存部が少ないため詳細は不明であるが、口縁端部上面に面を持つ。

192、193は横瓶である。口縁部のみ残存しているが、口径が小さく、端部を上方につまみ上げることから横瓶と判断した。

194～196は須恵器甕である。194は垂直気味に立ち上がる口縁部を持つ。195は口縁端部上面をナデにより平坦にする。196は口縁端部をやや内側につまみ出す。体部は肩の張りが弱く、外面の調整は自然釉により不明であるが、内面には同心円状の当て具痕が残る。

197は丸瓦である。凸面にはナデ、凹面には布目を残し、端面にはケズリを施す。広端部の端面はへら切りによって仕上げている。



第41図 SD4028 中層出土遺物 1

下層出土遺物

198、199 は須恵器蓋である。いずれも杯に伴う蓋であり。198 は口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。199 は扁平なつまみをもつ。

200～208 は須恵器杯である。200、201 はおそらく杯Bである。口縁が直立気味に立ち上がる。202 は底部外面にケズリを施す。203 は直線的に口縁部が外方に開く。204 は口径が小さく、深い器形を持つ。205 は底部が明瞭でない。206 は底部切り離し後、細かい単位のナデによって調整を行う。207、208 は杯Bであり、いずれも外方に開く高台を持つが、207 は端部を丸くおさめ、208 は面を持たせる。

209～215 は土師器杯である。

216、217 は土師器皿である。いずれも内面に暗文を持つ畿内系の土師器である。217 は口縁部が内湾し、端部がやや内側に肥厚する。外面底部との境界にはヘラケズリを施す。

218、219 は須恵器蓋である。いずれも皿に伴う蓋であり、口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。

220、221 は須恵器皿である。いずれも屈曲し直線的に外方へ広がる口縁部を持つ。

222、223 は須恵器鉢である。222 は口縁端部付近でくの字状に折れ曲がる形態を呈する。223 は内湾する口縁部を持つ。

224、225 は須恵器平瓶である。いずれも口縁部のみ残存する。

226～228 は須恵器高杯である。椀型の杯部をもつ高杯であり、226 は杯部の破片である。227、228 は脚部の破片であり、228 は脚部端に面を持たせる。

229 は土師器高杯である。内外面にハケ目を残す。

230 は須恵器甕である。口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部外面には格子叩き、内面には同心円状の当て具痕を残す。

231 は須恵器横瓶である。胴部のみ残存し、風船状に一カ所をあけた胴部を作り出したのちに粘土板で閉塞している。

232～234 は土師器鍋である。把手を持つ鍋であり、232 は把手のみ残存し、233 は垂直気味に外反する口縁部を持つ。234 は口縁端部に面を持つ。

235 は土師器甑である。筒状の体部から口縁端部まで直線的に伸びる形態を呈する。

236、237 は蛸壺である。236 は穿孔部分の上部に、穿孔方向と直行する方向の凹みが見られる。237 は穿孔部の形態が三角形状を呈する。

238 は製塩土器である。体部の破片であるが、詳細は不明である。

239 はふいご羽口である。筒状の形態が、裾広がり広がる形態を呈する。すぼまる側の外面には被熱の痕跡がわずかであるが確認できる。

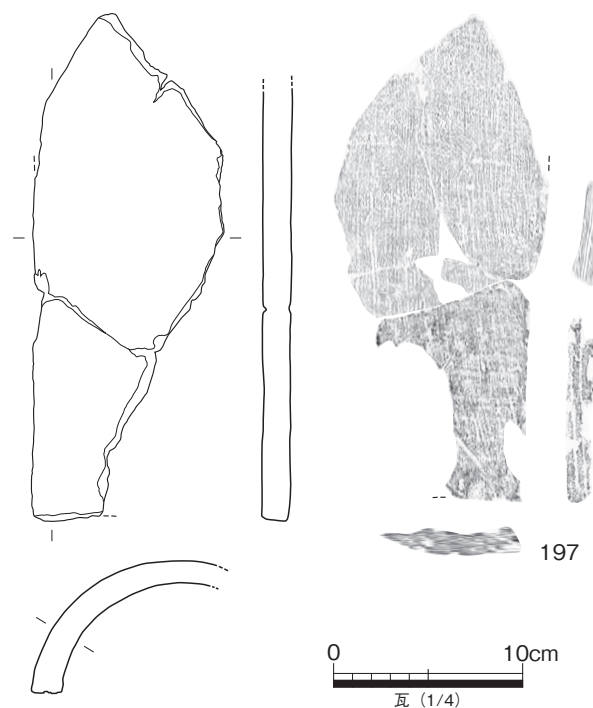
240 は須恵器杯である。口縁端部はわずかに外反する。

241 は土師器甕である。口縁部が大きく外反する。内面の頸部の口縁部と体部の境界が明瞭である。

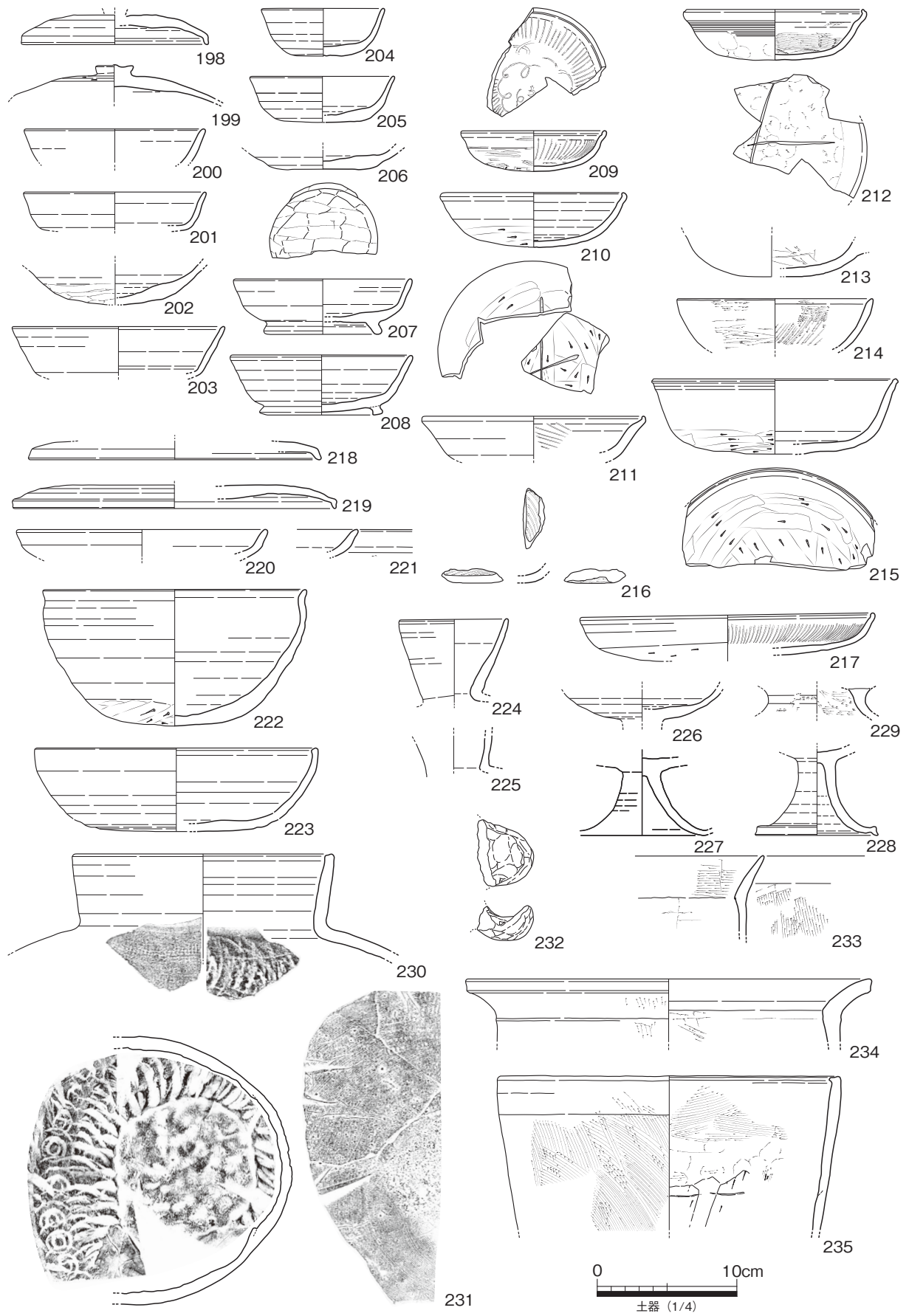
再掘削溝 1～3

中層埋没後に再掘削された小規模な溝群（第 39 図の 5～12 層に相当）を検出している。小溝同士にも切り合いが認められるが、遺物の取り上げの際には、峻別して取り上げることはできなかった。

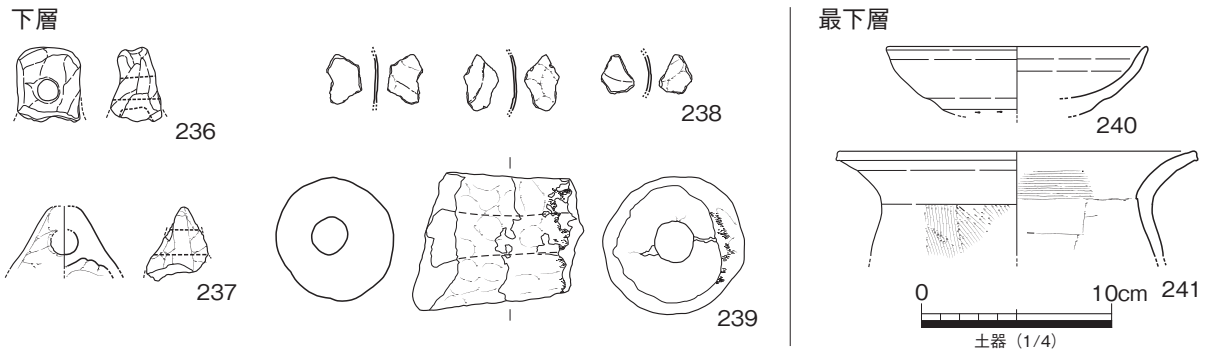
242～245 は須恵器杯である。242、243 は高台を持つ杯 B である。242 は外方へ踏ん張る高台が取り付け、243 は断面三角形の高台が外方へ開くように取り付く。244 は口縁端部が外反する。245 は口縁部が直線的に外方へ開く。



第 42 図 SD4028 中層出土遺物 2



第43図 SD4028 下層出土遺物 1



第 44 図 SD4028 下層出土遺物 2・最下層出土遺物

246 は須恵器盤の可能性が高い。口縁端部上面に面を持たせる。247 は須恵器壺である。頸部の破片である。

248 は蝸壺である。穿孔部は円形を呈し、上面には穿孔方向と直行するへこみをなでによって作る。

249 は土師器甕である。体部が直線的になる甕であり、口縁端部は面を持たせ、やや内湾する。

250 は土師器皿である。口縁部が外反し、端部が上方につまみ上げられる。外面には横方向のミガキを施す。

251、252 は須恵器甕である。251 は小型の甕の口縁部であり、端部の上面がナデにより平坦に仕上げられる。252 は口縁が直立気味に上方へ延び、端部がわずかに外反する。

253 は須恵器杯である。断面方形の高台が外方に開くように貼り付けられる。

254 は須恵器甕である。口縁端部を拡張し、ナデを施し凹線状のへこみを作る。

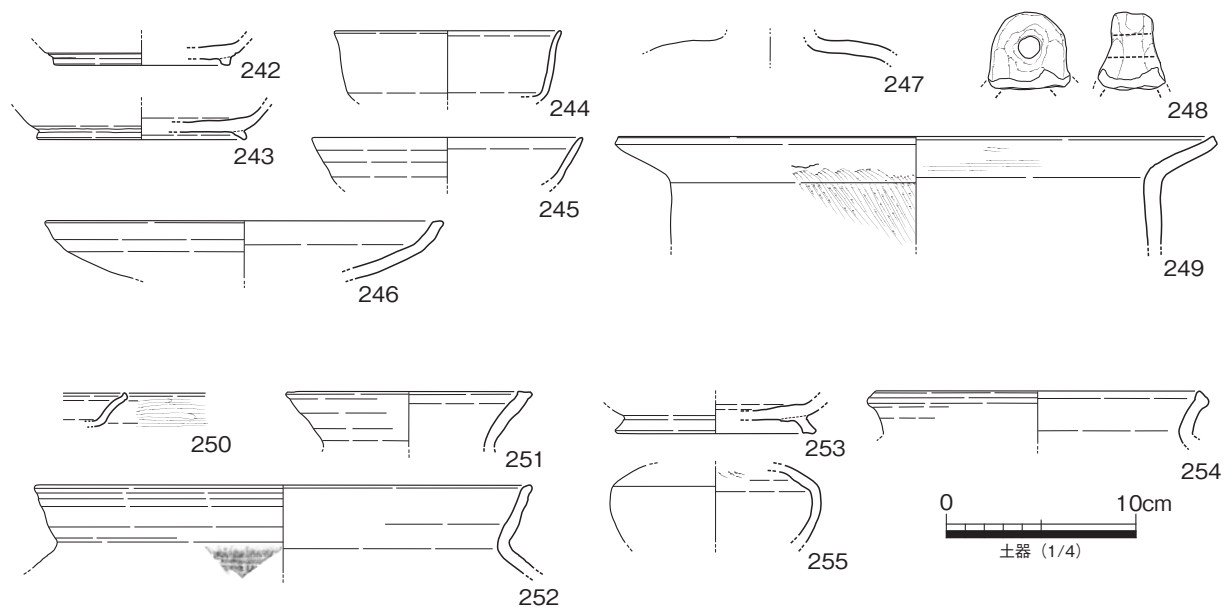
255 は須恵器壺である。肩部に緩い稜を持つ。

層位不明遺物

256 は須恵器蓋である。口縁端部が下方に折り曲げられ、端部に面を持つ。

257、258 は須恵器杯である。257 はやや口径が小さく、深手の器形を持つ。258 は高台が外方へ開き、端部がナデによりわずかに拡張される。

259、260 は土師器皿である。259 は口縁端部内面に、ナデによりへこみが生じる。260 は緩やかに屈曲



第 45 図 SD4028 再掘削溝出土遺物

する器形を持ち、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともにヨコ方向のミガキを施すが、全体的には回転ナデにより成形を行っている。

261は須恵器壺である。おそらく細い口縁部が取り付く。底部付近はケズリによって調整する。

262、263は土師器甕、鍋、甑等の取手である。

264は土師器甕である。口縁端部は上方につまみ上げ、面を持たせる。

265は須恵器壺である。口縁部が短く垂直に立ち上がる壺である。肩部にはカキ目を残し、その上から列点文を施す。

266は須恵器鉢である。片口の鉢であり、口縁部が内湾する。口縁端部はナデにより面を持たせる。

267は平瓦である。凸面の調整は不明であるが、凹面には布目を残す。

268は須恵器甕である。体部の破片であるが、内面に墨痕をもつため、硯として転用された可能性が考えられる。

中層出土木製品

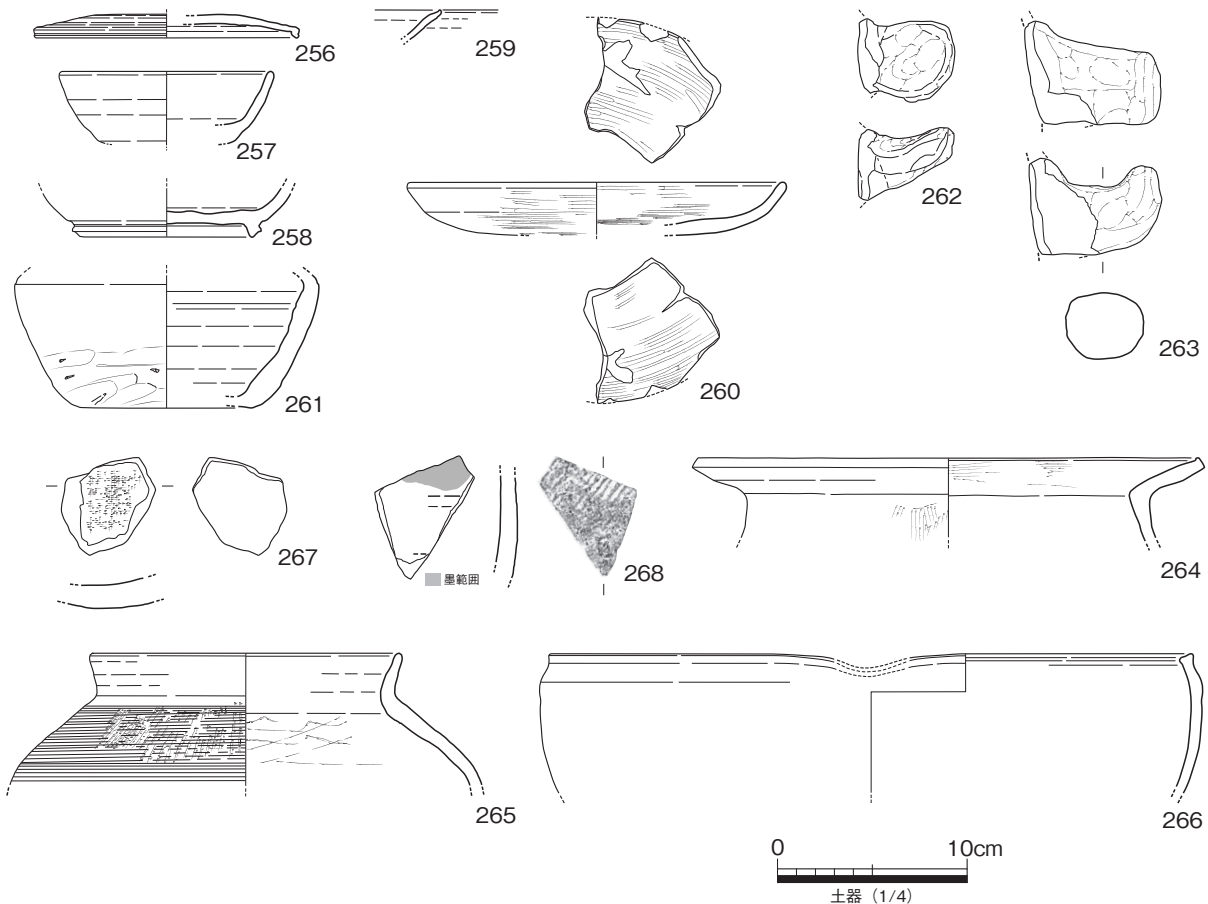
269、270は丸棒である。いずれも破片であるが、加工の痕跡は確認できる。

271～275は角棒である。いずれも太さは数cm程度の小型のものである。

276は削片である。明瞭な加工などは確認できない。

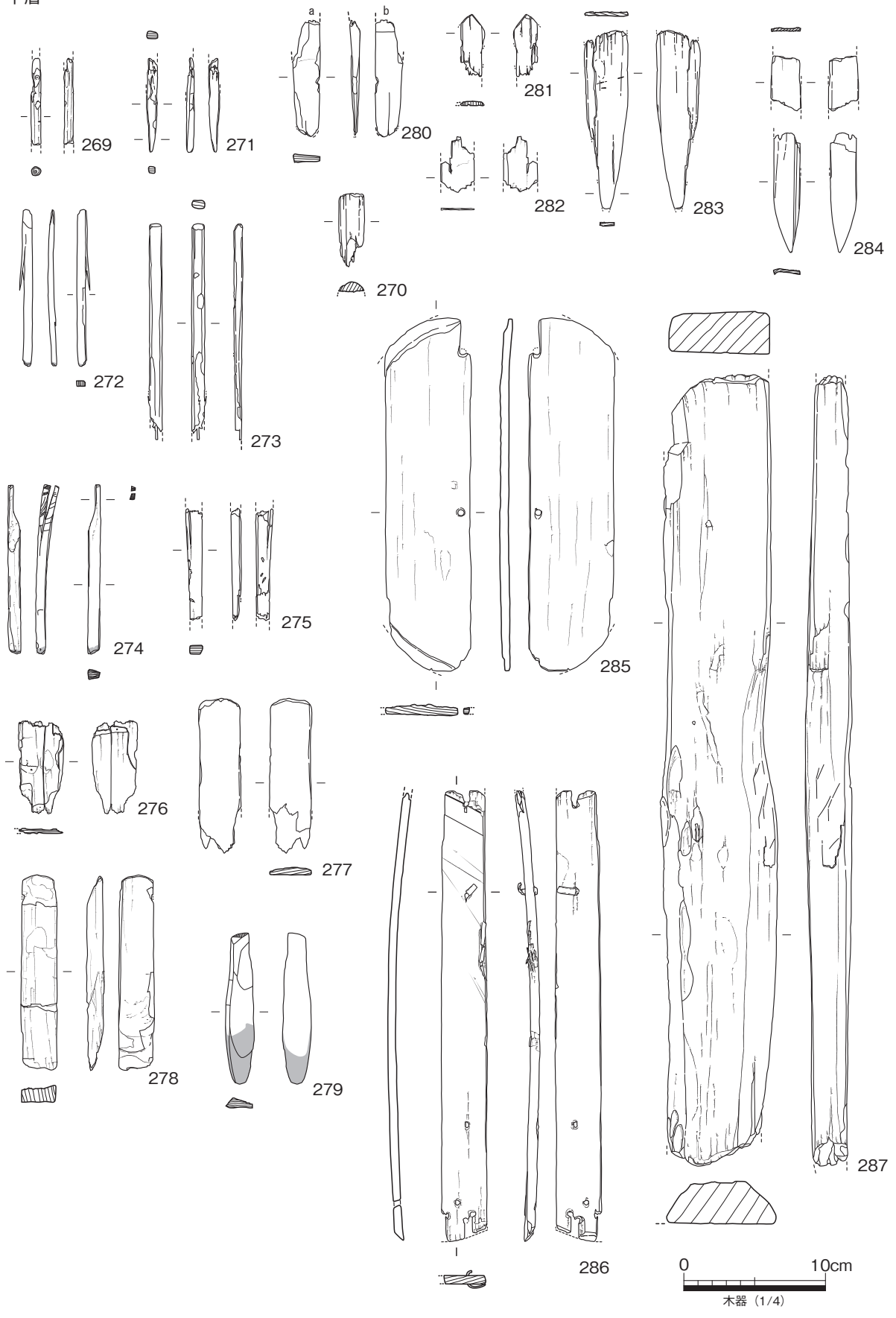
277、278は板材である。277は厚さ0.5cmほどの薄い板であり、隅丸の長方形を呈する。278は厚さ1.2cmを測り、両端が斜め方向に削られている。

279はへら状の木製品である。明瞭な加工痕は確認できないものの、形状はへら状となり、何かしらの器具として使用された可能性もある。下端には焦げが確認できる。



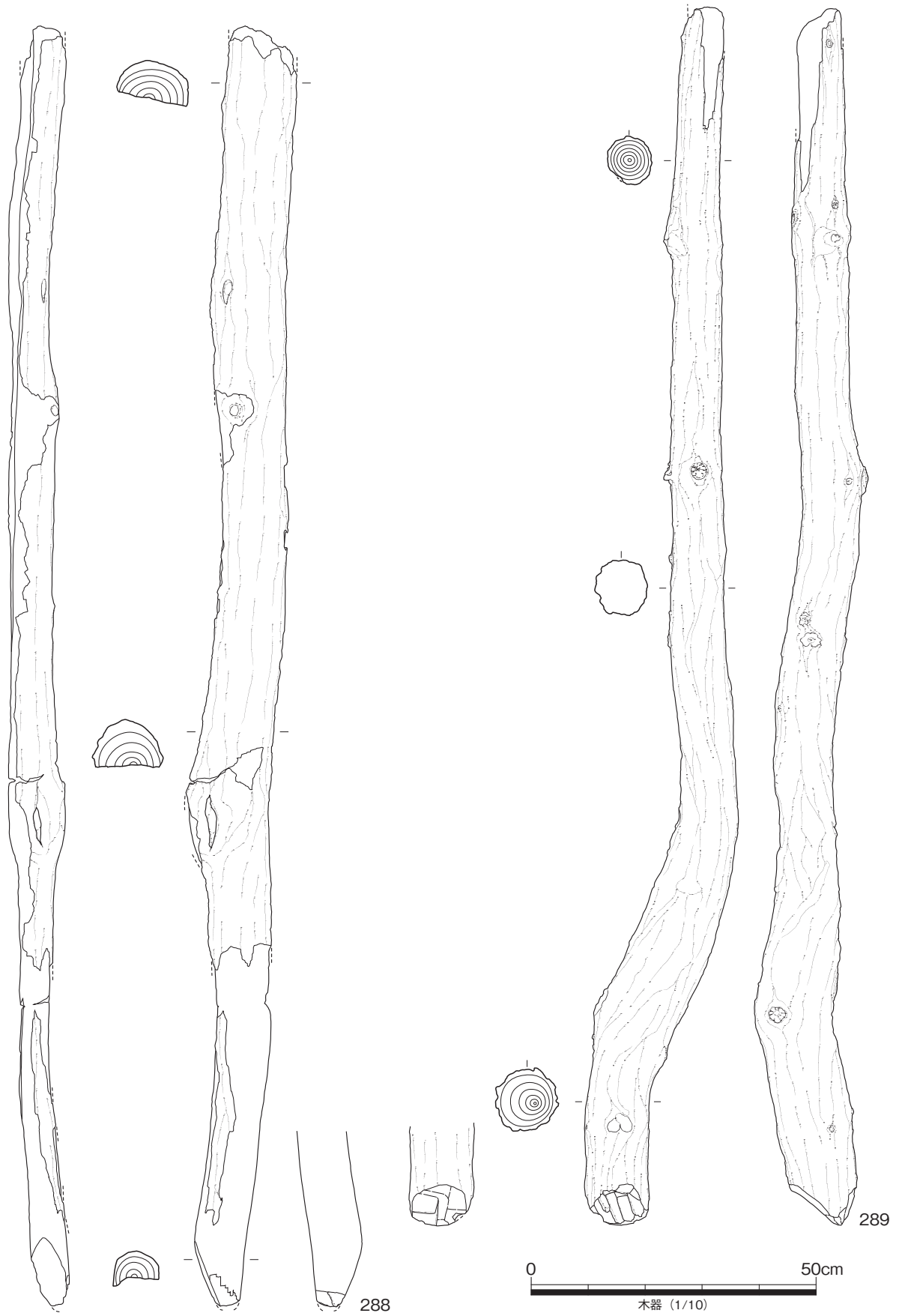
第46図 SD4028 層位不明遺物

中層



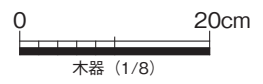
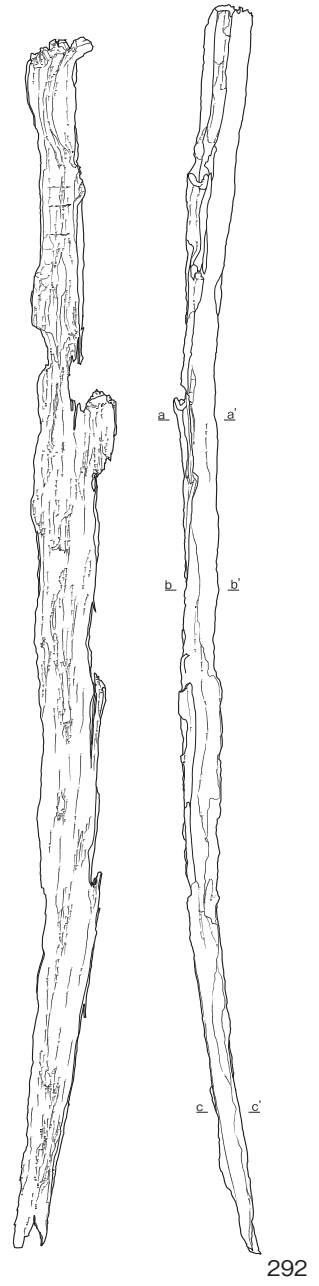
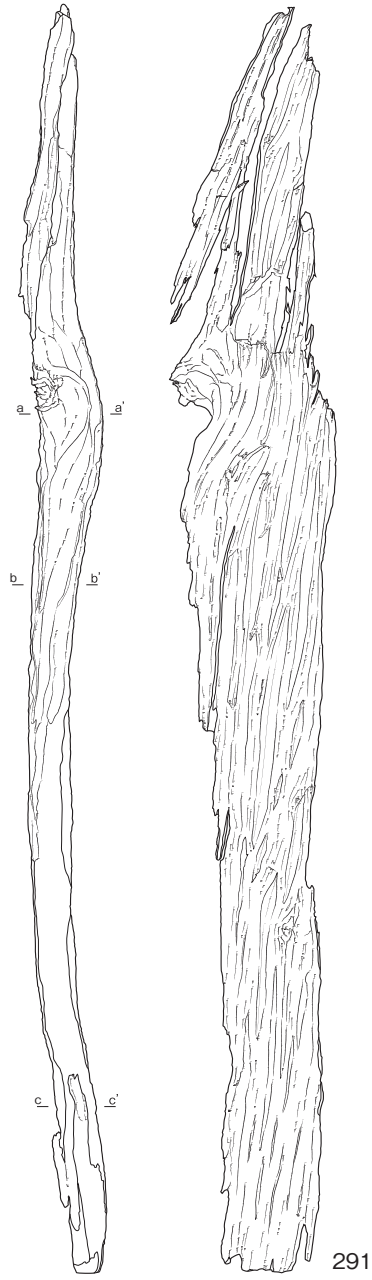
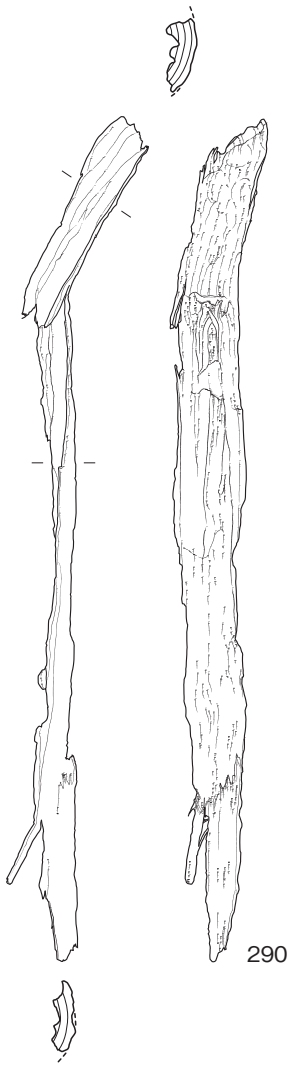
第 47 图 SD4028 中層出土木器 1

中層



第 48 図 SD4028 中層出土木器 2

中層



第 49 图 SD4028 中層出土木器 3

280 は不明破片である。おそらく角材の破片であり、側面などに加工の痕跡が残る。

281～284 は齋串である。いずれも破片であり全体形状を復元できるものではない。281 は頂部であり、山形に整形されている。282 は部位の特定も困難であり、厚さも極めて薄い、齋串であると判断した。

283、284 は下端が残存しており、いずれも左右対称ではなく、片側に先端が偏る。

285、286 は曲物である。いずれも底板の破片である。285 は穿孔や、側板を据えるのためのへこみが確認できるが、綴じに使用した材は残らない。286 は樫による綴じの痕跡が残る。

287 は板材である。大型の板材であり、部分的には断面台形状となるが、おおむね断面長方形に切り出されている。一部に未加工の面を残す。

288、289 は加工木である。いずれも材の端部のみを加工している。

290～292 は木樋である。いずれも一木の外周のみ樹皮を残し、内側にのみ加工を行っている。291、292 は溝の中層に据えられた状態で検出されたため、当初の位置や機能を反映しているものではないと考えられるが、一木を割り抜いて作られた木樋が投棄されたものと考えられる。290 も近接し出土した木製品であり、明瞭な加工の痕跡は見られないが、おそらく木樋の一部であると考えられる。

下層出土木製品

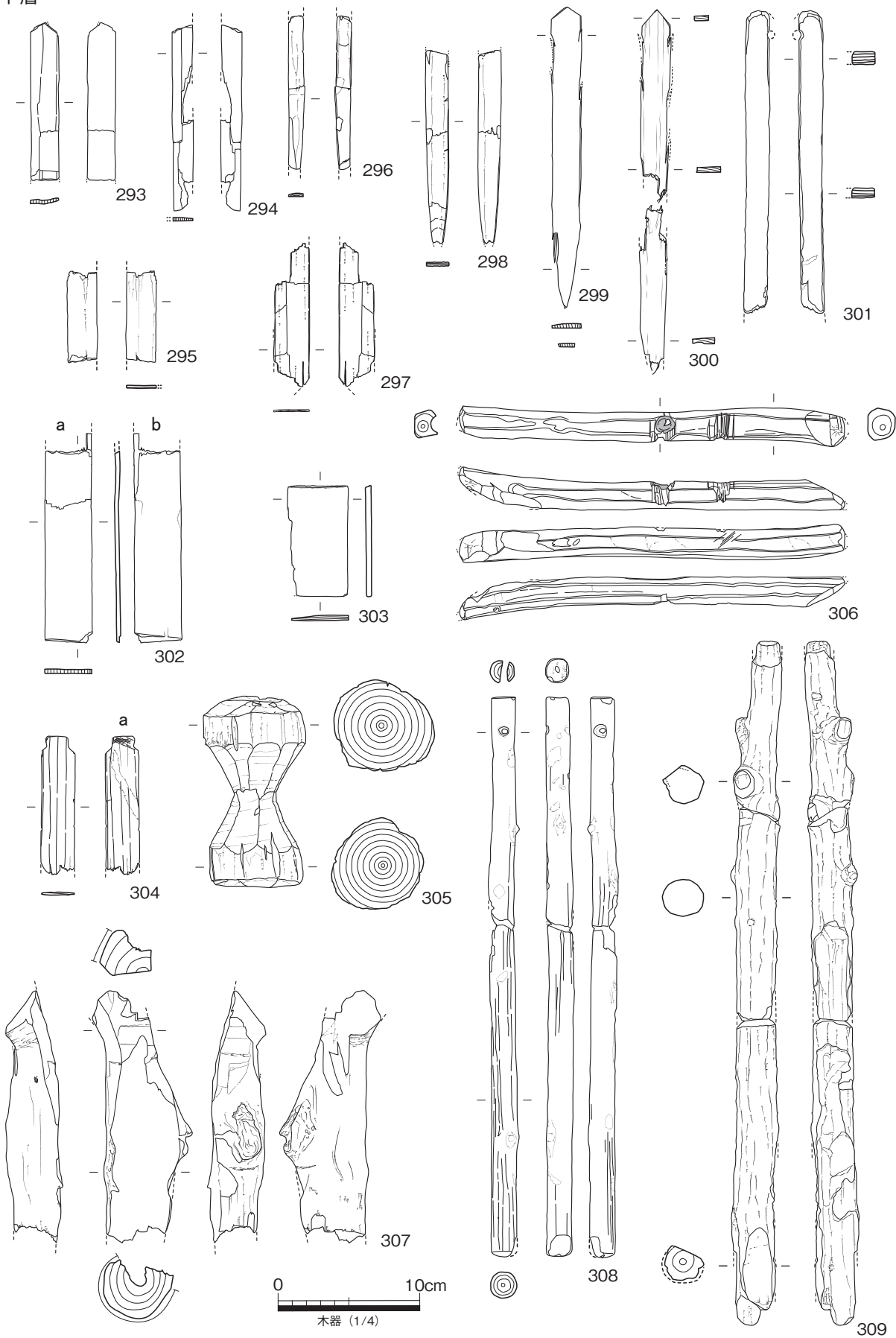
293～300 は齋串である。293 は頂部が残存する。磨滅はほとんどなく、上端に加工面が見られ、段差を持つ切込みを施す。294 板材の可能性も考えられる。工具痕は見られないが表裏とも平滑に加工されている。片面中央には稜をもつ、側面の片面は割れ面である。年輪の乱れは見られない。断面図の位置では、14本の年輪を確認できる。295 は両面とも平滑であり、磨滅はあまりないが、加工痕を確認することはできない。柱目材であり、確認できる年輪は1本のみである。296 は上端部がやや磨滅している。加工痕を確認できる。左面をやや山形状に成形しており、年輪については不明である。297 は全体的にやや磨滅している。加工痕は認められない。下端部の斜め方向の加工については、古い折面の可能性がある。298 は全体的にやや磨滅している。加工痕を確認できない。3.0 mmで4年分の年輪を確認できる。299 は全体的にやや磨滅している。上端及び側縁は刃物による加工と考えられるが、広い面は割り面のままと見える。左下の切り込み状に見える部分は新しい割れによるものである。300 は磨滅はほとんど見られない。両側縁に切り込みが複数ある。4 mmの間に3本の年輪を確認できる。

301 は板材である。全体やや磨滅し、加工痕は見えない。板目で1.5 mm間隔で6本の年輪を確認した。

302～304 は木簡である。文字の現時点での解釈等については、まとめの部分で言及することとし、この章では、製品自体の情報を中心に報告する。302 は残存長14.7 cm、幅3.3 cm、厚さ0.3 cmを測るほぼ平面長方形の木簡である。上端部より上が欠損している。上端は折られた可能性もある。下端は折り、左右両辺は削りを施す。墨の跡はa面にのみ認められる。a面を下にした状況で埋没し、土圧により少し折れがみられる。文字が解読できる部分は少ないが、墨の残存状況から、2行にわたり文字が書かれていたと考えられる。303 は残存長7.8 cm、幅4.3 cm、厚さは最大で0.4 cmを測る。長方形の短冊状の平面形態を呈しており、上端は切り折り、下端と左右には削りを施すが、左側が一部欠損している。断面形態からも確認できるように、剥ぎ取られたかのように、左側が薄くなっているが、墨痕なども全面にわたって確認でき、表面に荒れなども見られないため、この状態で使用されたものとする。

304 は下半が欠損している。残存長9.8 cm、幅2.8 cm、厚さ0.2 cmを測る。表面の磨滅が顕著であり、加工の痕跡は確認できない。文字の痕跡は確認できず、わずかに墨痕が認められる程度である。上端を削り、くびれ状に挟りを作る。挟りの部分に使用痕は認められないが、木簡であれば、荷札木簡である

下層



第 50 图 SD4028 下層出土木器 1

と考えられる。

305は木製槌である。全体的に摩滅はほとんど認められない。加工面には鉄器の刃こぼれによる線条痕が見られる。中心から1～3.5mmの間で5～8本の年輪を確認できる。

306は火鑽臼である。摩滅はほとんどなく、加工痕が確認できる。枝の四面を平らに皮ハギし、そのうち1面のみ切り込みを入れたのち、火鑽臼として利用していたと想定できる。

もう1か所切り込みが確認できるが、この部分については、使用に伴う痕跡は確認できない。

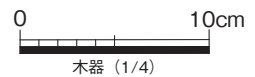
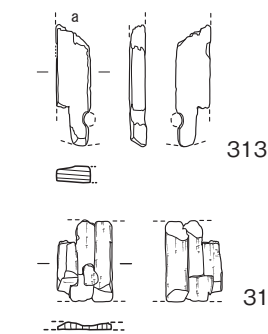
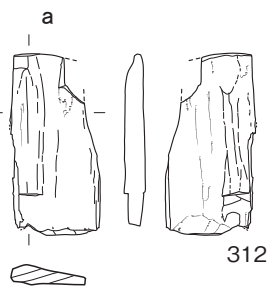
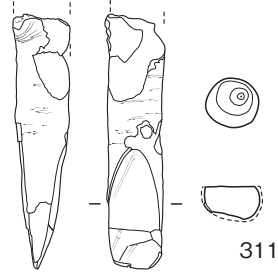
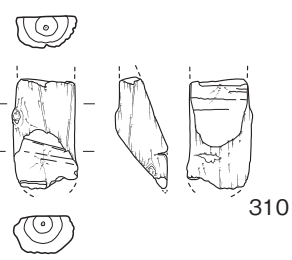
307は先端が加工された丸太である。加工痕が確認でき、その中には鉄器の刃こぼれ痕が見える。

308は丸棒である。全体的にやや摩滅している。細かい面取り状の加工が全体に見られる。

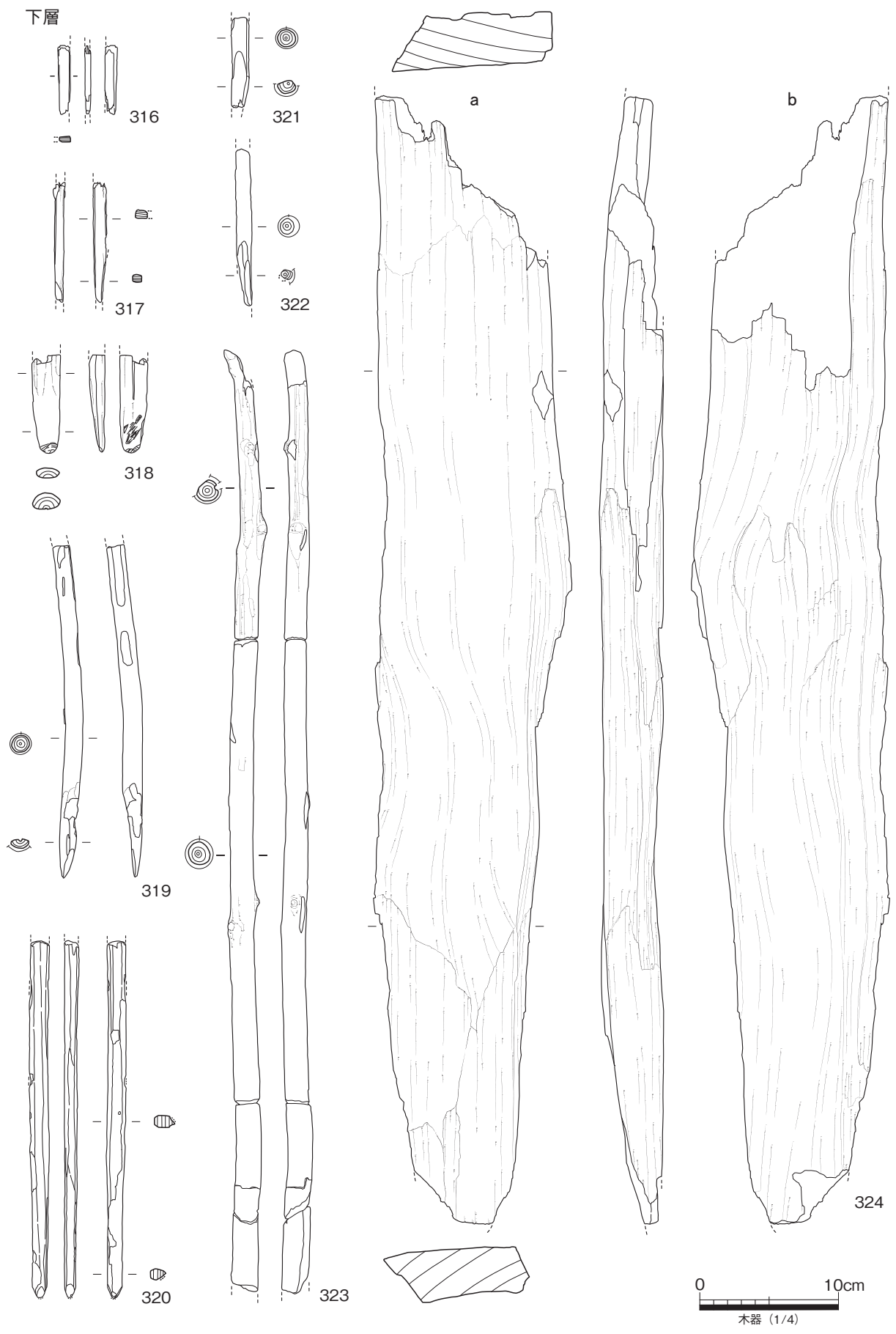
309は杭である。下端には斜めに切断した面があり、上端は折れている。枝部分は根元で枝払いを行っている。

310は切断片である。摩滅はほとんどなく、

下層



第51図 SD4028 下層出土木器2



第 52 図 SD4028 下層出土木器 3

工具痕がみられる。

311は杭状の木製品である。摩滅はほとんどない。加工痕は先端に見られ、工具の刃こぼれによる線状痕が確認できる。

312は不明木製品である。加工痕が一部に見られる。図左側縁は割れ面の可能性もあり、下端は面取りが見られる。

313は板材である。加工痕は見られない。a面左側も折れ面である可能性が高い。

314は削片である。上下端に斜目に切削した面があり、手斧による切断痕と考えられる。

315は角材である。加工痕は見えない。割り材と考えられる。

316は板材である。表裏両面とも平滑であるが、加工痕は見えない、1側面及び上下端は折損している。

317は角棒である。全体的にやや摩滅している。加工痕はa面下部にある。

318はへら状木器である。摩滅はほとんどなく、加工痕は上半に見られる。下端には使用痕と考えられる線状痕がある。

319は先端加工木である。全体的にやや摩滅しているが一部加工痕有り。

320は角棒である。全体的にやや摩滅しているが加工痕は確認できる。断面多角形状を呈する。

321～323は先端加工木である。321は全体的にやや摩滅している。下端に加工面を持つ。322は全体的にやや摩滅。下端部に加工面あり。

323は上半部に加工痕がある芯持ち材で、枝払いが確認できる。

324は割板材である。b面はやや摩滅している。加工痕は見えない。

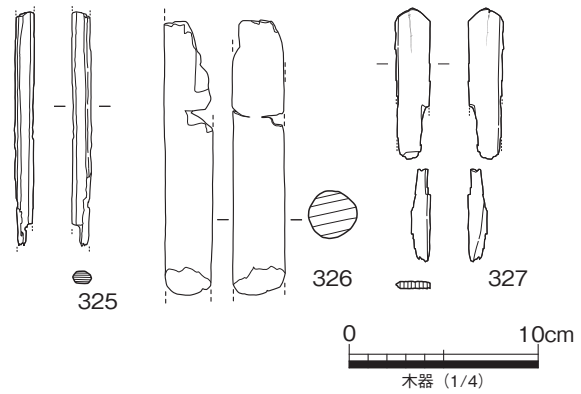
層位不明木製品

325は棒状製品（斎串）である。全体的に摩滅しているが、加工痕は見えない。断面は六角形を呈する。

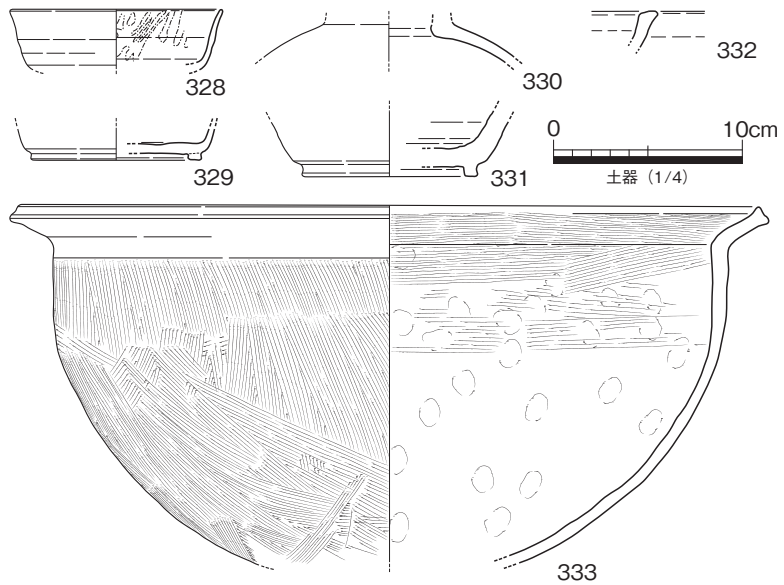
326は柄である。全体にやや摩滅している。加工痕は見られない。

327は斎串である。全体的に摩滅している。加工痕は確認できない。

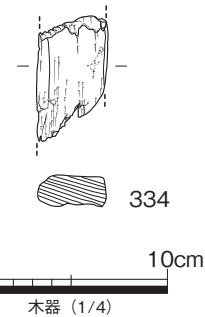
SD4028については、上層～下層において、7世紀末～9世紀初頭までの遺物が確認されている。このうち下層は、最新の遺物である須恵器杯Bの形態から、8世紀前半の埋没が考えられる。中層についてもおおむね同様の埋没が考えられるが、上層については、杯Aの形態から、8世紀末、ないしは9世紀



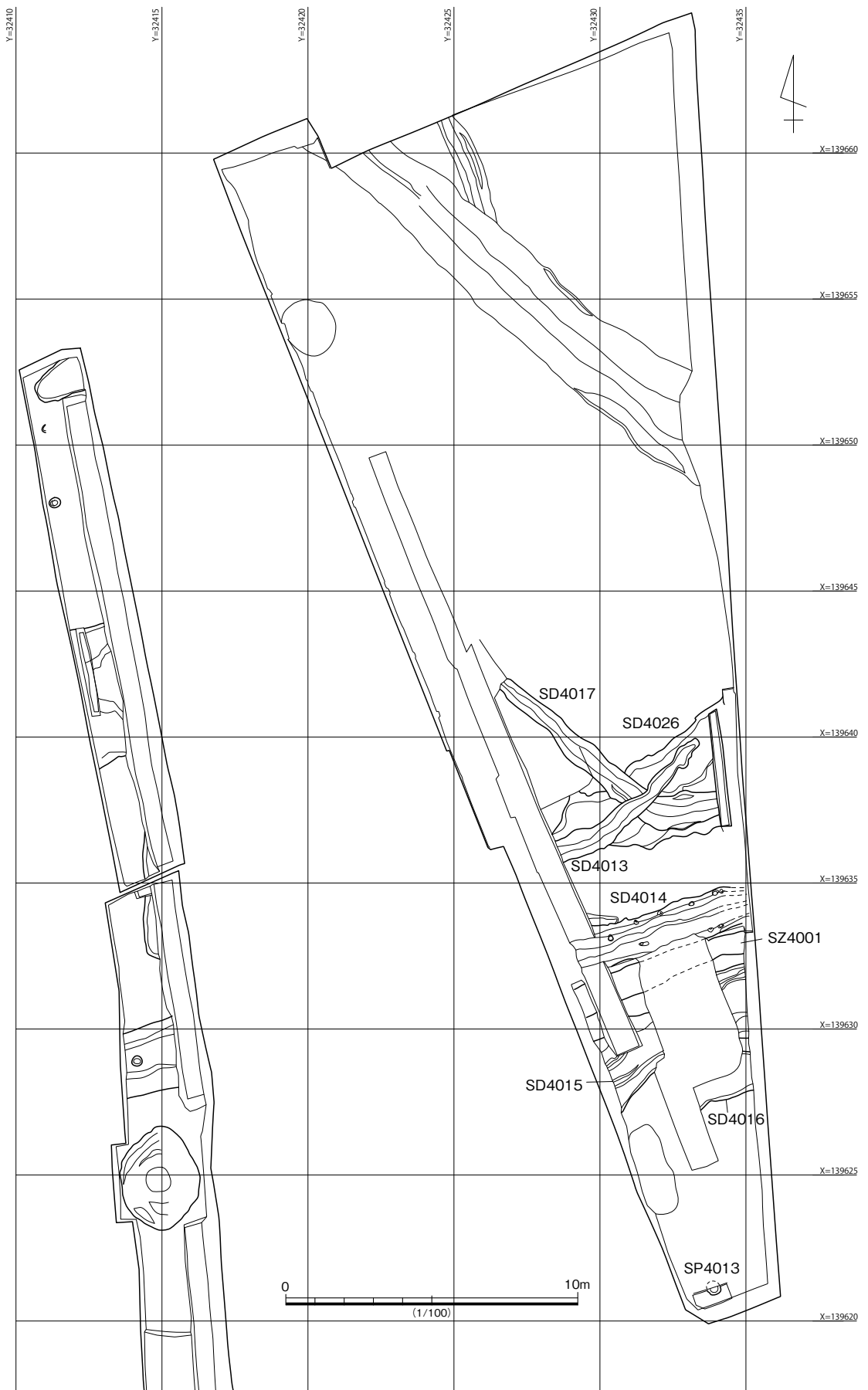
第53図 SD4028 層位不明木器



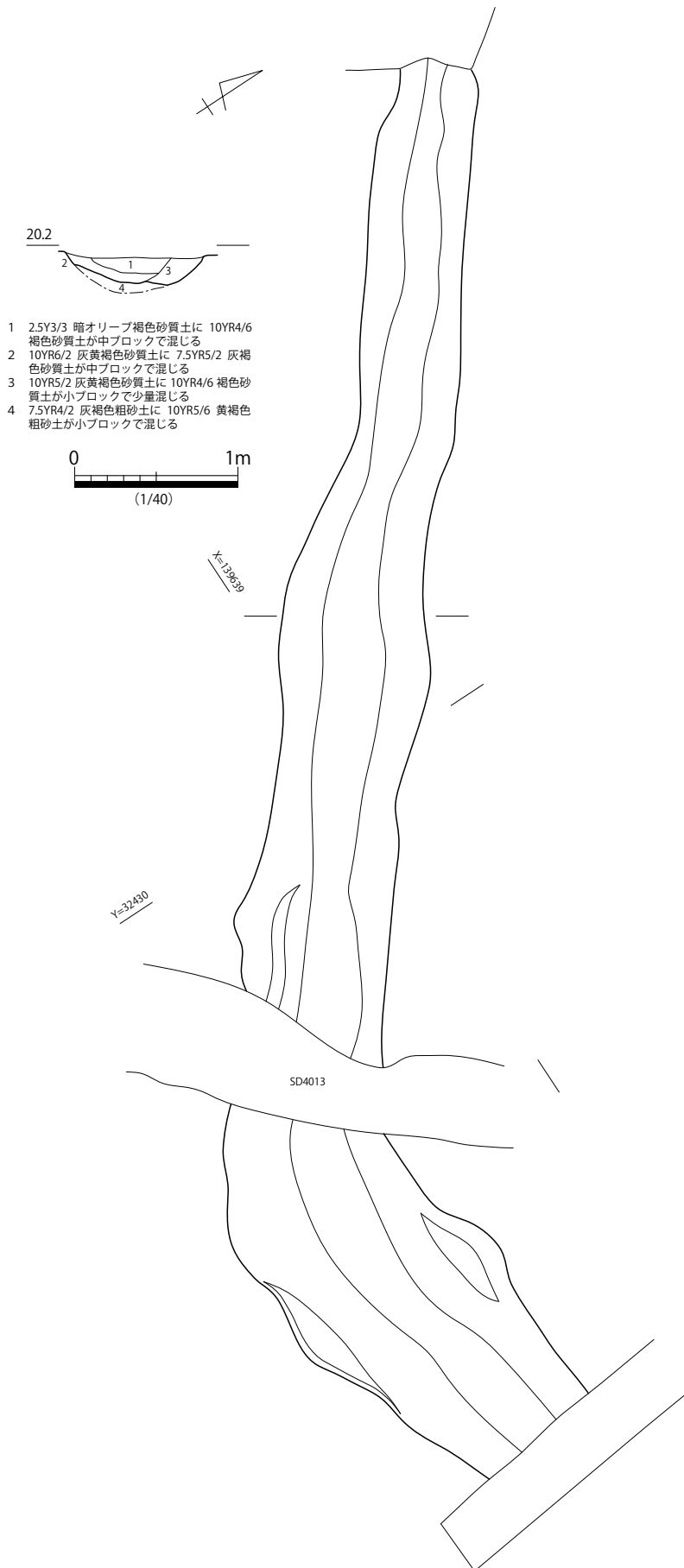
第54図 SD4030 出土土器



第55図 SD4030 出土木器



第 56 图 4 区 2 面平面



第57図 SD4017 平・断面

初頭の年代が想定され、中層埋没～上層埋没までの間に一定の期間があった可能性があり、その間に再掘削が行われたのであろう。

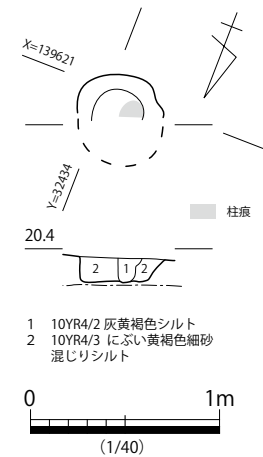
SD4030 (第37図) SD4028の西側から派生し、再びSD4028に合流する溝である。両者の埋没については、SD4030の埋没が、SD4028中層の埋没に先行していることから、機能時に設けられた複線のような溝が、SD4028先行して埋没したものと想定できる。出土遺物は第54・55図に示した。

328、329は須恵器杯である。328は底部が欠損しているが、おそらく高台が伴う杯Bであり、内面には火襷が残る。329は断面方形の低い高台を持つ。

330、331は須恵器壺である。330は頸部の破片であり、垂直に立ち上がる口縁部を持つ。331は底部片であり、体部は直線的に伸び、断面方形の高台がとりつく。

332は須恵器甕である。口縁部のみが残存しており、端部上面が平坦になる。

333は土師器鍋である。半球状の体部に、屈曲し外方に直線的に伸



第58図 SP4013 平・断面

びる口縁部を持つ。口縁端部はナデにより、上方、下方にそれぞれ拡張する。

334は木器角材である。全体に表面の残存状況が悪く、加工の痕跡が不明瞭であるが、おそらく割材の一部であると考えられる。

出土遺物からは8世紀前半の埋没が想定できる。

【2面の遺構】(第56図)

溝

SD4013 4-4区中央で検出された、東西方向に流れる溝である。5区のSD5010につながり、2面の水田に関連する遺構と考えられる。

SD4014 調査区中央で検出された。ほぼ東西方向に流れる溝である。5区のSD5009と同一の遺構である。

SD4015・SD4016 4-4区の南側で検出された溝である。大部分が上面の遺構によって削平されているため、その詳細は不明である。時期を示すような遺物などもほとんど出土していない。

SD4017(第57図) 4-4区北側で検出された溝である。東西方向に伸びるものが、調査区中央付近で北西方向に進路を変えている。最大幅は1.3m、深さ0.2cmを測る。出土遺物などは見られないが、畦畔とそれに伴う溝に先行する。

柱穴

SP4013(第58図) 調査区南端で検出された。平面形態はほぼ円形の柱穴である。直径0.4m、深さ0.2mを図る。柱痕と掘方が確認できるが、調査範囲の中で、建物や柱穴列を構成するような組み合わせは確認できない。

畔

SZ4001(第57図) SD4014に隣接して検出された。5区のSZ5001に対応する畔である。畦畔としての隆起を最も明瞭に確認でき、SD4014に並行して伸びることからも、水路との境界に位置する大畦畔であると考えられる。

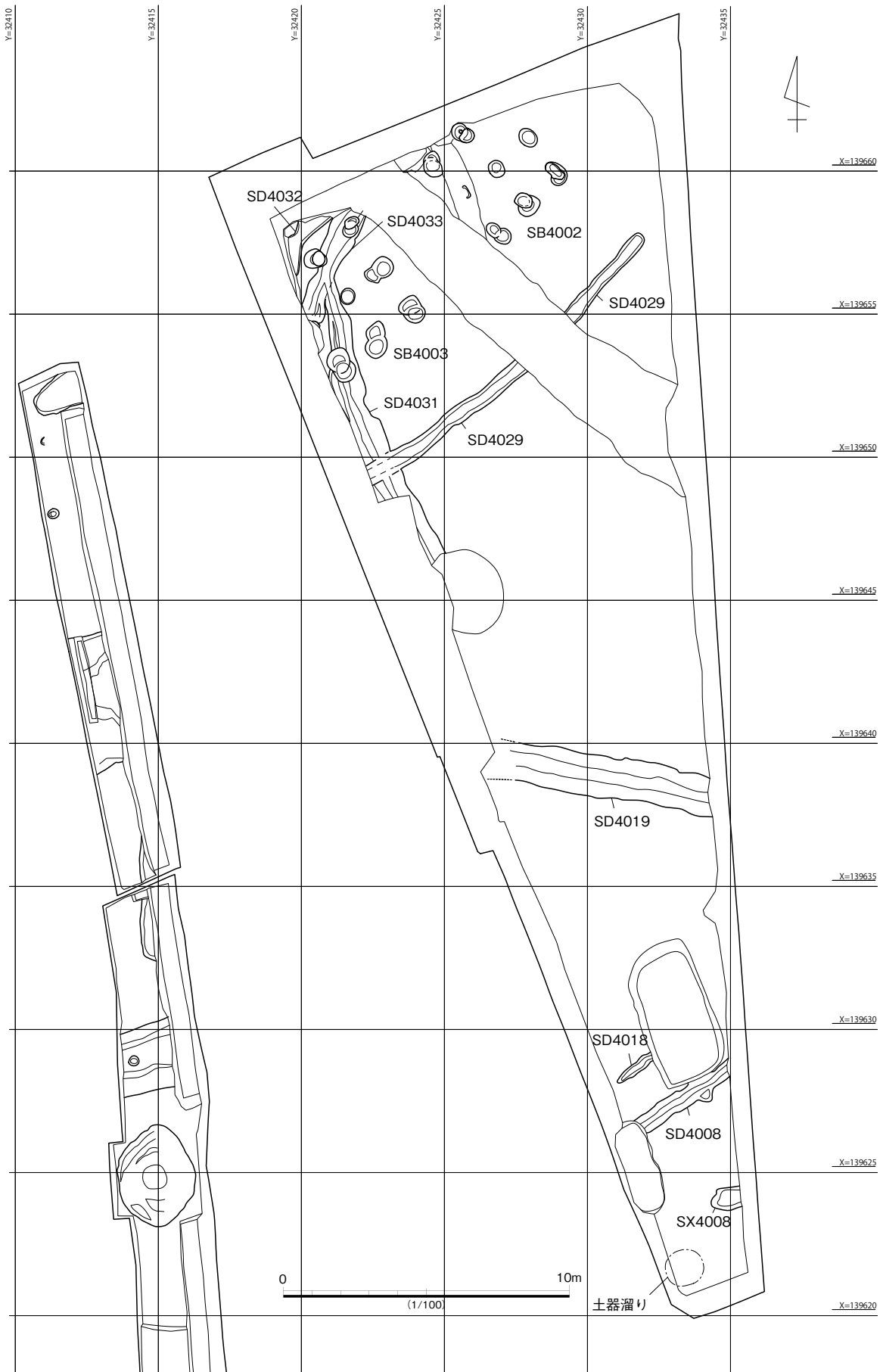
【3面の遺構】(第59図)

建物

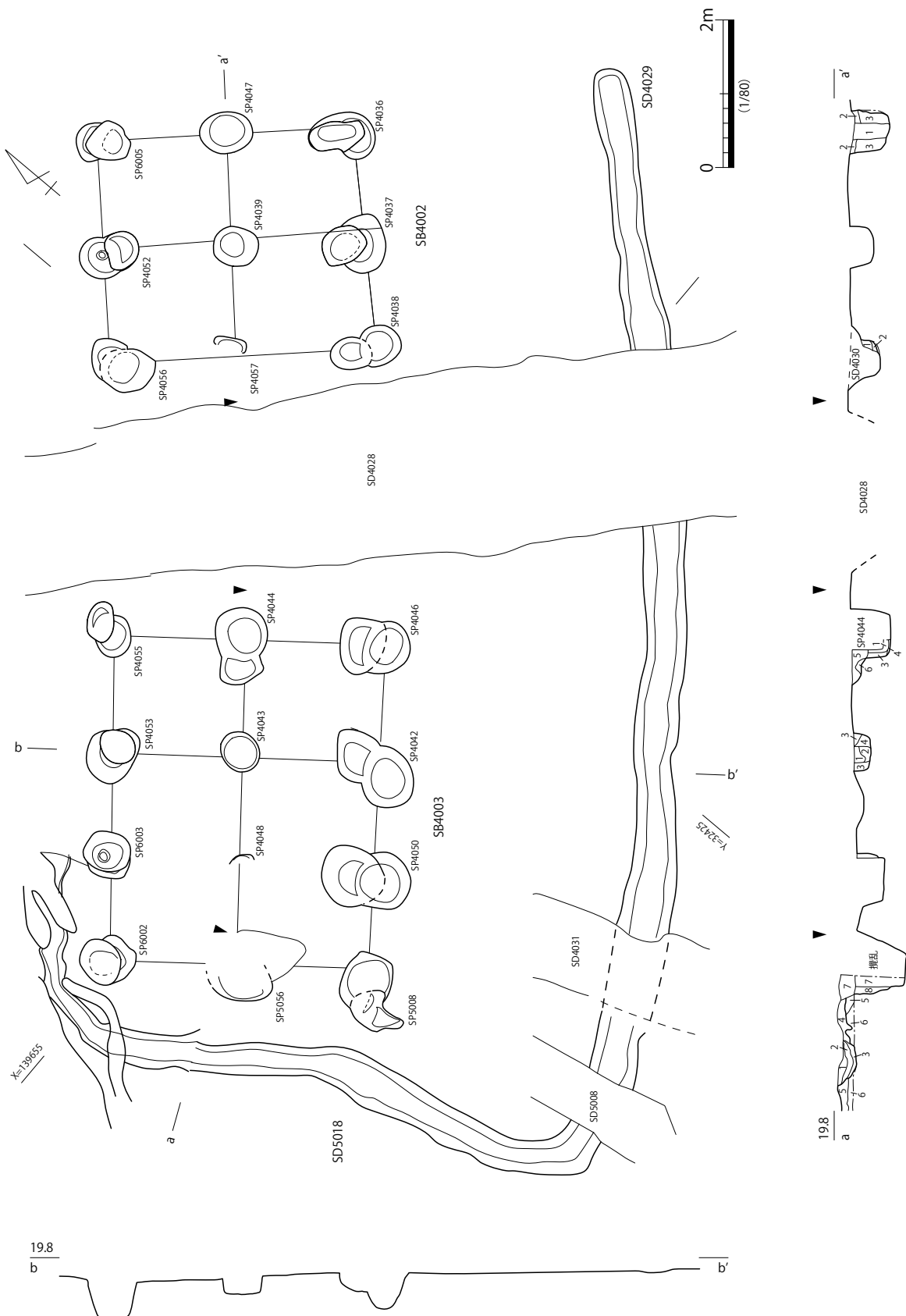
SB4002(第60～62図) 4-4区北端で検出された、2×2間の総柱建物である。検出されたのは2×2間であるが、隣接するSB4003が2×3間であることから、建物の西側のSD4028が掘削された範囲においても1間分柱穴が存在していた可能性が高い。また、現在確認できている最も西側の柱穴列については、中央の柱穴の規模が南北の側柱の柱穴よりやや小さく、それが束柱となり2×3間の総柱建物となりうる可能性を示唆している。柱穴は側柱と束柱の柱穴で規模が異なり、側柱の柱穴については、大きなもので直径0.75mを、束柱については直径0.5mを測る。柱穴間の距離は、柱痕が判明する部分で梁行1.75m、桁行1.5mを測る。側柱については大半に抜き取りの跡が確認でき、そのいずれも建物の中心側から掘削されている。束柱には抜き取りは確認できない。柱穴の中でも柱痕の周りの裏込め土については、いずれも2～3層程度に分層でき、ブロック土を多く含む土が堆積している。

出土遺物については、最も北側に位置するSP6005とSP4037から出土している。第65図に示した。336は弥生土器甕である。底部のみ残存しており、明瞭な底部を持ち底部から体部にかけてやや膨らみを持ちながら伸びる、弥生時代後期のものであると考えられるが、建物の時期を示すものではなく、混入したものであると考えられる。

337は不明土製品である。SP4037から出土した粘土に藁などの植物を混和した状態のものであり、壁土な



第59図 4区3面平面



第 60 图 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平·断面

<p>SP4043</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR2/1 黒色粘質土に5Y7/1 灰白色粘質土がブロック状に少量混じる 2 10YR4/1 褐灰色粘質土に2.5GY 灰色粘質土がブロック状に混じる 3 7.5Y7/1 灰白色粘質土と2.5Y6/2 灰黄色粘質土が混じり、10YR4/1 褐灰色粘質土が小ブロックで混じる 4 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土と2.5Y4/1 黄灰色粘質土が混じる <p>SP4044</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR3/1 黒褐色粘質土に2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土がブロック状に混じる 3 10YR5/1 褐灰色細砂混粘質土と7.5Y6/1 灰色粘質土が混じる 4 7.5Y6/1 灰色細砂混粘質土と2.5Y7/6 明黄褐色粘質土が混じる 5 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土がブロック状に混じる 6 7.5Y7/2 灰白色粘質土に2.5Y7/6 明黄褐色粘質土が混じる <p>SP4047</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に7.5Y7/1 灰白色粘質土がブロック状に混じる 2 10YR3/1 黒褐色粘質土に2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土が混じる 3 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質土と2.5Y4/1 黄灰色粘質土がブロック状に混じる 	<p>SP4057</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土に2.5Y6/6 明黄褐色粘質土が混じる 2 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土に5Y3/1 オリーブ黒色粘質土がまだらに混じる <p>SD5018・SP5056</p> <table border="0" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">SD5018</td> <td style="padding-left: 5px;">1 2.5Y3/2 黒褐色シルト、鉄分を多く含む(斑紋状)</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;"></td> <td style="padding-left: 5px;">2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、ベース由来のブロック(φ2~3 cm)をわずかに含む</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;"></td> <td style="padding-left: 5px;">3 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックをわずかに含む</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">SD5020 埋土</td> <td style="padding-left: 5px;">4 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックを(φ1~2 cm)含む</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">基盤層</td> <td style="padding-left: 5px;">5 5Y4/1 灰色粘土、しまり強</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;"></td> <td style="padding-left: 5px;">6 2.5Y5/3 黄褐色粘土、3面ベース層</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;">SP5056</td> <td style="padding-left: 5px;">7 5Y3/1 オリーブ黒色粘土にベース由来のφ2~3 cmのブロックを多く含む(柱穴埋土)</td> </tr> <tr> <td style="border-right: 1px solid black; padding-right: 5px;"></td> <td style="padding-left: 5px;">8 10YR3/2 黒褐色粘土、φ4~8 cmの灰白色シルトブロックを多く含む</td> </tr> </table>	SD5018	1 2.5Y3/2 黒褐色シルト、鉄分を多く含む(斑紋状)		2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、ベース由来のブロック(φ2~3 cm)をわずかに含む		3 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックをわずかに含む	SD5020 埋土	4 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックを(φ1~2 cm)含む	基盤層	5 5Y4/1 灰色粘土、しまり強		6 2.5Y5/3 黄褐色粘土、3面ベース層	SP5056	7 5Y3/1 オリーブ黒色粘土にベース由来のφ2~3 cmのブロックを多く含む(柱穴埋土)		8 10YR3/2 黒褐色粘土、φ4~8 cmの灰白色シルトブロックを多く含む
SD5018	1 2.5Y3/2 黒褐色シルト、鉄分を多く含む(斑紋状)																
	2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、ベース由来のブロック(φ2~3 cm)をわずかに含む																
	3 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックをわずかに含む																
SD5020 埋土	4 5Y2/2 オリーブ黒色シルト~粘土、ベース由来のブロックを(φ1~2 cm)含む																
基盤層	5 5Y4/1 灰色粘土、しまり強																
	6 2.5Y5/3 黄褐色粘土、3面ベース層																
SP5056	7 5Y3/1 オリーブ黒色粘土にベース由来のφ2~3 cmのブロックを多く含む(柱穴埋土)																
	8 10YR3/2 黒褐色粘土、φ4~8 cmの灰白色シルトブロックを多く含む																

第61図 SB4002, SB4003, SD5018, SD4029 平・断面(2)

どに使用されていたものと考えられる。掘方ではなく、抜き取りからの出土であることも、建物の廃絶などに伴い埋土に混入した可能性を補強するものといえる。

SB4002 からは建物の時期を示すような遺物は出土しなかったが、SB4003 との関係から、同時期である古墳時代後期後半に位置づけられる可能性が高い。

SB4003 (第60・63・64図) SB4002 の西側に位置する総柱建物である。2×3間であり、東西方向に桁行がある。平面積は15.7 m²である。SB4002 と比べ、やや軸が西側に傾く。しかし、2棟の柱筋の通り方や、両者の位置関係、2棟を囲むように巡るSD4029 の存在からも、SB4002 とSB4003 は同時併存していた可能性が高い。柱穴規模は側柱の大きなもので直径0.7 m、束柱で直径0.5 mを測る。柱穴間距離についても、梁行1.75 m、桁行1.5 mとSB4002 とほぼ同一である。

遺物はSP4053 から出土しており、第65図に示した。

335 は須恵器蓋である。かえりを持つ杯に伴うものであり、天井部が高く、天井部から口縁部まで、明瞭に屈曲する部分が存在しない。外面天井部では、回転ナデののちに回転ヘラケズリが施される。ケズリの範囲や全体の形状、法量から、TK43 期に位置づけられると判断した。

SB4003 は、出土遺物の特徴から6世紀後半の遺構であると判断した。これに伴い、SB4002、およびこれらを囲繞するSD4029 についても、同様の年代を考えることができる。

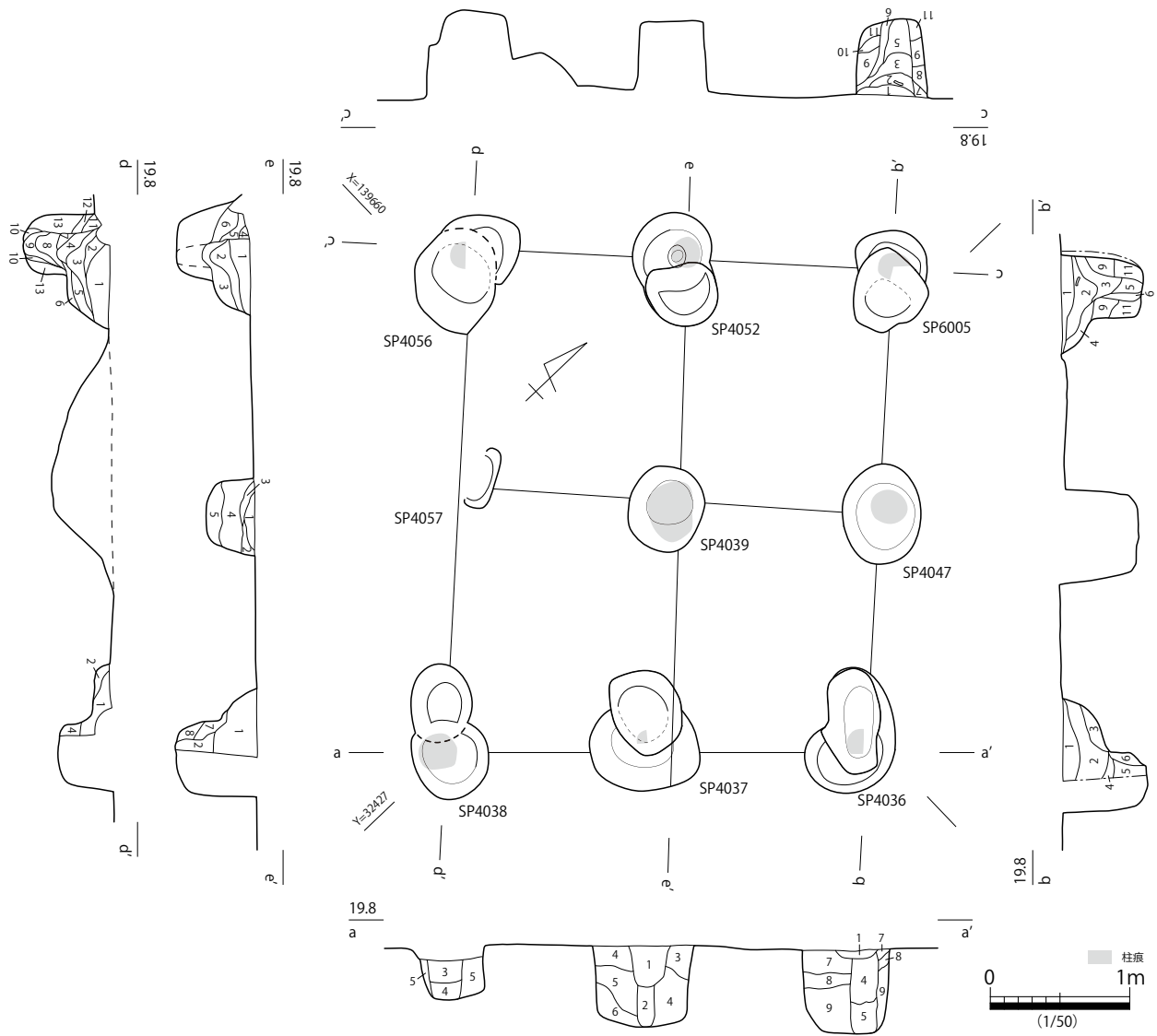
SB4002、4003 については、同時期の県内の掘建柱建物と比較しても、平面積や柱穴の規模といった点で卓越しており、また周囲に溝を持つ点においても特異なものである。また、総柱建物についても、県内の事例においては、2×2間のものが古墳時代に卓越したのちに、7世紀ごろから間数が増加し、平面系が長方形になるものが増加する。そして古代以降には、間数のバリエーションが増えるだけでなく、ほかの側柱建物と異なり、平面形態が正方形に近くなり差異が生じるという変化がある。SB4002、SB4003 は古墳時代~古代にかけての総柱建物の変化のうちの初期のものといえる。

土器溜まり (第66図) 4区南端で検出された遺構である。明瞭な掘方などは確認できなかったが、後述する須恵器甕をはじめとした土器類がまとまって出土している。地形としてもそれらの遺物がたまりやすいような場所でもなく、遺物の分布状況からも、人為的に投棄されたような状況が考えられたため、これらの土器の集合を遺構として判断した。出土遺物は第67図に示した。

338 は須恵器杯である。杯身であり、やや内側に傾き伸びる口縁部と、短く突出するかえりをもつ。

339 は土師器甕である。口縁部はくの字状に曲がる。外面、内面ともにナデとユビオサエの痕跡が多く残る。

340 は須恵器甕である。頸部から上の部分は残存していなかったが、体部はおおむね残存している。倒卵形の体部をもち、底部には回転糸切りの痕跡が残る。外面には平行叩きがタテ方向に残る。内面には



- SP4036**
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土が小ブロックでわずかに混じる
 - 2 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土
 - 3 5Y6/1 灰色粘質土と 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土が混じり、5Y2/1 黒色粘質土が網目状に入る
 - 4 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 5 2.5Y2/1 黒色粘質土
 - 6 5Y7/1 灰白色粘質土と 5Y4/1 灰色粘質土が混じる
 - 7 7.5Y7/2 灰白色極細砂混粘質土と 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土が混じり、5Y2/1 黒色粘質土が混じる
 - 8 5Y2/1 黒色粘質土に 5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土が少量混じる
 - 9 7.5Y7/2 灰白色極細砂混粘質土と 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土と 5Y2/1 黒色粘質土がまだらにまじる

- SP4037**
- 1 5Y4/1 灰色粘質土と 2.5Y3/1 黒褐色粘質土が混じる
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質土が小ブロックでわずかに混じる
 - 3 5Y5/3 灰オリーブ色極細砂混粘質土に 10YR6/8 明黄褐色粘質土が網目状に混じる
 - 4 7.5Y4/1 灰色粘質土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質極細砂がブロック状に混じる
 - 5 2.5GY6/1 オリーブ灰色極細砂混粘質土と 5Y6/8 オリーブ色粘質土が混じる
 - 6 2.5Y4/1 黄灰色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細砂混軟質土が混じる
 - 7 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y7/2 暗灰色粘質土が混じる
 - 8 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土

- SP4038**
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y3/2 黒褐色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土に 2.5Y7/2 灰黄色粘質土が中ブロックで混じる
 - 3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y3/2 黒褐色粘質土がブロック状に混じる
 - 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y6/4 にふい黄色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 5 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土が大ブロックで混じる

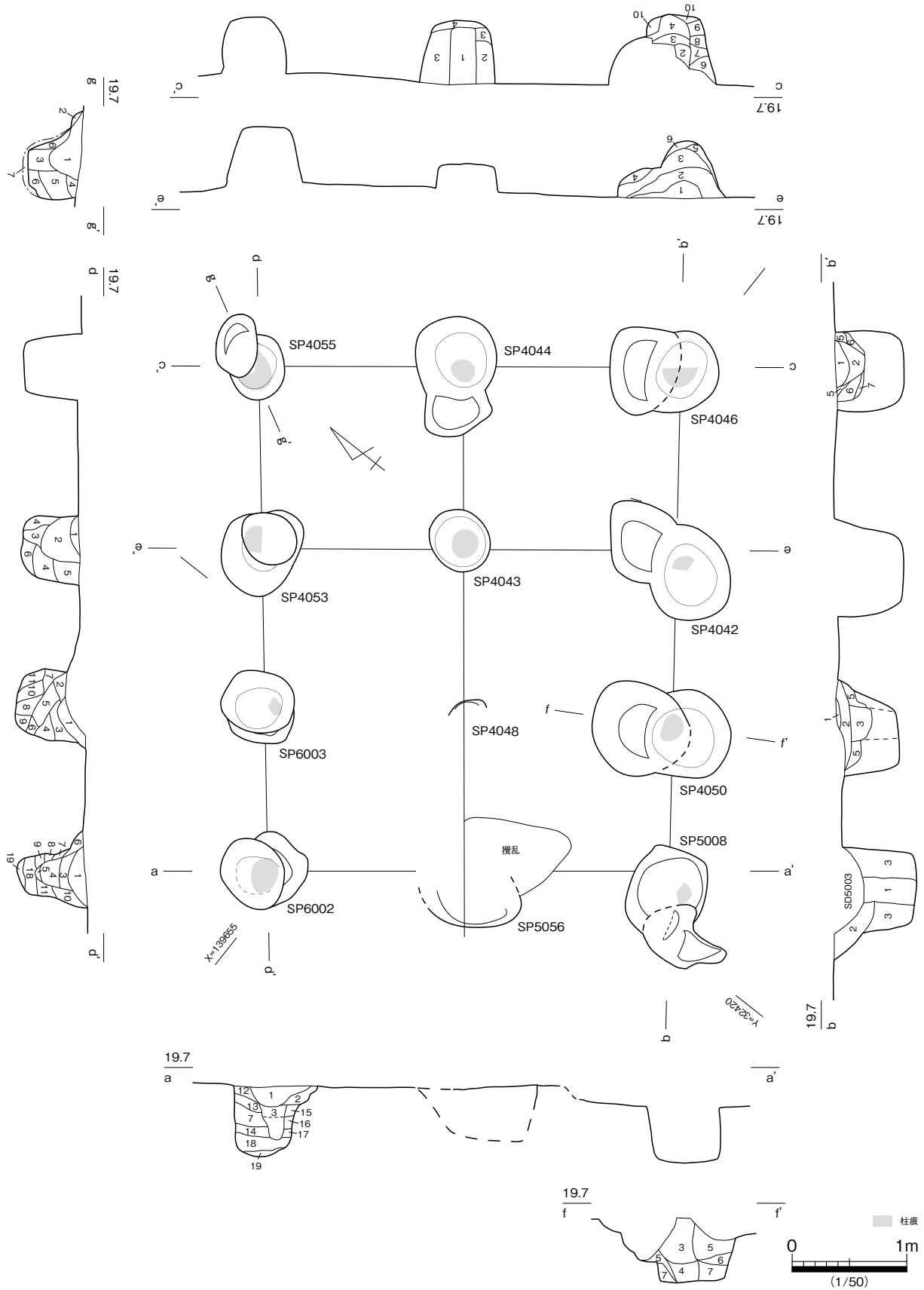
- SP4039**
- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土と 2.5Y7/3 浅黄色粘質土と 10Y7/1 灰白色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土に 5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土がブロック状に少量混じる
 - 3 5GY7/1 明オリーブ灰色極細砂混粘質土に 2.5Y2/1 黒色粘質土がわずかに混じる
 - 4 2.5Y3/1 黒褐色粘質土に 5GY7/1 明オリーブ灰色極細砂混粘質土がブロック状に混じる
 - 5 5GY3/1 暗オリーブ灰色極細砂混粘質土と 2.5Y7/8 黄色粘質土が混じる

- SP4052**
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土と 5Y5/1 灰色粘質土が混じり 7.5Y7/1 灰白色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質土と 10YR2/1 黒色粘質土が混じり、7.5Y7/2 灰白色粘質土が小ブロックで混じる
 - 3 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土に 5Y5/6 オリーブ色粘質土が混じる
 - 4 10YR2/2 黒褐色粘質土に 10YR4/2 暗黄褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 5 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に 10YR6/2 暗黄褐色粘質土がブロック状に混じる
 - 6 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土に 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土が混じる

- SP4056**
- 1 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細砂混粘質土がブロック状に混じる
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混粘質土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 3 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土に 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土がブロック状に混じる
 - 4 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細砂混粘質土がブロック状に混じる
 - 5 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土に 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 6 5Y7/1 灰白色極細砂混粘質土に 2.5Y5/6 黄褐色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 7 2.5Y5/6 黄褐色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土が混じる
 - 8 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土と 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土がまだらに混じる
 - 9 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
 - 10 7.5Y7/1 灰白色粘質シルト
 - 11 2.5Y5/6 黄褐色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土がブロック状に混じる
 - 12 2.5Y5/6 黄褐色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細砂混粘質土と 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土が混じる
 - 13 2.5Y5/6 黄褐色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細砂混粘質土が混じる

- SP6005**
- 1 5Y5/1 灰色粘質土と 5Y6/8 オリーブ色粘質土と 5Y4/1 灰色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 10YR2/2 黒褐色粘質土と 10YR4/1 褐灰色粘質土が混じる
 - 3 10Y6/2 オリーブ灰色粘質土と 10YR2/2 黒褐色粘質土がブロック状に混じる
 - 4 5Y5/1 灰色粘質土に 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土と 10Y6/2 オリーブ灰色粘質土がブロック状に混じる
 - 5 10YR2/1 黒色粘質土
 - 6 10Y6/2 オリーブ灰色粘質土と 10YR2/1 黒色粘質土が混じる (根巻か?)
 - 7 5Y6/6 オリーブ色シルト混粘質土と 10YR2/2 黒褐色粘質土が混じる
 - 8 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土に 10YR2/1 黒色粘質土が混じる
 - 9 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土と 10YR7/1 灰白色粘質土が混じる
 - 10 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土と 10YR2/1 黒色粘質土と 7.5Y7/1 灰白色粘質土が混じる
 - 11 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土に 7.5Y6/1 灰色粘質土が混じる

第 62 図 SB4002 平・断面



第 63 図 SB4003 平・断面

- SP4042
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土と 7.5Y6/1 灰色粘質土が混じる
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質土に 5Y6/1 灰色粘質土がブロック状に少量混じる
 - 3 10YR3/1 黒褐色粘質土と 5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土がブロック状に混じる
 - 4 5Y5/3 灰オリーブ粘質土と 5Y5/6 オリーブ粘質土が混じり、5Y2/2 オリーブ黒色粘質土がブロック状に少量混じる
 - 5 7.5Y6/2 灰オリーブ粘質土と 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土が混じる
 - 6 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細砂混粘質土と 2.5Y5/3 黄褐色極細砂混粘質土が混じる

- SP4044
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土に 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土と 2.5Y5/6 黄褐色粘質土が混じり、2.5Y3/1 黒褐色粘質土がまだらに混じる
 - 3 10YR5/1 褐灰色細砂混粘質土と 7.5Y6/1 灰色粘質土が混じる
 - 4 7.5Y6/1 灰色細砂混粘質土と 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土が混じる

- SP4046
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR7/1 灰白色粘質土がブロック状に混じる
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質土
 - 3 7.5GY7/1 明緑灰色粘質土に 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土が混じり、5Y2/1 黒色粘質土がまだらに混じる
 - 4 5Y2/1 黒色粘質土に 7.5GY7/1 明緑灰色粘質土が中ブロックで少量混じる
 - 5 10YR4/1 褐灰色粘質土に 5Y7/2 灰白色粘質土が小ブロックで混じる
 - 6 10YR3/1 黒褐色粘質土に 5Y7/2 灰白色粘質土粒状に混じる
 - 7 10YR5/1 褐灰色粘質土と 5Y7/1 灰白色粘質土が混じる
 - 8 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土と 7.5GY7/1 明緑灰色粘質土が大ブロックで混じる
 - 9 5Y2/1 黒色粘質土
 - 10 7.5GY7/1 明緑灰色粘質土に 5Y2/1 黒色粘質土が混じる

- SP4050
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土と 7.5Y6/1 灰色粘質土が混じる
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質土
 - 3 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10Y6/1 灰色粘質土がブロック状に混じる
 - 4 7.5Y6/1 灰色粘質土 (2 ~ 3 cm のブロック状) と 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土 (2 ~ 3 cm のブロック状) が混じる
 - 5 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 10Y7/1 灰白色粘質土が小ブロックで少量混じる
 - 6 7.5Y7/2 灰白色粘質土に 2.5Y6/8 明黄褐色粘質土が 5 ~ 8 cm 程度のブロック状に混じる
 - 7 7.5Y7/1 灰白色粘質土に 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土が少量混じる、上層あたり、10YR4/1 褐灰色粘質土が混じる

- SP4053
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土と 2.5Y5/2 暗灰色粘質土が混じり、7.5Y7/1 灰白色粘質土がブロック状にまだらに混じる
 - 2 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土と 7.5Y4/1 灰色粘質土が混じり、7.5Y7/1 灰白色粘質土が中ブロックで中量混じる
 - 3 7.5Y5/1 灰色粘質土に 7.5Y7/2 灰白色粘質土が粒状に混じる
 - 4 7.5Y7/1 灰白色粘質土に 7.5Y4/1 灰色粘質土が混じる
 - 5 2.5Y4/1 黄灰色粘質土に 7.5Y7/1 灰白色粘質土がまだらに混じる
 - 6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土と 2.5Y7/1 灰白色粘質土が混じる

- SP4055
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y6/2 灰オリーブ粘質土が 1 cm 程度のブロック状で少量混じる)
 - 2 10YR4/1 褐灰色シルト
 - 3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (7.5Y6/2 灰オリーブ粘質土が 2 ~ 3 cm 程度のブロック状で中量混じる)
 - 4 7.5Y4/1 灰色粘質土 (7.5Y5/2 灰オリーブ粘質土が 2 ~ 3 cm 程度のブロック状で中量混じる)
 - 5 7.5Y4/1 灰色粘質土に 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土と 7.5Y6/2 灰オリーブ粘質土がブロック状にまだらに混じる
 - 6 7.5Y6/2 灰オリーブ粘質土 (7.5Y2/1 黒色粘質土と 7.5Y4/1 灰色粘質土がブロック状に混じる)
 - 7 10Y7/2 灰白色粘質土

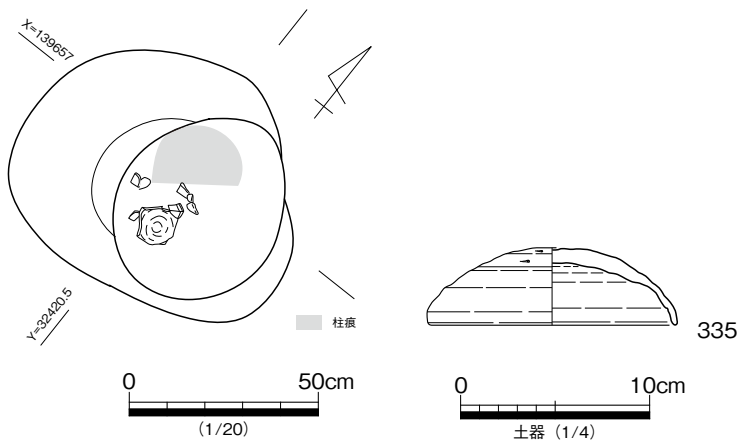
- SP5008
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土地山 (5 層) 由来のブロックを多く含む、しまり弱 (柱痕)
 - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、地山 (5 層) 由来のブロックを 10% 程度 (柱抜き取り埋土)
 - 3 10YR3/2 黒褐色粘土、地山由来のブロックを非常に多く含む (φ5 ~ 6 cm)

- SP6002
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト、φ3 ~ 4 cm の灰白色シルトブロックを多く含む
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト、φ2 ~ 3 cm の地山由来のブロックを少し含む
 - 3 10YR3/1 黒褐色粘土に部分的に暗灰黄色の極細砂を含む、粘質高い
 - 4 10YR3/1 黒褐色粘土に地山由来の灰白色シルト (φ1 ~ 2 cm) を少し含む
 - 5 2.5YR3/1 暗赤灰色粘土、地山由来の黄色シルトブロックを多く含む
 - 6 10YR3/2 黒褐色シルトに φ1 ~ 2 cm の灰白色シルトブロックを多く含む
 - 7 2.5Y3/1 黒褐色粘土に地山由来の φ3 ~ 4 cm のブロックを多く含む
 - 8 2.5Y3/1 黒褐色粘土、地山由来の黄色ブロック (φ1 ~ 2 cm) をわずかに含む
 - 9 2.5Y3/2 黒褐色粘土、φ1 ~ 2 cm の地山由来の黄色ブロックを均質に含む、(上よりは少ない)
 - 10 10YR3/2 黒褐色シルト、φ2 ~ 3 cm の地山由来シルトブロックを多く含む
 - 11 10YR2/1 黒色粘土、φ3 ~ 4 cm の地山由来シルトブロックを多く含む 10 層より粘質高い
 - 12 10YR2/1 黒色粘土、φ1 cm 程の灰白色シルト少し含む
 - 13 2.5Y3/1 黒褐色粘土、φ1 ~ 2 cm の地山由来のシルトブロックをまばらに含む
 - 14 2.5Y3/1 黒褐色粘土に地山由来のシルトブロックを多く含む (9 層よりは少し粗)
 - 15 2.5Y3/2 黒褐色シルトに φ3 cm 程の地山由来シルトブロックを含む
 - 16 2.5Y3/1 黒褐色粘土、地山由来のシルトブロックを多く含む
 - 17 2.5Y3/2 黒褐色粘土、地山由来のシルトブロックを多量に含む、しまり強
 - 18 2.5Y2/1 黒色粘土に地山由来の φ3 cm のシルトブロックを多く含む
 - 19 10YR3/1 黒褐色粘土に地山由来の φ2 ~ 3 cm のシルトブロックを含む

- SP6003
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト、地山由来のシルトブロック (φ1 ~ 3 cm) を少し含む
 - 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト、地山由来の灰白色 ~ 黄色シルトブロック (φ2 ~ 5 cm) を多く含む
 - 3 10YR3/2 黒褐色粘土に地山由来のシルトブロックを大量に含む、大半がブロック土
 - 4 10YR2/1 黒色粘土、部分的に地山由来のシルトブロックを含む (柱痕)
 - 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト、φ5 cm 以上の黄色シルトブロックを多く含む
 - 6 10YR3/2 黒褐色粘土、φ5 cm 以上のシルトブロックと φ1 ~ 2 cm のブロックを多く含む
 - 7 10YR3/2 黒褐色粘土、φ5 cm 以上のシルトブロックを多く含む (6 層と酷似)
 - 8 10YR3/2 黒褐色粘土、φ1 ~ 2 cm のブロック (黄色を少し含む)
 - 9 10YR3/2 黒褐色シルト、φ5 cm 以上の地山由来のシルトブロックを多量に含む
 - 10 10YR3/2 黒褐色粘土に φ2 ~ 3 cm 程の地山由来のブロックを含む
 - 11 10YR2/1 黒色粘土に φ5 cm 程のブロックを多量に含む (10 層より多)

第 64 図 SB4003 平・断面 (2)

SB4003

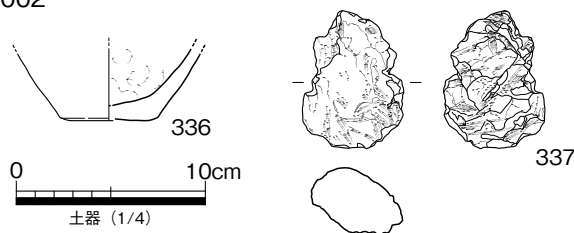


同心円状の当て具痕が残る。古墳時代後期に形成された可能性が高い。

溝

SD4029 (第 60 図) SB4002、4003 を囲堯する溝である。幅は最大 0.7m、深さは 0.25 m を図る浅い溝である。建物 2 棟を囲むように南側がやや広い台形に巡るが、北辺は一部のみしか残存しておらず、東辺については詳細な状況は不明である。建物との関係でみると、西側については建物の柱穴と 0.5m ほどしか離れておらず、かなり近接するが、南面については、幅 2.8 m ほどのスペースがある。その空間にはほかに遺構は形成さ

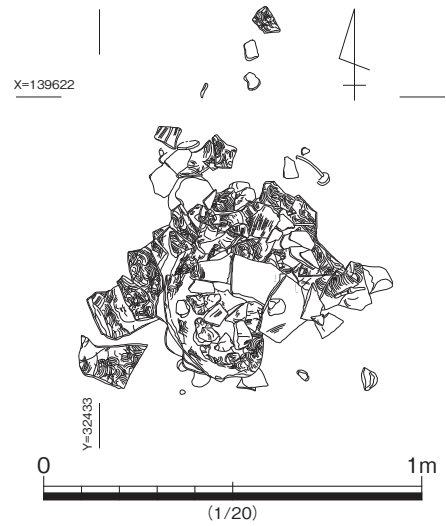
SB4002



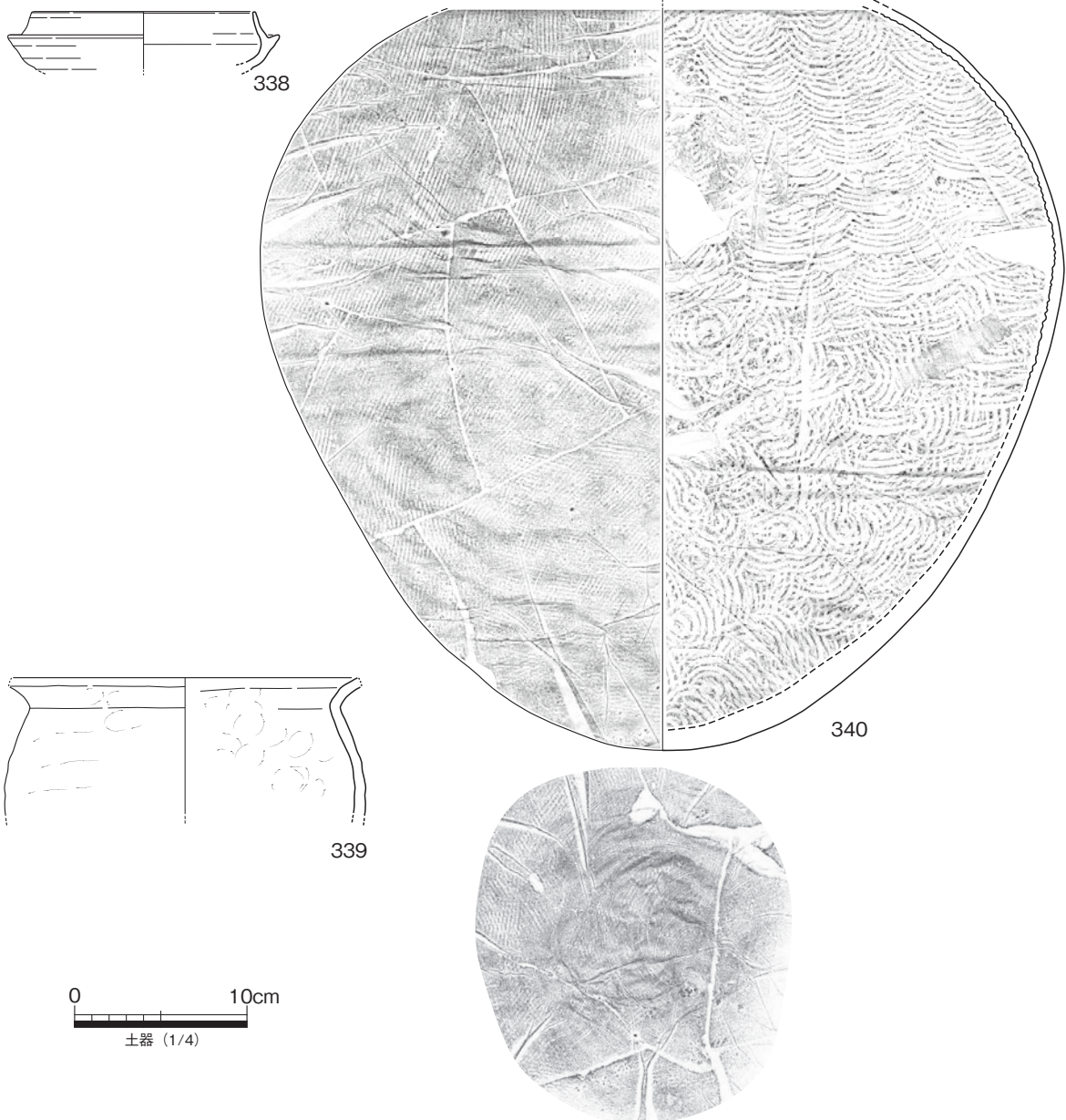
第 65 図 SB4003 (SP4053) 平面・出土遺物 SB4002 出土遺物

れておらず、建物の機能に関連する空間であった可能性が高い。対照的に、西側部分については、建物との位置関係から雨落ち溝のような機能も想定できるが、溝の断面や埋土の特徴からは、それらを示すような痕跡は見られなかった。遺物についても出土量は僅少である。

SD4019、SD4100、SD4033（第68図） 調査区の中央で検出された溝である。ほぼ東西方向に流れており、浅い掘方に皿状の断面を持つ。5区においてはSD5020につながると考えられる。SD5020は5区の中で90度方向を変え、溝は北東方向に向かう。SD4033はSD5020から北東方向に向かう続きの部分となり、途中でSD4031が合流するような格好となる。出土遺物は第69図に示した。



第66図 3面土器溜り



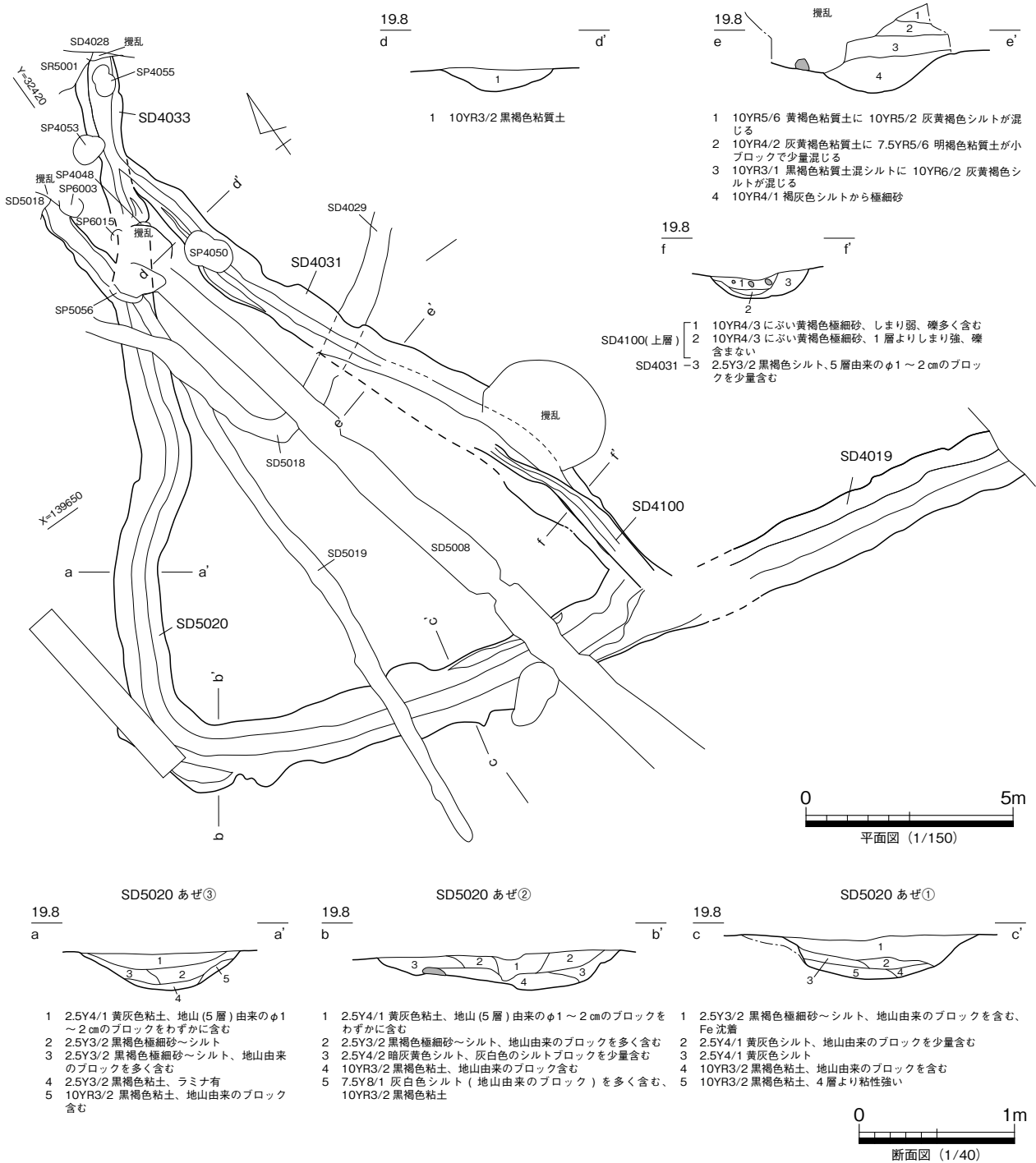
第67図 4区土器溜まり出土遺物

341 は弥生土器甕である。口縁部がくの字状に折れ曲がり、端部を上方につまみ上げる。

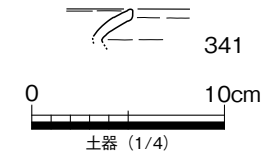
これらの溝については、出土遺物やほかの遺構との切り合い関係から、弥生時代後期以降に埋没したと考えられる。

SD4031 (第 68 図) 調査区北側で検出された。調査区周辺の地割に沿っている。SD4029 を切ることから、これに後出する遺構である。北側でSD4033 に合流するが、両者の埋没に明確な先後関係は認められない。

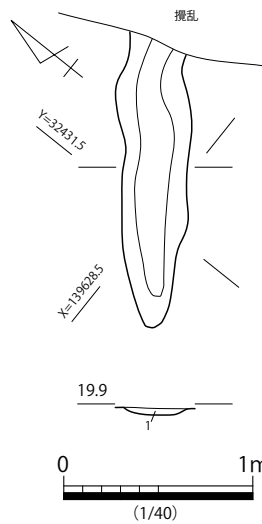
SD4018 (第 70 図) 4-4 区南で検出された。北東方向に流下する。幅は 0.4m 程であるが、深さは 0.1m に満たない浅い溝である。



第 68 図 SD4100, SD4031, SD4033, SD5020 平・断面

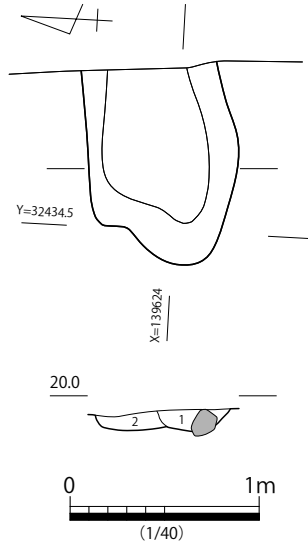


第69図 SD4019
出土遺物



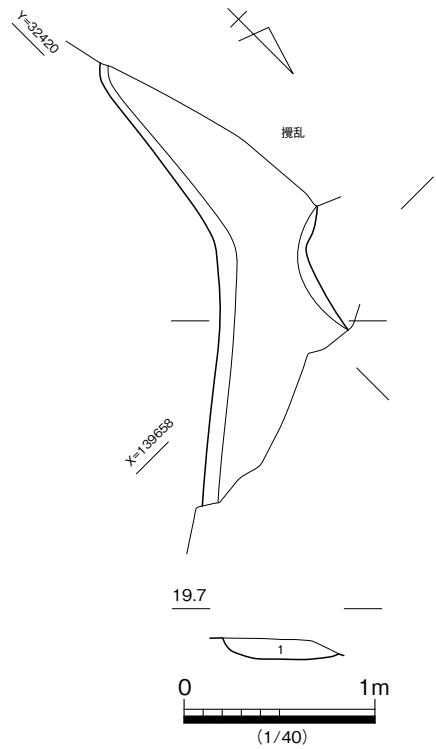
1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土が粒状に混じる

第70図 SD4018 平・断面

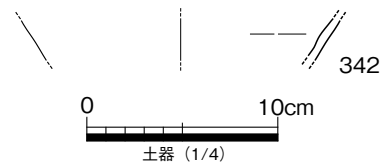


1 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土が粒状に混じる、φ10 cm程度の隙含む
2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/8 黄褐色粘質土が粒状に混じる、10YR6/8 明黄褐色砂質土が中ブロックで少量混じる

第71図 SX4008 平・断面



1 10YR3/1 黒褐色粘質土に 7.5Y7/2 灰白色粘質土が 5 cm程度中ブロックで混じる



第72図 SD4032 平・断面・出土遺物

SD4032 (第72図) 4-4区北端で検出された。大部分をほかの遺構に切られており、詳細は不明である。深さは0.1 mを図る。

342は須恵器杯である。外方に広がる口縁部を持つ。

不明遺構

SX4008 (第71図) 4-4区南端で検出された。調査区の東側に伸びると考えられ平面形は長楕円形を呈する。深さは0.1 mと浅く、出土遺物も僅少であり、時期については不明である。

遺構外出土遺物

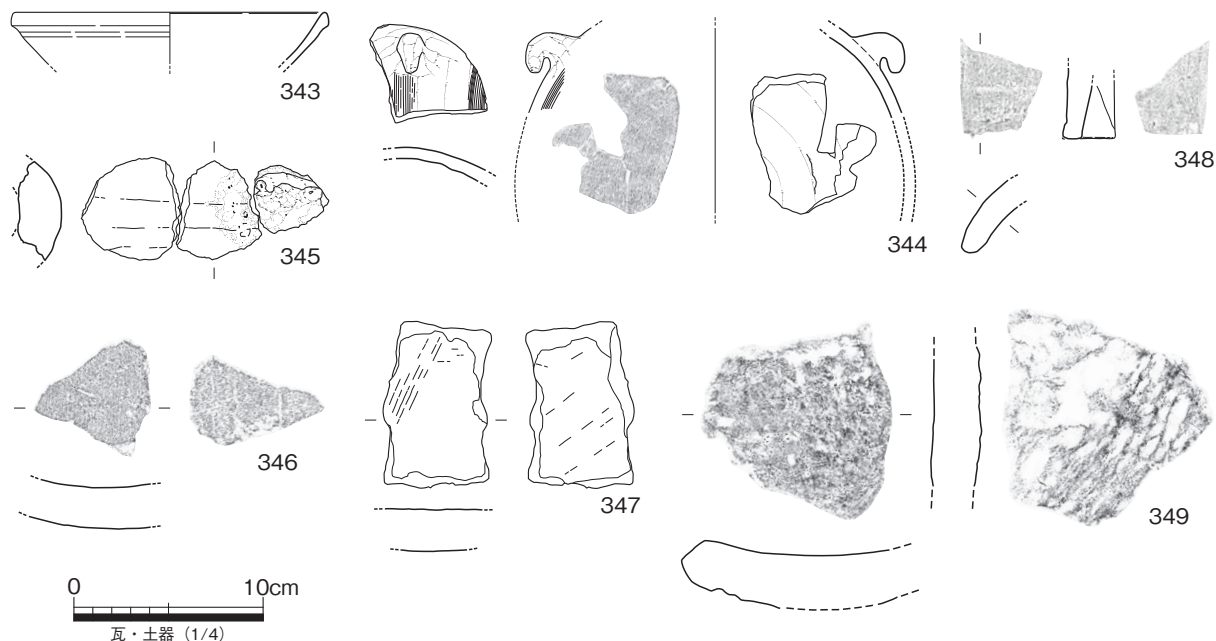
4区の遺構外から出土した遺物については、第73図に示した。

343は白磁碗である。口縁端部が玉縁状に肥厚する。口縁部下に沈線状のへこみを有する。344は須恵器提瓶である。肩部の把手が円でつながらない。体部にはカキ目が施される。

345はふいご羽口である。

346、347、349は平瓦である。346は凸面にナデ、凹面に布目を残す。349は凸面に斜め方向の縄目叩き、凹面に布目を残す。端面はケズリにより面取りを行う。347は調整が不明瞭であるが、凹面に糸切り状の痕跡を残す。347のみ中世以降の瓦の可能性はあるが、それ以外は古代の瓦である可能性が高い。

348は丸瓦である。凸面には縄叩きののちナデを施す。凹面にはナデの痕跡が残る。



第 73 図 4 区遺構外出土遺物

第4節 5区の調査成果

5 区の調査においても 3 面の遺構面が確認された。おおよその遺構面の解釈は 4 区と共通しており、4 区と同様の順番で報告を行う。なお、調査区の境界付近では同一遺構として解釈できる遺構も存在しているが、それらについては対応関係を示しながら、それぞれ個別に報告している。

【1 面の遺構】(第 74 図)

(1) 近世の遺構

溝

SD5001 (第 75 図) 調査区東端で検出された。南北方向に流下する溝であり、幅は両方の肩が判明する部分で最大で 1.2 m を測るが、深度は 0.15 m と比較的浅い。埋土の観察からは明瞭な流水の痕跡は確認できない。溝の方向は現在の地割と合致する。出土遺物の大半は古代の土師器・須恵器であるが、それらに混ざるように、中・近世の遺物が確認できる。出土遺物の最新のものの年代観によると、溝の埋没は 18 世紀以降となり、近世段階の地割の溝の可能性が高い。出土遺物は第 75 図に示した。

350 ～ 352 は上層出土遺物である。

350 は石製の鍋である。滑石製の石鍋の口縁部であり、口縁端部の下部が水平方向に突出する。器面の荒れなどから、本来の用途で使用されたのちに、温石として利用された可能性が高い。

351、352 は平瓦である。いずれも凸面に縄目叩きを施し、凹面の調整は不明である。

353 ～ 355 は下層出土遺物である。

353 は土師器碗である。断面 U 字状の高台が外方に開くようにとりつく。体部下半で弱い稜を形成する。

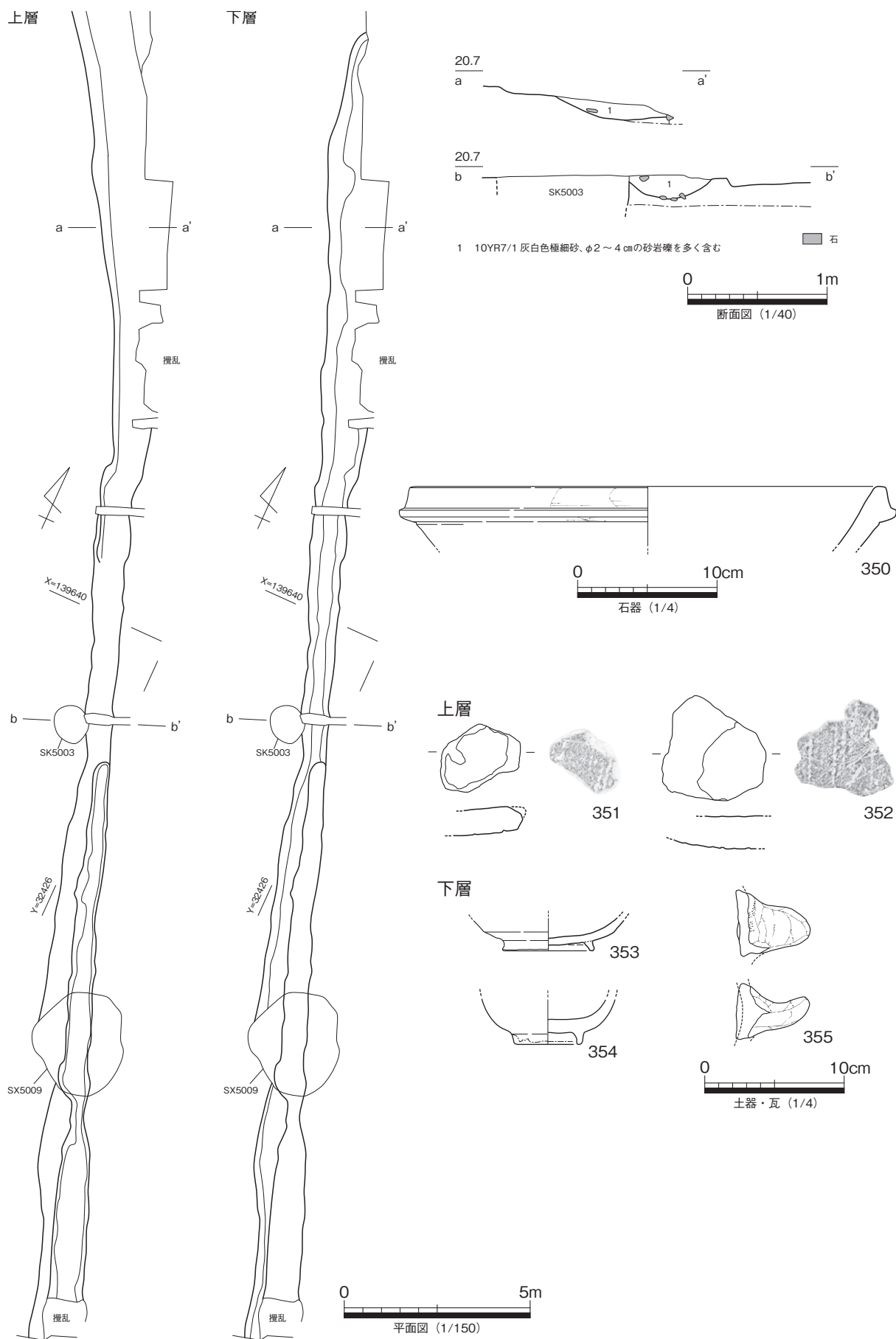
354 は磁器碗である。あまり腰の張らない丸碗であり、高台部分では釉薬のふき取りがみられる。胎土の特徴や形態から、18 世紀後半以降の年代が考えられる。

355 は土師器鍋である。把手の破片であり、先端はやや上方に向けて上がる。

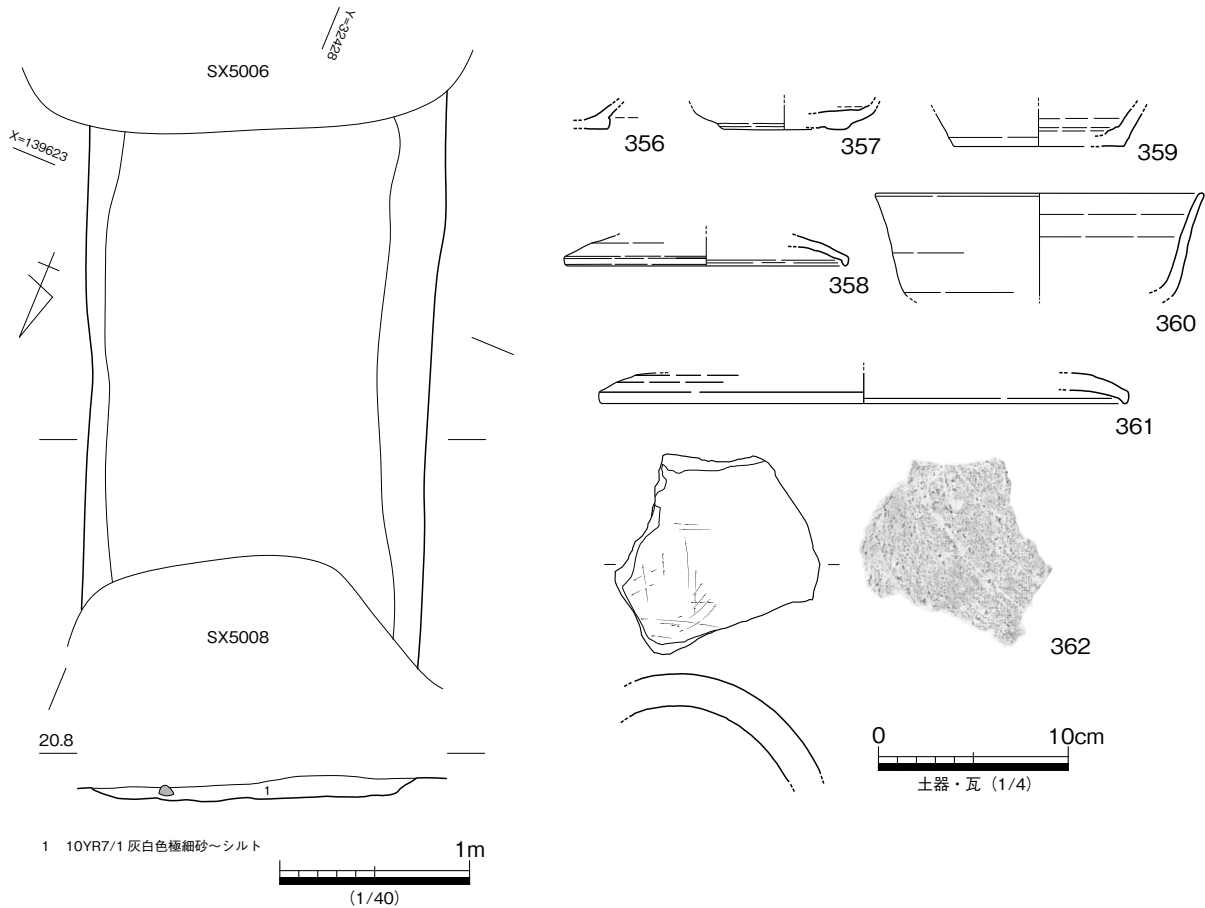
出土遺物については、古代の遺物も多く混じる状態であるが、下層から出土した陶磁器などの年代から、



第74図 5区1面 平面



第 75 図 SD5001 平・断面



第 76 図 SD5002 平・断面

18 世紀後半以降の埋没を想定する。

SD5002・SD5004（第 76・77 図） 調査区東側で検出された。基本的には南北方向に近い向きで流下するが、部分的には東北方向へ曲がる。近世の遺構に間を切られ連続性は確認できないが、遺構の深度や配置から、SD5002 と SD5004 は一連の遺構であると考えられる。

356、357 は土師質土器杯である。底部が突出する形態を呈する。底部の切り離し方法は不明である。

357 は腰が張るタイプの杯であり、調整等は摩滅により不明である。

358 は須恵器蓋である。天井部までが比較的高く、口縁端部を折り返し、端部に面を持たせる。

359 は須恵器壺である。底部から体部にかけて直線的に外方に広がる。

360 は須恵器杯である。口縁部が緩く外反し、器高が深い杯である。

361 は須恵器蓋である。皿に伴う蓋であり、口縁端部をナデにより下方につまみ出し面を持たせる。

362 は丸瓦である。凸面は最終調整のナデが確認できる。凹面には布目が残る。

出土遺物は古代～中世のものが多い。土師質土器の杯の年代や遺構を切る SD5001 の年代を参考にすれば、埋没年代としては中世後半に比定されるが、溝の方向などから考えると、近世以降の可能性が高い。

363 は須恵器皿である。底部と口縁部の境界が緩やかに屈曲するほか、内面では強いナデのためにへこんだような形態を呈する。

364 は須恵器壺である。外方に開く高台を持つ。

365 は土師器甕である。口縁端部にナデにより面を持たせる。

366 はふいごの羽口である。正確な部位などは不明であるが、内径部分も残存しており、胎土には多く

砂粒を混ぜる。被熱痕跡が部分的に見られる。

SD5007(第78図) 調査区南端で検出された。北東方向に延びる土坑状の溝であり、中央部が攪乱によって分断されている。深度は最大で0.3mを測り、埋土には少量の礫を含む。出土遺物は第78図に示した。367は土師質土器杯である。底部から口縁部まで大きく開く形態を呈し、底部の切り離し方法は不明である。

368は土師器椀である。断面U字状の高台がとりつき、高台が内側に向かってすぼまるために、外面では高台との境界がやや不明瞭である。

369、370は須恵器杯である。369は杯Bの高台であり、断面方形の低い高台が貼り付けられる。370は杯Aであり、口縁部が直線的に伸びる。

371は須恵器皿である。口縁部がやや内湾気味となり端部がとがる。内面に火襷が残る。

372は土師質土器竈である。側面の切開部の破片である。

373は平瓦である。凸面に格子叩きを施し、凹面には布目を残す。

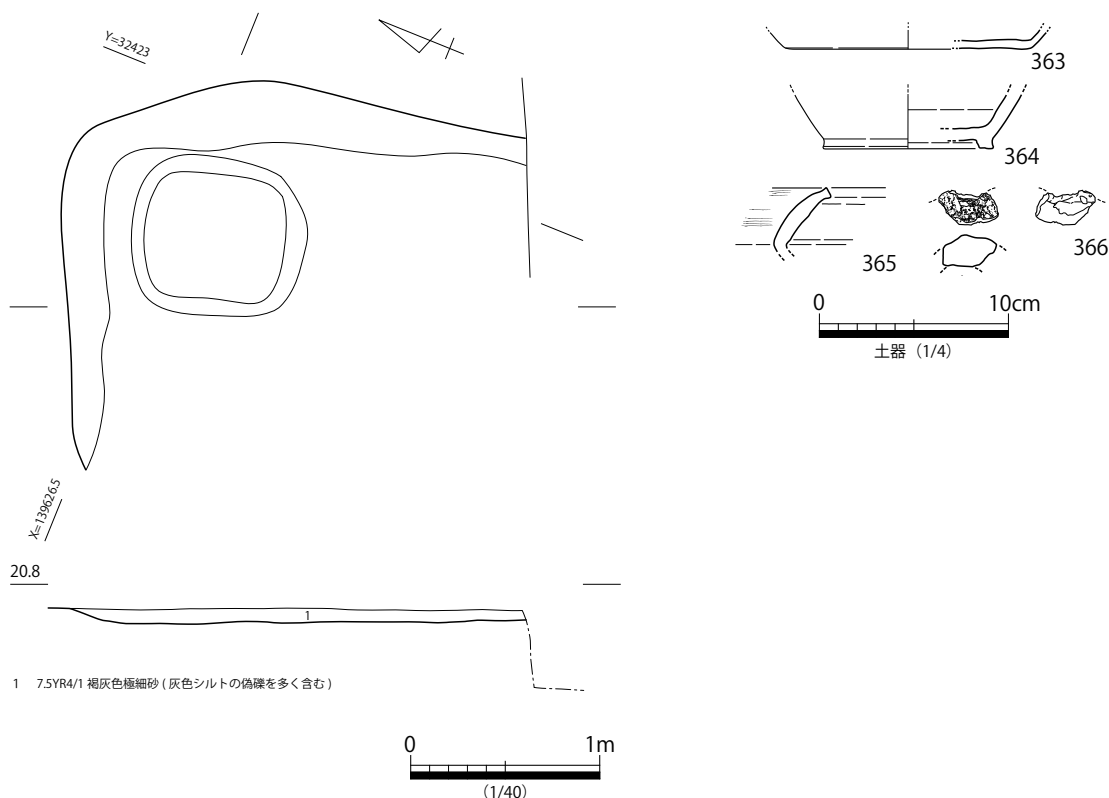
出土遺物の大半は古代の土器であるが、一部367、368のような中世土器も確認される。ただし、遺構の切り合いなどから、近世に埋没した遺構と判断した。

土坑

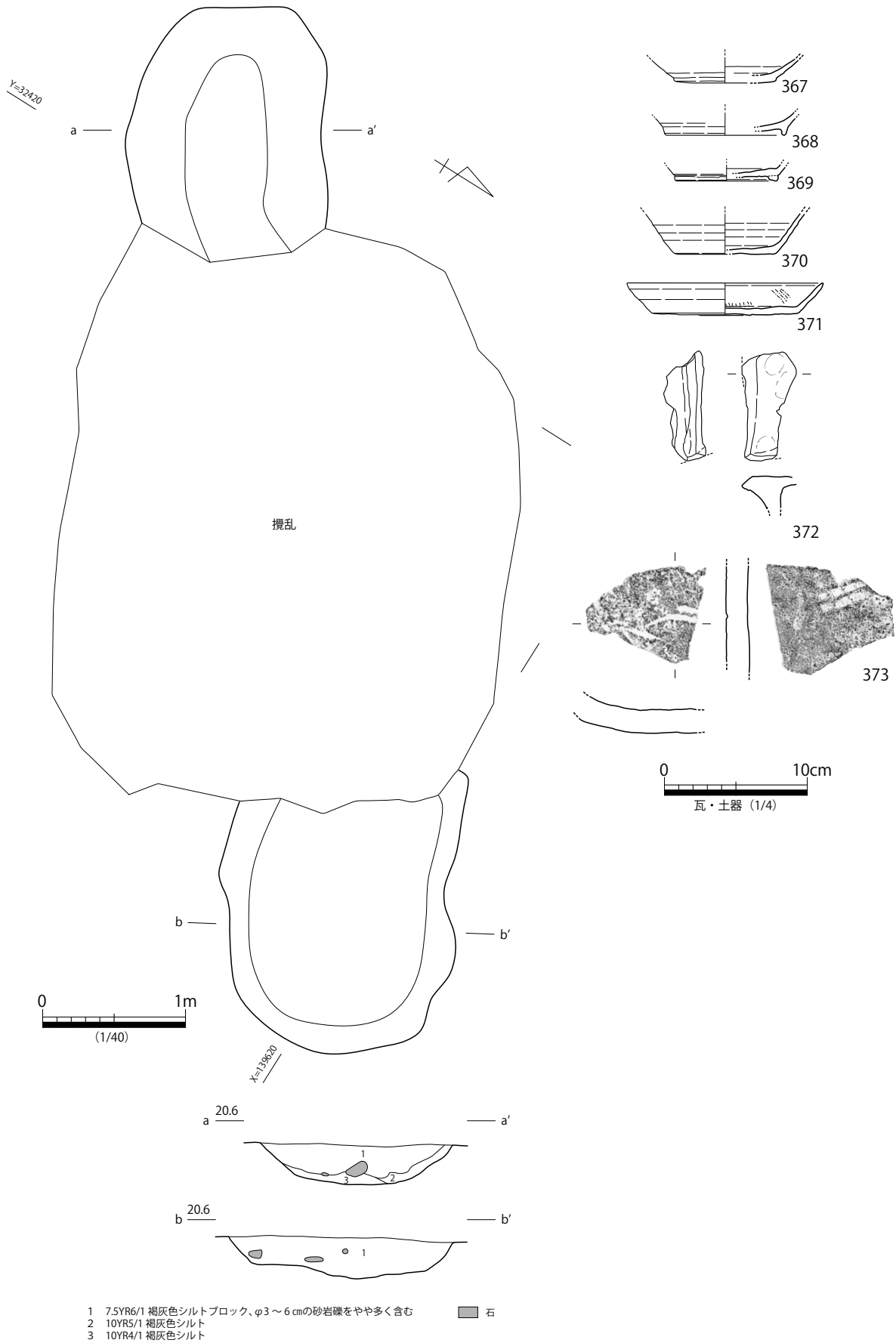
SK5002 調査区中央部付近で検出された。平面形態はほぼ円形を呈する。深度は浅い。出土遺物は第79図に示した。

374は須恵器蓋である。扁平なつまみがとりつく杯蓋である。

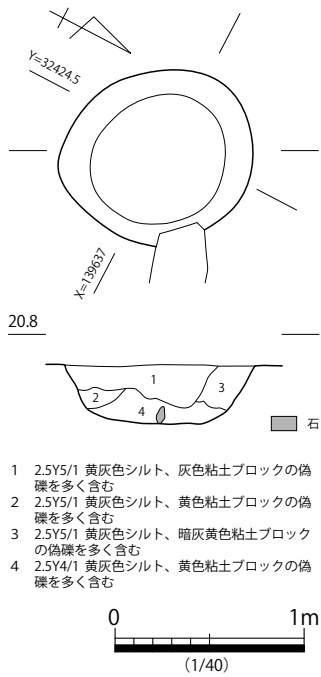
SK5003(第80図) 調査区中央部で検出された。ほぼ円形の平面形態を呈し、皿状の断面形態をもつ。底面は平坦になる。埋土に多くブロック土を含むため、人為的な埋め戻しがなされたものと考えられる。出土遺物は第81図に示した。



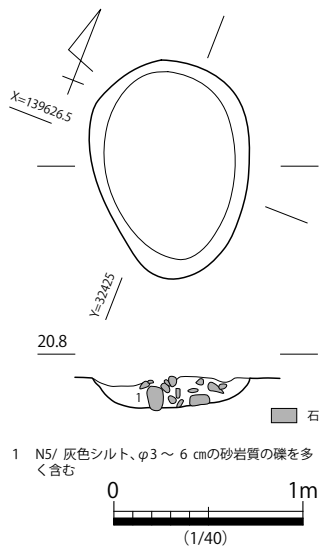
第77図 SD5004 平・断面



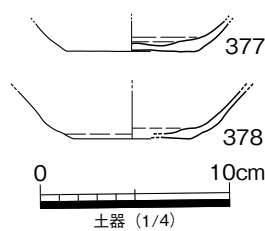
第78図 SD5007A・B平・断面



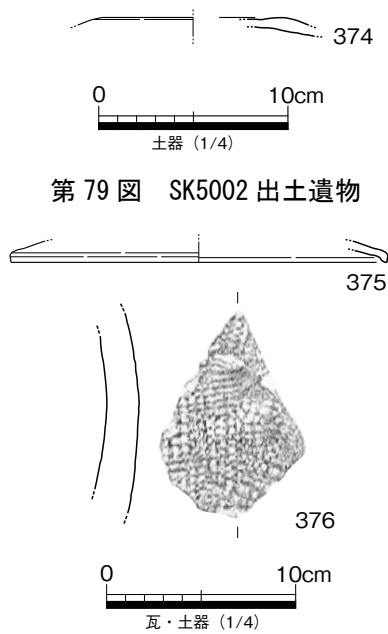
第80図 SK5003 平・断面



第82図 SX5005 平・断面

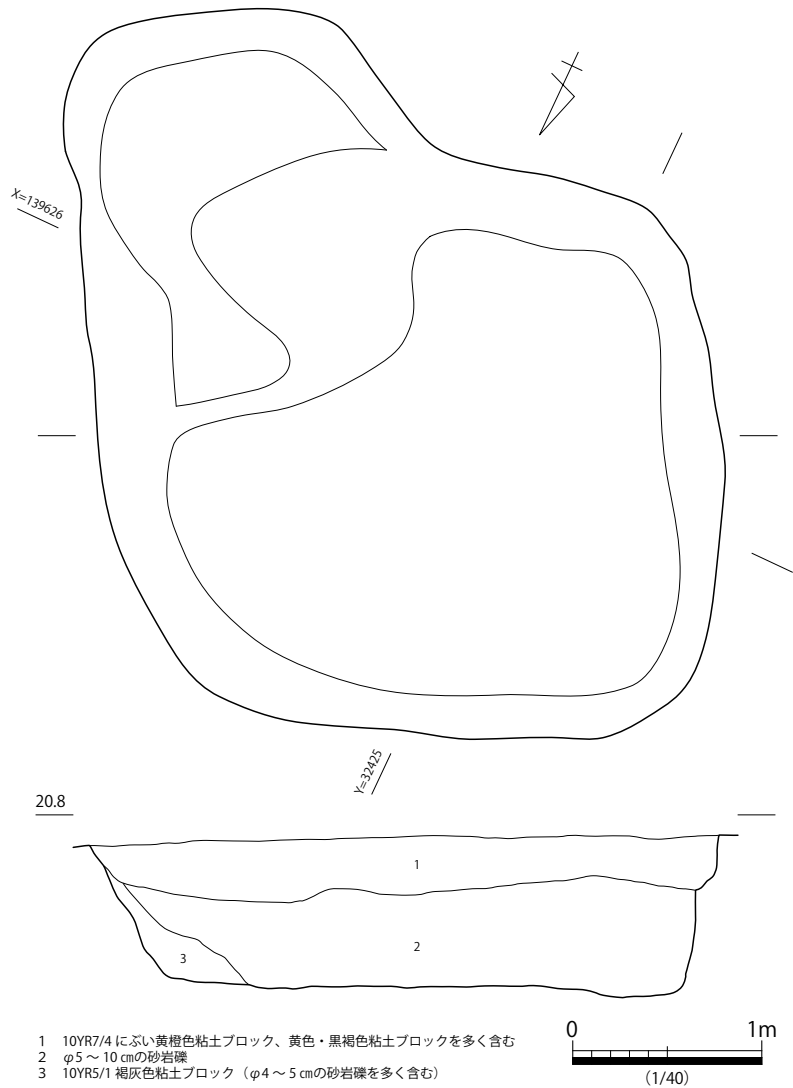


第83図 SX5007 出土遺物



第79図 SK5002 出土遺物

第81図 SK5003 出土遺物



第84図 SX5008 平・断面

375 は須恵器蓋である。口縁端部を折り返し、面を持たせる。

376 は須恵器甕である。亀山焼の甕であり、外面には格子タタキを持つ。

出土遺物からは中世前半の年代が想定されるが、遺構の切り合いからは近世以降に埋没した可能性が高い。

不明遺構

SX5005 (第82図) 調査区南部で検出された。小規模な楕円形の遺構であるが、近世の廃棄土坑と考えられるSX5008を切ることや、埋土に礫を多く含むことから、近世の廃棄土

坑と判断した。

SX5007 調査区南端で検出された。平面形態は東西方向に長い隅丸の長方形を呈する。出土遺物は第83図に示したが、図示していないものに近世のものを含み、遺構自体は近世の廃棄土坑であると考えられる。

377、378は土師質土器杯である。いずれもやや内湾気味に口縁部が立ち上がる。底部の切り離し方法は不明である。中世の土師質土器杯の可能性が高いが、さらに時期が下る可能性もある。

SX5008 (第85図) 調査区南部で検出された不整形な遺構である。断面方形で、底面が平坦になる。埋土には礫を多く含むことから、近世に耕作地として利用した際の礫などの廃棄に使用された土坑であると考えられる。出土遺物は第85図に示した。

379は青磁椀である。口縁端部まで直線的に伸びる。文様などは確認できない。

380は土師器皿である。口縁部は外反し、口縁端部が内側に肥厚する。内面には回転ナデののちに右上がりのナデを施す。外面については、判然としないが底部付近で調整が変化している痕跡がみられ、ケズリを行っている可能性もある。

381は平瓦である。凹面に布目を残す。

382はふいごの羽口である。残存状況が良好ではないが、外径と、内径が部分的に認められる。外面にはあまり被熱等の痕跡はみられない。

383は丸瓦である。凹面に布目を残す。

384は須恵器甕である。口縁部が外反し、端部に面を持つ。外面には格子タタキを施す。

385は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、口縁端部をつまみだし、面を持たせる。

386は土師質土器鉢である。残存部分では、内面に摺り目等は確認できないが、摺鉢の可能性が高い。口縁端部に面を持たせ、それ以下についてはユビオサエの痕跡が顕著に残る。

387は須恵器甕である。体部の破片であり、外面には平行叩き、内面には同心円状の当て具痕が残る。

388は土師質土器足釜である。やや内側に向かって立ち上がる口縁部と、口縁部下に垂れ下がり気味にめぐる突帯を持つ。

389は土師器甕である。鉢型の体部から、屈曲し内湾気味に外方へ延びる口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ出す。

390～393は平瓦である。392は調整が摩滅により確認できないが、凸面に関しては390が格子叩き、391がナデ、393が縄叩きを施す。凹面は布目が残される。

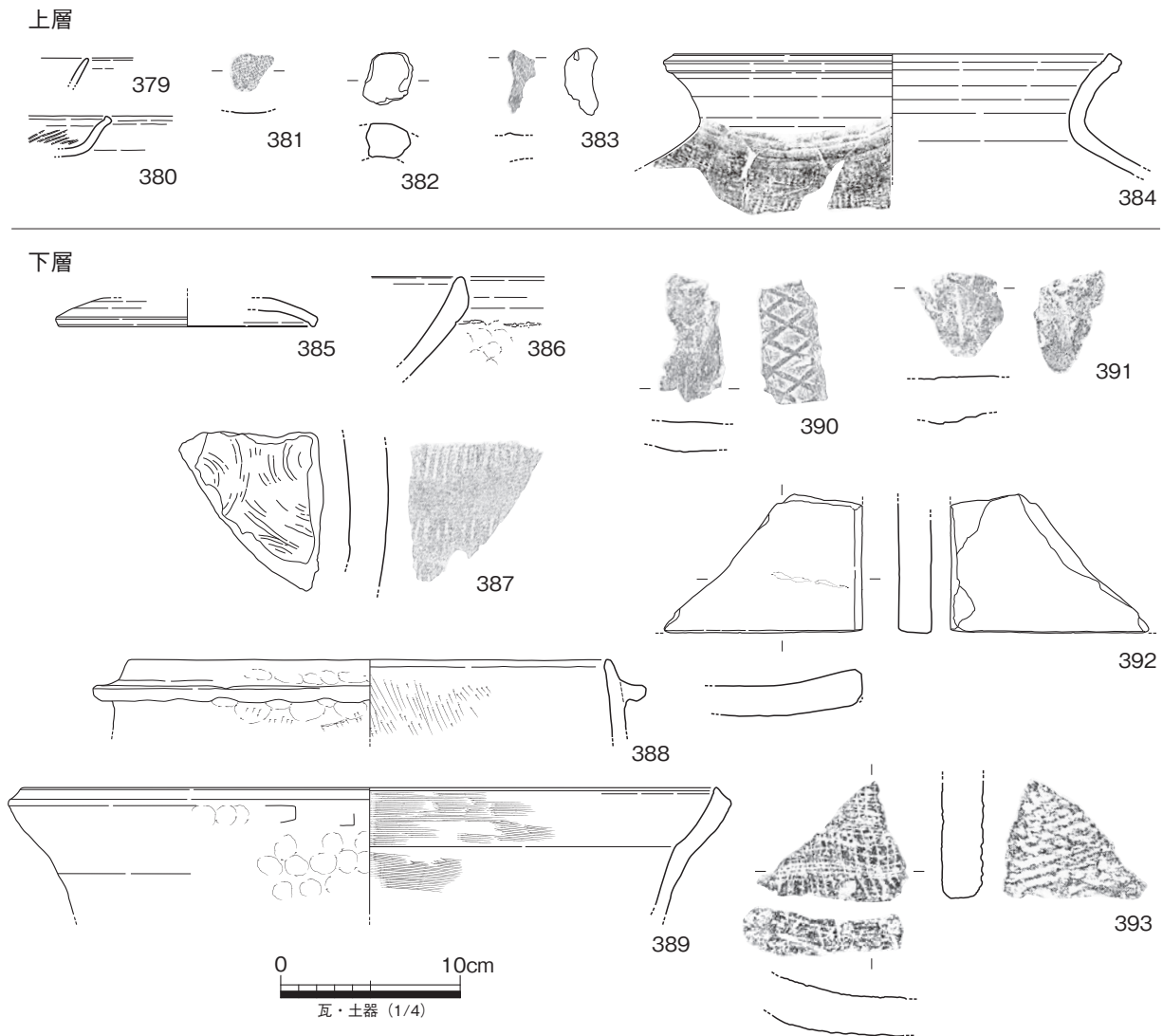
SX5009 調査区南東部で検出された。楕円形の土坑状の遺構であり、近世の遺構と考えられるSD5001を切ることからも、近世の廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第86図に示した。

394は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、本来はつまみが存在していた。口縁端部が折り返され、端部に面を持つ。天井部外面は回転ヘラケズリを施す。

395は須恵器壺である。断面方形の高台が、外側に広がる形態を呈する。高台内には、爪圧痕が弧を描くように残されている。

396、397は丸瓦である。397は凹面に布目を残す。398は凸面に縄叩きを施し、凹面に布目が残る。端部の調整は摩滅により不明瞭であるが、ケズリによって面取りしていた可能性が高い。

398は平瓦である。凸面はナデ、凹面は布目が残る。穿孔が一か所確認できる。端面はナデによって成形する。



第 85 図 SX5008 出土遺物

SX5010 調査区南端で検出された。地割に沿うように南北に長い平面形態を呈する。SD5001 を切ることから、近世以降の廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第 87 図に示した。

399 は木製の下駄である。表面が摩滅しているが、裏面の一部に刀子等による線状痕がある。半截材を用いており、24mm の間に 7 本の年輪が確認できる。

400 は漆器椀である。漆の膜面はややはがれかけている。広葉樹を横木取りしている。

(2) 中世の遺構

溝

SD5003・SD5005 (第 88 図) 調査区を南北方向に縦断する溝である。SD5001 に切られるが、その流下方向はおおむね一致している。調査区の南側で SD5005 と合流する。SD5005 は 2 本に分かれており、それぞれの深度や埋土に大きな差は見られない。地境付近に設けられた水路ないしは溝と判断した。出土遺物は SD5003 部分については上層・下層に分けて取り上げ、第 89 図に示した。

上層出土遺物は 401～410 である。

401、402 は土師質土器杯である。いずれも底部のみが残存し、底部は回転へら切りによって切り離されている。

403 は須恵器碗である。西村型土器碗の特徴をもち、口縁端部でナデにより若干の屈曲を持ち、内面には板ナデを施す。ミガキの痕跡は見られない。

404、405 は土師器碗である。焼成は土師質であるが、西村型の土器碗である。404 は口縁部が大きく開き、口縁端部は丸みを帯びる。405 は断面U字状の高台が垂直にとりつき、底部付近にヘラケズリを施す。

406 は須恵器杯である。直線的な口縁部が、垂直気味に立ち上がる。

407 ~ 409 は須恵器壺である。407 は断面方形の低い高台がとりつく。高台は削り出しによって作り出す。408 は算盤玉状の形態を呈する長頸壺の体部である。409 は頸部であり、口縁部が垂直に立ち上がる。

410 は不明須恵器である。口縁部の破片の可能性が高いが、残存部が少なく断定できない。

下層出土遺物は 411 ~ 452 である。

411 は瓦器碗である。口縁端部が強いナデにより外反する。内外面ともに横方向の細かいミガキを施す。和泉産の瓦器碗である。

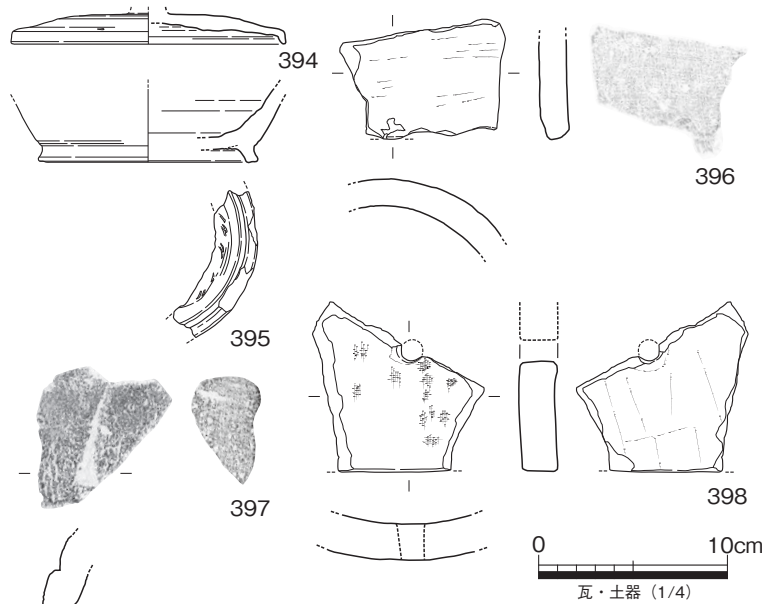
412 は黒色土器碗である。断面台形の高台が外方に広がるようにとりつく。内面にミガキの痕跡が僅かに確認できる。

413、414、415 は須恵器蓋である。413 は宝珠形が退化したようなつまみを持つ。414 は天井部外面にヘラケズリを施し、口縁端部を下方につまみ出し面を持たせる。415 は口径からも皿に伴う蓋の可能性が高い。

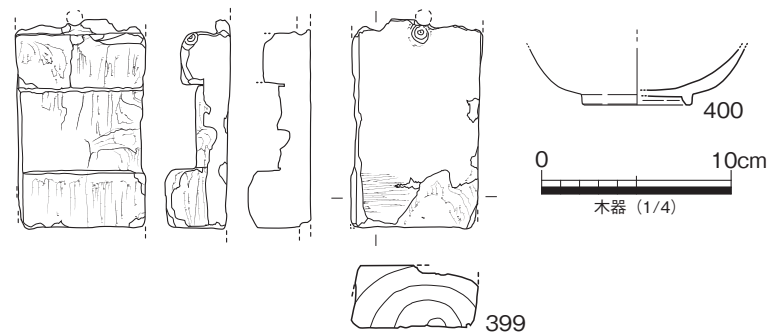
416 は須恵器甕である。大形の甕の頸部であり、口縁部は外反する。

417 ~ 419 は土師質土器皿である。417 は内面における底部との境界が明瞭であるが、418、419 についてはナデによりつまみ出したような断面三角形の口縁部形態を有する。いずれも底部はへら切りによって切り離す。

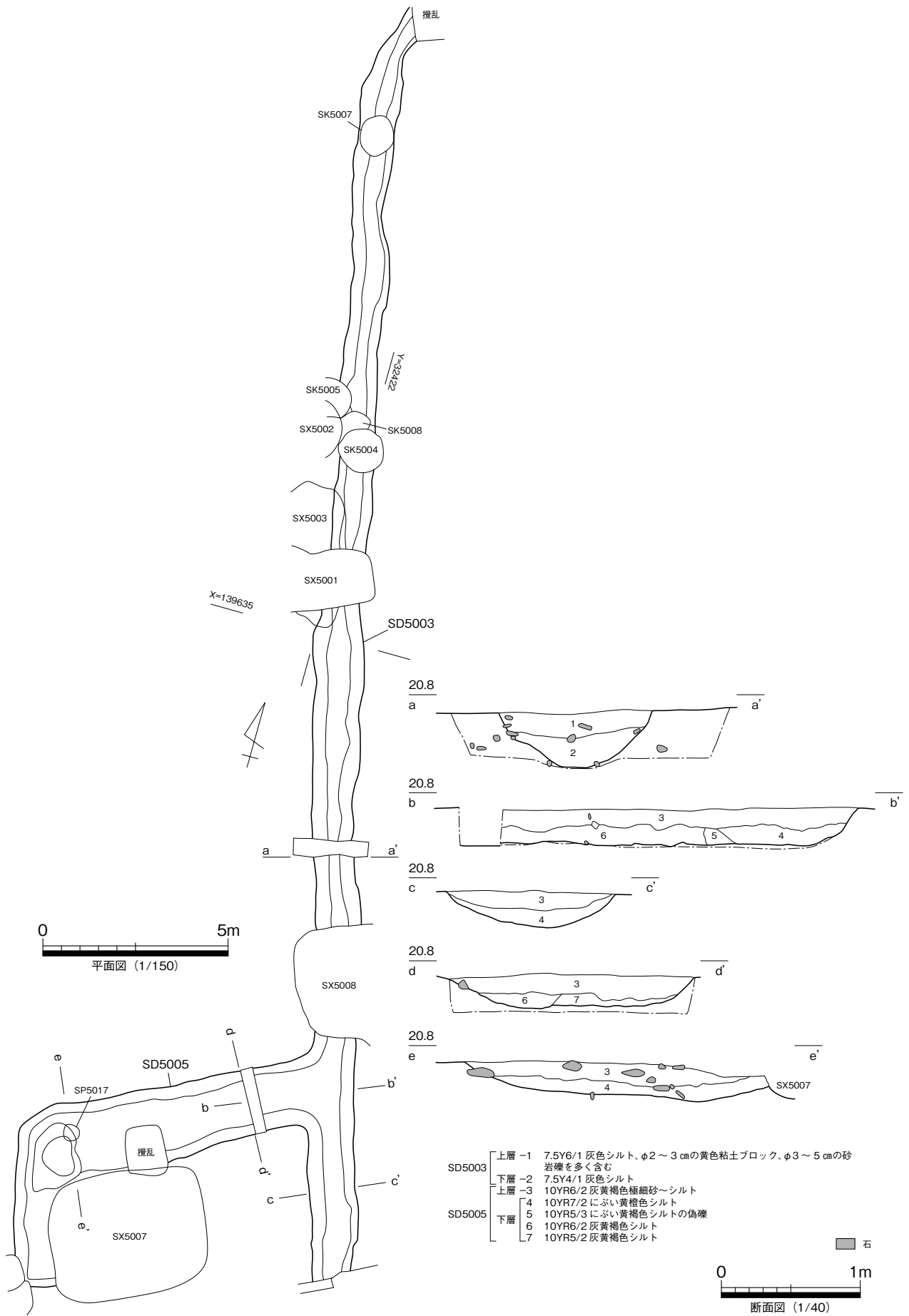
420 ~ 426 は土師質土器杯である。いずれも底部はへら切りによって切り離す。421 は屈曲し口縁部が外反する。422 は口縁部がやや内湾気味に外方へ延びる。423 は底部から強く外反している。口縁端部が欠損している。424 は口縁部が直線的に外方へ延びる。425 は口縁部の立ち上がりが強く、端上面に若干の面をもつ。見込み中央部がへこむ。426 は深手の杯であり、口縁部がやや内湾する。



第 86 図 SX5009 出土遺物



第 87 図 SX5010 出土木器



第 88 図 SD5003, SD5005 平・断面

427～429は黒色土器碗である。いずれも断面方形の高台が、外方へ開くようにとりつく。高台高が低く、底部が押し出されたような形態を呈する。

430～433は土師器碗である。西村型土器碗の特徴を有しており、焼成が土師質になったものと考えられる。430はやや外方に踏ん張る形態の高台をもつ。431、432は焼成が悪く、摩滅も著しいため詳細は不明である。433は碗の底部をへら切りによって切り離したのちに、断面三角形の低い高台を貼り付ける。

434、435は白磁碗である。434は底部の破片であり、高台をケズリ出しによりわずかに作り出す。435は口縁部であり、断面三角形状に口縁端部を肥厚させる。

436は土師器壺である。小型の短頸壺である。比較的精良な胎土を用いており、肩部から直線的に頸部に至り、垂直に短く口縁部が立ち上がる。機能などは不明である。

437は土師器甕である。口縁端部が外方に肥厚する。

438、439は亀山焼甕である。438は内面に横方向のナデを施し、ユビオサエを施す。439は外面に太筋の平行叩きの痕跡が残る。底部端が、やや外方に突出する。

440は白磁碗である。残存部分においては、外面に施釉は行わず、回転ヘラケズリの痕跡が残る。内面にはやや黄色がかった釉薬を施し、見込みには圏線が施される。

441、442は土師質土器足釜である。441は口縁部が内傾し、突帯が上方に向かって伸び、端部は強いナデで凹線状にへこませる。底部には格子叩きを施す。442は口縁部がやや内傾し、端部の上をナデにより平坦にする。突帯はほぼ水平に伸び、内外面ともにハケ目を顕著に残す。底部には格子叩きを施す。

443～448は土師器杯である。いずれもあまり明瞭ではない平底に、内湾する口縁が伴う。443は口縁端部をナデにより、やや直立気味にしている。445、447は口縁端部をナデにより外反させる。

449は須恵器鉢である。口縁部が直線的に伸び、口縁端部をとがらせる。

450はふいごの羽口である。外面には被熱の痕跡がみられる。

451、452は平瓦である。凸面には縄目叩きを施し、凹面には布目を残す。側面まで布目が残る。452は凸面ナデによって仕上げ、凹面はミガキ状の調整によって表面を平滑化する。

SD5005出土遺物は、上層、下層に大別し、一部最下層の7層を別に取り上げている。

上層出土遺物は453～468である。

453～455は土師質土器杯である。453は判然としないが、454と455は底部をへら切りによって切り離す。口縁部は外反するものと想定される。

456は須恵器皿である。底部がやや上げ底状となる。

457は須恵器蓋である。つまみがとりつく蓋であり、短頸壺に伴うものであると考えられる。天井部からほぼ直角に下方へ曲がる。

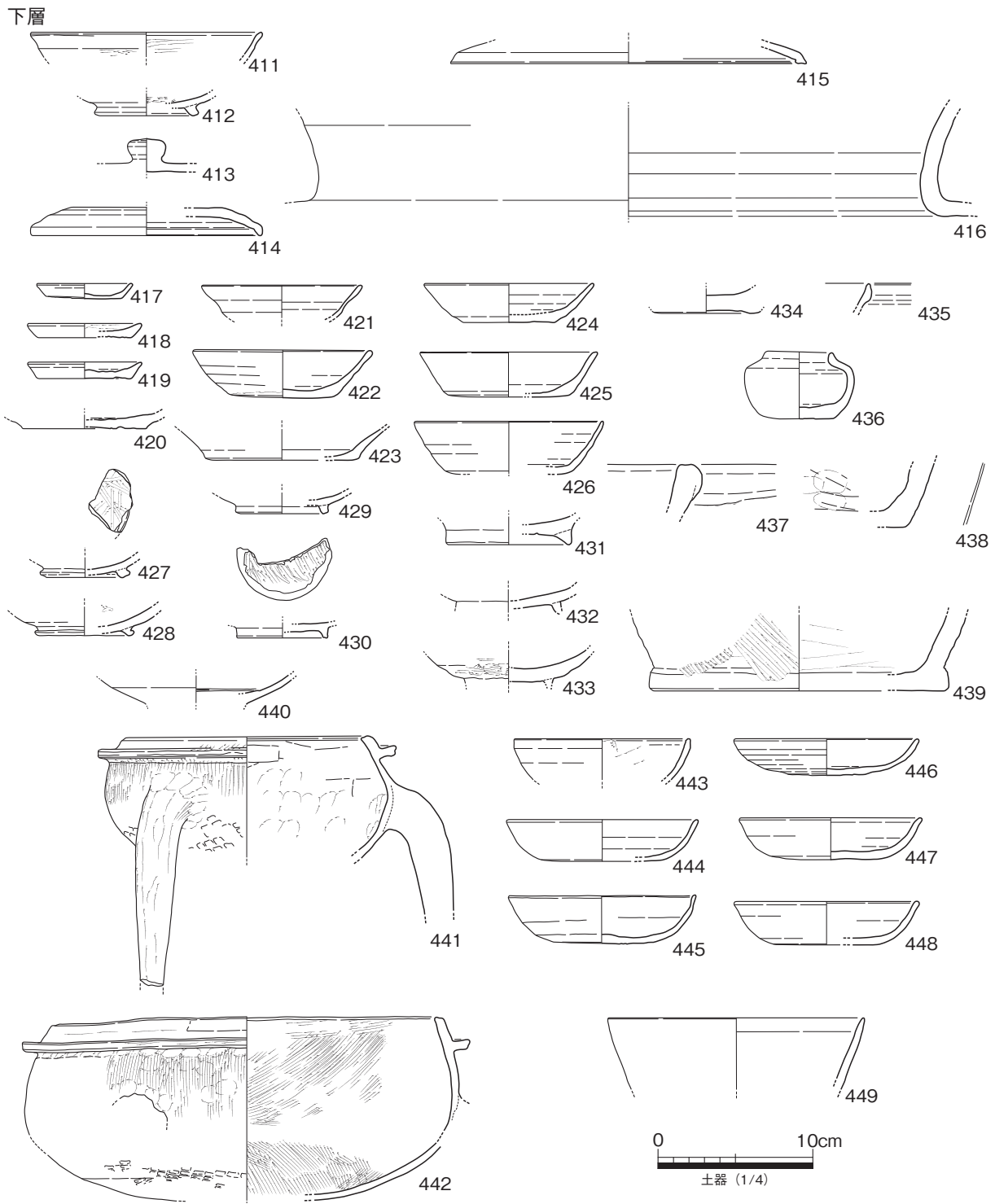
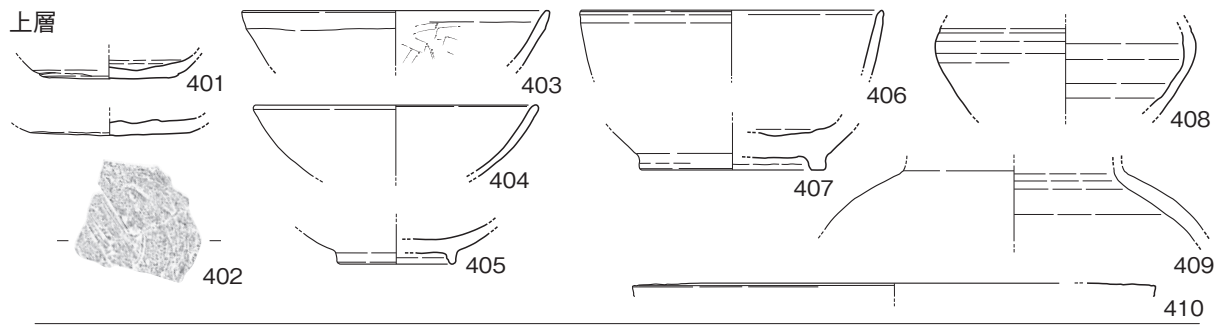
458は須恵器高杯である。脚端部の破片であり、端面を下方につまみ出す。

459は瓦器皿である。和泉型の瓦器皿であり、体部で屈曲し、屈曲の下にはユビオサエの痕跡を残す。

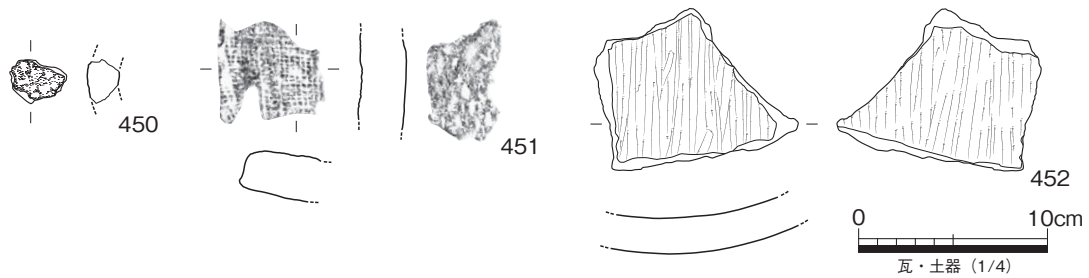
460、461は土師質土器杯である。高台付の杯であり、いずれも外方に開く、高い高台を持つ。460は外面に細かいナデを施し、高台は貼り付けによって作る。

462は須恵器壺である。底部の破片である。

463は須恵器硯である。円面硯の脚部であり、強く外反する脚部に、上方、下方ともに拡張する端部を持ち、端部には面を持つ。透孔が一か所確認でき、間隔等が不明であり数の復元ができないが、下端が



第 89 図 SD5003 出土遺物 1



第90図 SD5003 出土遺物2

直線的になるため、おそらく長形状の透孔をもつ。

464、465 は土師器羽釜である。いずれも鏝がほぼ水平にとりつき、465 は端面にナデによって面を作る。口縁部は体部から直線的に屈曲し外方に広がると考えられる。

466 は須恵器甕である。外面に平行叩きの痕跡が残り、内面には同心円状の当て具痕が残される。

467、468 は須恵器壺である。長胴の壺である。外面には格子叩きを施し、内面にはユビオサエ痕が顕著に残る。468 は外面の底部と体部の境界に、へら状の工具で面取りを行う。

下層出土遺物は 469 ～ 476 である。

469 は須恵器杯である。外方に大きく開く口縁部を持つ。

470 は土師質土器杯である。深い器形に、口縁端部が僅かに肥厚する。

471 は瓦器椀である。見込みに格子状のミガキを施す。

472 は黒色土器椀である。断面三角形の高台を持つ。内面の黒色化が全体に及んでいない。

473 は須恵器杯である。底部をへら切りによって切り離し、体部は内湾気味になる。外面に火轆が残る。

474 は土師器甕である。口縁部が屈曲し、端部にナデによって面を作る。

475、476 は須恵器甕である。口縁端部が屈曲し水平となる。476 は体部片であり、外面に格子叩き、内面には平行叩きの痕跡のような圧痕が残る。内面の圧痕は叩きに伴う当て具の痕跡である可能性が高い。最下層出土遺物は 477 ～ 479 である。

477 は土師器椀である。内傾する高台を持つ。胎土の特徴からは西村型の土器椀とは判断できない。

478 は須恵器壺である。中型の壺であり、断面方形の高台が外方に踏ん張る形態を呈する。

479 は土師器高杯である。脚柱部が断面多角形状を呈する高杯である。外面はケズリを施し、内面には粘土接合痕を顕著に残す。

SD5006 調査区南西隅で検出された。おおむね現在の地割の方向に平行する溝である。4 区に西側を切られ、全体幅は不明である。出土遺物は第 92 図に示した。

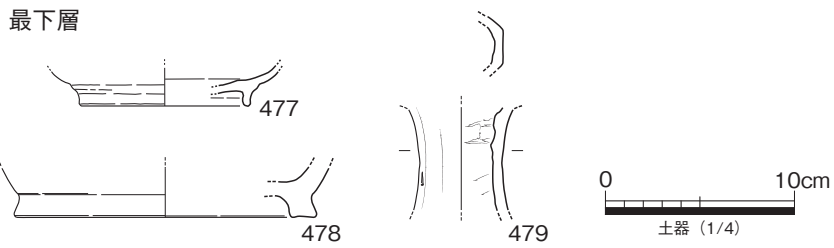
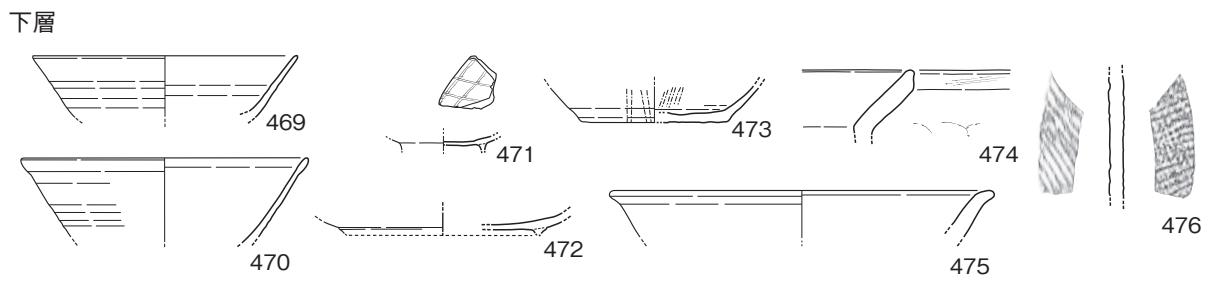
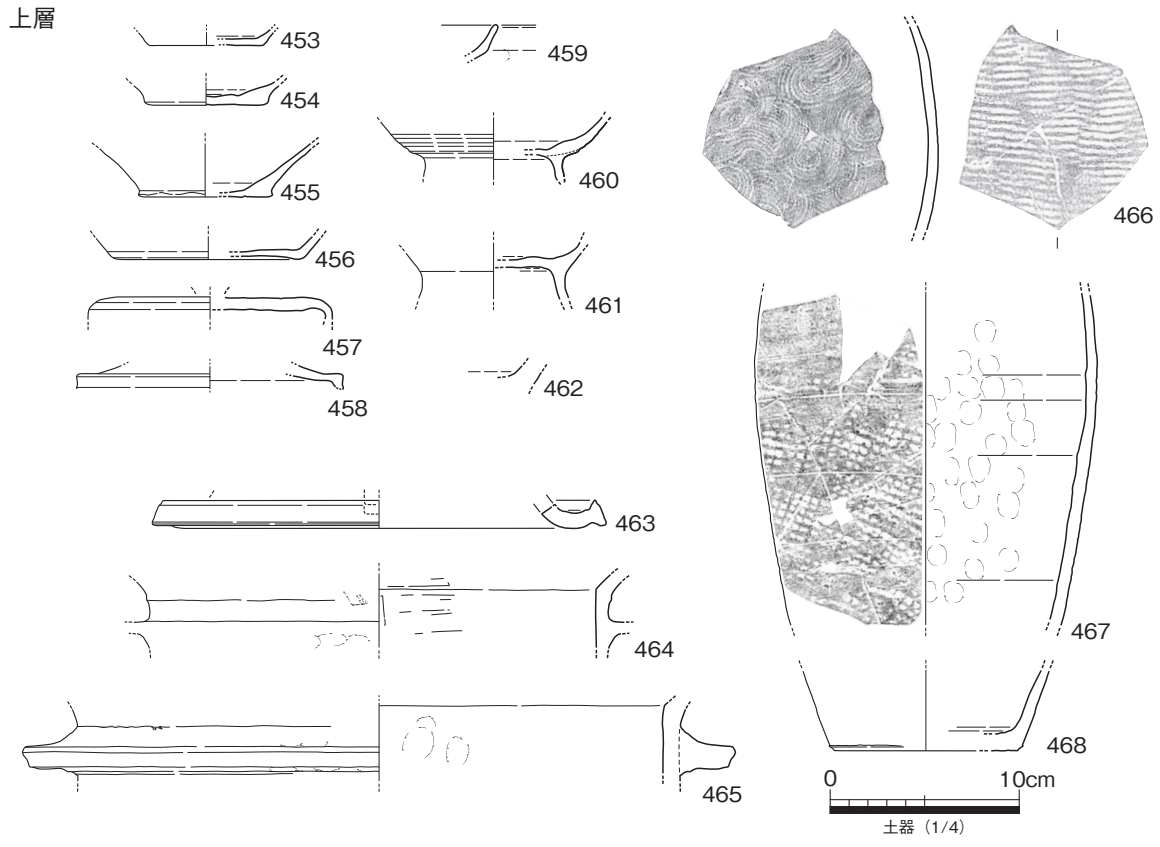
480 は土師器椀である。全体に摩滅が著しく、調整などは不明。断面逆三角形の高台を貼り付ける。

481 は須恵器壺である。胴部下半の破片である。

482 は須恵器甕である。体部の破片であり、外面に格子叩き、内面はユビオサエの痕跡が残る。

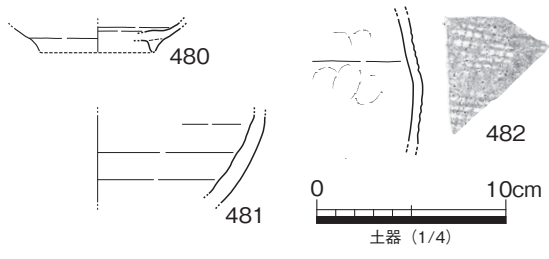
SD5008 (第 93 図) 調査区中央部を南北方向に流下する。南端では溝の端が収束しているが、北側は 6 区に至るまで検出されているが、6 区での検出範囲はきわめて小さく、6 区における同遺構と出土遺物についても、あわせて報告する。

遺構の検出幅は、最大で 4 m 程である。断面形状は、多少変化はあるものの、おおむね断面逆台形状を呈し、底面は比較的平坦となる。特徴として、3 ～ 5 m ごとに、障子堀り状に、溝の底面が高くなり、壁のように溝に直行する仕切りのような部分が生じる。これらの機能については、仕切りより下部の堆

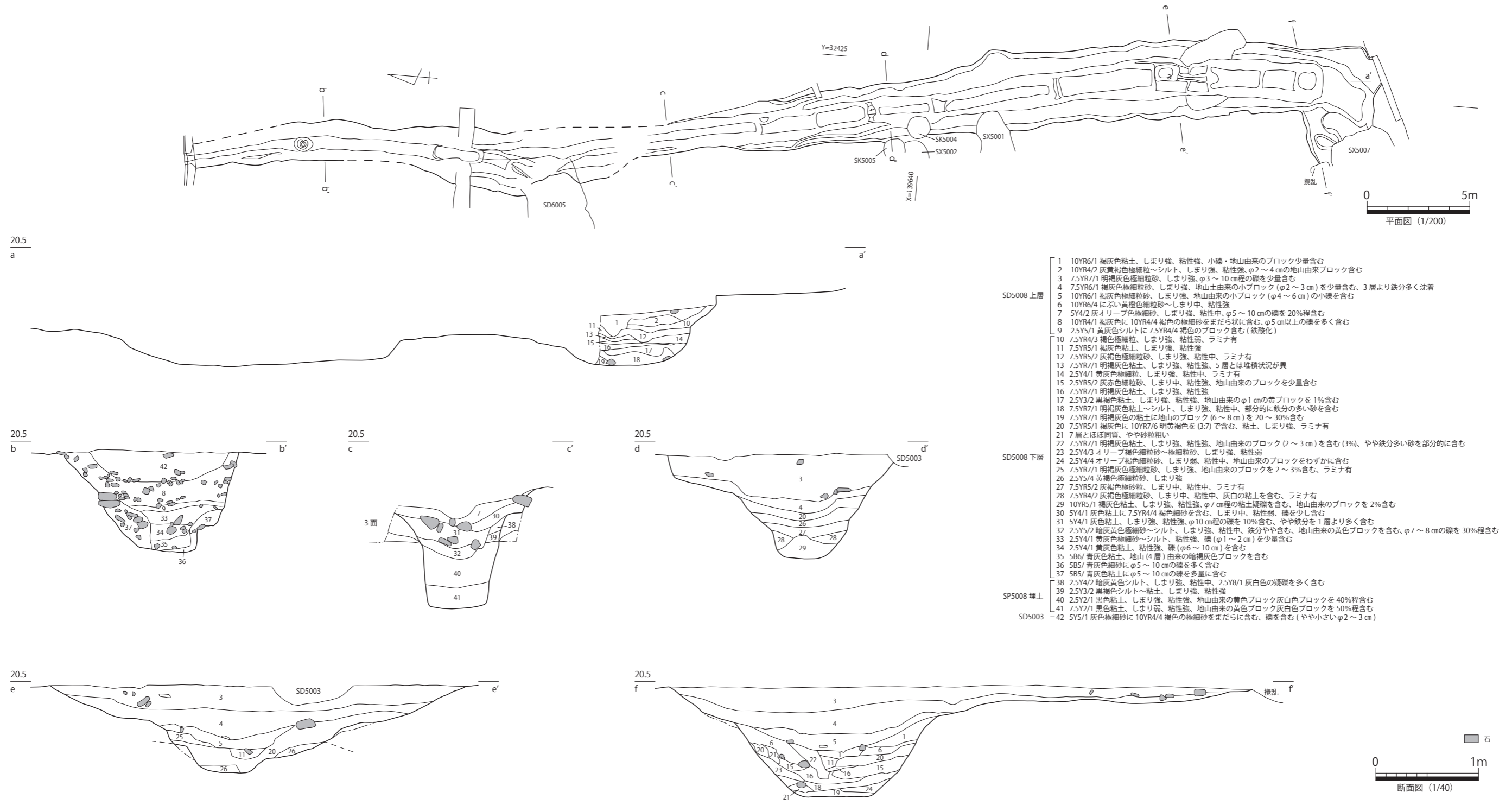


第 91 図 SD5005 出土遺物

積状況を観察すると、いずれもラミナが明瞭に認められ、流水があったことが想定されることから、灌漑に用いられたものと想定する。そして、仕切り状の部分は、配水の際などの流量の調整のための施設の可能性が考えられる。このほかに、溝の機能にかかわる施設や構造は確認できなかった。



第 92 図 SD5006 出土遺物



第93図 SD5008 平・断面

た。

仕切り状の部分より下位の流水が確認できる部分を下層、それより上位を上層として遺物の取り上げなどを行った。出土遺物は第94～96図に示した。

上層出土遺物は483～503である。

483は瓦器椀である。外面下半にユビオサエ痕跡を持ち、見込みには不整方向のミガキを施す。高台は断面逆三角形に近いが、端部のみつまみ出したような形態を呈する。

484～486は土師器椀である。484は、調整は摩耗により判然としないが、外面に粘土接合痕がみられる。高台は断面台形のものが、外方に開く。底部は下方に押し出されたような形態を呈する。485は外面における高台との境界が不明瞭で連続するような形態を呈する。外面は強いヨコナデにより弱い段を形成する。486は高い高台を持ち、高台の端部がやや外方に広がる。

487は土師質土器杯である。底部はへら切りによって切り離し、底部から口縁部にかけて緩く外反する。

488～490は須恵器蓋である。488は宝珠形のつまみを持つ杯蓋であり、口縁部にかえりを持つ。489は扁平なつまみを持つ。190は皿などに伴う蓋であり、口縁端部がやや内側につまみ出される。

491は須恵器壺である。短頸壺であり、肩部に水平方向の列点が施される。口縁部がやや外方に広がる。

492～494は須恵器甕である。492は口縁部の破片であり、端部にナデにより面を持たせ、少し上方に摘み上げる。

495、496は土師器甕である。屈曲し外方に広がる口縁部を持つ。いずれも口縁端部に、ナデにより凹線状のへこみを作る。

497はふいごの羽口である。端面が残存しており、外面と端面に被熱の痕跡がみられる。

498は不明須恵器である。おそらく杯の底部であろうが、断定はできない。底面に刻書を施す。刻書の内容は不明である。

499は不明陶器である。扁平な板状の土製品で、平瓦の可能性もあるが、厚さや曲がりの弱さなどからも、別のものの可能性がある。調整や文様なども認められない。

500は平瓦である。凸面には縄叩き、凹面には布目を残す。側面や端面の調整については、摩滅により判然としない。

501～503は丸瓦である。501は凸面にはナデ、凹面には布目の痕跡を残す。側面の調整は不明である。

502は凸面にはナデ、凹面には布目を残す。503は凸面にはナデ、凹面には布目を残す。

下層出土遺物は504～508である。

504、506は土師質土器杯である。504口縁部は緩く外反する。底部は回転へら切りによって切り離されており、内面には煤のような付着物が残る。外面にこのような痕跡が認められないことから、灯明具として使用された可能性も考えられる。506は底部を回転へら切りによって切り離すが、全体として丸みをもつ。胎土は精良である。

505は土師器椀である。体部には屈曲部が認められ、白色系の胎土を用いていることから、吉備系の土師器椀であると考えられる。

507は須恵器高杯である。杯部下半に回転ヘラケズリを施す。脚部の貼り付けの痕跡が認められ、透孔の痕跡も確認できる。

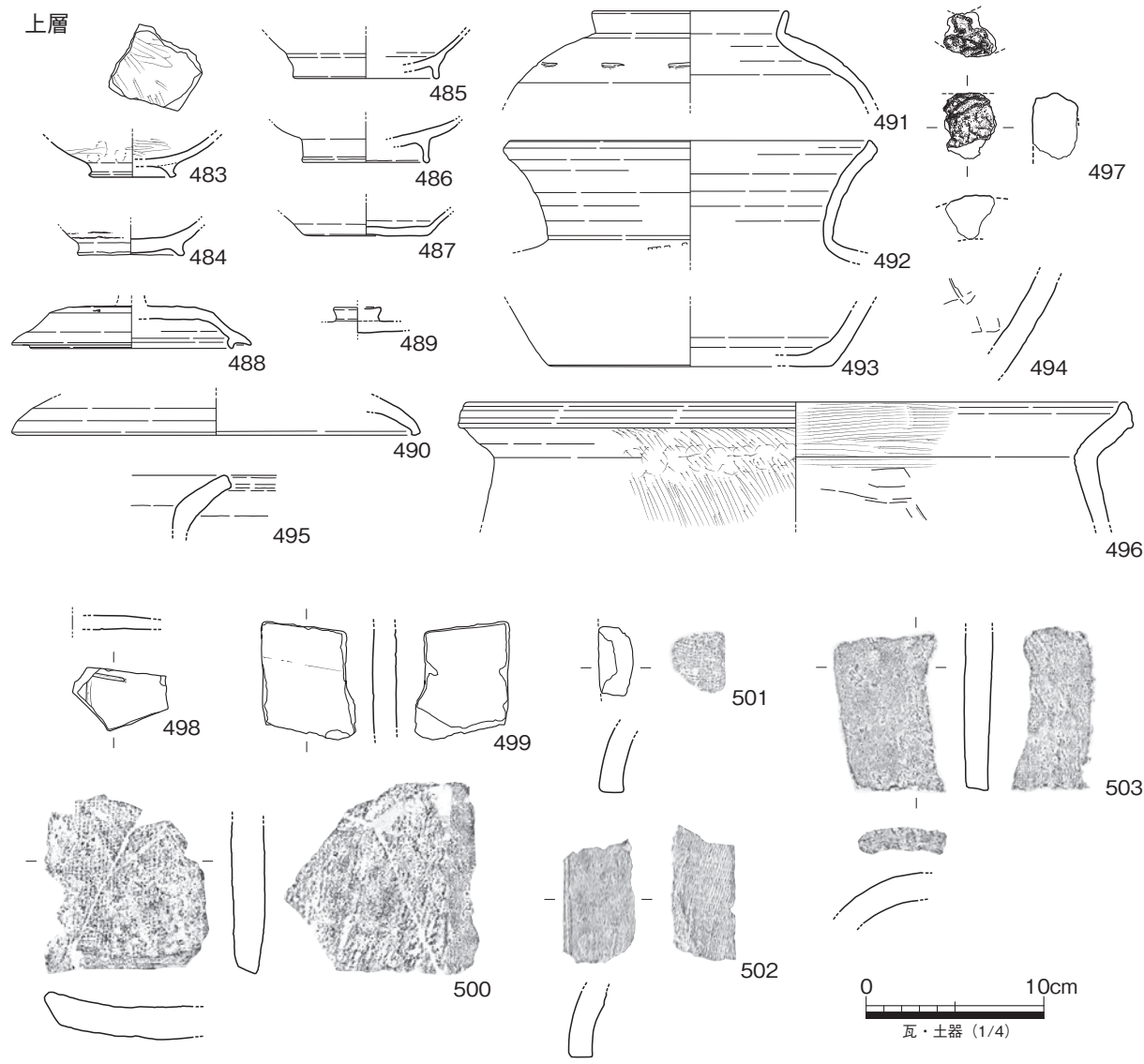
508は平瓦である。凸面には格子叩きを施し、凹面には最終調整としてナデを施している。側面はケズリによって面取りし、端面も同様の方法を用いている。

なお、SD5008 出土遺物の中で、層位不明の遺物についても 509 ~ 544 に示した。なお、木製品については、大部分が下層出土の可能性が高い。

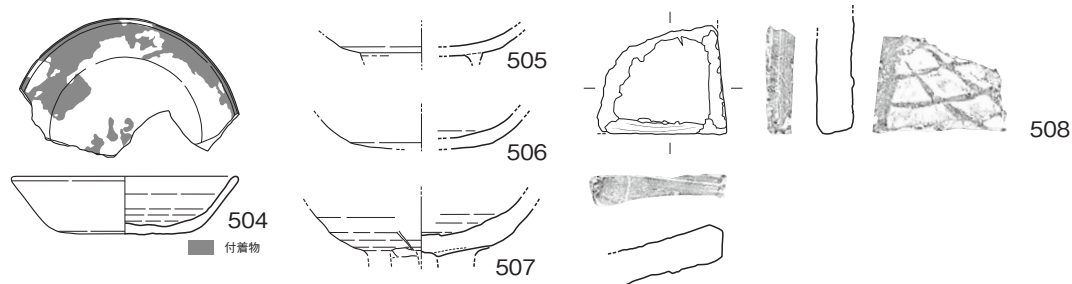
509 は土師器椀である。口縁部が外反し、外面にはヨコナデを施す。内面には横方向のミガキが確認できる。西村型の土器椀とは特徴が異なる。

510 は須恵器椀である。西村型の土器椀であり、内外面に横方向のミガキを顕著に残すほか、外面にはユビオサエの痕跡が確認できる。

511 は土師質土器皿である。口縁部は内湾気味に短く伸びる。底部はヘラ切りによって切り離す。

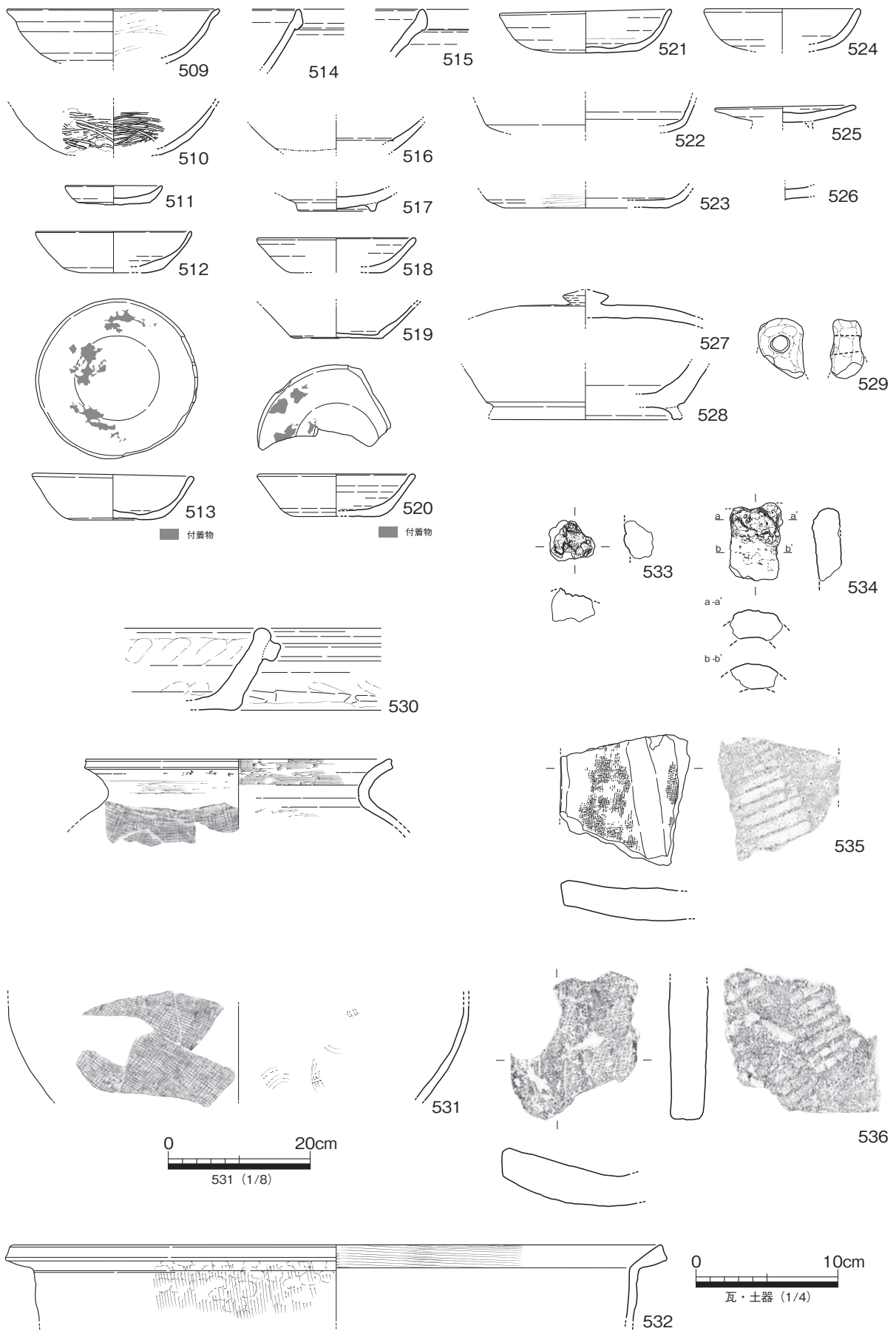


下層

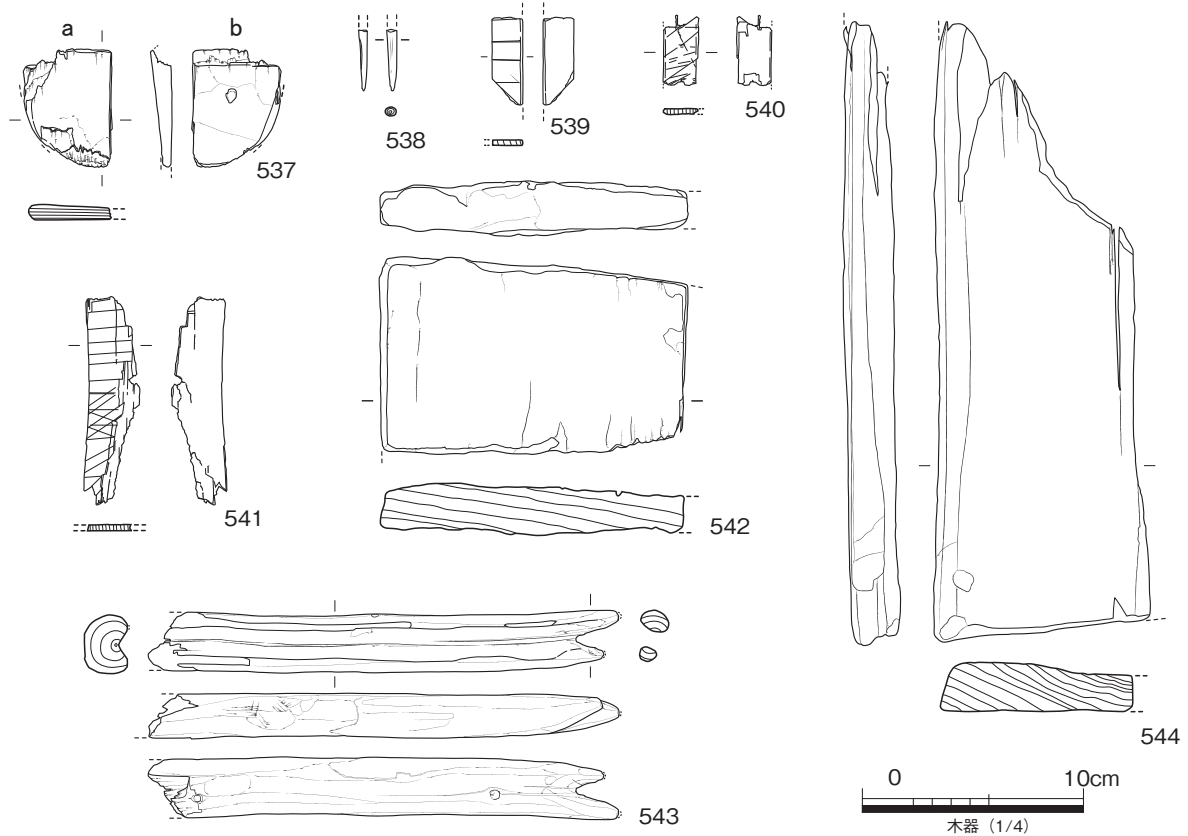


第 94 図 SD5008 出土遺物 1

- 512、513、518～521は土師質土器杯である。いずれも底部は回転へら切りによって切り離す。512は口縁部が内湾し見込み中央部がへこむ。513は内面に煤のような付着物がみられる。灯明皿として使用されたか。518、519は口縁部が直線的に外方へ開く。520は口縁部が直線的に外方に開くほか、513のような付着物の痕跡が確認できる。521は全体的に丸みを持ち、口縁部がわずかに外反する。
- 514は白磁碗である。口縁部であり、端部が断面三角形状に肥厚する。
- 515は須恵器鉢である。東播系の摺鉢であり、口縁端部が丸みを持ちながら肥厚し、口縁端部付近のみ黒色化する。
- 516は白磁碗である。外面上部は施釉される。内面には一重の圈線を巡らせる。
- 517は土師器碗である。断面台形の高台を貼り付け、底部が下方に押し出されたような形態を呈する。
- 522は須恵器杯である。底部から緩やかに曲がり、直線的に傾斜を持って立ち上がる。
- 523は土師器皿である。内外面に赤彩を施し、外面下半にはヘラケズリを施す。部分的にミガキが確認される。
- 524は土師器杯である。丸底に近い形態を呈し、口縁部はやや内湾する。
- 525は土師質土器皿である。浅い皿に高台が取り付くタイプの皿である。口縁端部内面はナデによってへこませる。
- 526は不明陶器である。内面には薄い緑色系の釉薬が施される。底部の破片であり、底部はケズリ出しによって成形される。
- 527は須恵器蓋である。杯に伴う蓋であり、宝珠形のつまみを取り付く。自然釉により調整は不明瞭であるが、内・外面共に回転ナデにより成形されている可能性が高い。
- 528は須恵器壺である。断面方形の高台が、外方に踏ん張るように開く。
- 529は蛸壺である。穿孔部のみが残存し、上部に穿孔方向と直行するへこみをナデによって作る。
- 530は土師器鉢である。断面台形状の浅い鉢であり、口縁部下に下方に向かう突帯が取り付く。底部付近には板ナデの痕跡が顕著に残り、内面にはユビオサエの痕跡が顕著に残る。
- 531は須恵器甕である。口縁部が外反し、端部にはヨコナデにて凹線状のへこみをもたせる。体部外面には、格子叩きを施す。
- 532は土師器甕である。口縁部が明瞭に屈曲したのちに外方に広がり、口縁端部は上下に肥厚し、端面にはナデにより面を持たせる。
- 533、534はふいごの羽口である。533は外面に被熱した痕跡が残る。534は端面が残存しており、特に被熱痕跡が顕著に残り、ガラス化した鉱物等が付着している。
- 535、536は平瓦である。535は凸面に、平行叩きを施す。おそらく縄叩きであろう。凹面には布目が残る。側面の調整は不明である。536は凸面に格子叩きを施し、凹面には布目を残す。側面にはケズリを施し面取りを行う。
- 537は不明木製品である。弧を描く部分を残す。b面上端は切り込みを入れたあと折っていると考えられる。a上端は斜めにカットされているものの、折り取りとの前後関係は不明である。加工痕は一部見られる。
- 538は箸状木器である。炭化材となっており、摩滅部分はほとんどない。明瞭な加工痕は見られない。
- 539～541は曲物側板である。539は片面に刀子によるけびきが見られることから曲物測板と考えられる。全体的に摩滅しているため、工具、加工痕は見られない。540は片面にケビキ痕を残す。そのほか刀子



第 95 図 SD5008 出土遺物 2



第96図 SD5008 出土木器

等による線状痕がある。541 はけびき痕が多数残される。

542 は木製の板材である。明確な加工痕跡は摩滅により確認できない。

543 は木製の布巻具である。棒状の素材の両端に抉りをつけている。全体的にやや摩滅しているが、部分的に加工痕が認められる。

544 は板材である。全体として摩滅している部分が多いが、側面部に加工痕が残される。全体に焼痕があり、側面以外は割面と考えられる。

土坑

SK5004 (第97図) 調査区中央部よりやや北で検出された。平面形態はほぼ正円形を呈し、掘り込みはほぼ垂直に掘り込まれる。掘り込みの形状から、廃棄土坑であると考えられる。出土遺物は第98図に示した。

545 は土師質土器皿である。口縁部が短く立ち上がりやや外反する。底部はへら切りによって切り離す。

546 は土師器椀である。断面台形の細い高台が取り付く。西村型の土器椀であると考えられる。

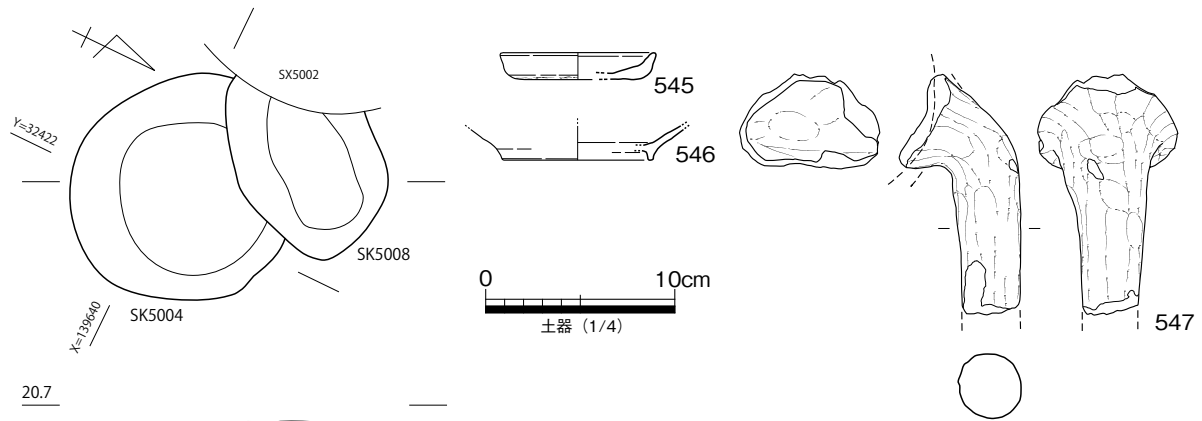
547 は土師質土器足釜である。脚部のみが残存し、内面にはユビオサエの痕跡が残る。

SK5005 調査区北側で検出された。ほぼ円形の土坑である。近世の遺構である SX5002 に切られるほか、中世の遺構である SD5003 を切る。出土遺物は第99図に示した。

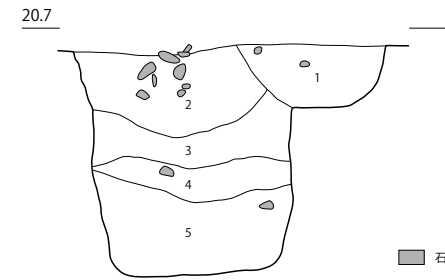
548 は須恵器杯である。底部はへら切りによって切り離されており、内外面に火襷が残る。

549 は平瓦である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。

SK5007 (第100図) 調査区北側で検出された。楕円形状の平面形に、ほぼ垂直の掘り込みを持ち、深さは0.4mを測る。出土遺物は第97図に示した。



第 98 図 SK5004 出土遺物



- | | | | |
|--------|----|---|---|
| SK5004 | 上層 | 1 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、3~8cm 大の礫含む |
| | | 2 | 10YR5/2 灰黄褐色粘質土、2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロック、5~10cm 大の礫多く含む |
| | 下層 | 3 | 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土、2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロックを含む |
| | | 4 | 10YR4/2 灰黄褐色シルト、10YR3/2 黒褐色粘土ブロックを含む、鉄分沈着 |
| | | 5 | 2.5Y3/2 黒褐色粘質土、5Y6/2 灰オリーブ色粘土ブロックを多く含む、鉄分沈着 |



第 97 図 SK5004, SK5008 平・断面

550 は土師器碗である。断面三角形の高台が取り付く。

551 は黒色土器碗である。断面三角形の低い高台が取り付く。内外面ともに摩滅により調整は不明である。

552 ~ 554 は瓦器碗である。552 は口縁部片であり、内外面に横方向のミガキを施す。553 も同様に横方向のミガキを施す。

555 は不明須恵器である。端部の破片であり、上部に凹線を施す。

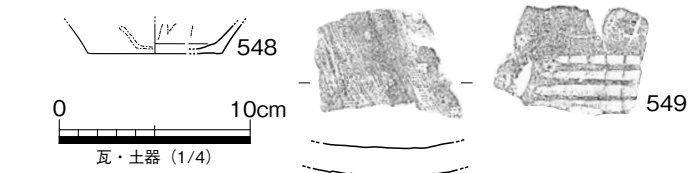
556 は須恵器蓋である。口縁端部を下方につまみ出し、面を持たせる。

SK5010 調査区南側で検出された。遺構の大部分を SD5005 に切られており、遺構としての詳細は不明である。出土遺物は第 102 図に示した。

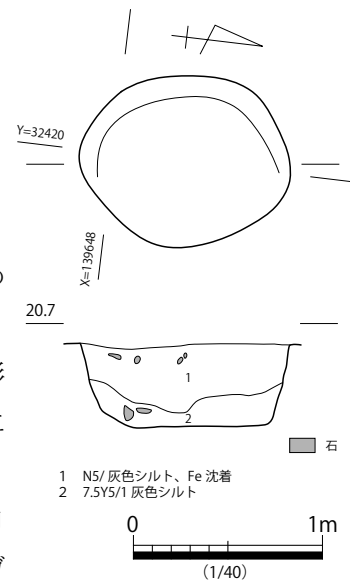
557 は土師器皿である。口縁端部が内側に少し肥厚する。赤彩が確認でき、内面には図化できないが、ミガキの痕跡が確認できる。

558 は土師器高杯である。脚部であり、裾が大きく開く。外面にはミガキの痕跡が残る。

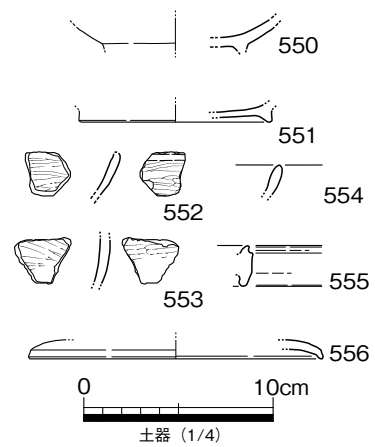
SK5001 (第 103 図) 調査区北端で検出された。平面は楕円形を呈し、深度は 0.2 m を測る。埋土に多



第 99 図 SK5005 出土遺物



第 100 図 SK5007 平・断面



第 101 図 SK5007 出土遺物

くの礫を含む。近世の遺構である SX4002 に切られる。出土遺物は第 103 図に示した。

559 は須恵器杯である。口縁部が直線的に延び、立ち上がりの角度が強い。

SK5017 調査区中央より少し東で検出された。検出された面は 3 面であるが、出土遺物の年代からは、1 面の遺構であると考えられたため、1 面の遺構として報告する。ほぼ円形の土坑であり、直径 0.5 m を測る。出土遺物は第 104 図に示した。

560 は土師質土器杯である。底部の切り離し方法は不明である。内外面ともに煤の付着が確認でき、なおかつ破面にも付着が確認されるため、破損ののちに、灯明具として転用されたものと考えられる。

561 は須恵器壺である。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

【2面の遺構】(第 105 図)

溝

SD5009 (第 108 図) 調査区中央部付近で検出された。ほぼ東西方向に延びる溝であり、東側の 4 区では、SD4014 につながる。断面からも比較的垂直に掘り込まれた溝であることがわかる。埋土には流水の痕跡が確認でき、水路として機能していたものと考えられる。南側に SZ5001、北側に SZ5003 が隣接しており、それらの畦畔との関係からも、水田に関連する灌漑用の水路であると考えられる。出土遺物は第 106 図に示した。

562 は不明須恵器である。底部の破片であり、ナデの痕跡が確認できる。

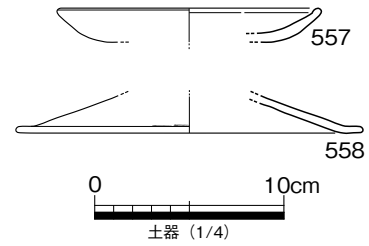
563 は須恵器甕である。小型の甕であり、口縁部が外反する。

SD5010 (第 108 図) 調査区中央で検出された。SD5009 と同方向に延びており、東側の 4 区では、SD4013 につながる。平面規模や断面形状、方向などが SD5009 と類似するが、SD5010 については、SD5009 に伴う畦畔である SZ5002 を切って掘削されるため、時期差のある遺構であると考えられ、新たに掘削された水路である可能性が高い。

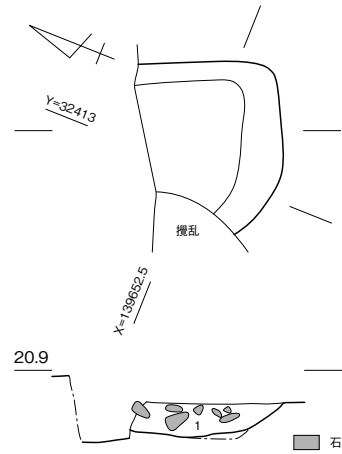
柱穴

SP5007 (第 107 図) 調査区南側で検出された。一部攪乱によって平面形態が不明であるが、おそらく楕円形の平面形を持つ。出土遺物は第 102 図に示した。

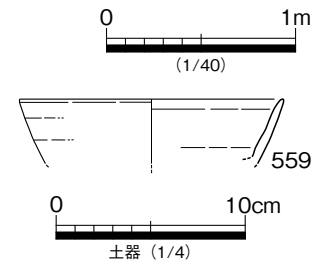
564 は土師器杯である。底部をヘラ切りののち、ナデを施す。外面底部との境界に、面取り状に強いナデを施す。口縁部は強く外反する。



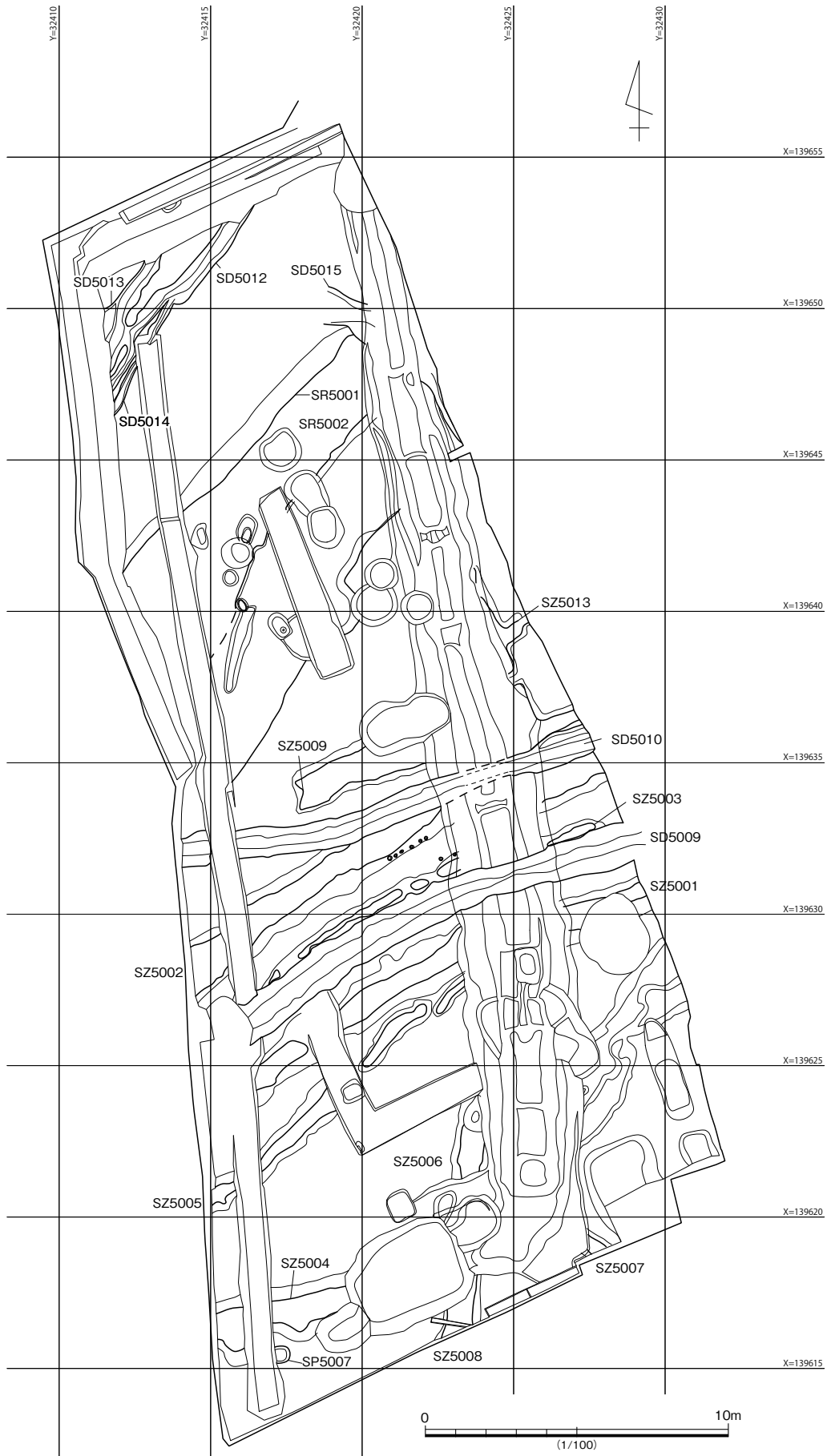
第 102 図 SK5010 出土遺物



第 103 図 SK5001 平・断面



第 104 図 SK5017 出土遺物



第 105 图 5 区 2 面 平面

畦

調査地内では、大小さまざまな畦畔が検出されている。水田の耕土層と判断できるものは少なく、偽畦畔状に検出されたものが多い。なお、SZ5001などの溝に隣接する規模の大きな畦畔については、水田耕土との区別が可能で、造りつけられた痕跡が明瞭に確認できる。

SZ5001（第108図） 調査区中央付近で検出された。同時期の灌漑水路であるSD5009に接しており、ほぼ同一方向に延びる。畔自体も0.2mほどの高さを持ち、ほかの畦畔と比較しても規模も大きな畦畔である。水路からの導水のための水口等の施設は確認できない。SZ5001に近接するSZ5002、SZ5003、SZ5005についても、方向が揃っており、それぞれとの間に、明確な水田の区画などは見られないため、畦畔によって囲まれた導水、ないしは排水のための浅い水路の両岸の畔の可能性も考えられる。

SZ5006（第110図） 調査区南側で検出された。北東方向に向かって伸びており、水路や大畦畔（SZ5001）との接続部分については、後世の遺構によって切られているため、同時に存在していたのかなどについては不明である。

SZ5008（第111図） 調査区南端で検出された。1面の遺構に切れ分断されているが、SZ5006につながる畦畔である可能性が高い。

SZ5009（第112図） 調査区中央で検出された。SD5010から少し離れた場所に所在する。SD5010と同方向に延びることから、これに伴う畦畔の可能性も考えられる。

SZ5013（第113図） 調査区中央よりやや北で検出された。いずれも畔の高さとしては低いが、南北方向の畦畔と、それに直交するような東西方向の畔が東側にとりつく状況が確認できた。これらに囲まれる範囲が、小区画の水田であった可能性が高い。出土遺物は第113図に示した。

565は須恵器杯である。畦畔の直上、ないしは畦畔中から1個体のみが出土している。杯身であり、底部は回転ヘラ切りを施し、口縁部付近はナデを施す。口縁部は垂直に立ち上がり、端面は丸くおさめる。口径に比して深さが深い。口径の大きさと、口縁部の立ち上がりなどから、7世紀前半のものであると考えられ、水田の埋没時期に近い資料であると評価できる。

流路

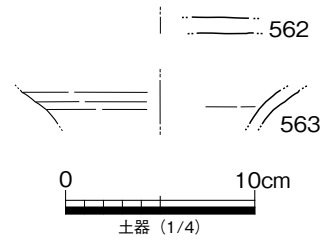
SR5001・SR5002 調査区北側で検出された。いずれも北東方向に向かって流下しており、埋土は1面の構成土と同様、礫を多量に含むことから、2面を覆うような氾濫作用により、この遺構も埋没したものと考えられる。埋没時期を示すような出土遺物は確認できなかった。

【3面の遺構】（第114図）

（1）古墳時代の遺構

溝

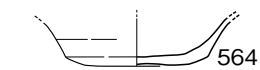
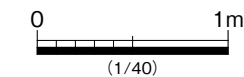
SD5018（第60図） 調査区北部で検出された。4区のSB4002、SB4003を囲堯する溝の西辺である。



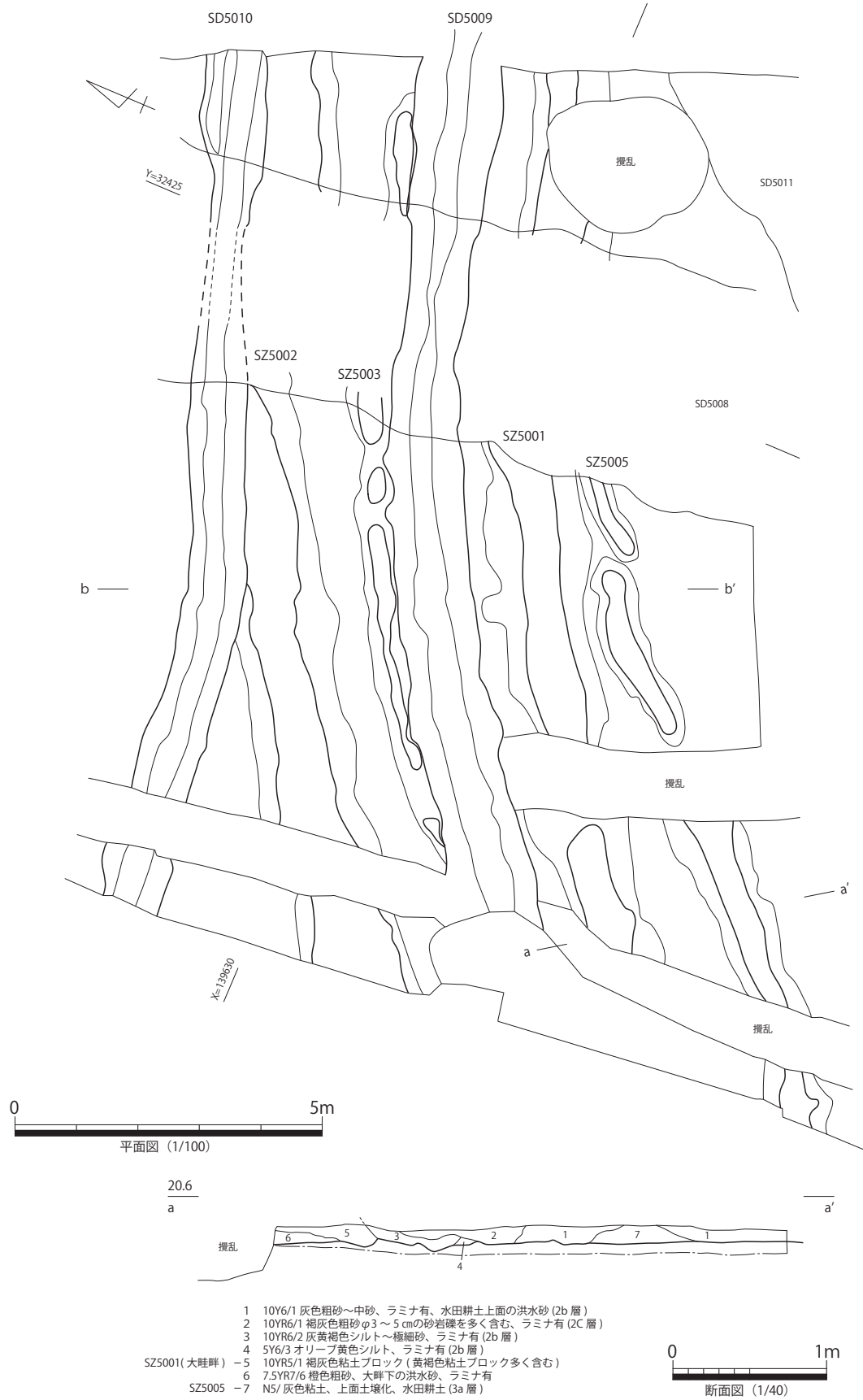
第106図 SD5009 出土遺物



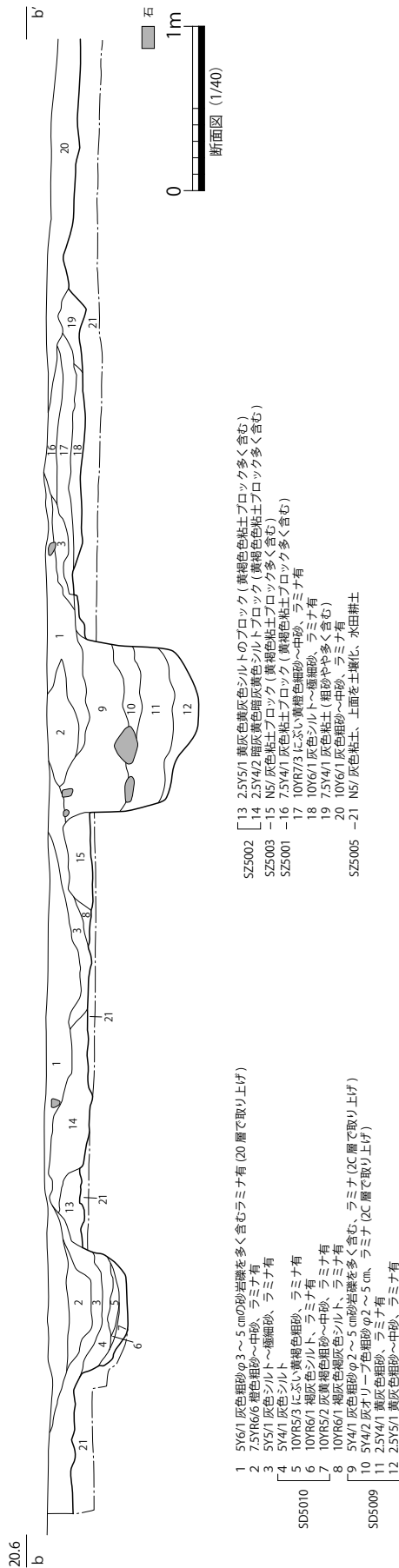
1 7.5YR6/1 褐灰色シルトブロック
(極細砂、炭化物多く含む)



第107図 SP5007 平・断面



第 108 図 SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 平・断面 1



第109図 SZ5001, SZ5002, SZ5003, SZ5005, SD5009, SD5010 断面2

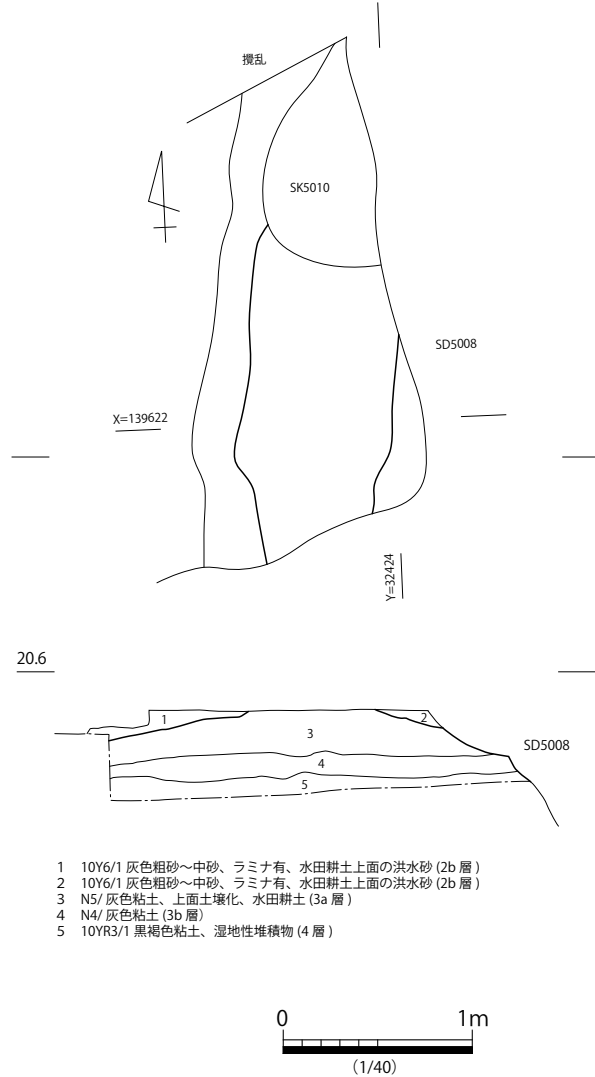
(2) 弥生時代の遺構
溝

SD5016 調査区南端で検出された。東側の4区で、SD4008 とつながる。

SD5017 (第115図) 調査区南東部で検出された、北東方向に向かって流下する溝である。隣接する4区において、接点はないものの、SD4018 とつながる。深さは0.1mに満たず、そういった点でもSD4018と同様の特徴を持つ。

SD5020 調査区北側で検出された溝である。西壁付近までほぼ北西方向に向かったのち、角度を変え北東方向に向かう形態を呈する。4区のSD4019と連続するほか、5区の北端付近でSD4033につながる。出土遺物は第116図に示した。

566は弥生土器高杯である。脚部の破片であり、外面には



第110図 SZ5006 平・断面

縦方向のミガキ、内面にはナデを施す。

567 は弥生土器甕である。平底の底部であり、底端部が少し突出する。

出土遺物から詳細な年代を推定することは難しいが、弥生時代中期の埋没が想定される。

SD5019 (第 117 図) 調査区中央より北で検出された。幅 0.3m、深さ 0.1 ~ 0.2 m ほどの小規模な溝である。出土遺物はないが、弥生時代の遺構である SD5020 を切り、古墳時代の建物に切られるため、弥生時代の遺構であると判断した。

SD5021 (第 118 図) 調査区南端で検出された。SD5016 から分岐し、ほぼ南北方向に延びる。出土遺物には、年代を特定できるものはない。

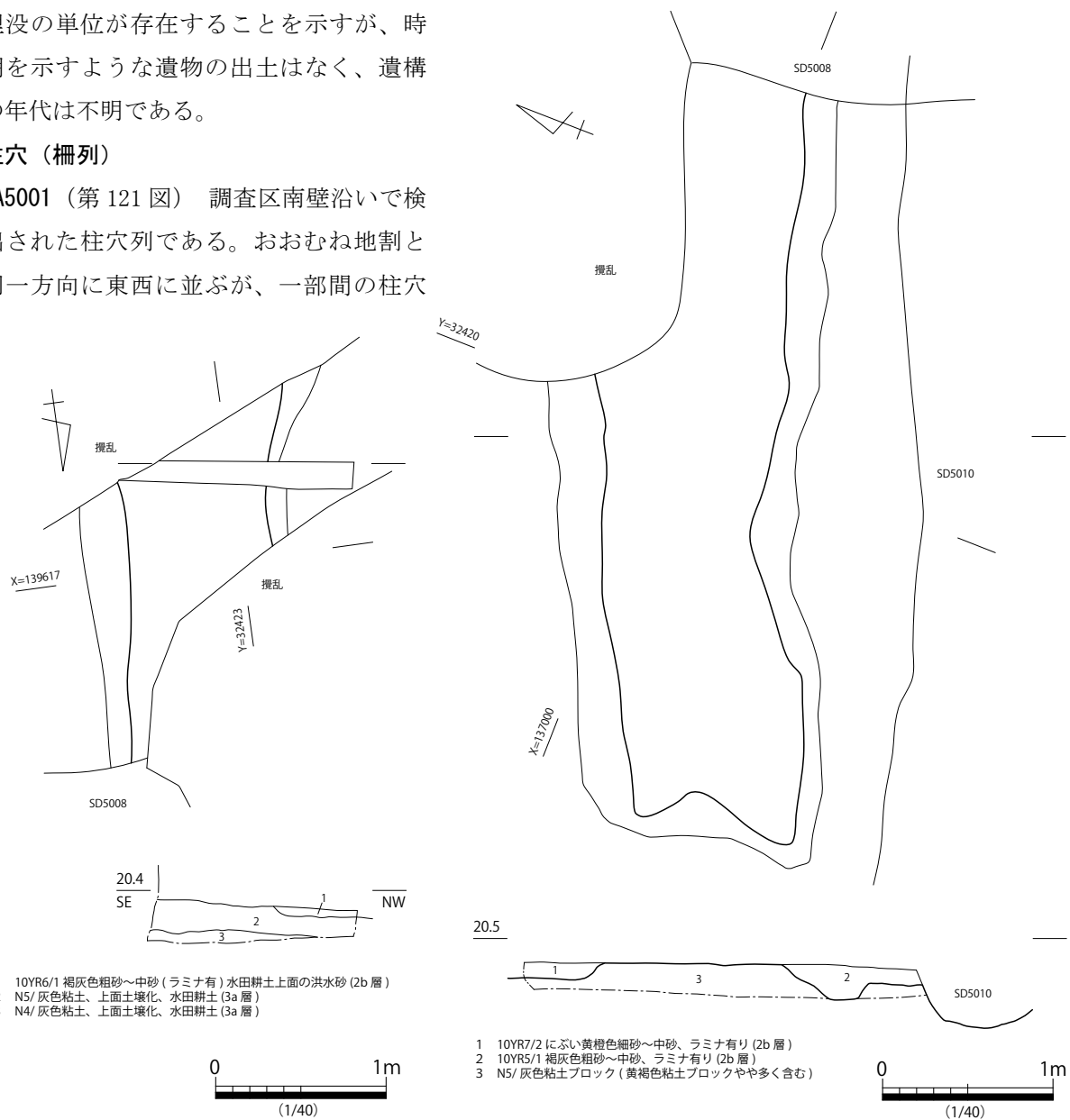
SD5023 (第 119 図) 調査区北端で検出された。ほぼ南北方向に延びる溝であり、南端は丸く収まる。深さも 0.1 m に満たない。出土遺物も僅少で、年代を特定するに至らなかった。

土坑

SK5018 (第 120 図) 調査区中央で検出された。東西方向に長い長楕円形の土坑である。埋土は複数の埋没の単位が存在することを示すが、時期を示すような遺物の出土はなく、遺構の年代は不明である。

柱穴 (柵列)

SA5001 (第 121 図) 調査区南壁沿いで検出された柱穴列である。おおむね地割と同一方向に東西に並ぶが、一部間の柱穴



が確認できない。確認できるところにおいては、柱穴の間隔は0.68 mを測る。それぞれの柱穴の深度も非常に浅く、列の向きが条里の方向に類似することも含めて、3面に帰属する遺構であるか決定する根拠に欠ける。出土遺物もない。

SA5002 (第122図) 調査区南部で検出された。南北方向に並ぶ柱穴列であり、北から30°強西に傾く。柱穴間隔はおよそ0.6mである。近隣の条里型地割の方向と類似するが、出土遺物や、検出面の年代からは年代を特定できない。

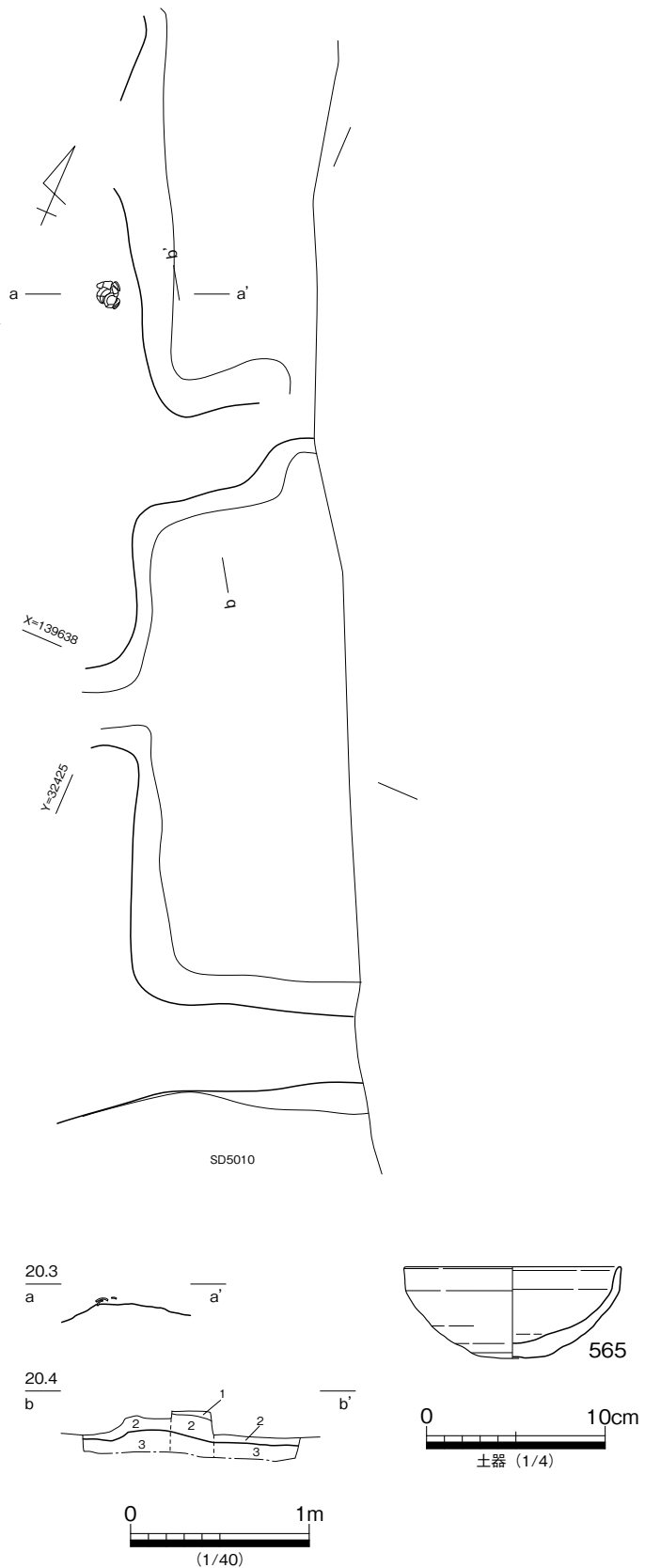
なお、SA5001、SA5002に隣接する形で、柱穴がいくつか検出されている。詳細は第123図～第127図に示すが、いずれも直径0.2～0.3 mの直径をもち、深さが0.1 mに満たない小規模な柱穴である。

SP5047・SP5048 (第128図) 調査区南部、SA5002の西側で検出された。2基の遺構が近接して切り合っており、平面形態も隅丸方形に近く、直径0.6 mほどの規模を持つことから、当初建物を構成する柱穴の可能性も考えながら調査を行った。しかし、いずれも深度0.1 mにも満たず、3面のほかの建物を構成する柱穴と明らかに異なる。

SP5049・SP5050 (第129図) 調査区南部で検出された。SP5047・SP5048と同様に2基の遺構が近接して切り合っている。これらも深度が非常に浅く、対応する柱穴も見られないため、建物を構成するようなものではないと判断した。時期を決定しうるような遺物の出土もない。

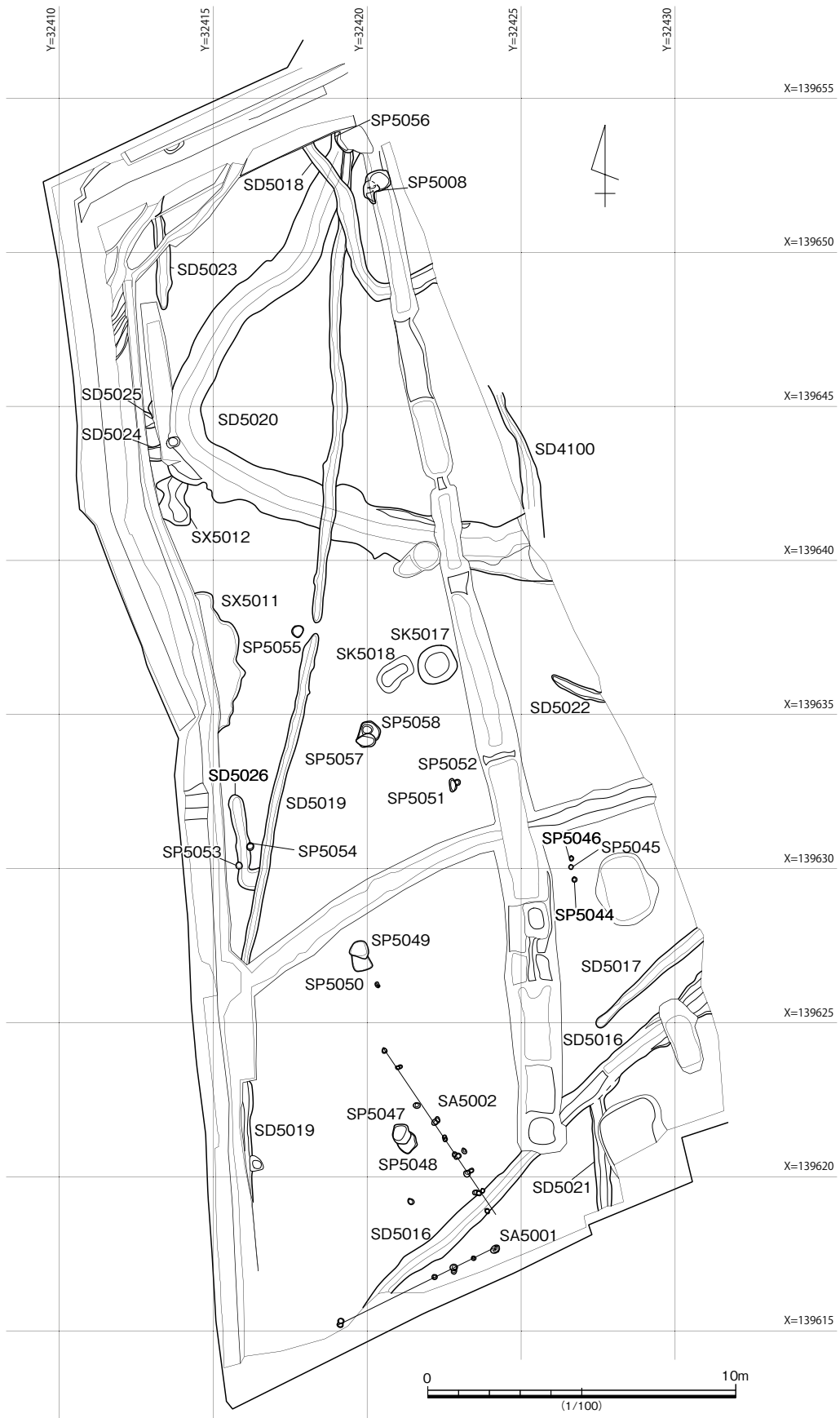
SP5051・SP5052 (第130図) 調査区中央部で検出された。2基が近接し切り合っている。周囲に建物を形成するような柱穴の組み合わせは見られない。

SP5053・SP5054 (第131・132図) 調査区中央部、西壁沿いで検出された。いずれも直径

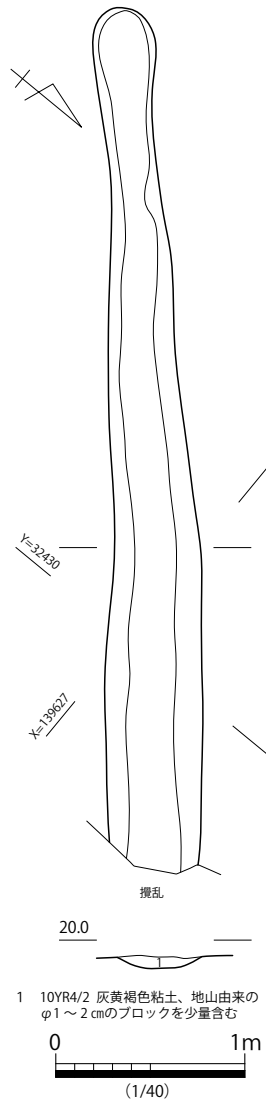


- 1 10Y6/1 灰色粗粒砂～中粒砂、水田上の砂層 (2b層)
- 2 N5/ 灰色粘土、水田の耕土 (3a層)
- 3 N4/ 灰色粘土 (3b層)

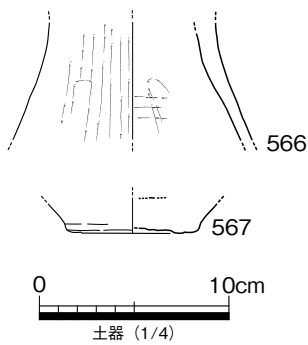
第113図 SZ5013 平・断面



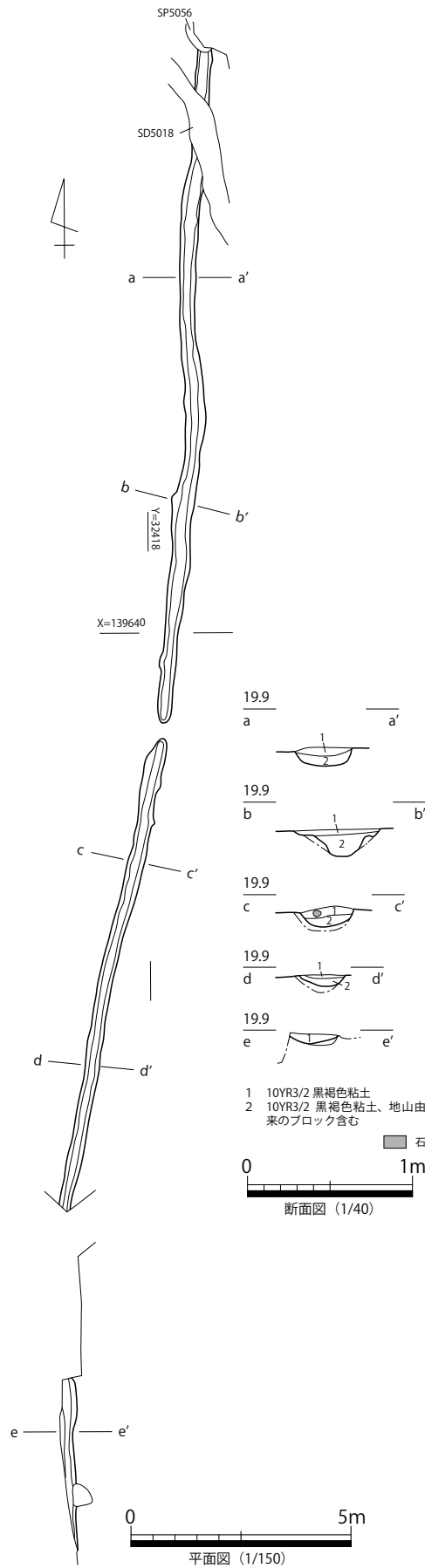
第114图 5区3面 平面



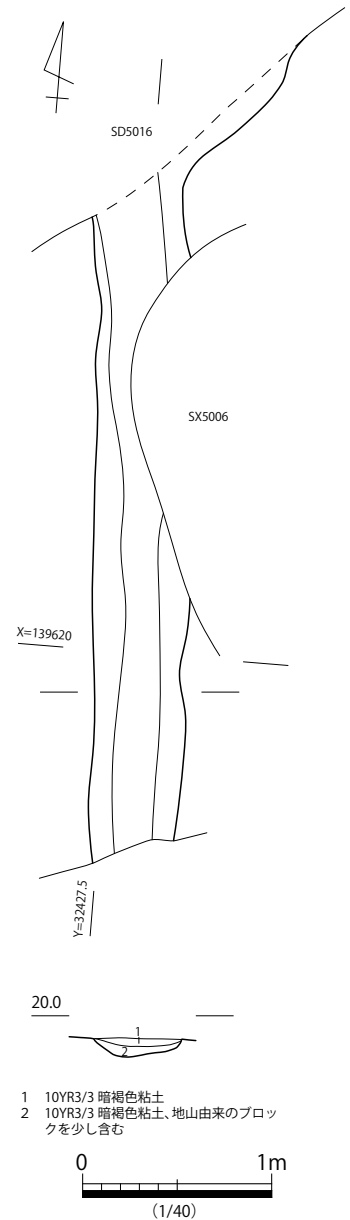
第115図 SD5017 平・断面



第116図 SD5020 出土遺物



第117図 SD5019 平・断面



第118図 SD5021 平・断面

0.2 mほどの小規模な柱穴である。

SP5055 (第 133 図) 調査区中央部で検出された。直径 0.36 m の浅い遺構である。

SP5057・SP5058 (第 134 図)

調査区中央部で検出された。長軸が 0.6 m 程の非常に浅い遺構が 2 基近接して切り合っている。

不明遺構

SX5011 (第 135 図) 調査区西壁沿いで検出された。平面形態は不整形であり、深度も浅い。出土遺物も僅少であり、時期を特定するに至らなかった。

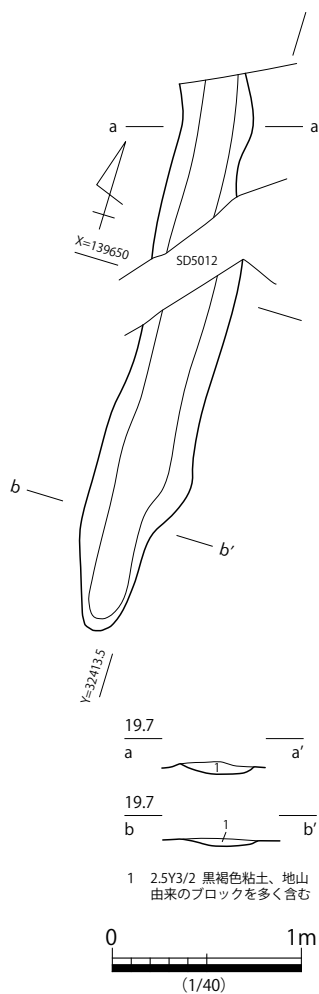
SX5012 (第 136 図) 調査区西壁沿いで検出された。SD5020 に切られる不整形な遺構である。遺物も見られず、深度も非常に浅い。

遺構外出土遺物

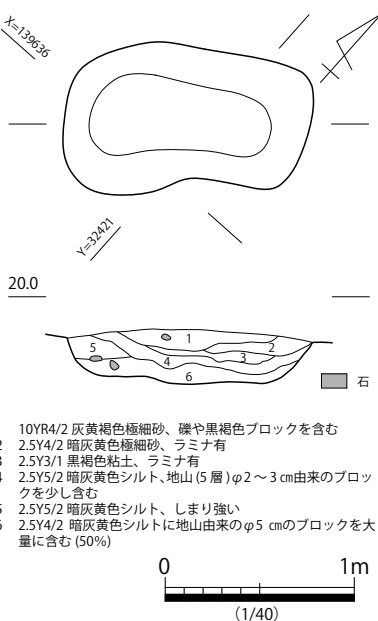
568 は土師器甕である。口縁部の破片であり、屈曲し垂直に立ち上がる。

569、570 は須恵器杯である。569 は口縁部が直線的に外方へ延びる。570 は底部のみヘラ切を行い、他は回転ナデを施す。口縁部が垂直に立ち上がる。

571 は須恵器蓋である。宝珠形のつまみを持つ、杯に伴う蓋である。572 は須恵器壺である。底部から垂直気味に体部が延びることから、長胴の壺の可能性が高い。

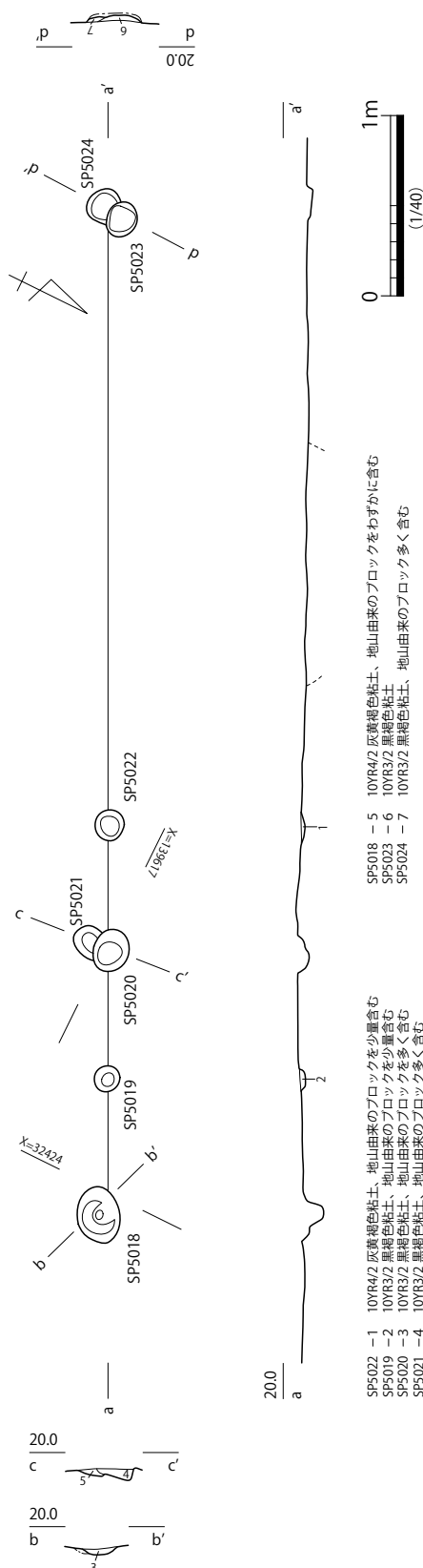


第 119 図 SD5023 平・断面



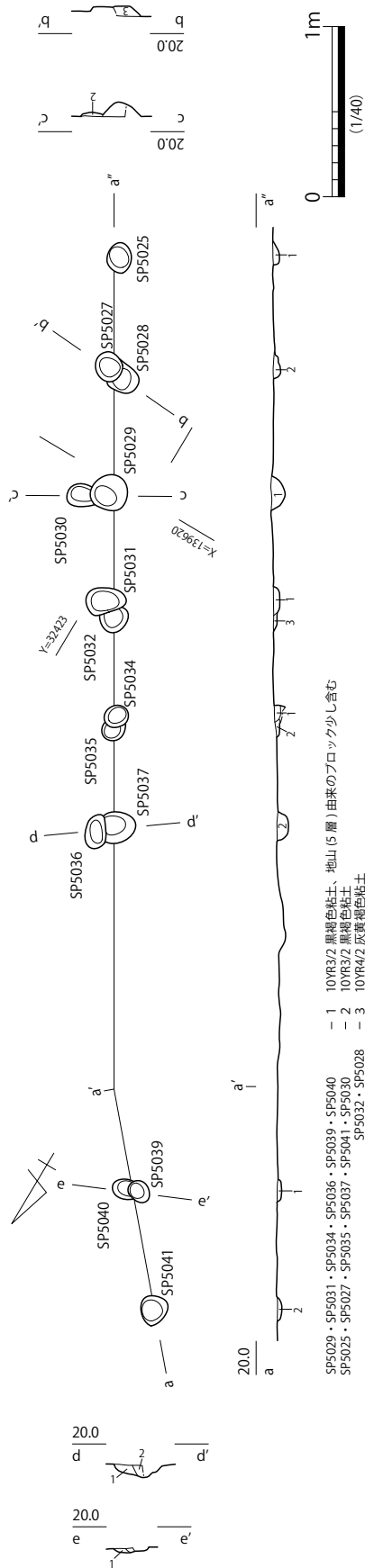
第 120 図 SK5018 平・断面

- 1 10YR4/2 灰黄褐色極細砂、礫や黒褐色ブロックを含む
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂、ラミナ有
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粘土、ラミナ有
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、地山(5層)φ2~3cm由来のブロックを少し含む
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、しまり強い
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトに地山由来のφ5cmのブロックを大量に含む(50%)

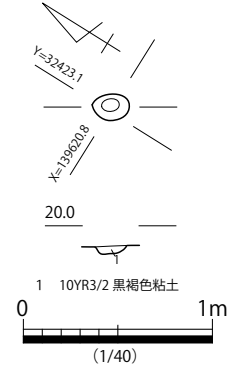


第 121 図 SA5001 平・断面

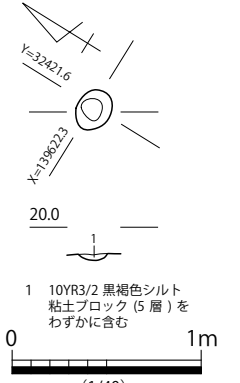
- SP5022 - 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土、地山由来のブロックを少量含む
- SP5019 - 2 10YR3/2 黒褐色粘土、地山由来のブロックを少量含む
- SP5020 - 3 10YR3/2 黒褐色粘土、地山由来のブロックを多く含む
- SP5021 - 4 10YR3/2 黒褐色粘土、地山由来のブロックを多く含む
- SP5018 - 5 10YR4/2 灰黄褐色粘土、地山由来のブロックを少量含む
- SP5023 - 6 10YR3/2 黒褐色粘土
- SP5024 - 7 10YR3/2 黒褐色粘土、地山由来のブロックを多く含む



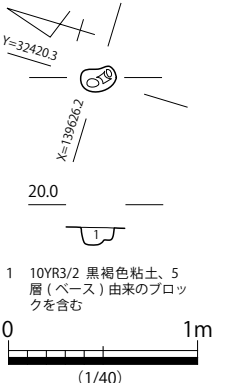
第122図 SA5002 平・断面



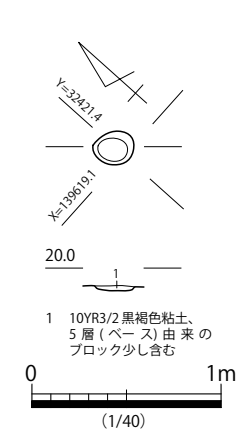
第123図 SP5033 平・断面



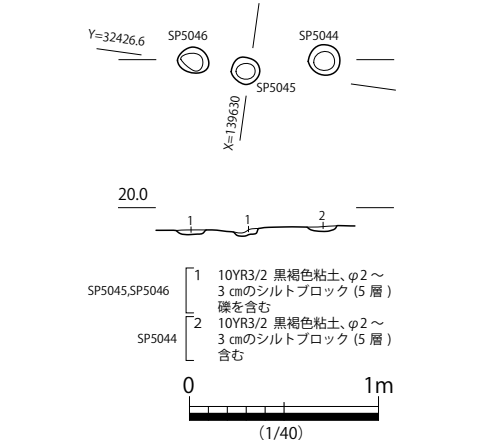
第124図 SP5038 平・断面



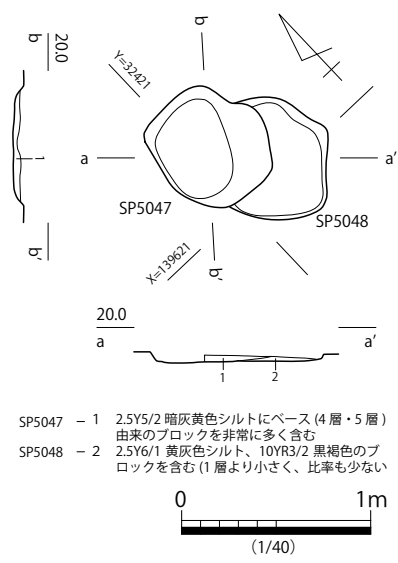
第125図 SP5042 平・断面



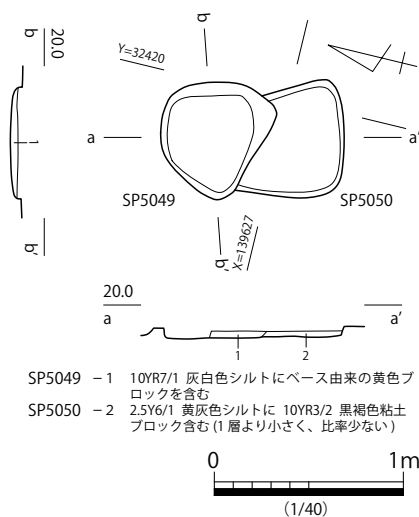
第126図 SP5043 平・断面



第127図 SP5044, SP5045, SP5046 平・断面

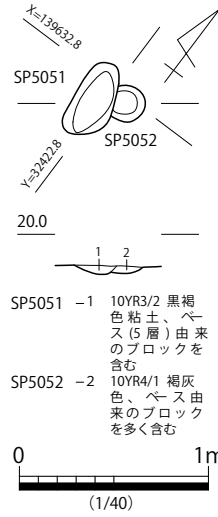


第128図 SP5047, SP5048 平・断面



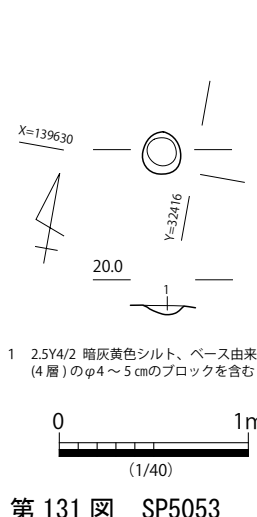
第129図 SP5049, SP5050
平・断面

SP5049 -1 10YR7/1 灰白色シルトにベース由来の黄色ブロックを含む
SP5050 -2 2.5Y6/1 黄灰色シルトに 10YR3/2 黒褐色粘土ブロック含む (1層より小さく、比率少ない)



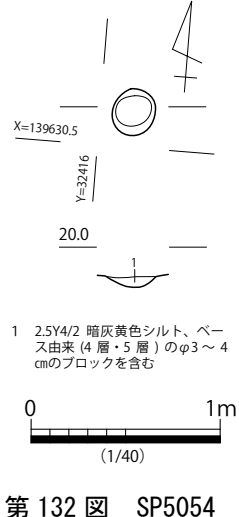
第130図 SP5051, SP5052
平・断面

SP5051 -1 10YR3/2 黒褐色粘土、ベース (5層) 由来のブロックを含む
SP5052 -2 10YR4/1 褐色、ベース由来のブロックを多く含む



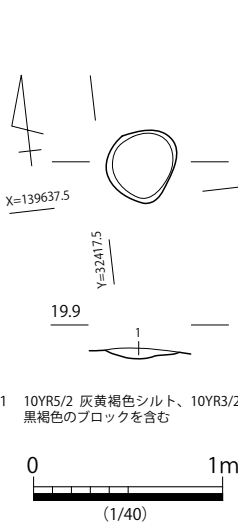
第131図 SP5053
平・断面

1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、ベース由来 (4層) のφ4~5 cmのブロックを含む



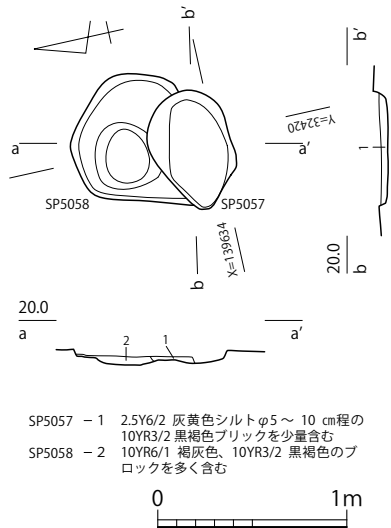
第132図 SP5054
平・断面

1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、ベース由来 (4層・5層) のφ3~4 cmのブロックを含む



第133図 SP5055 平・断面

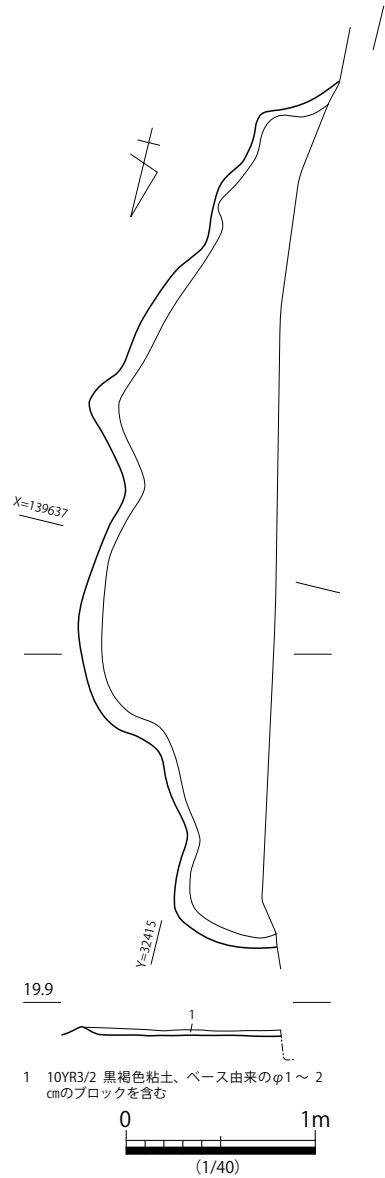
1 10YR5/2 灰黄褐色シルト、10YR3/2 黒褐色のブロックを含む



第134図 SP5057, SP5058 平・断面

SP5057 -1 2.5Y6/2 灰黄色シルトφ5~10 cm程の10YR3/2 黒褐色ブロックを少量含む
SP5058 -2 10YR6/1 褐色、10YR3/2 黒褐色のブロックを多く含む

573 は土師器杯である。外面下半にはユビオサエの痕跡が残り、内面には板ナデを施す。全体に半球形の形態を呈する。
574 は須恵器杯である。やや内湾する口縁部を持つ。口縁端部が少し外反する。
575 は土師質土器皿である。底部を回転ヘラ切りによって切り離し、突出させる。
576、577 は土師器椀である。576 は断面三角形の高台を貼り付ける。577 は断面方形の細い高台を貼り付ける。調整などは摩滅により不明である。
578 は土師器杯である。浅い杯に高台が取り付く形態のもので、高台はケズリ出しによって作り出す。



第135図 SX5011 平・断面

1 10YR3/2 黒褐色粘土、ベース由来のφ1~2 cmのブロックを含む

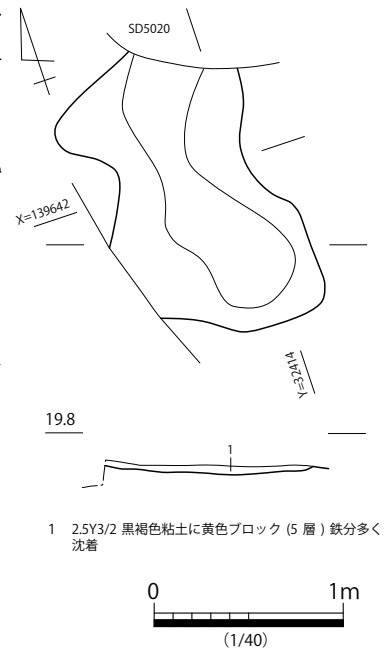
579、580は須恵器硯で、いずれも円面硯である。579は上部の破片であり、天井部が直線的でなく、中央へ少し高くなる形態を呈する。方形の透孔が確認できる。580は脚端部の破片であり、下方へ外反する形態を呈する。端部は下方につまみ出し、端面は面を持たせる。透孔が確認でき、詳細な形態は不明であるものの、楕円形の透孔が入ると考えられる。

581は須恵器鉢である。円盤状の底部に、グラス状の体部が取り付く。口縁端部は下方につまみ出し、面を持たせる。外面に凹線に挟まれた文様帯をもち、内部には列点文を施す。

582は須恵器甕である。外反する口縁部であり、端部を上方に摘み上げ、凹線状のへこみを持たせる。

583、584は丸瓦である。584は凸面にナデを施し、凹面には布目が残る。

585は角材である、摩滅により加工の痕跡は不明瞭である。



1 2.5Y3/2 黒褐色粘土に黄色ブロック(5層)鉄分多く沈着



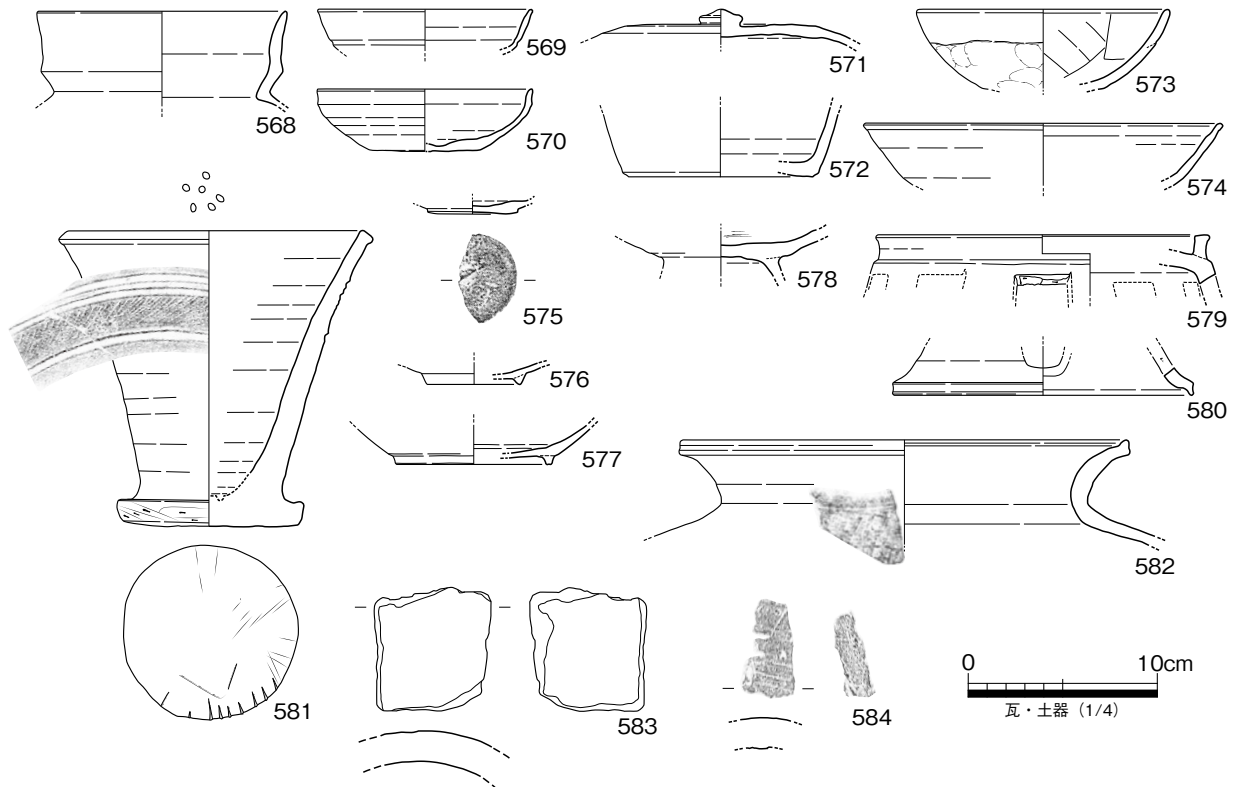
第136図 SX5012 平・断面

第5節 6区の調査成果

6区は、岸の上遺跡の中でも、最も北側の調査区となる。調査については、1面、3面において調査を行ったが、2面については、南側の調査区から土層の堆積状況を確認しても、2面を構成する層の堆積が認められない。また、調査区の北へ向かうにつれ、遺構面の標高がかなり下がり、低地に至る様子が確認できた。

【1面の遺構】(第139図)

(1) 近世の遺構



第137図 5区遺構外出土遺物

土坑

SK6001 調査区南隅で検出された土坑である。多量に遺物を含み、垂直に掘り込まれていることなどから、廃棄のための土坑であると考えられる。遺物の大半は近代以降のものであり、埋没時期についても近代以降のものであると考えられる。出土遺物の中で、近代以前のものについては第 140 図に示した。

586 は弥生土器壺である。細頸壺の口縁部であり、口縁端部がやや内湾気味となる。

587 は須恵器皿である。外面に火襷が残る。

588 は丸瓦である。玉縁の跡が確認できるため、端部の破片であろう。凸面の調整は不明であるが、凹面には布目が残る。古代の瓦である可能性が高い。

SK6002 (第 142 図) 調査区東側で検出された。東西方向に長い長楕円形の土坑である。出土遺物に、遺構の年代を決めるような遺物は見られない。

SK6003 調査区南端で検出された。楕円形の平面形態を持ち、深度は浅い。地境の付近に掘削されていることや、平面形態の特徴から近世の廃棄土坑であると判断した。出土遺物は第 143 図に示した。

589 は平瓦である。凸面には縄叩きの痕跡が確認できる。凹面については、摩滅しているため詳細は不明である。

SK6004 調査区南端で検出された。SK6003 に切られる土坑である。出土遺物は第 144 図に示した。

590 は須恵器杯である。口縁端部が下方に折れ曲がる。

(2) 中世の遺構

溝

SD6004 調査区西側で検出された。複数の遺構に切られており、その全長や幅がわかる部分では、幅 1.2 m を測る。出土遺物は第 145 図に示した。

591、594 は土師器椀である。断面台形の細い高台が取り付け、端部が外方に折れ曲がる。594 は断面台形の高台を貼り付ける。端部に段をもたせ、高台が踏ん張る形態を呈する。

592 は須恵器杯である。底部はへら切りによって切り離す。

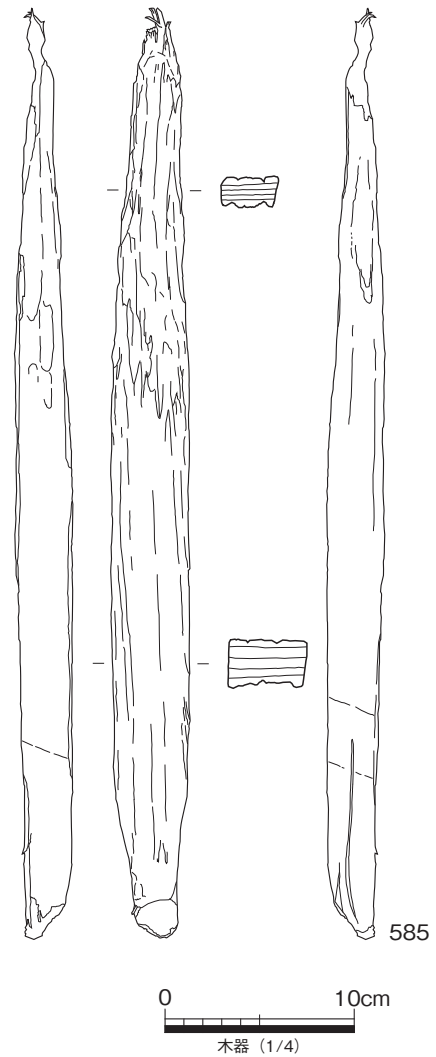
593、595 は土師質土器杯である。593 は底部を回転へら切りによって切り離す。595 は器壁が薄く、大きく外反する口縁部を持つ。

596 は土師質土器皿である。口縁部が直線的に大きく開き、浅い皿に外方に開く高台を持つ。

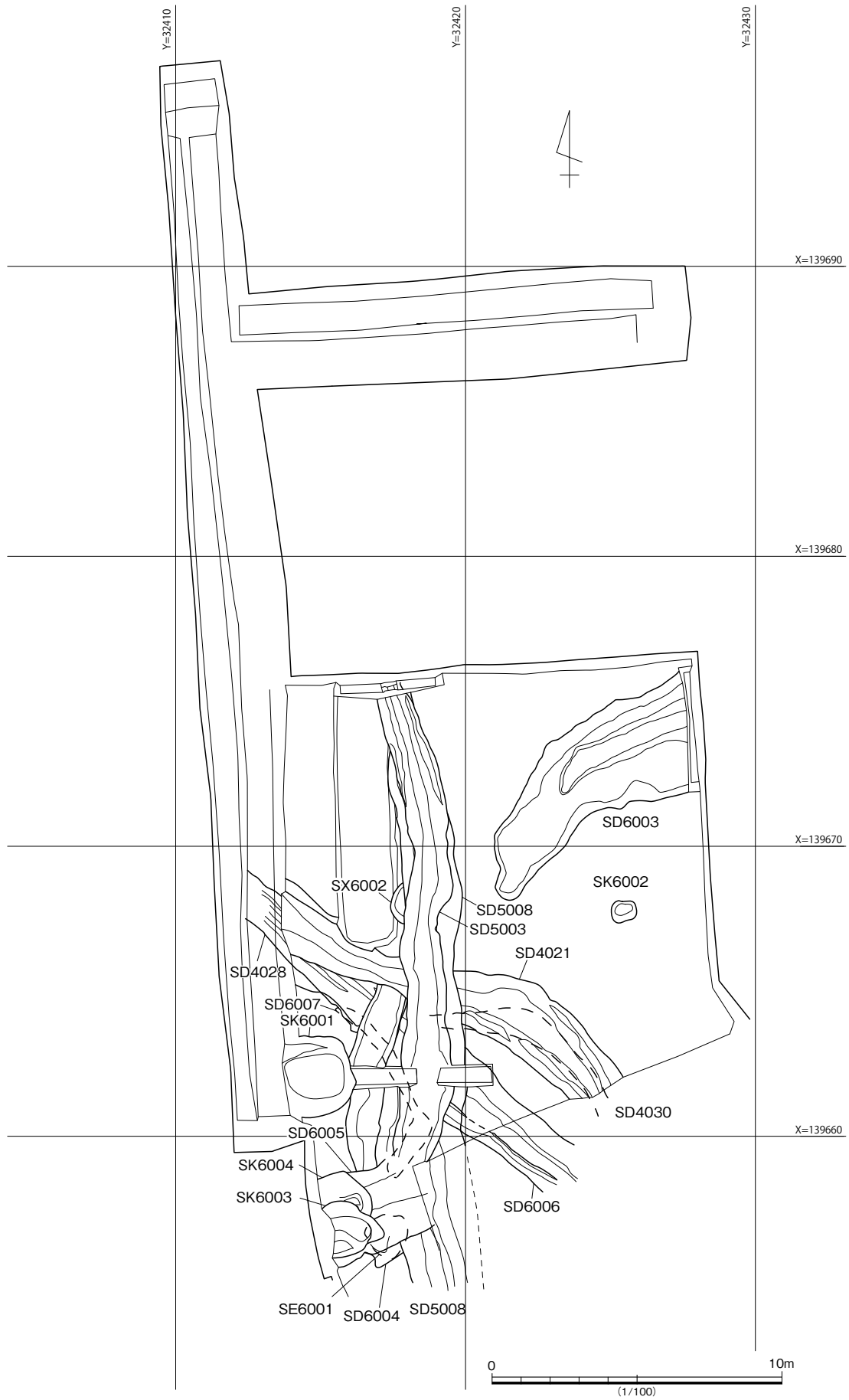
597 は陶器皿である。

598 は須恵器壺である。底部の破片であり、ケズリにより低い高台を作り出す。外面には格子叩きの痕跡が残る。

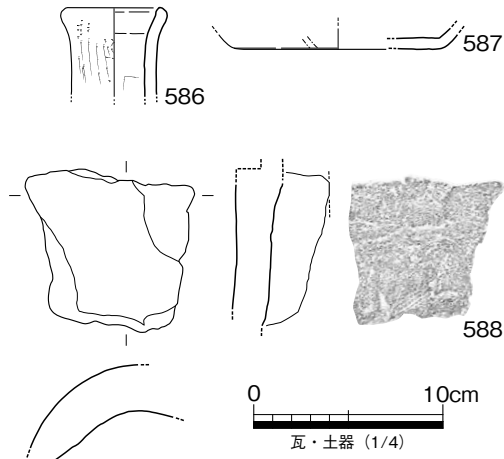
599、601 は須恵器甕である。599 は口縁部、601 は頸部から体部の破片である。599 は口縁端部



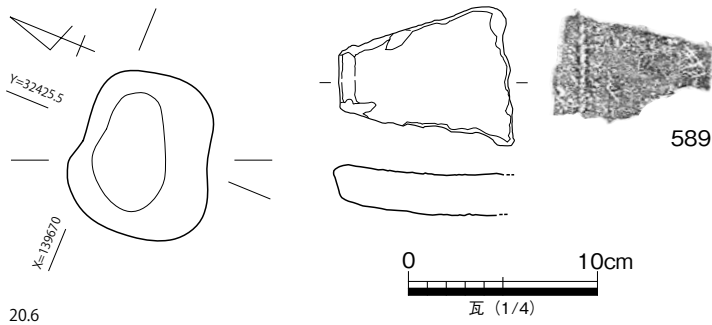
第 138 図 5 区遺構外出土木器



第139図 6区1面 平面

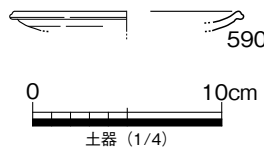


第140図 SK6001 出土遺物



第143図 SK6003 出土遺物

- 1 10YR5/2 灰黄褐色極細砂に 10YR4/4 褐色の極細砂を粒状に含む
- 2 10YR5/2 灰黄褐色極細砂に 10YR4/6 褐色の極細砂、ベース (5 層) 由来の黄色ブロックを少量含む、φ10 cm以上の礫を含む



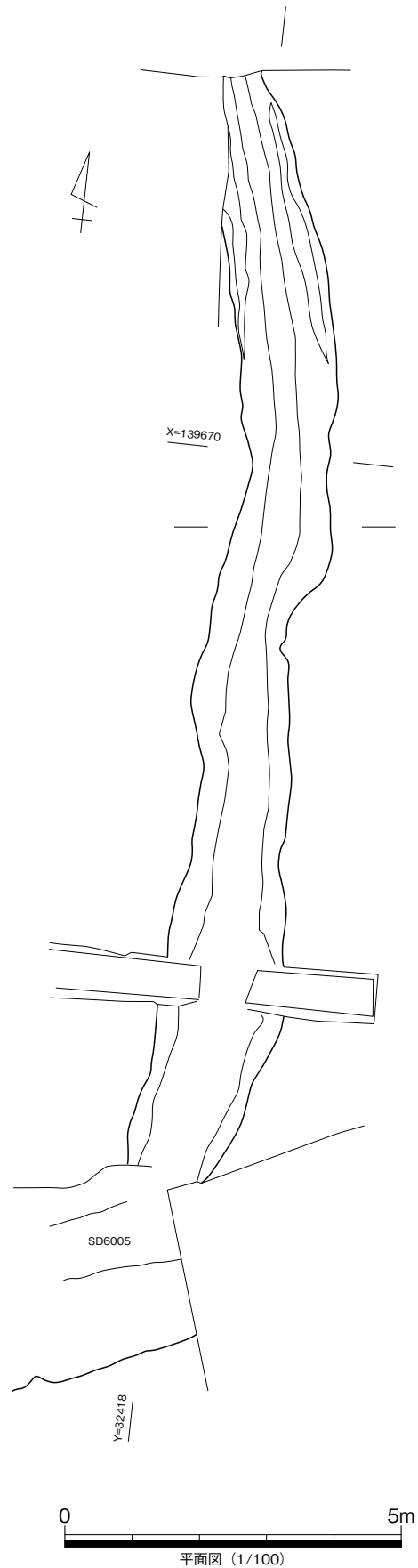
第142図 SK6002 平・断面 第144図 SK6004 出土遺物

が、上方に突出する。端部下端にはナデにより、段を形成する。601 は外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す。600 は土師器竈である。側面の破片であり、端部を拡張している。

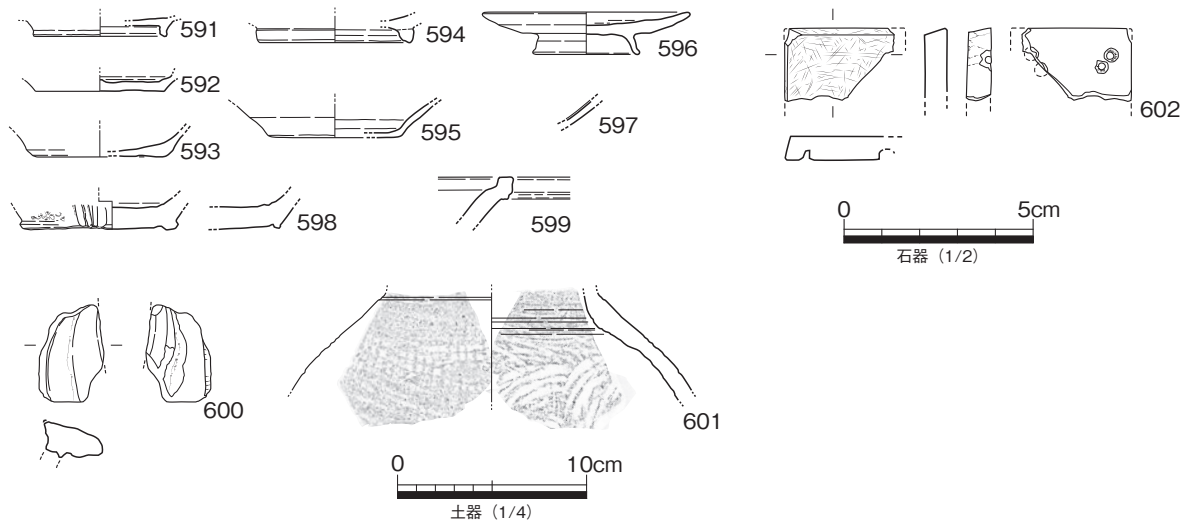
602 は石帯である。本来は方形であり、片方の面には穿孔が四隅に2箇所確認できる。表面には細かい擦痕が確認できる。

SD6005 調査区南西隅で検出された。かつて地境があった方向と同方向に流れる。近世の廃棄土坑に切られているが、中世段階の遺物なども埋土に含まないことから、中～近世の遺構と評価しておく。

603～605については、SD6005、SD6006、SK6004のいずれか



第141図 SD5003 平・断面



第 145 図 SD6004 出土遺物

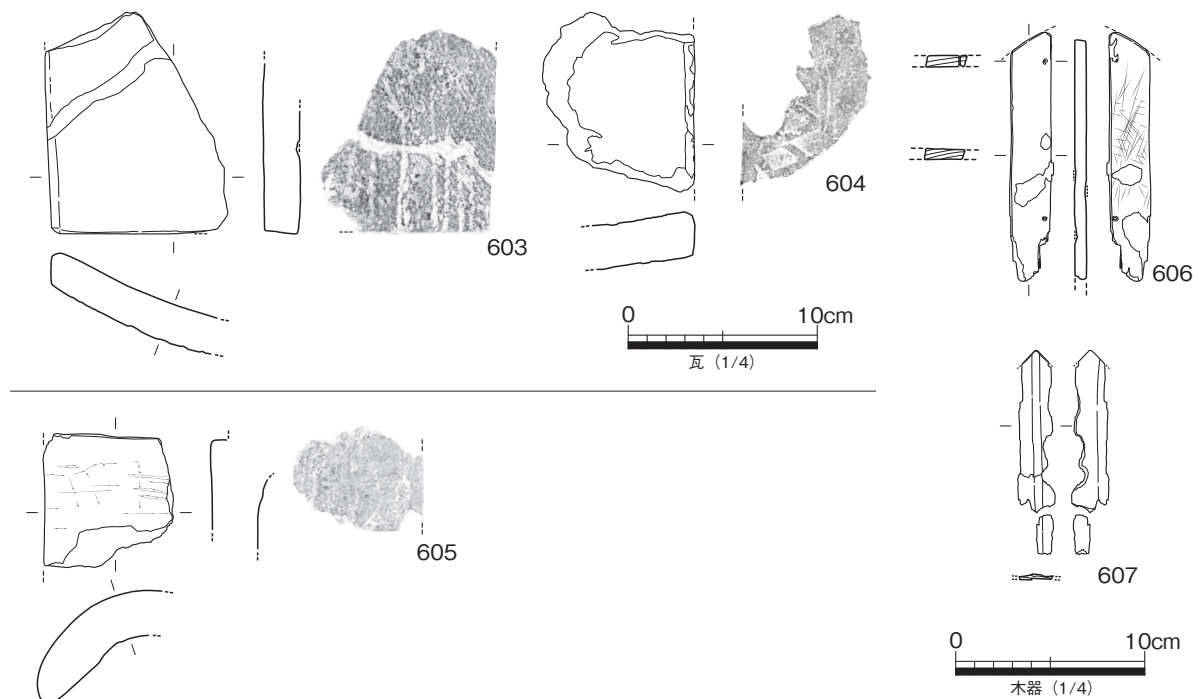
に属する遺物である（第 146 図）。正確にどの遺構に帰属するかについては不明であるが、いずれも本来の遺構の年代よりさかのぼる古代の遺物であるため、一括して取り扱う。

603、604 は平瓦である。603 は凸面に斜め方向の縄叩きを施す。凹面の調整および側面の調整は不明であるが、端面はケズリの痕跡が確認できる。604 は凸面に格子叩きを施す。凹面の調整は不明である。側面についても、摩滅により調整は不明である。

605 は丸瓦である。玉縁との境界付近の破片であり、凸面にはナデを施し、凹面には布目が残る。側面については、明瞭な面などを作らないが、ナデを施す。

SD6004 から確実に出土したと考えられる遺物については、中世前半の遺物が目立つ。このほか、古代の遺物も一定量みられる。

SD6006 調査区南端付近で検出された。4 区から延びる SD4028 の埋没中に掘削されている溝である。



第 146 図 SD6005・SD6006・SK6004 出土遺物

第 147 図 SD6006 出土木器

出土遺物を第 147 図に示した。

606 は木製曲物である。底板の破片であり、全体的に摩滅している。明瞭な加工痕は見えないが、片面にのみ刃物による線状痕が認められる。2カ所の穿孔が確認できる。

607 は木製齋串である。頂部は山型に切り落とされている。全体的に摩滅しており、上部端面のみ加工する。表裏面とも割面の状態である。

SD6007 調査区南

側で検出された。SD4028 の掘削中に検出された溝状の遺構である。明瞭に検出・掘削できていないが、おそらく SD4028 中層堆積後に掘削されたものであると考えられる。出土遺物は第 148 図に示した。

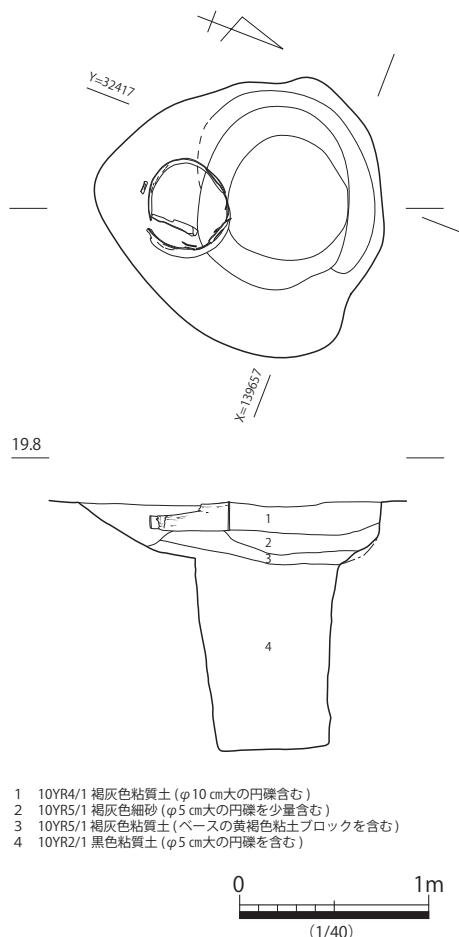
608 は木製杭である。樹皮が残る部分が多く、先端のみ加工の痕跡が確認できる。

井戸

SE6001 (第 149 図) 調査区南端で検出された。現状の地割の直下に位置する。検出時は最大径 1.52 m ほどであるが、0.3 m ほど掘り下げをしたのちに、0.8 m ほどの井筒を据えていた掘方が確認できる。

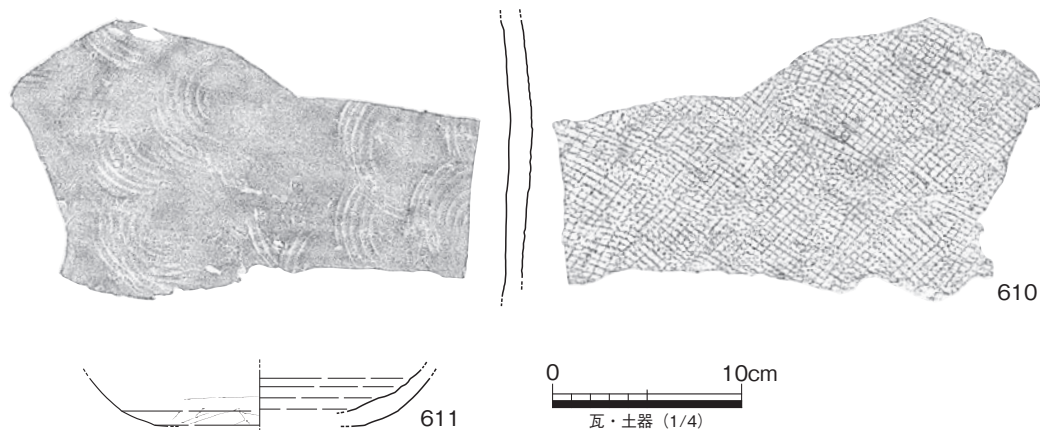


第 148 図 SD6007 出土木器

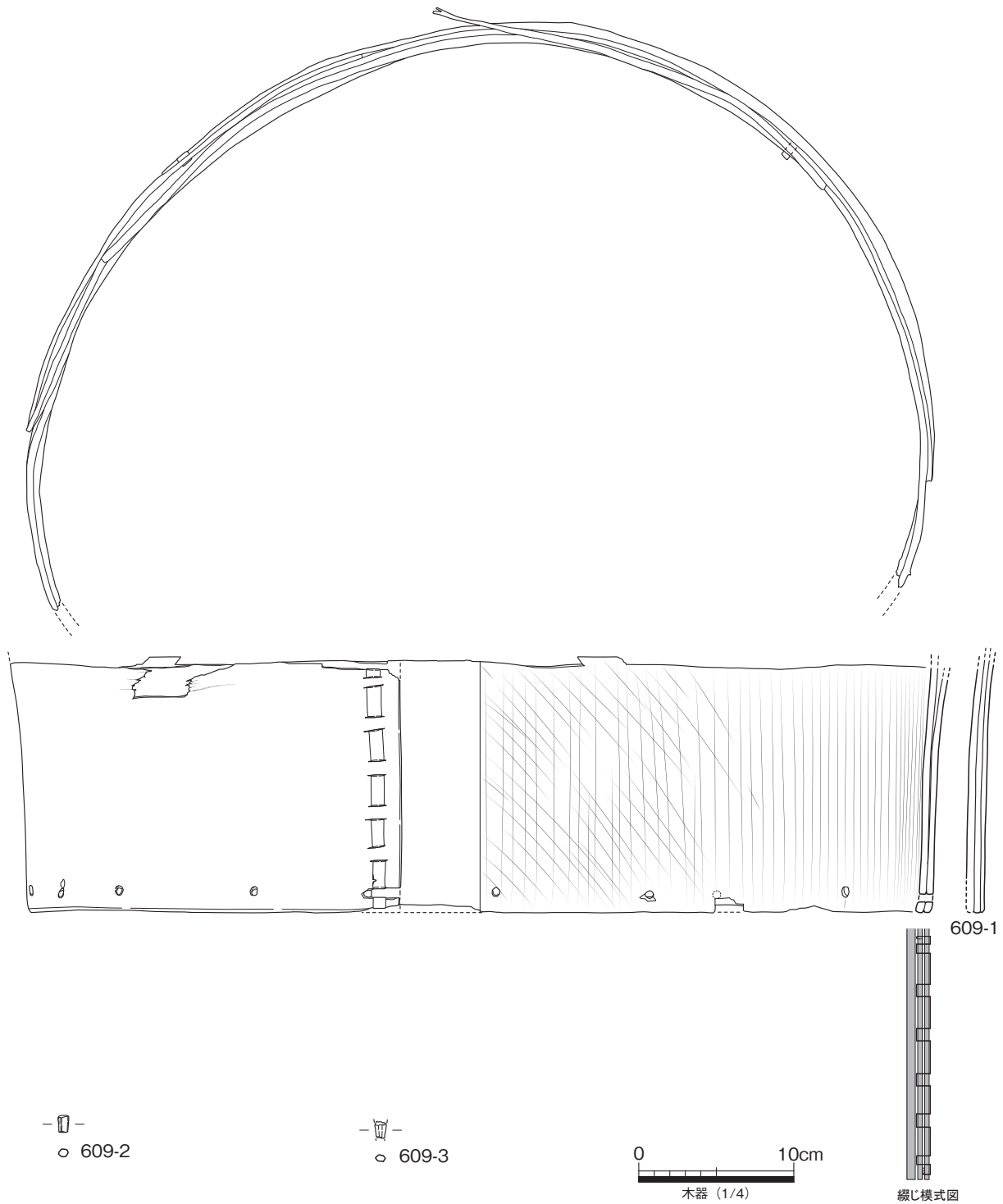


- 1 10YR4/1 褐灰色粘質土 (φ10 cm 大の円礫含む)
- 2 10YR5/1 褐灰色細砂 (φ5 cm 大の円礫を少量含む)
- 3 10YR5/1 褐灰色粘質土 (ベースの黄褐色粘土ブロックを含む)
- 4 10YR2/1 黒色粘質土 (φ5 cm 大の円礫を含む)

第 149 図 SE6001 平・断面



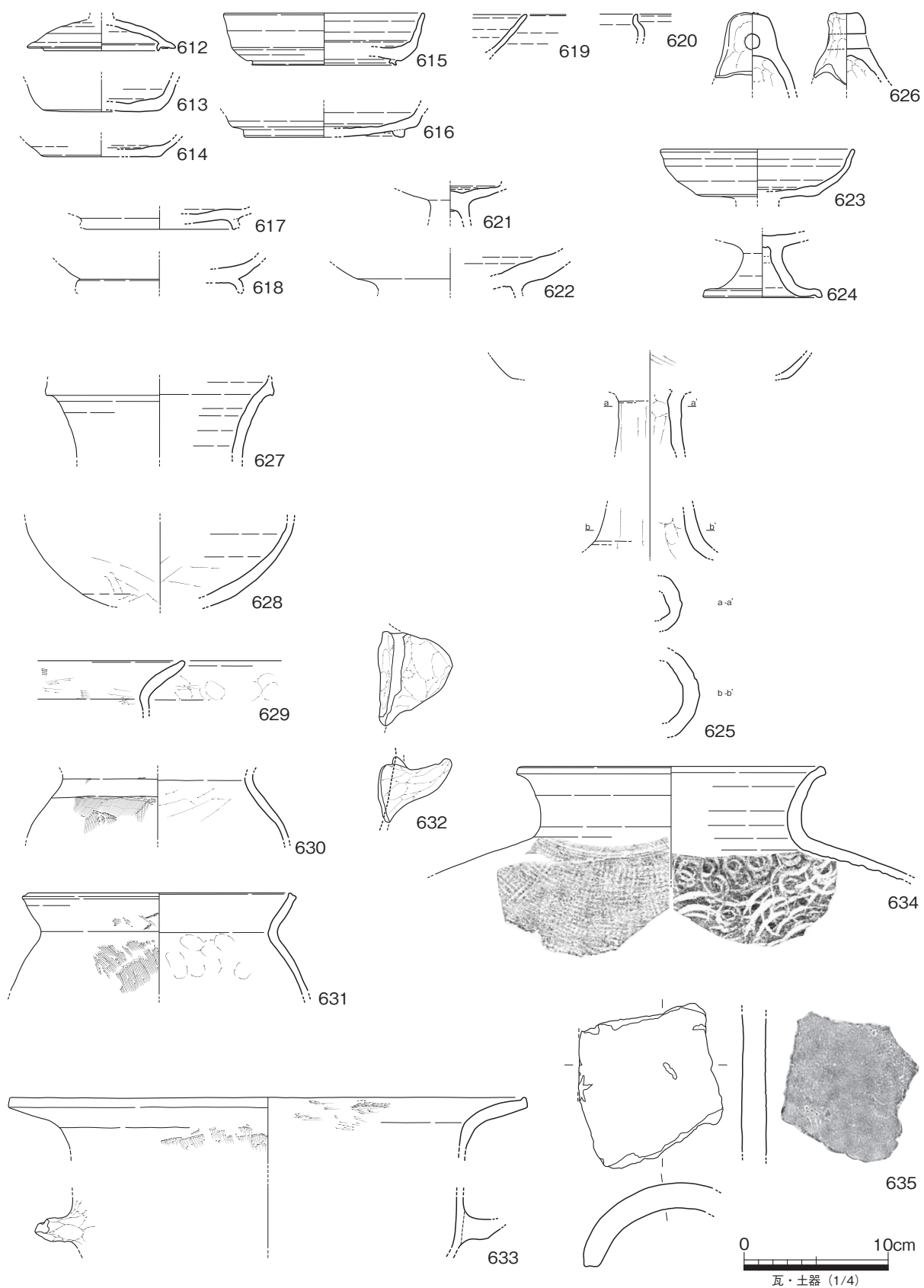
第 150 図 SE6001 出土遺物



第151図 SE6001 出土木器

本来の位置の井戸本体の痕跡は確認できなかったが、検出面において、曲物が置かれている状態が確認できた。本来の井戸の堀方と対応しておらず、井戸側の据え直しの可能性が考えられる。井戸側は第151図、それ以外の出土遺物は第150図に示した。

609は木製曲物である。遺構内に据え置かれており、井戸側として利用されていたものであろう。上部が欠損しており、本来の高さは不明であるが、綴じの痕跡からは本来の形態に近いものと考えられる。内面には、垂直および左上がりのけびき痕が残る。底板固定用の目釘が1点側板にあり、2点側板から



第 152 图 SD6003 出土遺物

遊離した目釘がある（609-2、609-3）。内板・内面炭化処理を行う。
610は亀山焼甕である。外面には格子叩きを施し、内面には同心円状の当て具痕を残す。

611は須恵器鉢である。底部のみ残存し、法量や形態から、鉢である可能性が高い。

出土遺物の特徴からは、中世前半に機能していたものであると考えられる。

(3) 古代の遺構

SD6003 調査区北東部で検出された。やや湾曲しながら北東方向に流下する溝である。深度は浅く、溝の南部についても丸く収まるものであるが、遺物を比較的多く含む。出土遺物は第152図に示した。612は須恵器蓋である。口縁部にかえりを持ち、欠損しているが宝珠形のつまみを持つ。

613～618は須恵器杯である。613、614は須恵器杯であるが、613は口縁部までの立ち上がりが高く、614は大きく開く。いずれも底部はヘラ切りによって切り離されている。615～618は高台を持つ杯Bであり、口縁部が垂直気味に立ち上がる。616は高台の作りがやや粗雑である。617、618は外方に踏ん張る高台を持つ。

619は須恵器杯の可能性が高い。口縁部内外面にヨコナデの痕跡を残す。

620は須恵器壺である。短頸壺であり、短く口縁部が垂直に立ち上がる。

621は須恵器高杯である。622は須恵器壺である。細い高台が取り付く。623、624は須恵器高杯である。低脚の高杯であり623は口縁部が直線的に伸びる。624は脚端部を下方につまみ出し、端部に面を持たせる。

627、628は須恵器壺である。627は口縁端部を上方に摘み上げる。628は丸底の底部である。

629～631は土師器甕である。いずれも球形の胴部に、屈曲し直線的に伸びる口縁部が取り付くものである。629は口縁端部を丸くおさめる。630は胴部のみであるが、外面に縦方向のハケを施す。631は口縁端部を上方につまみ上げ、端部にナデにより凹線を作る。

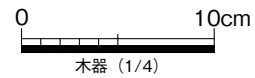
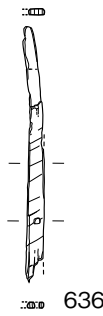
632、633は土師器鍋である。632は把手部分の破片である。633は接点がないものの口縁部と把手を持つ胴部の破片であり、口縁部が大きく外反し、端部を上方につまみ上げる。

634は須恵器甕である。口縁部が外反する。外面に格子叩き、内面は同心円状の当て具痕が残る。

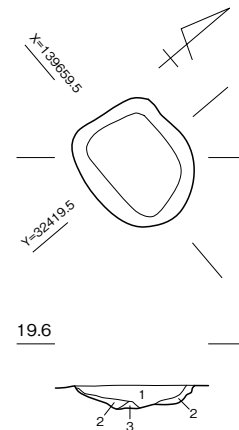
635は丸瓦である。凸面の調整は摩滅により不明である。凹面には布目を残す。

SD6003の出土遺物については、7世紀段階のものを含むが、須恵器杯の型式などを考えると、8世紀前半の埋没が想定される。

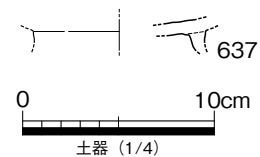
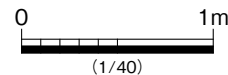
SD6008 調査区南部で検出された。北東方向に向かって流れる溝である。流れの方向が、後述する通り



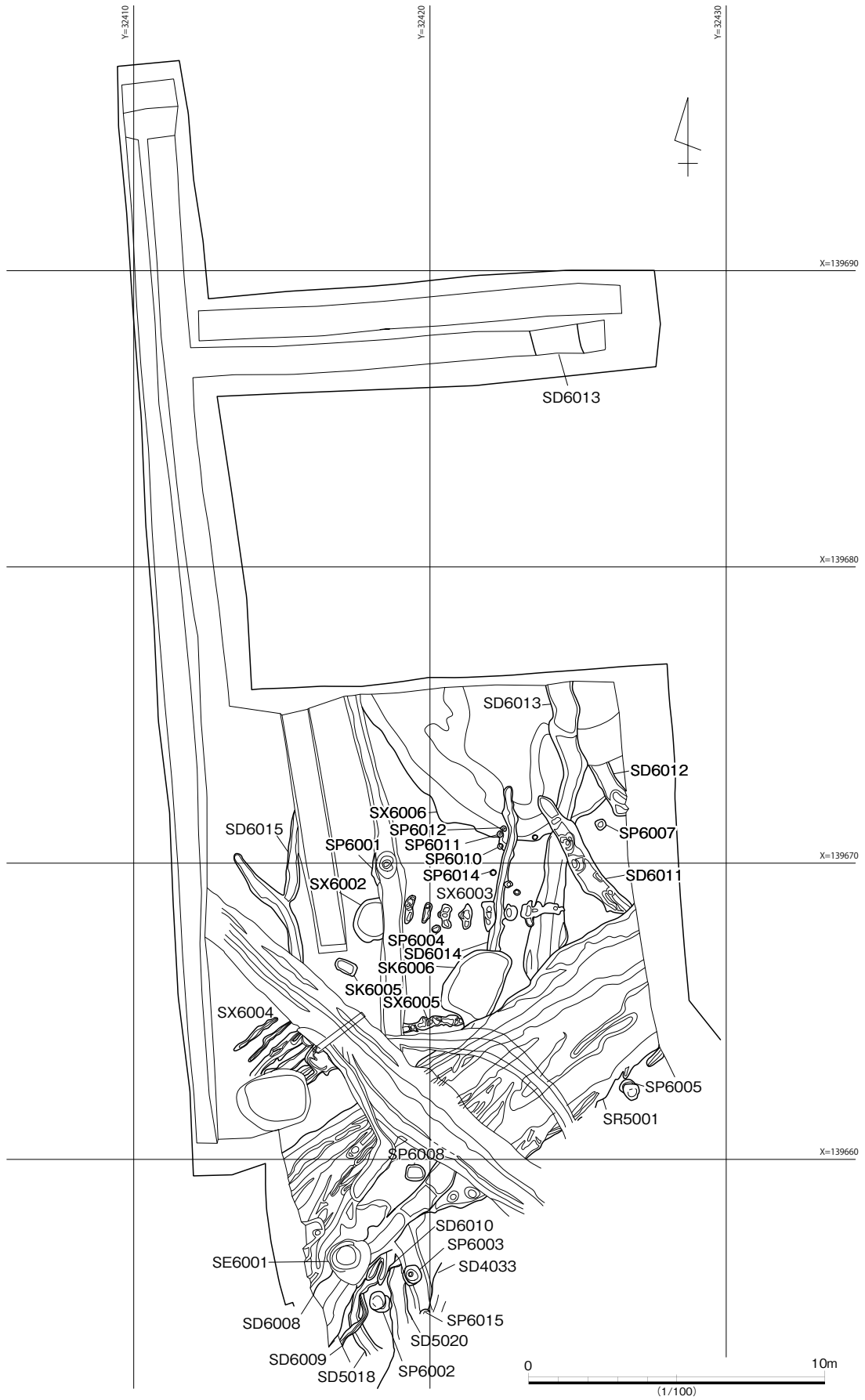
第153図 SD6008 出土木器



- 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト(φ3～10 cm大の礫含む)
- 2 5YR5/1 褐灰色細砂
- 3 7.5YR8/4 浅黄褐色シルト



第154図 SP6008 平・断面



第 155 图 6 区 3 面 平面

自然流路と同様であること、SD4028 に切られることから古墳時代後期～奈良時代前半の埋没が考えられる。出土遺物は第153図に記した。636は木製曲物である。側板の破片であり、けびき痕が片面に確認できるほか、穿孔が一カ所確認できる。

柱穴

SP6008 (第154図) 調査区南側で検出された。流路であるSR5001の埋没後に掘られていることは確実である。直径0.6mほどで、深さは0.1mほどである。出土遺物は第154図に示した。

637は土師器碗である。おそらく断面台形の高台が貼り付けられ、外方に広がる。出土遺物からは、中世前半の埋没が考えられるが、その場合の1面からの掘り込みの深さを考えると、おそらくは3面に属する遺構であり、637は混入と判断した。

【3面の遺構】(第155図)

(1) 弥生時代の遺構

溝

SD6011 (第156図) 調査区北側で検出された。北西方向に延びる溝である。底面は所々土坑状にへこみ、埋土にはシルトブロックを含む。遺物の出土はほとんどなく、年代を決定することが困難であるが、埋土の特徴から、弥生時代の遺構であると考えられる。

SD6013 (第157図) 調査区北東部で検出された。やや蛇行しながらもほぼ北へ向かって流れる。6区の北側で東西方向にトレンチ状に開けた調査区においても、溝の続きが確認されている。出土遺物は、第157図に示した。

638は打製石包丁である。両端に抉りが施されるが、片側が欠損している。

出土遺物の特徴、溝の埋土の特徴から、弥生時代、特に弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

SD6014 (第158図) 調査区の中央部で検出された。ほぼ南北に伸びており、幅0.4m、深さは0.1mほどの小規模な溝である。遺物もほとんど含まないため、年代は不明である。

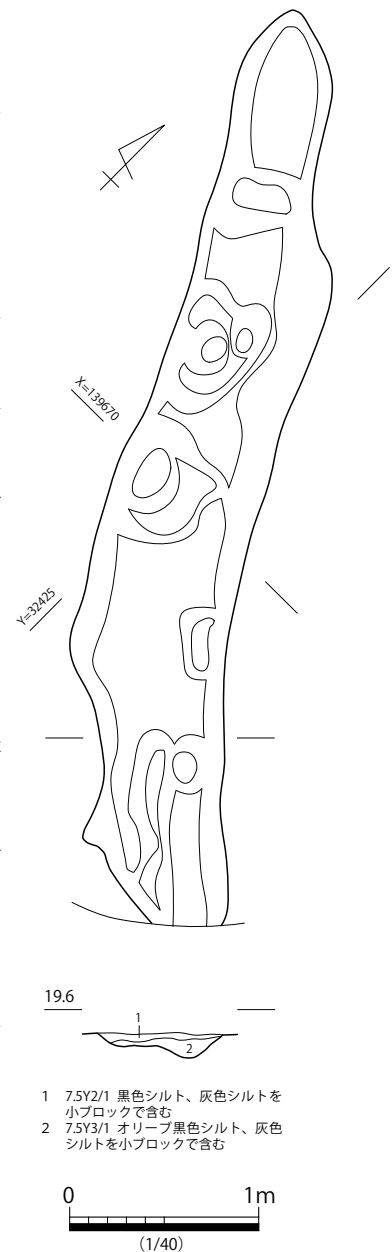
SD6015 (第159図) 調査区西側で検出された。南北方向に延び、途中で2方向に分岐する溝である。出土遺物などの、年代を示す資料はないため、遺構の年代については不明である。

土坑

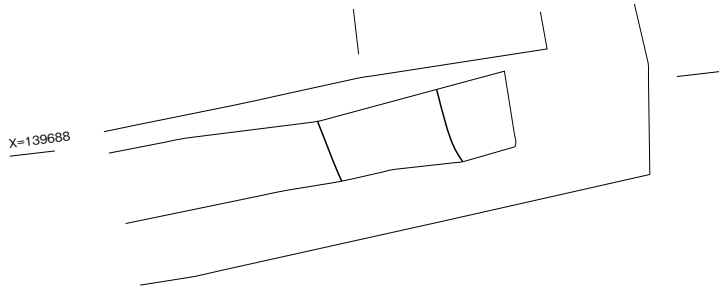
SK6005 (第160図) 調査区西側で検出された。平面形態は長楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。埋土に炭化物などを含むが、時期を表すような遺物を含まないため、遺構の年代は不明である。

SK6006 (第161図) 調査区中央で検出された。長楕円形を呈する土坑である。掘り込みは逆台形状を呈し、底面は平坦になる。埋土にブロック土などを含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられるが、時期を表すような遺物の出土はなく、遺構の年代は不明である。

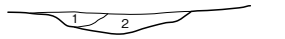
SP6001 (第162図) 調査区中央部で検出された。その大半をSD5008に切られているた



第156図 SD6011 平・断面



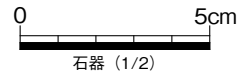
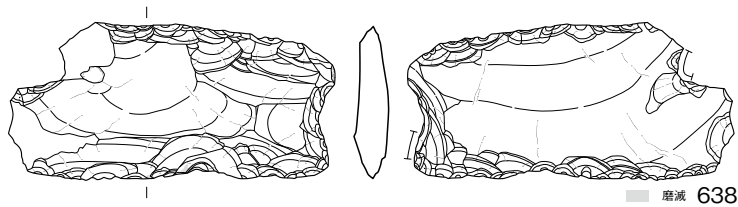
19.6



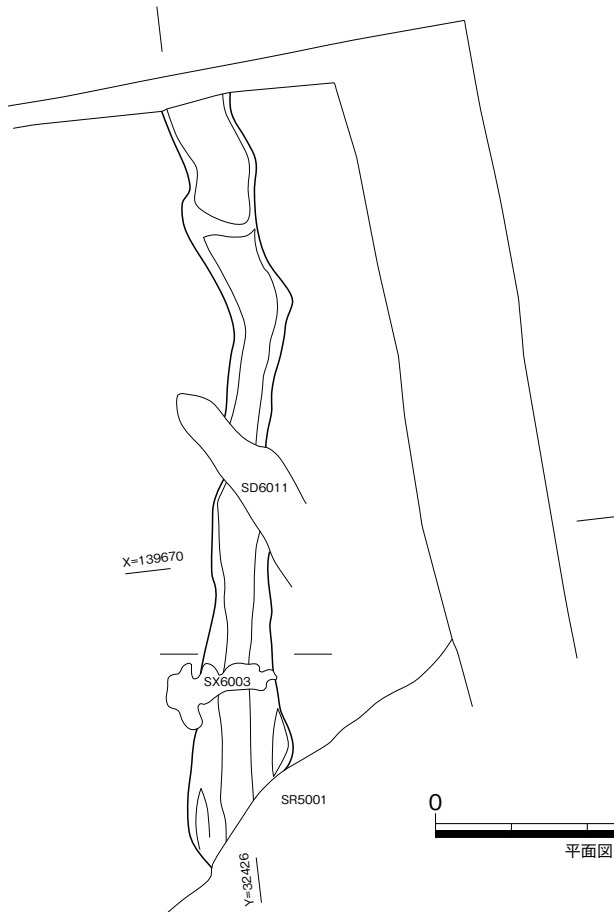
- 1 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト、灰色シルトを小ブロックで少量含む
- 2 7.5Y4/1 灰色シルト



断面図 (1/40)

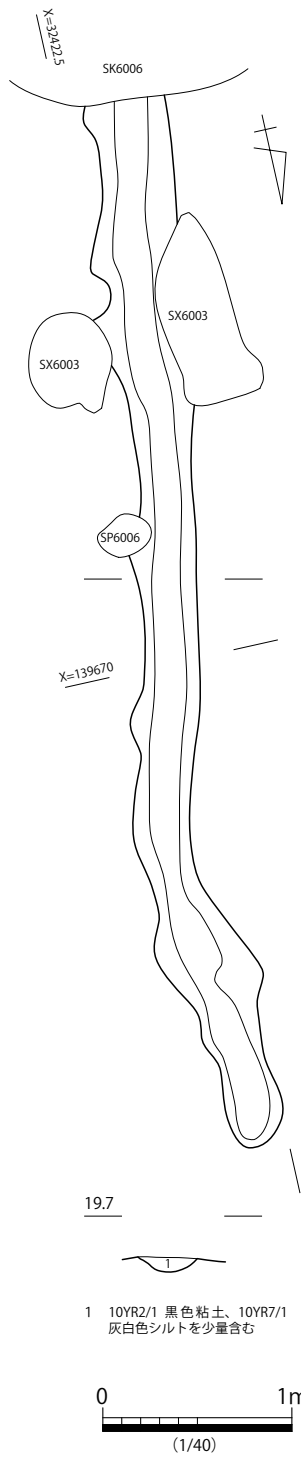


石器 (1/2)

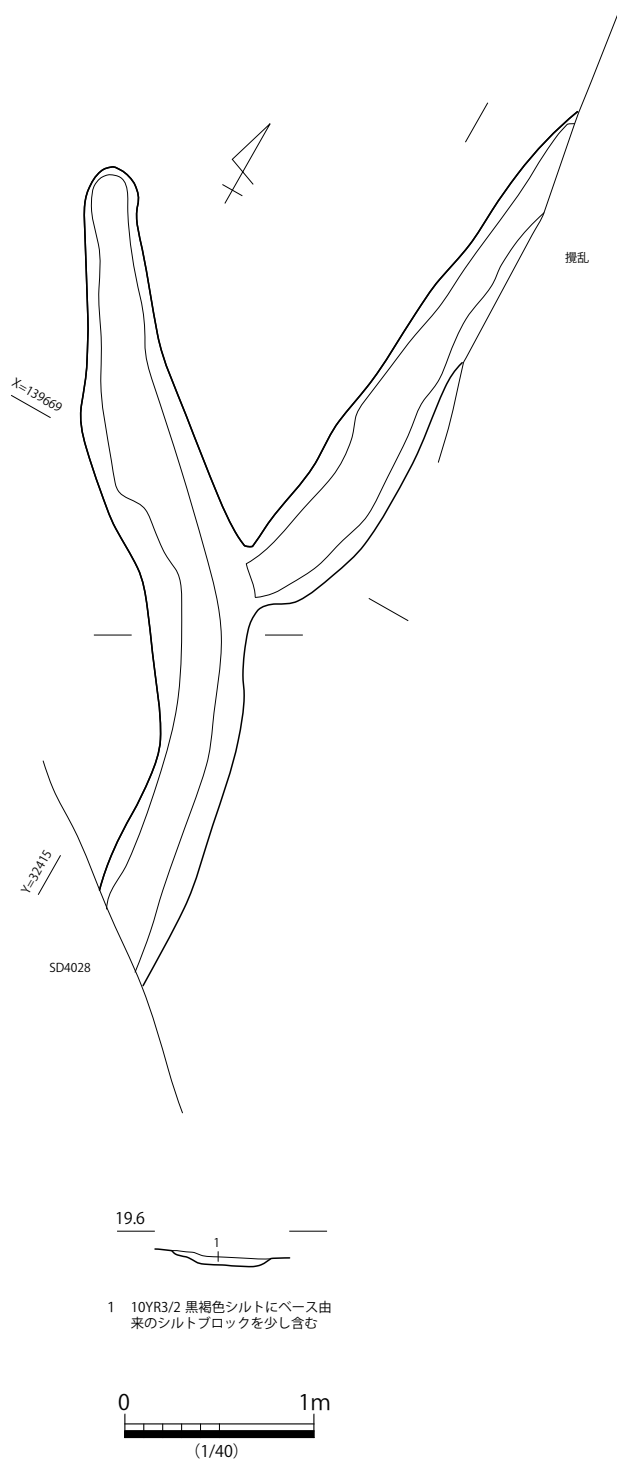


平面図 (1/100)

第 157 図 SD6013 平・断面



第158図 SD6014 平・断面



第159図 SD6015 平・断面

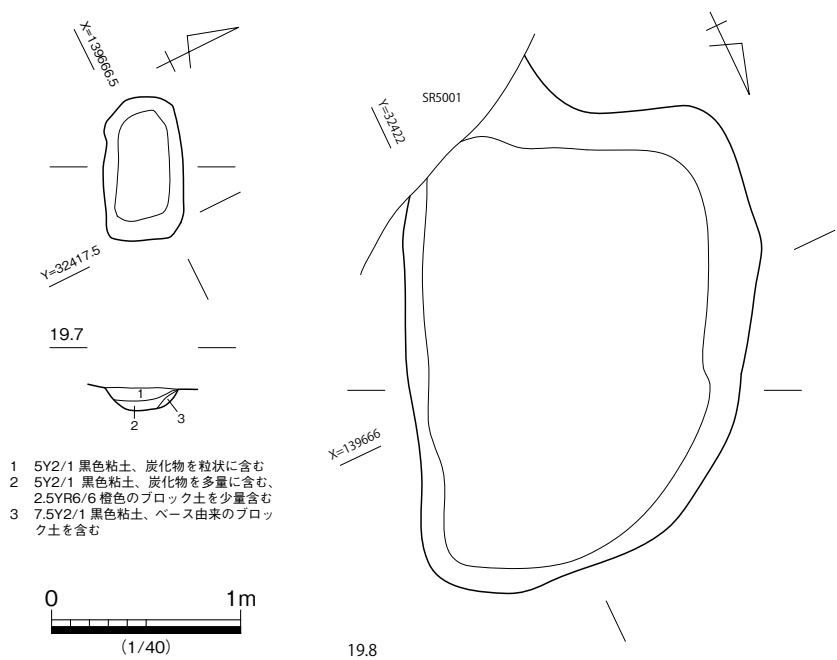
め、詳細は不明である。

SP6007 (第163図) 調査区北東部で検出された。やや角ばった平面形態を持つ。周囲に建物を構成するような柱穴はない。

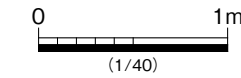
不明遺構

SX6002 (第164図) 調査区北部で検出された。楕円形の平面形態を持ち、深さは0.1mほどであり、底面は平坦である。

SX6003 (第165図) 調査区中央部からやや北で検出された。ほぼ東西方向に、南北に長い不整形の遺構が並ぶ。いわゆる波板状圧痕と呼ばれる。道路遺構の痕跡かと考えられたが、それぞれの遺構の埋土を観察すると、地盤沈下防止のための礫等はほとんど含まれておらず、道路状遺構とは考え難い。性格不明の遺構である。遺物もほとんど出土しない。



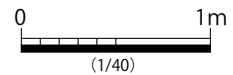
- 1 5Y2/1 黒色粘土、炭化物を粒状に含む
- 2 5Y2/1 黒色粘土、炭化物を多量に含む、2.5YR6/6 橙色のブロック土を少量含む
- 3 7.5Y2/1 黒色粘土、ベース由来のブロック土を含む



第160図 SK6005
平・断面

SX6004 (第166図) 調査区西側で検出された。1面のSD4028と同じ方向で、横長の遺構が並んでいる。こちらの遺構については、埋土に少量ではあるが礫を含み、道路状遺構の可能性もあるが、それぞれの深度が極めて浅いことや、遺構の長軸が、南を流れる流路であるSR5001に並行することからも、それらに関連する溝状の遺構である可能性もあり、詳細は不明である。

- 1 10YR2/2 黒褐色シルトφ1~2cmの灰色シルトブロックを含む
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトにベース由来のシルトブロックを多量に含む



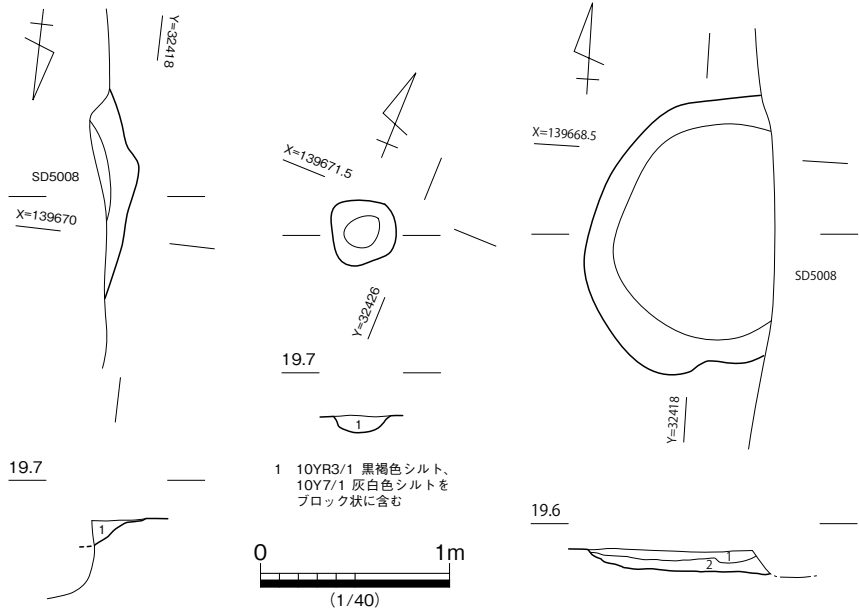
第161図 SK6006 平・断面

遺構外出土遺物 (第167図)

639は土師質土器皿である。底部を静止糸切りによって切り離す。口縁端部にナデにより面を持たせる。

640、641は土師質土器杯である。底部をヘラ切りによって切り離し、口縁部は外方へ大きく開く。

642は瓦器椀である。内外面のミガキについては確認でき



第163図 SP6007
平・断面

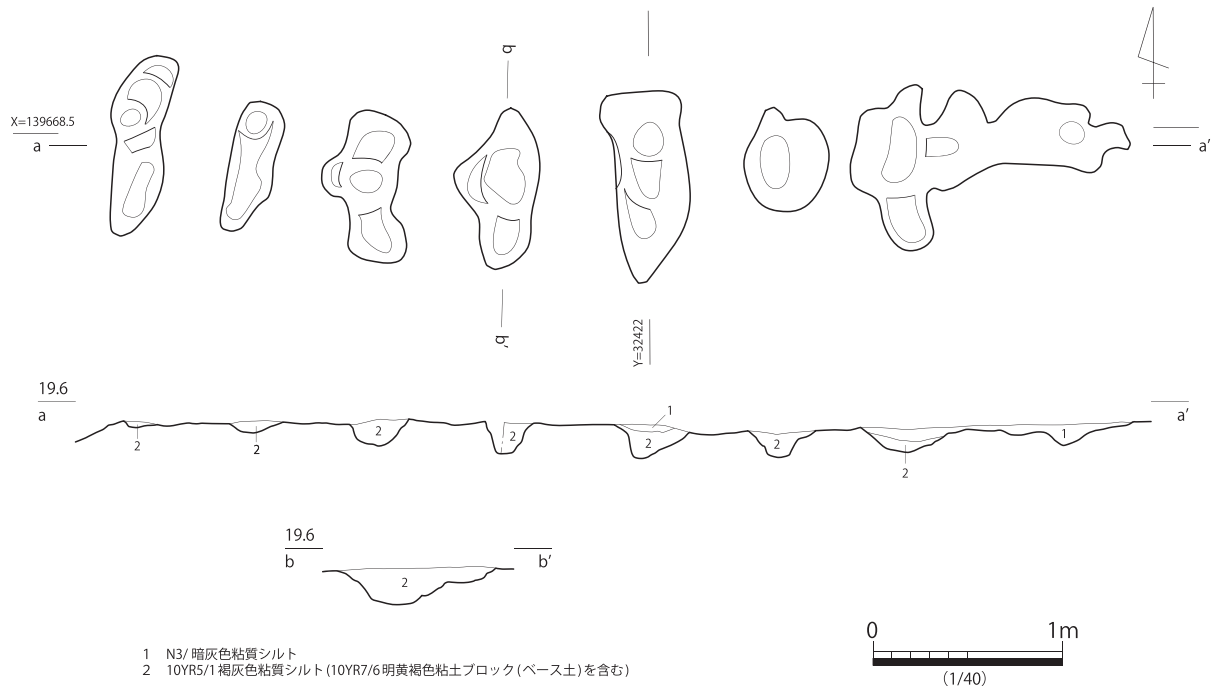
- 1 10YR3/2 黒褐色シルトベース由来のブロック(φ1~2cm)を含む、しまりが弱い
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト、ベース由来のブロック(φ3~4cm)を多量に含む、しまりが弱い、部分的に2.5YR6/6 橙色のブロックを少し含む



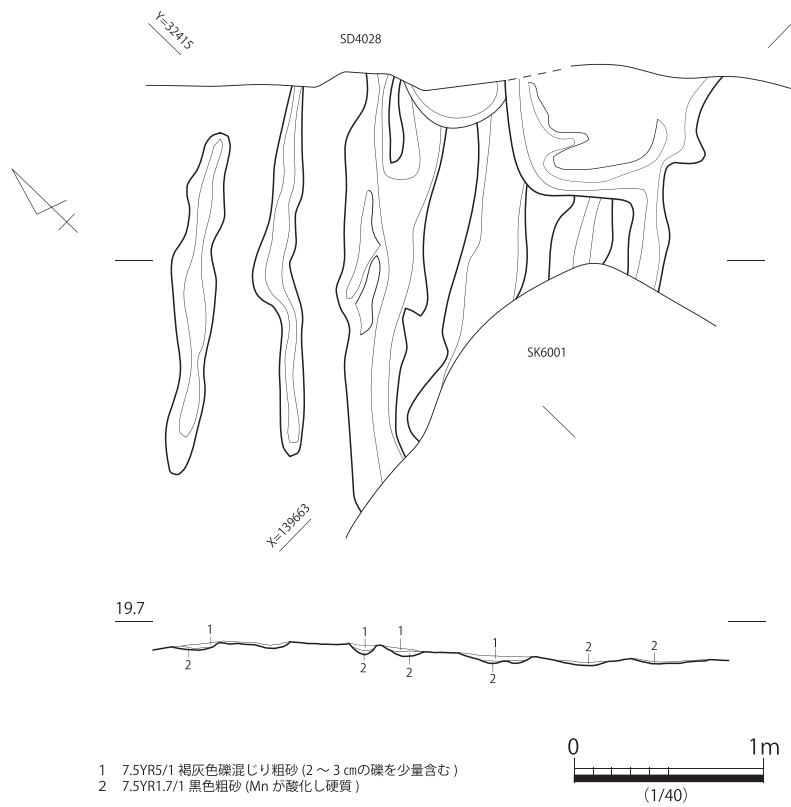
第164図 SX6002 平・断面



第162図 SP6001
平・断面



第 165 図 SX6003 平・断面



第 166 図 SX6004 平・断面

ず、外面にはユビオサエ痕を残す。

643 は土師器椀である。断面が丸みを持った三角形の高台を持つ。

644 は須恵器蓋である。杯の蓋であり、口縁部端に面を持たせる。

645、646、648～651 は須恵器杯である。いずれも杯 B であり、645、646、648、649 は高台が外方に開く。650、651 は断面方形の低い高台が取り付く。

647 は須恵器皿である。口縁部が少し外反する。

653 は白磁椀である。口縁部の破片であり、端部外面を肥厚させる。

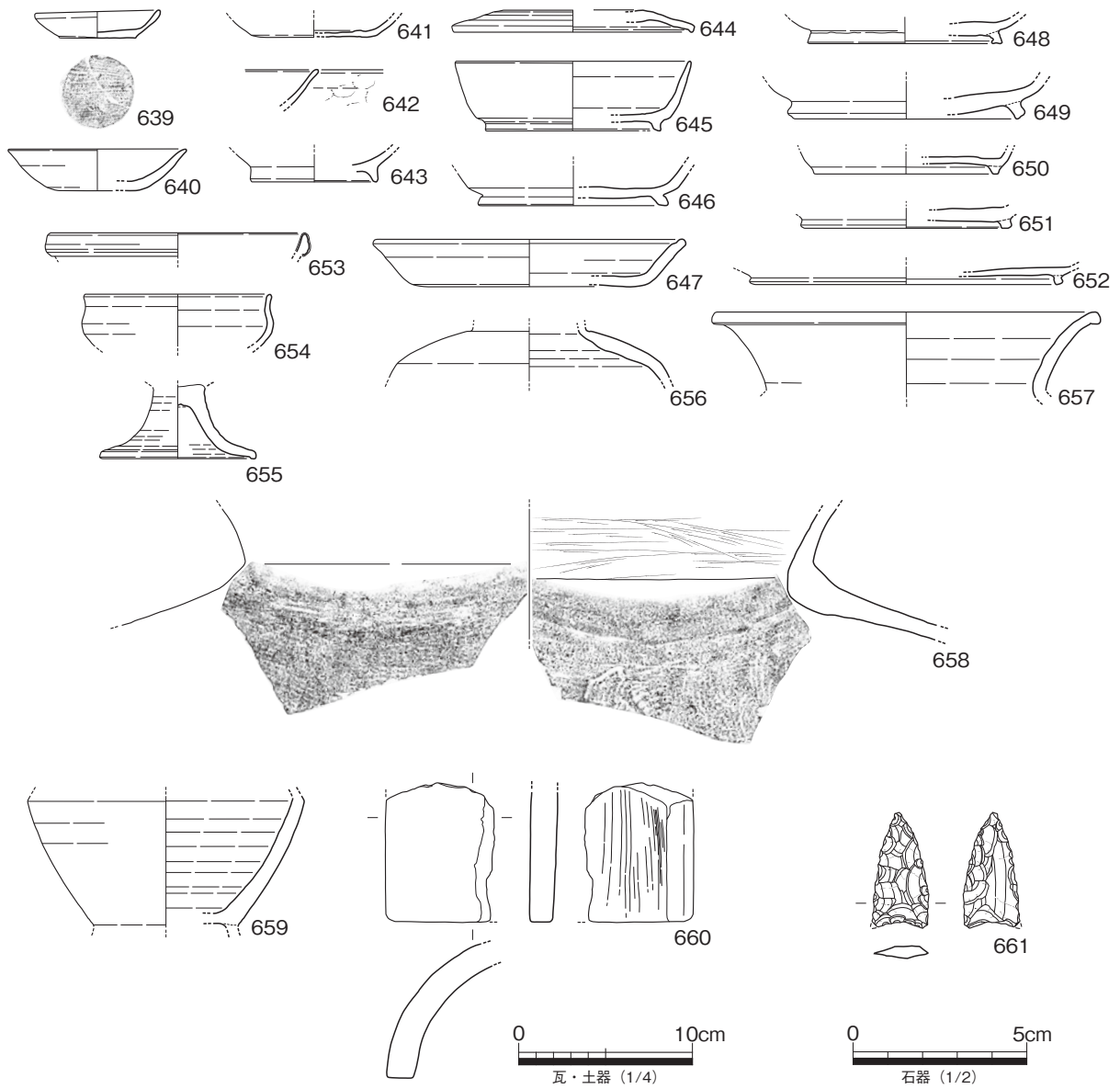
655 は須恵器高杯である。脚部であり端部は面を持たせ下方につまみ出す。

656、659 は須恵器壺である。656 は頸部の破片であり肩部に緩い稜を持つ。659 はおそらく長頸壺の胴部であり、外方へ開く高台を持つ。

657、658 は須恵器甕である。657 は口縁部であり端部を下方に拡張する。658 は頸部であり、外面に格子叩き、内面に同心円状の当て具痕を残す。

660 は丸瓦である。凸面および側面、端面の調整は摩滅により判然としない。凹面については、糸切り痕のような縦方向の条痕がみられる。

661 は石鏃である。無茎式の打製石鏃であり、形態からは弥生時代中期後半の年代が考えられる。



第167図 6区遺構外出土遺物

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 岸の上遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山 2000, 杉山 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、4-4 区西壁 A 地点の 3 層、4 層、6 層、7 層、10 層、17 層、26 層からブロック状に採取された試料 1～試料 7 の計 7 点である。このうち、3 層と 4 層は 8～9 世紀、6 層と 7 層は 7～8 世紀、10 層と 17 層は 6 世紀前半とされ、6 層 (粘質土) については発掘調査の所見から水田耕作土の可能性が指摘されていた。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02 g 添加 (0.1 mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 168 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、Bタイプ

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

4-4区西壁A地点では、3層（試料1）、4層（試料2）、6層（試料3）、7層（試料4）、10層（試料5）、17層（試料6）、28層（試料7）の計7試料について分析を行った。その結果、3層（試料1）から10層（試料5）までの層準からイネが検出された。このうち、水田耕作土の可能性が指摘されていた6層（試料3）では密度が700個/gと低い値であり、その下位の7層（試料4）と10層（試料5）でも600個/gおよび1,400個/gと低い値である。また、上位の3層（試料1）と4層（試料2）でも密度が2,000個/gおよび1,900個/gと比較的低い値である。

イネの密度が低い原因としては、1）稲作が行われていた期間が短かったこと、2）土層の堆積速度が速かったこと、3）採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および4）上層や他所からの混入などが考えられる。ここでは、土層の堆積状況などから1）や2）の要因が大きいと考えられるが、その他の要因も想定されることから、地点数や試料数を増やすなどさらに詳しい分析調査が必要と考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の26層から17層にかけては、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。10層では、イネ、キビ族型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科が出現し、ネザサ節型やメダケ節型などのタケ亜科は減少している。7層から6層にかけては、ネザサ節型などのタケ亜科がさらに減少し、4層から3層にかけてはイネがやや増加している。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、とくに下位の26層と17層で多くなっている。また、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、下位の26層から17層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類が多く分布し、ススキ属やウシクサ族、キビ族などのイネ科草本類も見られたと推定される。

10層では、ヨシ属が生育するような湿潤なところを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと考えられ、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類は減少したと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。7層から3層にかけても、おおむね同様の状況であったと推定されるが、メダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類はさらに減少したと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、水田耕作土の可能性が指摘されていた6層（7世紀）、およびその下位の7層（7世紀）と10層（6世紀）では少量のイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。また、上位の3層（8～9世紀）と4層（8～9世紀）でも比較的少量のイネが検出され、稲作の可能性が認められた。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったことや、土層の堆積速度が速かったことなどが想定される。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して10層の時期に調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属、ウシクサ族、キビ族などのイネ科草本類が生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p. 189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表1 岸の上遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: × 100 個 / g)

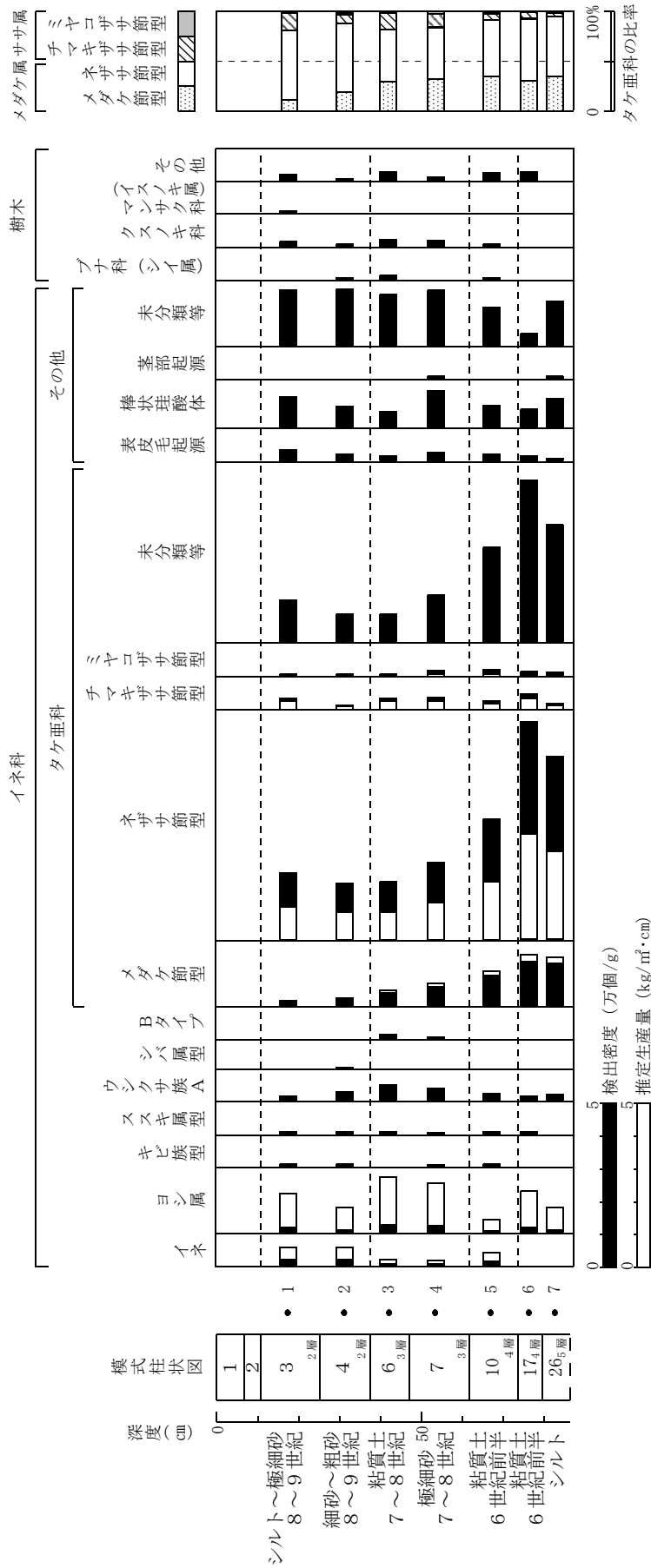
地点・試料	4-4 区西壁A地点	試料 No.						
		1	2	3	4	5	6	7
分類群	学名							
イネ科	<i>Gramineae</i>							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	20	19	7	6	14		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	20	13	28	25	7	21	13
キビ族型	<i>Panicaceae type</i>	7	6		6	7		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	7	6	7	6	7	7	
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A type</i>	14	26	49	37	21	14	19
シバ属型	<i>Zoysia type</i>		6					
Bタイプ	<i>B type</i>			14	6			
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>							
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	14	19	42	62	96	141	134
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	211	174	183	243	377	683	574
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	34	13	35	37	27	49	19
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	7	6	7	19	21	14	13
未分類等	<i>Others</i>	129	84	84	143	288	493	357
その他のイネ科	<i>Others</i>							
表皮毛起源	<i>Husk hair origin</i>	34	19	14	25	21	14	6
棒状珪酸体	<i>Rodshaped</i>	95	64	49	112	68	56	89
茎部起源	<i>Stem origin</i>				6			6
未分類等	<i>Others</i>	170	167	155	168	116	35	134
樹木起源	<i>Arboreal</i>							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>		6	14		7		
クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	14	13	21	19	7		
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	7						
その他	<i>Others</i>	20	6	28	12	27	28	
植物珪酸体総数	<i>Total</i>	802	649	739	934	1109	1556	1364

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m² · cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

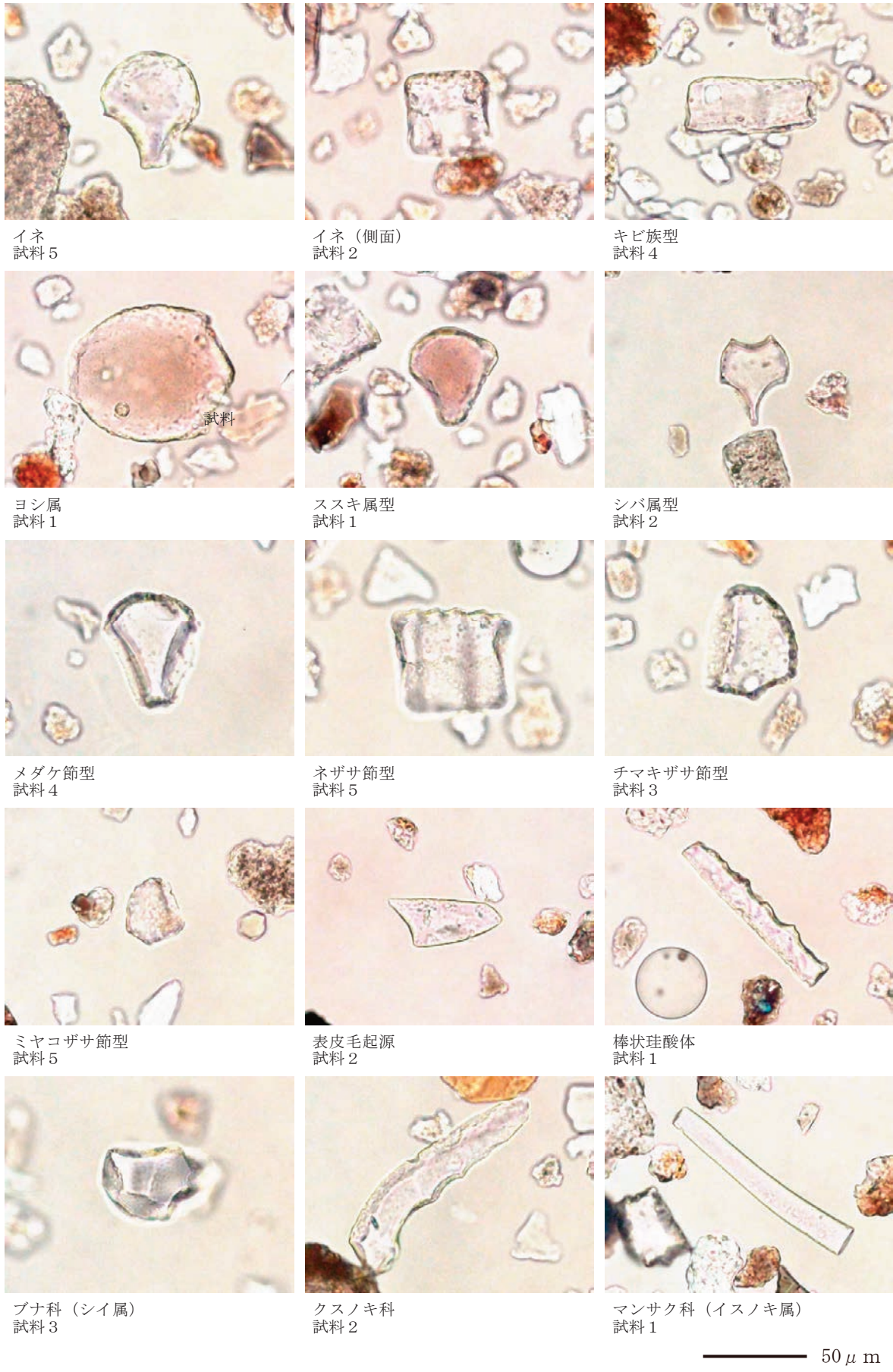
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.60	0.57	0.21	0.18	0.40		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.29	0.81	1.78	1.57	0.43	1.33	0.80
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.08	0.08	0.09	0.08	0.08	0.09	
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.16	0.22	0.49	0.72	1.11	1.63	1.55
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	1.01	0.83	0.88	1.17	1.81	3.28	2.75
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.26	0.10	0.26	0.28	0.21	0.37	0.14
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.02	0.06	0.06	0.04	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	11	19	30	32	35	31	35
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	70	71	53	52	57	62	61
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	18	8	16	13	6	7	3
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	1	2	1	3	2	1	1
メダケ率	Medake ratio	81	90	83	85	92	92	96



第 168 図 岸の上遺跡 4-4 区西壁における植物珪酸体分析結果



第169図 岸の上遺跡の植物珣酸体

第2節 岸の上遺跡出土木製品の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岸の上遺跡は香川県丸亀市に所在する。本報告では、溝跡から出土した8世紀と考えられている木製品について樹種同定を行い、木材の利用について検討する。

1 試料

試料は、4区・6区のSD4028より出土した齋串5点、薦槌、器・底、木樋、不明各1点の合計9点である。

2 分析方法

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、(島地・伊東 1982)、(Wheeler 他 1998)、(Richter 他 2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、(林 1991)や(伊東 1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

表2 樹種同定結果

地区	遺構	層位	報告番号	木取り	器種	時代	種類
4区	SD4028	下層	299	柁目	齋串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	305	芯持丸木	薦槌	7世紀末～8世紀	ヒノキ科
6区	SD4028	中層	285	板目	器・底	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	298	板目	齋串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	中層	284	板目	齋串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	—	327	板目	齋串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	293	柁目	齋串	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	下層	304	板目	不明	7世紀末～8世紀	ヒノキ
6区	SD4028	中層	291	破片	木樋	7世紀末～8世紀	コナラ属コナラ亜属コナラ節

3 結果

樹種同定結果を表2に示す。木製品は、針葉樹2分類群（ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹1分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は

単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同様放射組織とがある。

4 考察

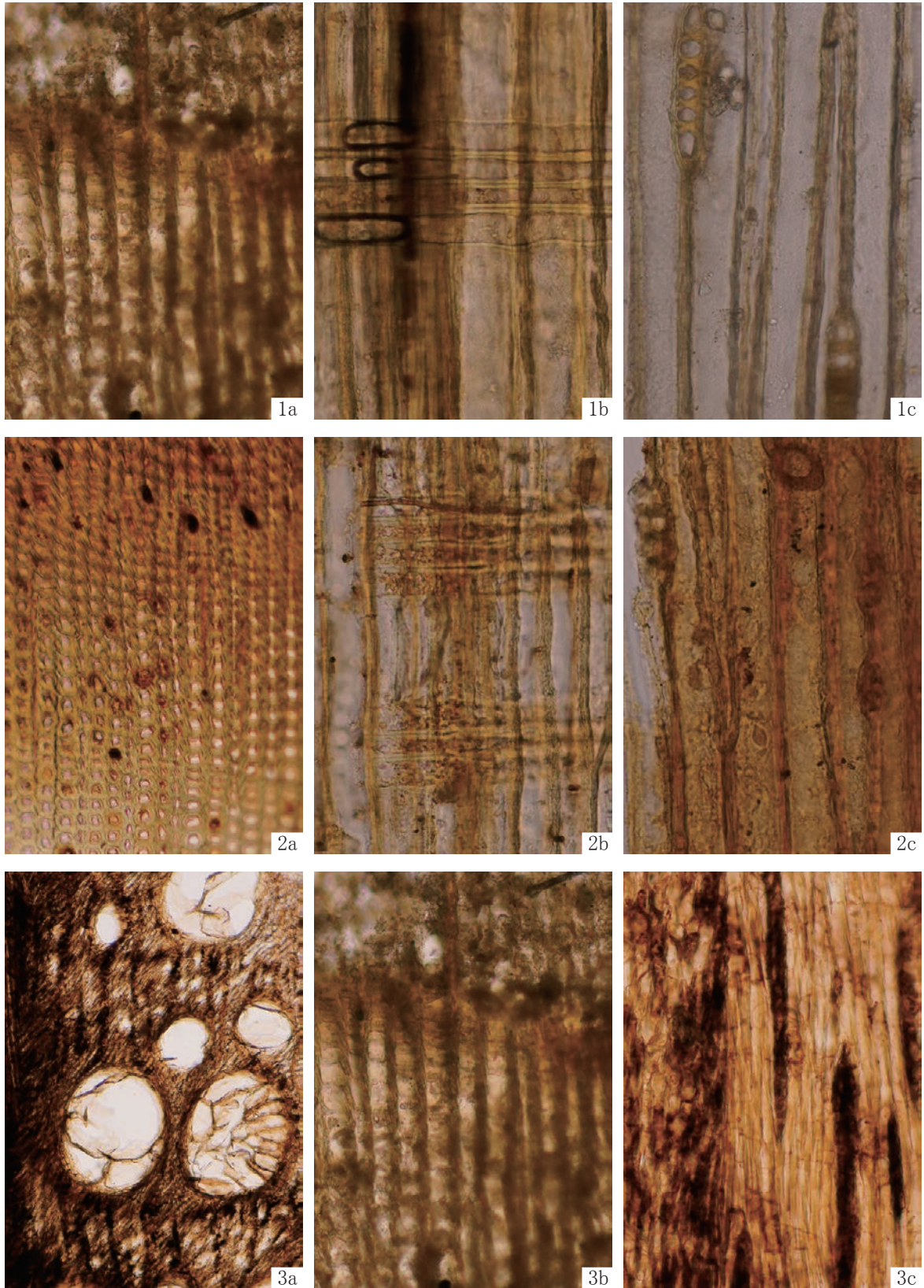
SD4028 から出土した木製品は、いずれも8世紀と考えられている。樹種同定を実施した資料は、(伊東・山田 2012) の木器分類を参考にすると、編み具・紡織具(薦槌)、容器(器・底)、祭祀具(斎串) 施設材・器具材(木樋)、その他(不明)に分けられる。これらの木製品の樹種同定では、合計3種類が確認された。同定された各種類についてみると、針葉樹のヒノキは、山地・丘陵地等に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性・耐水性が高い。ヒノキ科には、ヒノキのほか、サワラやアスナロ等の有用材が含まれる。いずれも山地等に生育する常緑高木であり、木材はヒノキと同様に木理が通直で割裂性と耐水性が高い。広葉樹のコナラ節には、コナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの4種がある。平地の二次林、山地・丘陵地の落葉広葉樹林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。器種別にみると、薦槌(コモヅチ)は芯持丸木で、ヒノキ科が利用されている。組織をみると、年輪が詰まっており、手に持った際の重さは一般的なヒノキ科に比べて重いことから、アテ材など、通常より重く硬い部位を用いている可能性がある。

容器の器・底は、円形を呈する板の一部と考えられ、曲物や結物等の底板の一部と考えられる。樹種は、ヒノキに同定され、分割加工が容易で耐水性の高い木材を利用したことが推定される。なお、本資料は板目板であるが、板目は細胞の密度が高い晩材部が層状に重なることから、柁目板に比べて保水性が高いとされ、容器の用途を反映している可能性がある。斎串6点と不明1点も全てヒノキに同定された。器種は異なるが、いずれも板状を呈していることから、器・底と同様に割裂性が高く、分割加工が容易な樹種を利用したものと考えられる。(伊東・山田 2012) のデータベースによれば、香川県内で調査された古代の曲物・結物の底板では、ヒノキの利用が圧倒的に多い。また、斎串では、下川津遺跡でヒノキが大多数を占め、コウヤマキ、サワラ、スギ、ツガ属が少数混じる組成が確認されている他、多肥松林遺跡ではコウヤマキを主体としてヒノキが混じる組成が報告されている。遺跡によって種類構成に多少の違いはみられるが、割裂性や耐水性の高い針葉樹材を利用している点では共通しており、今回の結果とも調和的である。

木樋は、樹種同定用の破片試料のため、全体の木取りは不明である。広葉樹のコナラ節に同定され、強度の高い木材を木樋として利用したことが推定される。香川県内で古代の木樋について樹種を同定した例をみると、郡家一里屋遺跡でニレ科、川津一ノ又遺跡で針葉樹とヒノキ、尾端遺跡でコウヤマキとヒノキの報告例がある(伊東・山田 2012)。これらの結果をみると、木樋が確認された3遺跡のうち、2遺跡で加工性・耐水性の高い針葉樹材を利用している。今回の結果は、広葉樹材が利用されている点で、郡家一里屋遺跡の事例に似ている。

参考文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
 Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz



1.ヒノキ(SD4028;W4002)
 2.ヒノキ科(SD4028;W6136)
 3.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SD4028;W6030-1)
 a:木口, b:柁目, c:板目

100 μ m:3a
 100 μ m:1-2a,3b,c
 100 μ m:1-2b,c

第 170 図 岸の上遺跡出土木材

I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第3節 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定

株式会社イビソク

1. はじめに

丸亀平野の東端の微高地上に立地する岸の上遺跡から出土した木製品・木材について、樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、SD4028 から出土した生の木製品・木材 56 点と炭化材 1 点の、計 57 点である。遺構の時期は、7 世紀末～8 世紀末頃と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

生材の樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行った。

表3 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定結果一覧

樹種 / 器種	柄	火鑽白	布巻具	下駄	漆器椀	曲物側板	曲物底板	箸状木器	斎串	斎串か	板材	棒	丸棒	角棒	角材	杭	杭状	へら状木器	へら状	加工材	加工木	角材削片	割れた破片	削片	切断片	不明	合計
モミ属			1																								1
マツ属複雑管束亜属				1																							1
ヒノキ					4	2		3		9		1	4	1									1	1		2	28
アスナロ								1		3			2	1				1									8
サクラ属																								1			1
クマヤナギ属												1															1
エノキ属															1												1
スダジイ							1																				1
コナラ属アカガシ亜属	1														1												2
コナラ属クスギ節																									1		1
アカメガシワ												2									1						3
サカキ											1						1					1					3
ツバキ属					1													1									2
トネリコ属トネリコ節												1															1
モチノキ属		1							1											1							3
合計	1	1	1	1	1	4	2	1	4	1	12	3	3	6	2	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	57

3. 結果

同定の結果、針葉樹のモミ属とマツ属複維管束亜属、ヒノキ、アスナロの4分類群と、広葉樹のサクラ属とクマヤナギ属、エノキ属、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、アカメガシワ、サカキ、ツバキ属、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節）、モチノキ属の11分類群の、計15分類群がみられた。ヒノキが28点で最も多く、アスナロが8点、アカメガシワとサカキ、モチノキ属が各3点、アカガシ亜属とツバキ属が各2点、モミ属とマツ属複維管束亜属、サクラ属、クマヤナギ属、エノキ属、スダジイ、クヌギ節、トネリコ節が各1点であった。同定結果を表4に、一覧を付表3に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡および走査型顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第171図 1a-1c(No. 543)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には、高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第171図 2a-2c(No. 399)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第171図 3a-3c(No. 275)、4a-4c(No. 295)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(4) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第171図 5a-5c(No. 316)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油分が多く、耐朽性に優れている。

(5) サクラ属（広義） *Prunus s.l.* バラ科 第171、172図 6a-6c(No. 314)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と区別できないため、広義のサクラ属とは

モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(6) クマヤナギ属 *Berchemia* クロウメモドキ科 第172図 7a-7c (No. 308)

やや大型の道管が2~4個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、立方、直立細胞が混在する異性で、幅4~10列となる。また放射組織は1mm異常の高さとなる。

クマヤナギ属にはクマヤナギやオオクマヤナギ、ホナガクマヤナギなどがあり、ホナガクマヤナギは日本海沿岸の山地に多く分布する落葉低木の広葉樹である。現在では材利用は顕著に行われていない。

(7) エノキ属 *Celtis* アサ科 第172図 8a-8c (No. 608)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が方形となる異性で、幅1~5列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとめて生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(8) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 第172図 9a-9c (No. 538)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 第172図 10a-10c (No. 326)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 第172図 11a-11c (No. 310)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(11) アカメガシワ *Mallotus japonicas* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科

第172、173図 12a-12c (No. 321)

やや厚壁で丸い道管が、晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の異性である。

アカメガシワは宮城県および秋田県以西の温帯から暖帯に分布する落葉高木で、日当たりのよい二次林に普通に生育する。材は軽軟で、耐久性が低い。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科 第 173 図 13a-13c (No. 323)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は 20 ～ 40 段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端 1 ～ 4 列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 第 173 図 14a-14c (No. 318)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、幅 1 ～ 3 列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(14) トネリコ属トネリコ節 *Fraxinus sect. Ornus* モクセイ科 第 173 図 15a-15c (No. 269)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 2 列並び、晩材部では径を減じた道管が単独ないし数個複合して配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅 1 ～ 3 列となる。

トネリコ属トネリコ節にはヤマトアオダモやマルバアオダモなどがあり、一般的なマルバアオダモは日本各地の丘陵地や山地で普通に見られる落葉高木の広葉樹である。材はトネリコ属シオジ節より重いが、乾燥は比較的容易で、切削加工等は容易である。

(15) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 第 173 図 16a-16c (No. 307)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20 ～ 40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、幅 1 ～ 5 列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

4. 考察

同定の結果、ヒノキをはじめとする針葉樹が多くみられた。針葉樹は全般的に木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良く（伊東ほか 2011）、木製品に多く利用されていたと考えられる。また、さまざまな広葉樹が一部の木製品や杭、棒状の木製品などに使用されていた。サクラ属やエノキ属、スダジイ、アカガシ亜属、クヌギ節、サカキ、ツバキ属、トネリコ節、モチノキ属は比較的堅硬な樹種であり、アカメガシワとマタタビ属は比較的軽軟な樹種である（伊東ほか 2011）。

香川県の 7 世紀末～中世頃の出土例では、居石遺跡の古墳時代末期～平安時代頃の布巻具がヒノキである。また、下川津遺跡では古墳時代末～平安時代頃の下駄にヒノキが最も多く利用される一方で、平安～鎌倉時代頃の漆器椀にはトチノキが多くみられ、今回の岸の上遺跡の下駄や漆器椀とは異なる樹種が利用されていた（伊東・山田編 2012）。下川津遺跡の古墳時代末～平安時代頃の曲物の側板と底板には、ともにヒノキが多く利用されており（伊東ほか 2011）、今回の岸の上遺跡と傾向が一致する。

香川地域の古代～中世の棒および杭には、多様な針葉樹および広葉樹が利用されており（伊東・山田編 2012）、多様な広葉樹がみられた今回の岸の上遺跡は地域の傾向と一致する結果を示した。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—，449p，海青社。

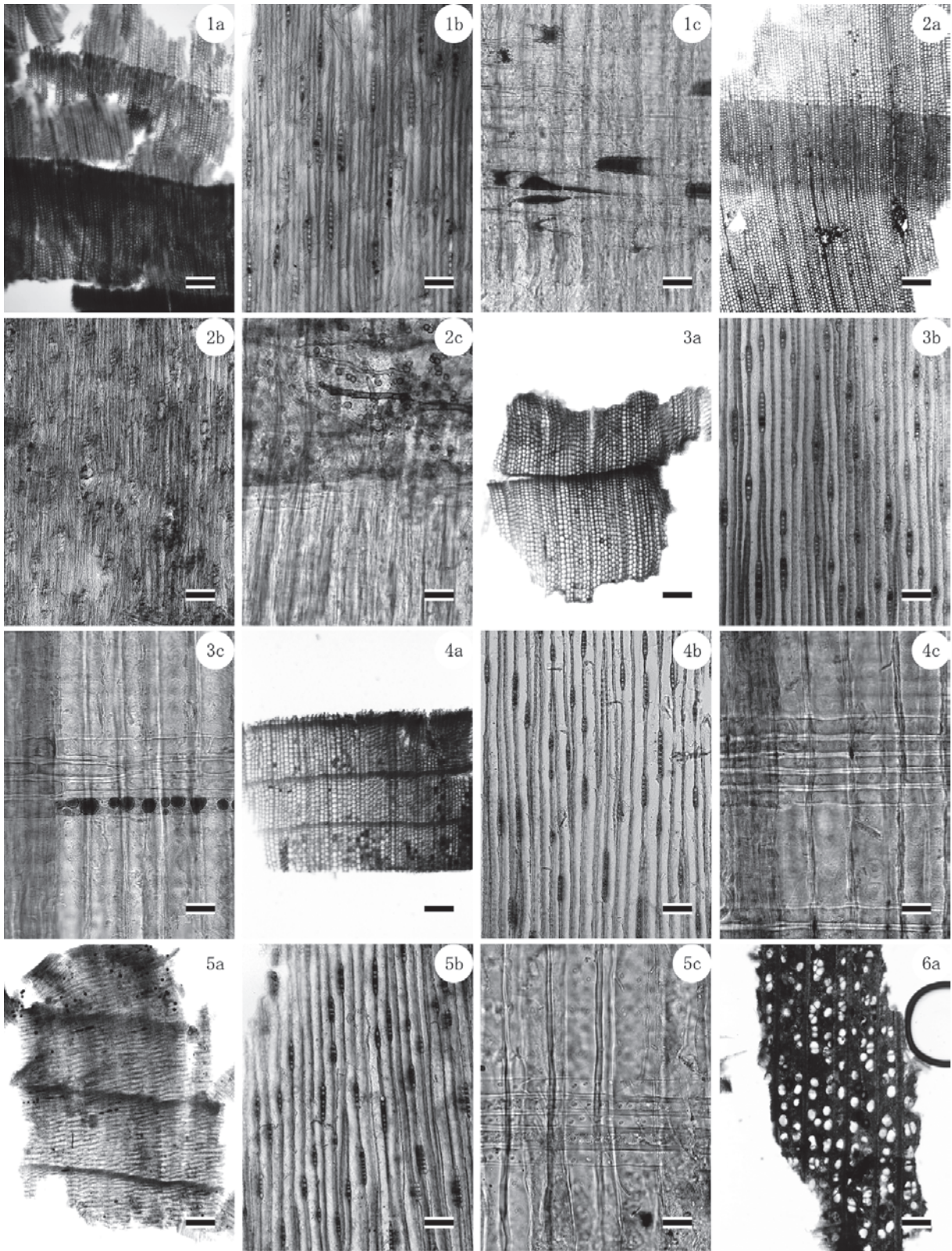
技術協力

小林克也（パレオ・ラボ）

表4 岸の上遺跡出土木製品・木材の樹種同定結果

報文番号	出土遺構	器種	樹種	木取り	備考	時期
269	SD4028	丸棒	トネリコ属トネリコ節	芯持丸木		7世紀末～8世紀
270	SD4028	丸棒	ヒノキ	芯去削出		7世紀末～8世紀
271	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
272	SD4028	割れた破片	ヒノキ	割れ		7世紀末～8世紀
273	SD4028	角棒	アスナロ	芯去削出		7世紀末～8世紀
274	SD4028	角棒	アスナロ	角材		7世紀末～8世紀
275	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
276	SD4028	削片	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
277	SD4028	板材	ヒノキ	板目	薄板状（加工痕有）	7世紀末～8世紀
278	SD4028	板材	アスナロ	柾目	加工痕有	7世紀末～8世紀
279	SD4028	へら状	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
280	SD4028	角材削片	サカキ	板目		7世紀末～8世紀
281	SD4028	斎串	アスナロ	柾目		7世紀末～8世紀
282	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
283	SD4028	斎串	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
286	SD4028	曲物底板	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
287	SD4028	板材	ヒノキ	追柾目		7世紀末～8世紀
294	SD4028	板材	ヒノキ	柾目		7世紀末～8世紀
295	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
296	SD4028	斎串？	モチノキ属	板目		7世紀末～8世紀
297	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
300	SD4028	斎串	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
301	SD4028	板材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
306	SD4028	火鑽臼	モチノキ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
307	SD4028	加工材	モチノキ属	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
308	SD4028	丸棒	クマヤナギ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
309	SD4028	杭	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	枝払い	7世紀末～8世紀
310	SD4028	切断片	コナラ属クヌギ節	芯持丸木		7世紀末～8世紀
311	SD4028	杭状	サカキ	芯持丸木		7世紀末～8世紀
312	SD4028	不明	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
313	SD4028	板材	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
314	SD4028	削片	サクラ属	柾目		7世紀末～8世紀
316	SD4028	板材	アスナロ	板目		7世紀末～8世紀
317	SD4028	角棒	ヒノキ	角材		7世紀末～8世紀
318	SD4028	へら状木器	ツバキ属	芯去削出		7世紀末～8世紀
319	SD4028	加工木	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
320	SD4028	角棒	ヒノキ	芯去削出	先端加工	7世紀末～8世紀
321	SD4028	棒	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
322	SD4028	棒	アカメガシワ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀
323	SD4028	棒	サカキ	芯持丸木	先端加工	7世紀末～8世紀

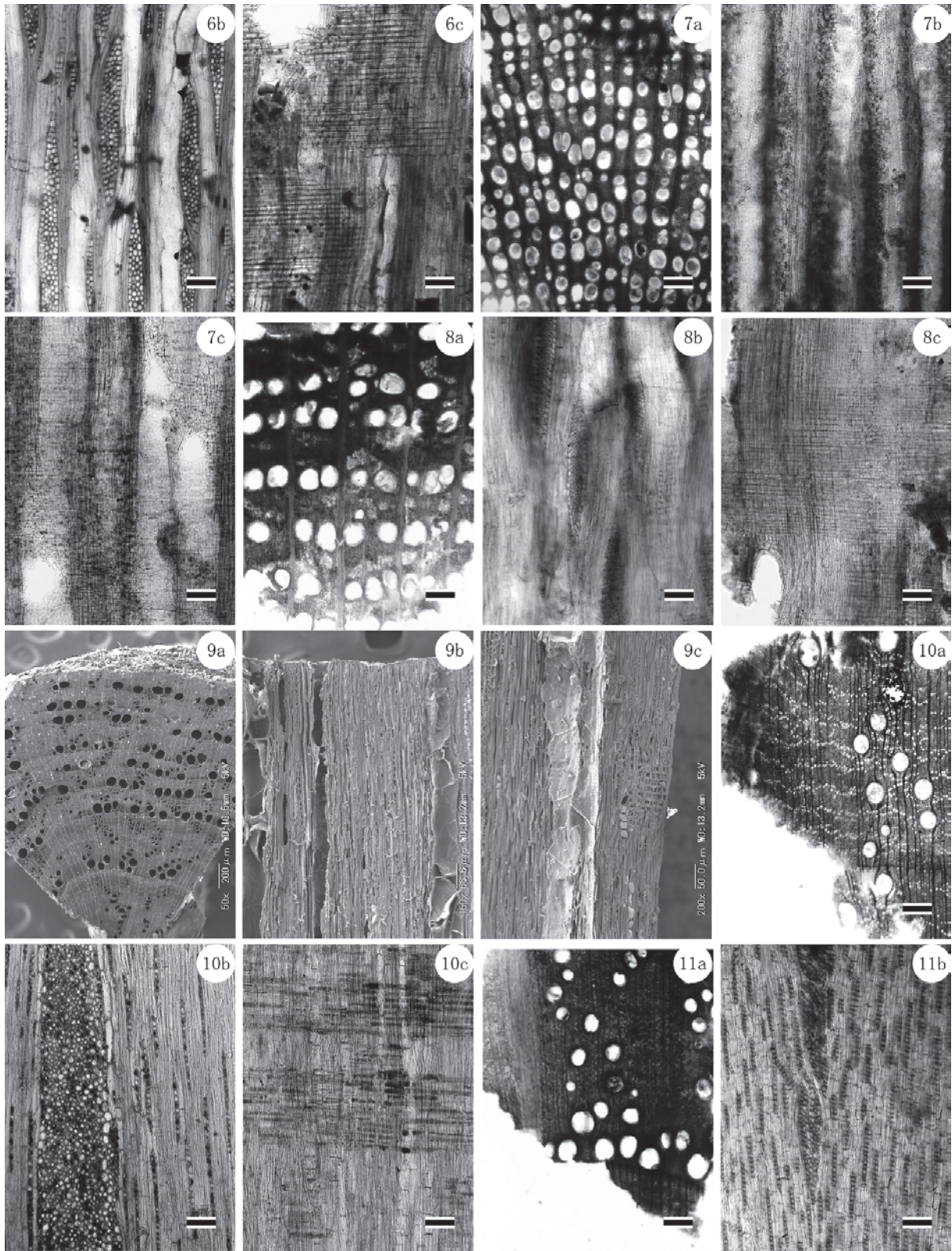
325	SD4028	齋串	ヒノキ	芯去削出	棒状	7世紀末～8世紀
326	SD4028	柄	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出		7世紀末～8世紀
334	SD4030	角材	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
399	SX5010	下駄	マツ属複雑管束亜属	板目		中世?～近世
400	SX5010	漆器椀	ツバキ属	横木取り		中世?～近世
537	SD5008	不明	ヒノキ	板目		中世
538	SD5008	箸状木器	スダジイ	芯持丸木		中世
539	SD5008	曲物側板	ヒノキ	桎目		中世
540	SD5008	曲物側板	ヒノキ	桎目		中世
541	SD5008	曲物側板	ヒノキ	桎目		中世
542	SD5008	板材	ヒノキ	板目		中世
543	SD5008	布巻具	モミ属	芯持丸木		中世
544	SD5008	板材	ヒノキ	板目		中世
585	遺構外	角材	アスナロ	角材	先端加工	中世?
606	SD6006	曲物底板	ヒノキ	板目		7世紀末～8世紀
608	SD6007	杭	エノキ属	芯持丸木		7世紀末～8世紀
636	SD6008	曲物側板	ヒノキ	桎目		7世紀末～8世紀



1a-1c. モミ属 (No. 543)、2a-2c. マツ属複維管束亜属 (No. 399)、3a-3c. ヒノキ (No. 275)、4a-4c. ヒノキ (No. 295)、
5a-5c. アスナロ (No. 316)、6a. サクラ属 (No. 314)

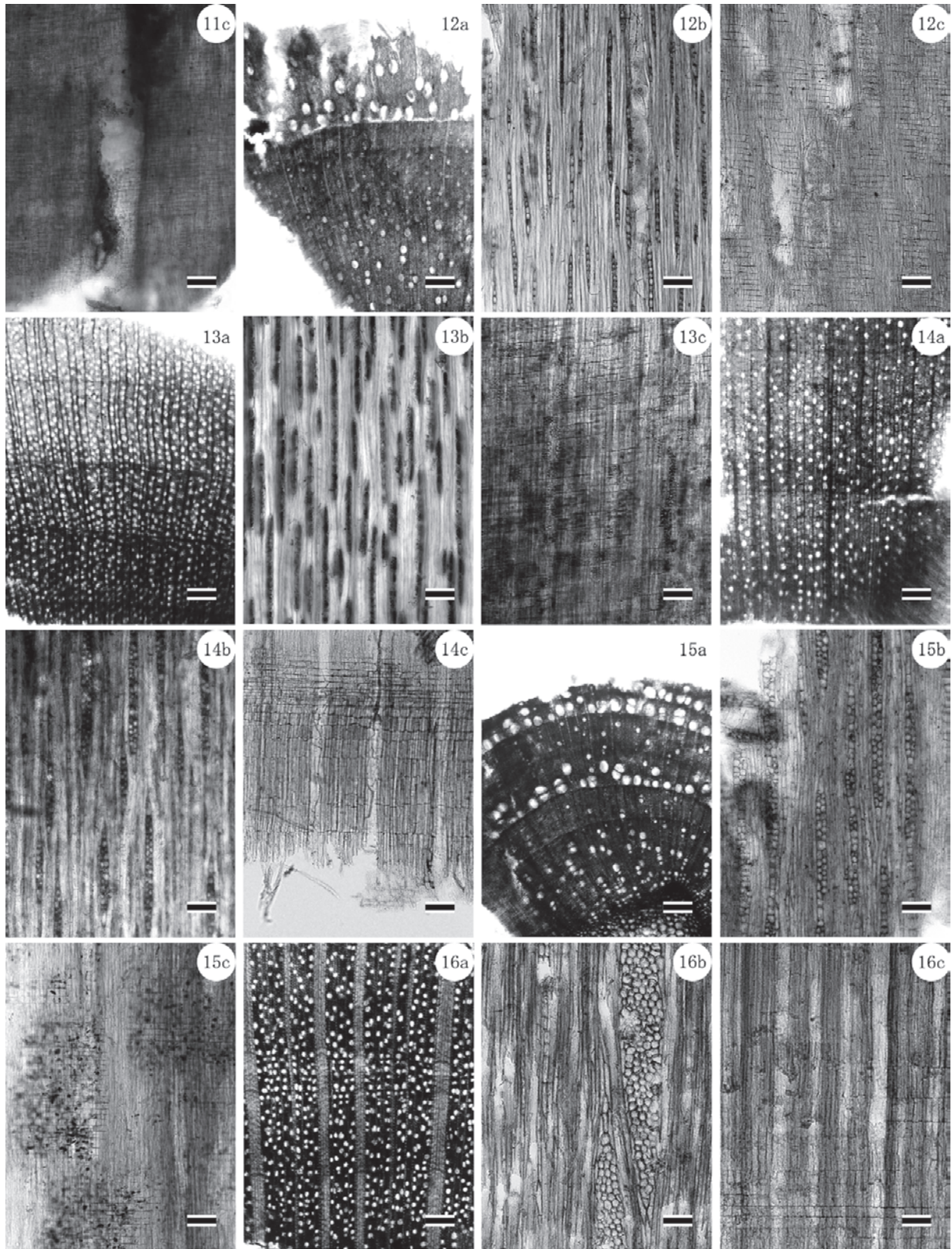
a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=25 μm)

第 171 図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 1



6b-6c. サクラ属 (No. 314)、7a-7c. クマヤナギ属 (No. 308)、8a-8c. エノキ属 (No. 608)、9a-9c. スダジイ (No. 538)、10a-10c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 326)、11a-11c. コナラ属クヌギ節 (No. 310)
 a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=6、7、9、10:100 μm)

第 172 図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 2



11c. コナラ属クヌギ節 (No. 310)、12a-12c. アカメガシワ (No. 321)、13a-13c. サカキ (No. 323)、14a-14c. ツバキ属 (No. 318)、15a-15c. トネリコ属トネリコ節 (No. 269)、16a-16c. モチノキ属 (No. 307)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

第 173 図 岸の上遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真 3

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

今回報告する岸の上遺跡の調査においては、弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認された。

ここでは、各時代の遺構の状況について整理し、まとめとする。

縄文時代以前

遺構は確認されていない、一部に縄文時代にさかのぼる可能性がある石鏃などが出土している。

弥生時代（第174図）

3面において確認される。遺構は散漫であり、居住域は確認できない。遺構の大半は溝であり、一部平面形態が不明な遺構が確認できる。SD5020といったように、幅も比較的広く、途中で溝が大きく屈曲するような遺構が認められるが、大半は北東方向に向かって流下する。

これらの遺構からは遺物の出土も少量であり、その大半は弥生時代中期後半～後期にかけてのものである。周辺に当該期の居住域が存在していた可能性も高いが、今回調査範囲とは少し離れていた、ないしは短期的なものと考えられる。

なお、3面を構成する4層から弥生時代前期のものと考えられる土器が出土している。

古墳時代（第174、175図）

3面においてSB4002、SB4003とそれに付随する遺構が確認できるほか、2面の水田層で確認された畦畔及びそれらに付随する溝についても古墳時代終末期の遺構である可能性が高い。

3面の建物は、いずれも、古墳時代後期の中でもTK43期に建物が埋没していることから、6世紀後半の遺構である可能性が高い。当該期の遺構については、これまでの調査において、より南方の微高地上に比較的時期に近い竪穴建物が検出されている。それらの近隣には2×2間の総柱建物が存在しており、建物の軸が竪穴建物と一致するといったように、一般的な集落と類似する内容を示す。

香川県下の古墳時代後期前後の集落を見ると、太田下・須川遺跡（北山・森下1995）は5世紀に相当し、佐古川・窪田遺跡（山元2007）、吉野下秀石遺跡（西岡2007）などでも6世紀代の総柱建物が存在するが、2×2間のものが多い。竪穴建物に近接する特徴も認められる。古墳時代後半期の集落遺跡では、竪穴建物と掘立柱建物の分布域が明瞭に分離される状況は少なく、混在しているような分布状況を示すものが大半である。

しかし、今回検出された建物は、周囲に溝を持つといった構造、2×3間の建物2棟が並列している状況からも、通常の集落に伴うものとは異なる。遺跡の中で竪穴建物が集中する範囲とも離れている。岸の上遺跡の周辺には、周囲の集落遺跡の調査例はないものの、岸の上遺跡自体が周辺の集落と比べ規模が大きく、そういった状況の表れとして、このような大規模な建物が作られたと考えられる。

古墳時代終末期には、3面が埋没し4・5区においては2面が形成される。2面の大部分は古墳時代終末期の遺構であり、小規模な柱穴や溝のほかは、水田畦畔とそれらに伴う溝の存在が確認されている。畦畔の方向は、残存状況や後出する流路により削平されていることから、明確な畦畔で囲まれた区画は検出できていない。しかし、周辺の条里型地割とは一致しない方向の溝や畦畔が見られることや、一つ一つが均整な区画とならない状況であり、より古墳時代以前の水田畦畔区画に類似しているといえる。

これらの水田については、植物珪酸体分析の結果や、遺構自体の重複が少ない点、3面の最新段階の

遺構と、1面の最古段階の遺構、並びに各面を構成する堆積土の年代からも、かなり短期間に操業されたものであると考えられる。

古代（第175図）

最も多量の遺物が出土する時期である。地形の状況から、南側の微高地より次第に下がる地形はまだ続き、遺跡の北端付近では低地部へと移り替わる。

そういった状況の中で、地形に直行するような形で大型の溝 SD4028 が掘削されるほか、小規模な溝などが確認できる。SD4028 は北東方向へと地形が下がる境界付近で、北西方向に流下するように流れる。

SD4028 からは、7世紀後半～9世紀初頭に至るまでの土器の他、木製祭祀具や木簡等の官衙遺跡を想起させる遺物が出土している。官衙遺跡内部の施設を囲む溝であれば、地割や建物に沿った方向に開削される、深度の浅いものが多く、今回検出された溝とは異なる特徴が多い。

中世以降にも同一の方向の水路（SD4021）が開削されること、流水痕跡が確認でき、木樋等が出土することから、水路としても一時機能していた可能性が高い。中世の水路と方向が類似することもその傍証となろう。

ただし、低地への落ち際という微高地の縁辺に開削されることから、官衙外縁部を囲む溝となる可能性も高い。各地の郡衙遺跡の発掘調査事例の中でも、諸施設の存在する範囲の外周を囲む溝が存在する例があり、地割に沿わないことや、深度などの規模の特徴から SD4028 も、囲まれた内部の状況は不明なもの、官衙の諸施設の存在する広大な範囲の周囲を巡る溝とも考えられる。後の遺構からも出土する多数の古代の遺物は、内部の諸施設で使用されたものが、官衙域の範囲に広く分布していたことを示しうる。遺跡の所在する鶴足郡において、明確な郡衙が遺跡として見つかっていないことや、推定南海道との位置関係からも、岸の上遺跡とその周辺が鶴足郡衙となる可能性も考えられよう。

なお、SD4028 の埋没後については、今回調査範囲においては、遺構が形成されないうえに、8世紀後半以降の遺物の出土も極めて少なくなる。遺跡の存在する微高地上での、建物配置などのプランの変更、ないしは規模の縮小といった可能性を考えたい。

中世（第176図）

中世の遺構・遺物については、今回調査範囲の中では、溝、柱穴、井戸が確認されている。溝は現在の地割に近いものと、そうでないもの（SD4021）に分かれ、地割に合致しないものについては、その大半が中世前半のものであり、柱穴が集中する部分についても同様である。

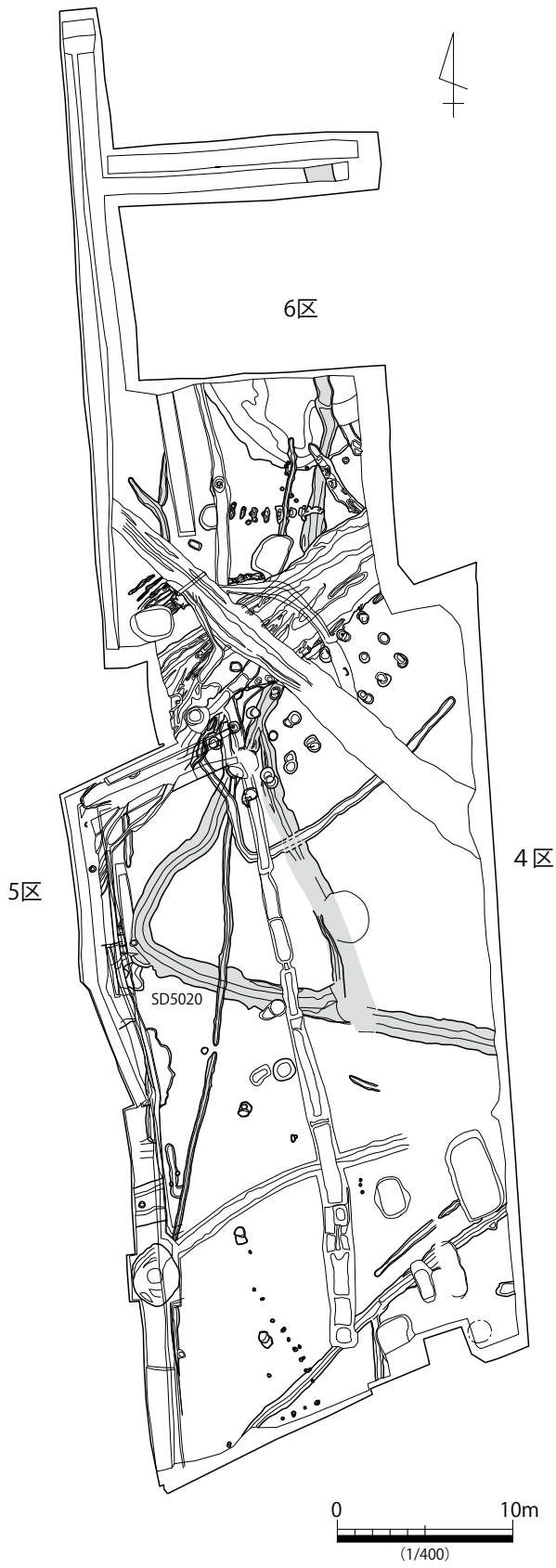
中世後半以降については、おおむね地割に合致する形で遺構が形成される。それを端的に示すのが SD5008 であり、流量調整機能をもつ灌漑水路が南北方向に流れるようになり、大まかではあるが中世前半と後半の間において、条里型地割に近い遺構が形成されるなどの変化が認められる。

近世（第176図）

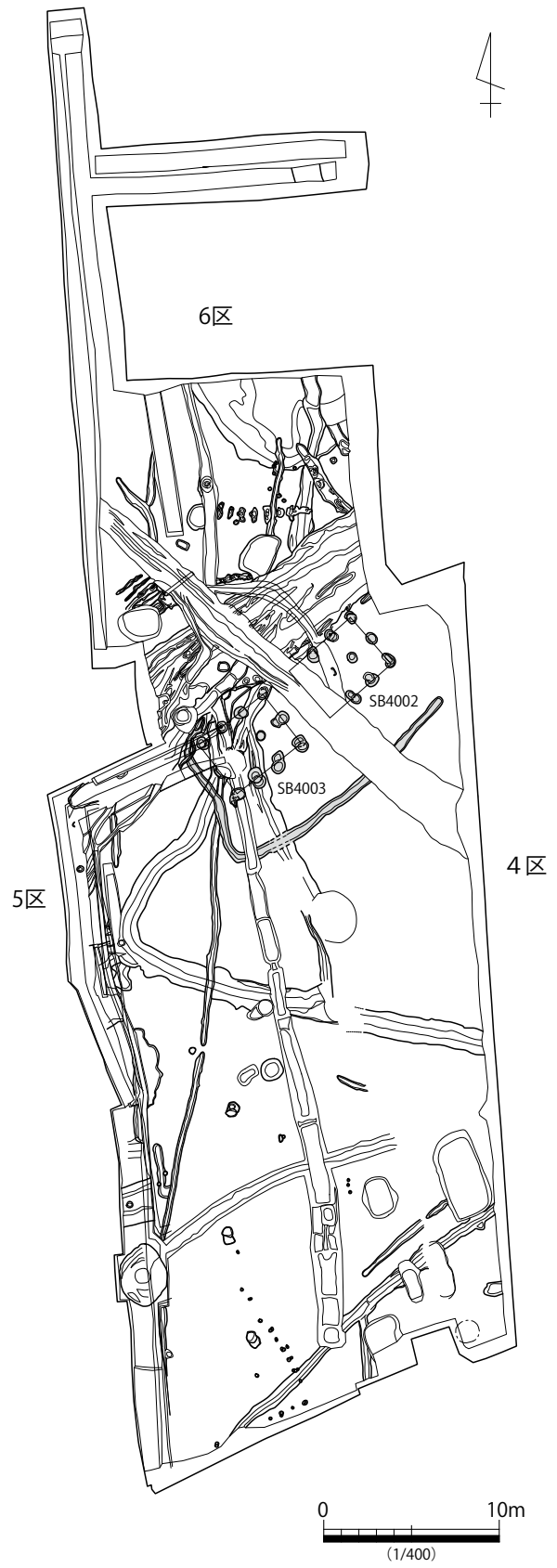
地割に合致する溝が確認でき、これらに前後するように地割周辺に地割線同方向の土坑状の遺構が形成される。これらの埋土に多数の礫が含まれることから、耕作に伴い出てくる礫などを投棄した廃棄土坑であると判断し、近世は現代と同様に、近隣には田畑が展開されていたと考えられる。

土坑出土遺物については、今回報告の中では十分に遺物が掲載できていないが、おおむね18世紀後半以降のものが多い。岸の上遺跡が高松藩領に位置することからも、焙烙や土師質土器皿には、東西それぞれの特徴がみられるほか、陶磁器についても、播鉢に堺産のものが入り、椀類も良質なものではない陶器が中心となることから、近世の香川県内の農村部の生活状況や流通状況を知るうえでは興味深い。

弥生時代

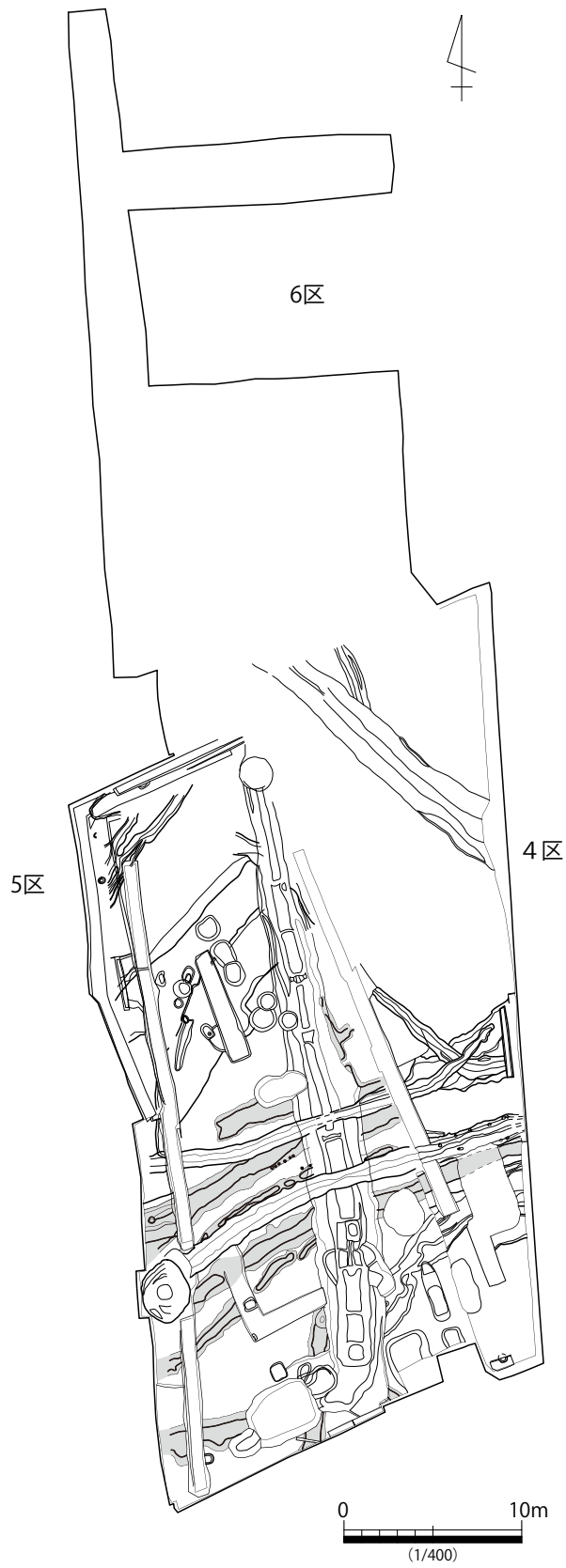


古墳時代後期

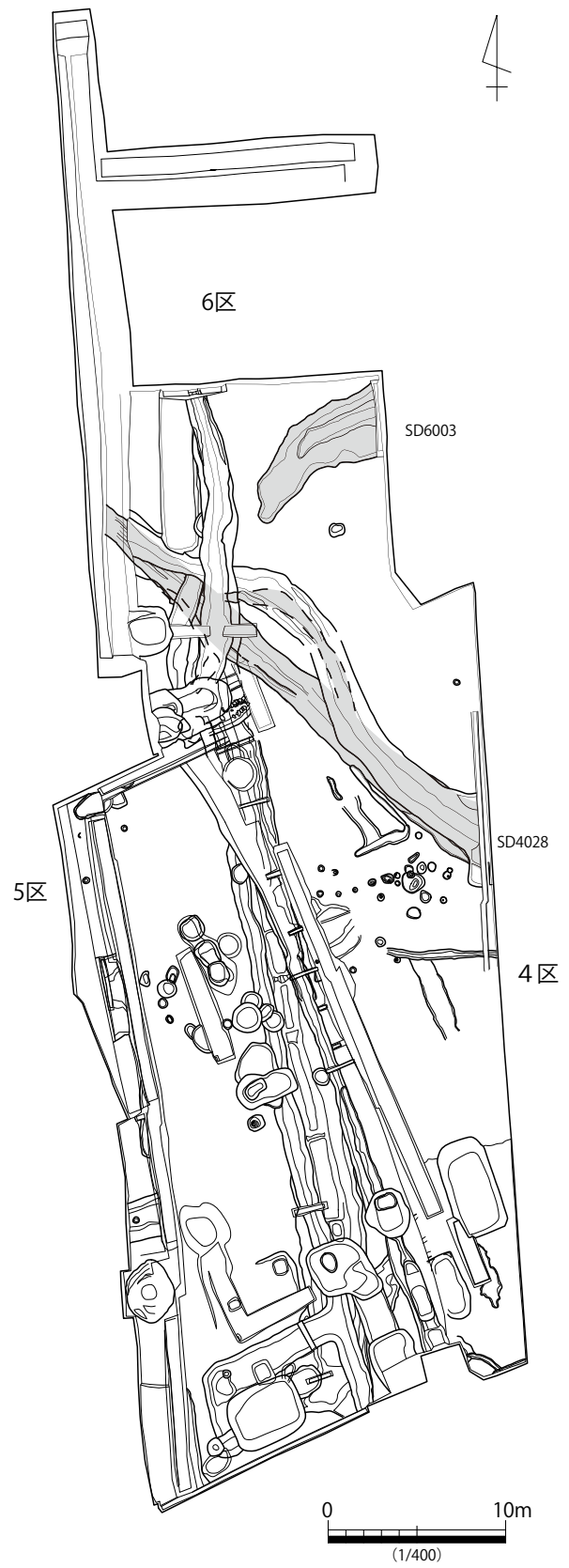


第 174 図 遺構の変遷 1

古墳時代終末期

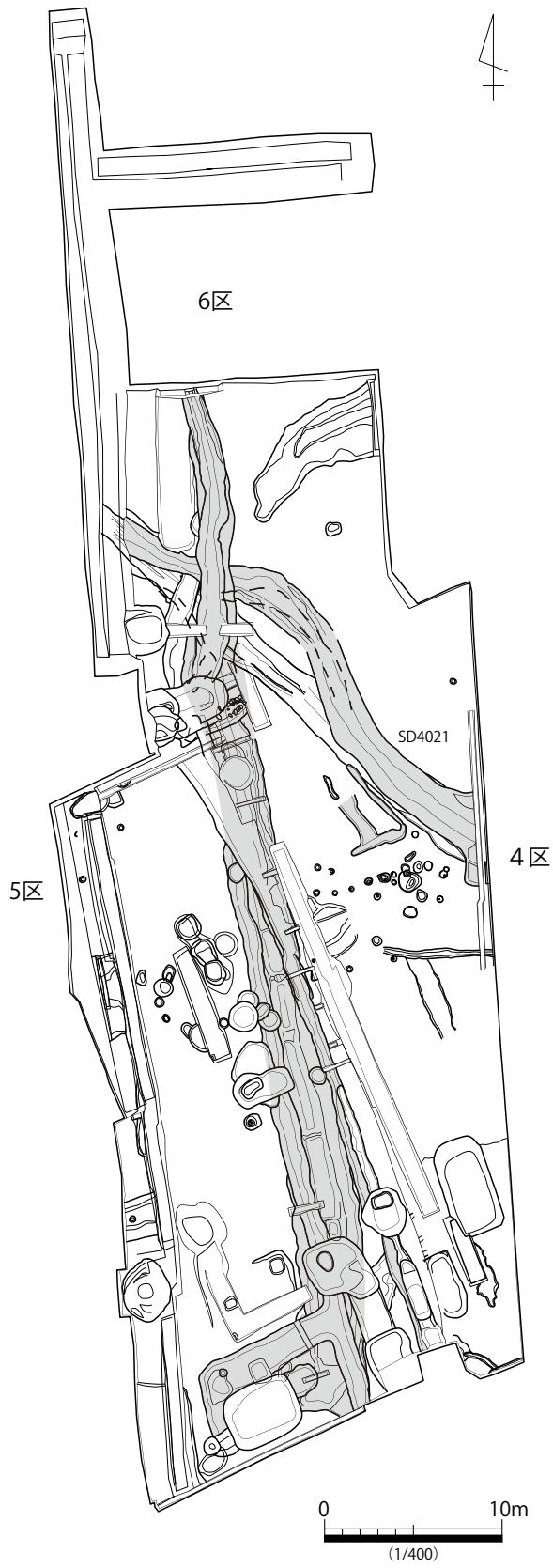


古代

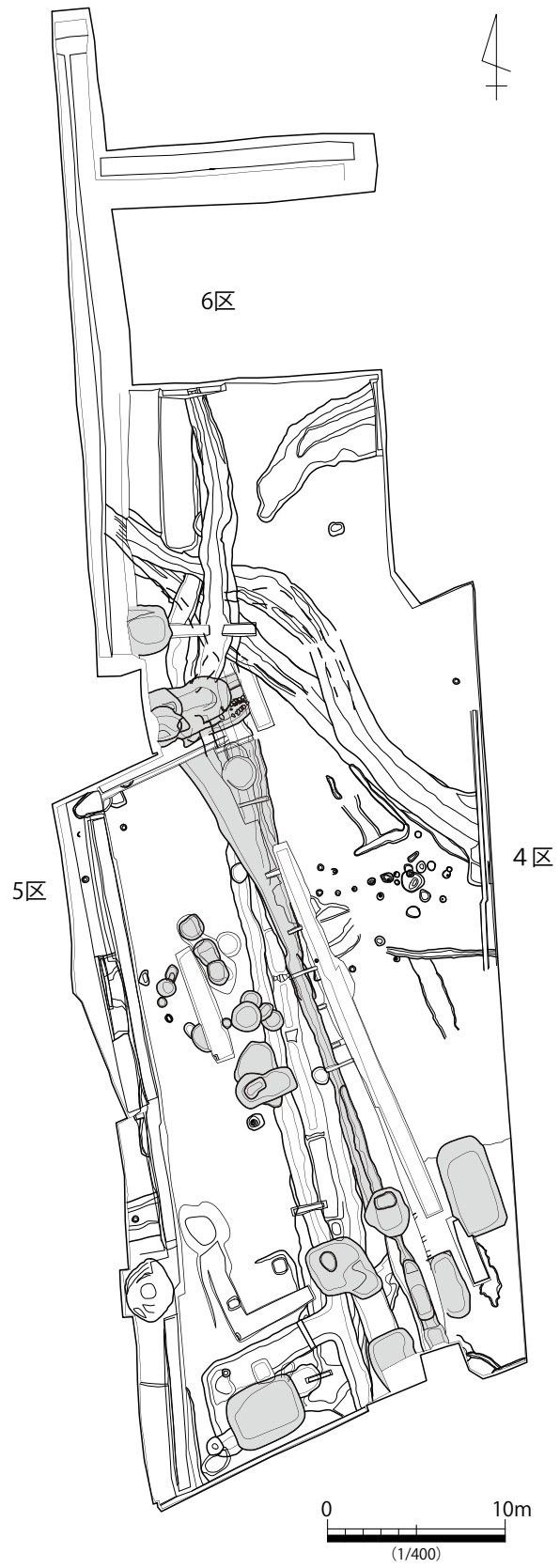


第175図 遺構の変遷2

中世



近世



第 176 図 遺構の変遷 3

第2節 SD4028 出土木簡と木製品について

今回調査において、特筆すべき遺物として、SD4028 出土の木簡が挙げられる。県内の古代遺跡の調査では、坂出市下川津遺跡で墨書がある木製品（転用品）及び刻書された木板が出土しているのみである。今回、奈良文化財研究所資料研究室のご協力のもと、木簡の赤外線写真撮影及び判読できる部分の積文を行い、そのうちの判読成果、それを受けての木簡の評価を行いたい。

木簡 1（報告番号 303）

SD4028 下層で出土した。上端切り折り、下端削り、右辺削り、左辺上部削り、左側下半破損。樹種はヒノキ。読み下しについては以下のとおりである

二升 荏油	□ □ □ □ □ □ □	〔此里カ〕	〔於井里丁八十一〕
└			
			十収

短冊型

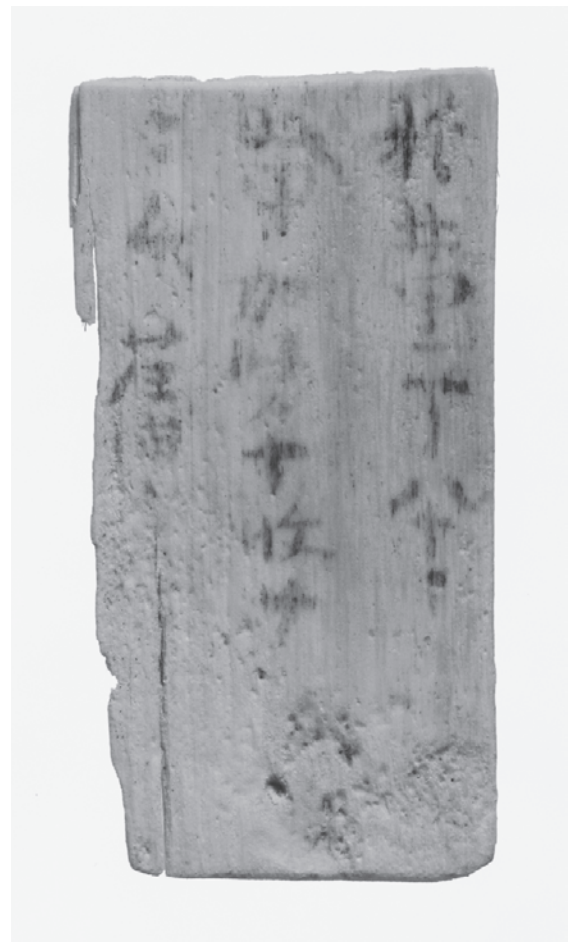
以上の判読からこれらが農業経営、ないしは郡レベルでの地域経営にかかわる内容を記載したものであった可能性が高い。

特に、鵜足郡には9箇所の郷があったとされるが、そのうちの一つ井上郷（木簡内では里として表記）に対しての記載があることから、さらに上位の鵜足郡衙、ないしはそれらに深くかかわる遺跡において出土する性格のものと考えられる。

出土状況については、投棄されたものが上流より流れ着いた状況ではなく、近隣にて投棄されたと考えられる。岸の上遺跡の今回調査・報告範囲の中では、官衙に相当する施設は確認できていないが、木簡以外の官衙を想起させるような遺物の存在や、南側で建物が多数復元されている状況から、郡衙の存在を遺跡の近辺に想定することが可能であろう。

岸の上遺跡の南側は、推定南海道を隔てて大型の建物が検出されており（香川県埋蔵文化財センター2018）、それらの存在や遺跡の所在する微高地がさらに西側に続く状況を考えると、このような内容の木簡が出土する性格の遺跡が周囲に展開していたと考えられる。

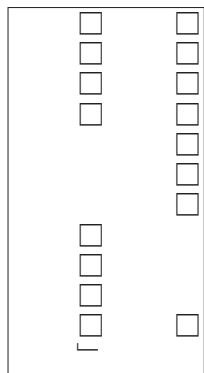
また、井上郷の表記が里であることから、郷という名称が使用される715年以前のものである可能性が高く、SD4028 下層の埋没時期であると想定される7世紀末～8世紀前半とおおむね一致する。



第177図 SD4028 出土木簡1 赤外線写真

木簡 2 (報告番号 302)

木簡 1 と同じく SD4028 下層で出土した。読み下しについては以下のとおりである。樹種はヒノキ科である。



短冊形 019 型式

判読できる部分については墨痕が確認でき、字数については想定できるものの、現状では判読できる文字はない。2行取りであることは判明しており、一部の文字については、「俵」「束」といった文字の可能性もある。

大きさからも元々文書等が記載されていたものと考えられる。上部は欠損しているが、埋没時や調査時の折れというよりは、木簡廃棄時に意図して折られたような状態であり、出土状況からも破片が周囲には確認できない。そういった状況も鑑みると、意図的に折られたものである可能性は高いといえる。

木簡を再利用することなく、意図的に破棄している状況が確認できるのであれば、これまで県内で見つかっている下川津遺跡などとは扱いが一部異なる。再利用可能なものを投棄することは、文書の管理がより厳密に行われているという考え方もできる。また、当初の木簡の法量についても、意図的な折りを想定するのであれば、倍の大きさである長さ 30cm ほどになり、比較的大型の部類のものとなりえる。

木簡 3 (報告番号 304)

肉眼では墨痕が確認できない。赤外線写真にて観察すると、部分的ではあるが墨痕が確認できる。行や字数などを検討する材料は全くないが、その形態については上部に抉りを持ち、荷札木簡である可能性が高い。



第 178 図 SD4028 出土木簡 2
赤外線写真

以上のような特徴を持つ木簡であるが、その特徴について整理すると、①文書や地域経営にかかわる内容のものであること②使用時から廃棄されるまでにほかの木製品として再利用された痕跡が見られな

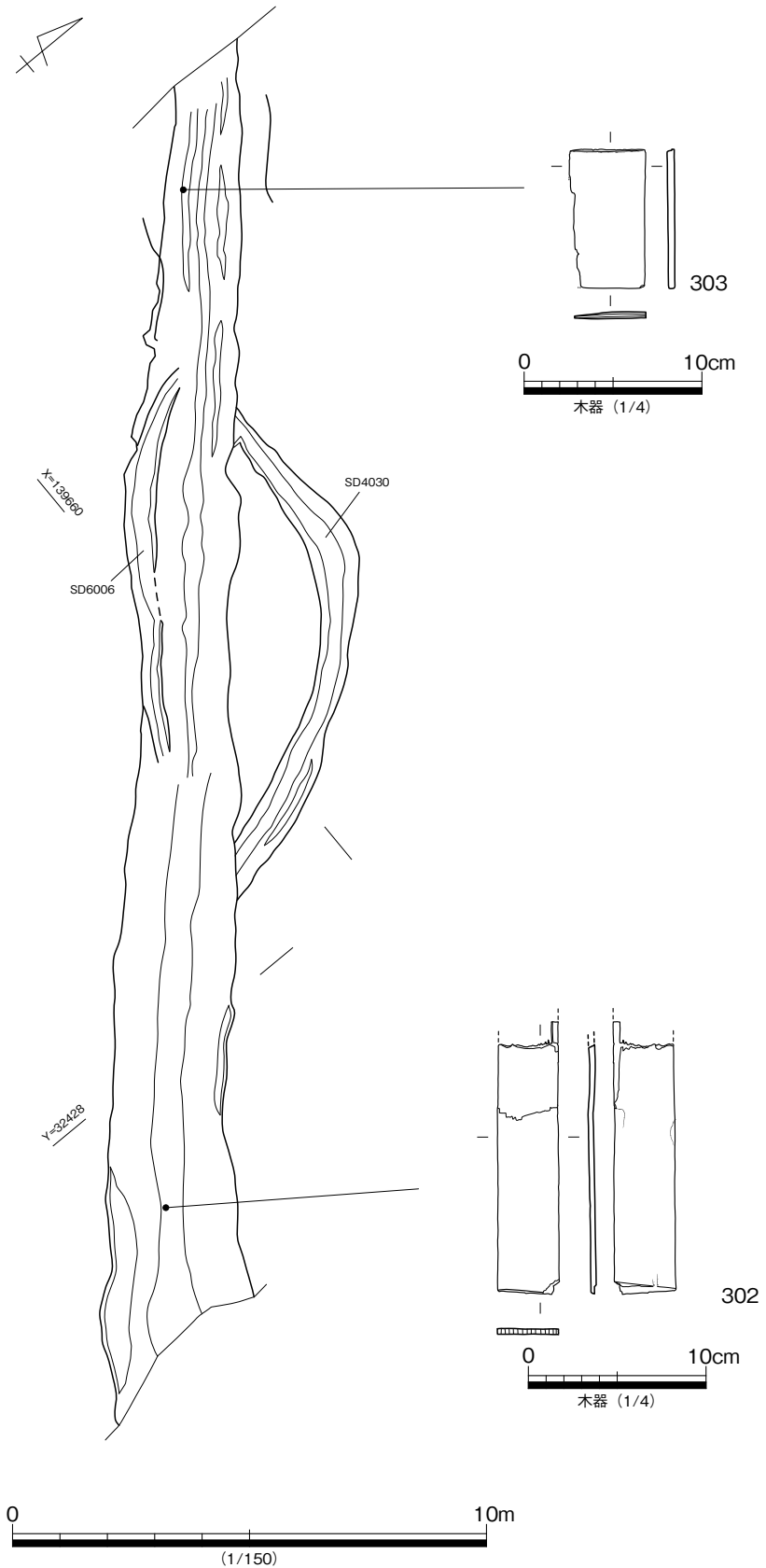
いことがあげられる。

木簡が出土した SD4028 からは、同一層から古代の祭祀具も含めた木製品が出土しているほか、ふいご羽口、製塩土器、蛸壺、暗文が施された土師器など、一般集落であまり見られない資料が散見される。

この他、後世の遺構からではあるが、石帯や瓦も SD4028 付近で出土している。

このうち土師器皿については、一部に川津一ノ又遺跡・下川津遺跡などで類似する特徴を持つ一群の土師器が出土しており、これらは讃岐産土師器と位置付けられている(片桐 1996)。鵜足郡内の遺跡に多く確認されており、岸の上遺跡については、遺跡全体の様相が不明な部分も多いが、川津遺跡群での出土量と比較すると、おそらくは川津遺跡群周辺から持ち込まれたものであろう。官衙に関連する遺物が出土するのみでなく、製塩土器や蛸壺など、遺跡の立地にかかわらず、様々なモノが集まっている状況も、岸の上遺跡の特徴であるといえる。

なお、岸の上遺跡が所在する鵜足郡内において、木簡が出土し、最も状況に近い下川津遺跡では、文字が書かれた木簡も転用され、使用し続けられている。こういった状況と岸の上遺跡にみられる状況は、県下全体に敷衍できるものではないが、少なくとも同一郡の中での官衙的性



第 179 図 SD4028 木簡出土地点

格を持つ遺跡間の差異としてとらえられる可能性があり、今後周辺の遺跡の実態解明と合わせ、検討していくべき課題である。

【主要参考文献】

- 尾上実 1983 「南河内の土器椀」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 北山健一郎・森下友子 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4集 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会
- 西岡達哉 2007 『一般国道 32 号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3集 吉野下秀石遺跡』香川県教育委員会
- 木下晴一 2016 『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 東坂元北岡遺跡 飯山北土居遺跡』香川県教育委員会
- 片桐孝浩 1997 「讃岐の土師器」『香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅴ』香川県埋蔵文化財調査センター
- 金田章裕 1989 「条里と村落生活」『香川県史 第1巻 原始・古代』香川県
- 蔵本晋司 2017 『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 北岸南遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 佐藤竜馬 1998 「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』古代学協会四国支部
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第4集 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2016 「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）9世紀前葉～11世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』香川県埋蔵文化財センター
- 香川県立ミュージアム 2017 『讃岐びと 時代を動かす - 地方豪族が見た古代世界 -』
- 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也ほか 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊 下川津遺跡』香川県教育委員会
- 松村恵司 1983 「古代の稲倉について」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 30 周年記念論文集刊行会
- 丸亀市教育委員会 2014 「第Ⅲ章 飯山町上真時字早川地区試掘調査」『丸亀市内遺跡発掘調査報告書』第11集
- 山下平重 1997 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第26冊 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会
- 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 山中敏史 1995 「国府・郡衙跡調査研究の成果と課題」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立 40 周年記念論文集刊行会
- 山本信夫 1995 「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山元素子 2007 『一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1集 佐古川・窪田遺跡』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター 2018 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 28 年度』

表5 土器観察表1

観文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調				胎土						法量 (cm)																
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)													
1	6区	包含層 2a層	土師器	蛸壺	指オサエ	指ナデ	75YR6/6 橙	75YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
3	5区	包含層 3a層	須恵器	坏	口縁~体: 回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
4	5区北	包含層 3b層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
5	5区南	包含層 4層	弥生土器	壺	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/4 浅黄橙	2.5YR8/3 淡黄	中・多	無	無	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
7	4-2区	SD4001	-	須恵器	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
8	4-2区	SD4002	-	土師器	口縁: 不明(マメツ) 体: ハラミカガキ、 底: 不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
9	4-2区	SD4002	-	土師器	ハケメ	不明(マメツ)	7.5YR6/4 浅黄橙	10YR6/2 灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
10	4-2区	SD4002	-	土師器	口縁: 横ナデ、 体: ハケメ	不明	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
11	4-1区	SD4005	-	土師質	なで?	線刻	7.5 Y R 8/3 浅黄橙	7.5 Y R 8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
12	4-1区	SD4005	-	土師器	不明	不明(マメツ)	7.5YR5/4 浅黄橙	7.5YR5/4 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
13	4-1区	SD4005	-	中国産白磁	施釉	施釉	7.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
19	4-4区	SD4011	-	土師器	口縁: ナデ、他: 不明	不明	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
20	4-3区	SE4001	1層	土師器	指オサエ後ナデ	板ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
22	4-3区	SE4001	1層	須恵器	格子タタキ	当て具痕	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
23	4-3区	SE4001	1層	土師器	口縁: ヨコナデ、体: 調整なし(指の痕あり)	ハケ目後口縁: ヨ コナデ、頸: ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
24	4-3区	SE4001	1層	土師器	口縁: ヨコナデ、口 縁下: 指オサエ	ハケ目後ナデ	5YR7/8 橙	2.5YR6/8 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
25	4-3区	SE4001	1層	土師器	ヨコナデ後体ナデ	ナデ?	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
26	4-3区	SE4001	1層	土師器	ナデ	体: ナデ、口 縁: ヨコナデ	10YR7/3 浅黄橙	10YR7/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
27	4-3区	SE4001	-	白磁	施釉	施釉	釉: 10GY8/1 明緑灰	胎土: N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
29	4-3区	SE4001	3層	土師器	ナデ	ハケメ	5Y5/1 灰	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
30	4-3区	SE4001	3層	土師器	体: 回転ナデ、底: 回転ヘラキ	回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
31	4-3区	SE4001	3層	土師器	指オサエ後ナデ	板ナデ後おろし目	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
39	4-2区	SX4002	-	灰釉陶器	胴上半: 回転ナデ、胴 下半: 回転ヘラ削り	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
41	4-4区	SX4004	-	須恵器	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
42	4-4区	SX4004	-	土師器	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
43	4-4区	SX4004	-	須恵器	口縁: 回転ナデ、体: 平行タタキ後ナデ	体: 指オサエ後回転ナ デ、口縁: 回転ナデ	5Y6/ 灰	10YR6/4 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
45	4-4区	SX4004	-	土師質	ヨコナデ、型成 型、指オサエ	ナデ、板ナデ	7.5YR6/4 浅黄橙	7.5YR6/4 浅黄橙	中・小	細・少	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
46	4-1区	SD4004	-	土師器	口縁: 回転ナデ、他 不明(マメツ)	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
47	4-1区	SD4004	-	土師器	口縁~体: 回転ナ デ、底: 回転ヘ ラ削り後ナデ	口縁~体: 回転ナ デ、底: ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48	4-1区	SD4004	-	土師器	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
49	4-1区	SD4004	-	龍泉窯青磁	刻花文、施釉	施釉	釉: 5Y5/3 灰 オリーフ	胎土: 2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 2

報文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整			色調			胎土						法量 (cm)			
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)
50	4-1区	SD4004	-	中国産 白磁	碗	回転ヘラケズリ	施釉	釉: 5Y6/2 灰 オリーブ	胎土: 5Y7/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
51	4-1区	SD4004	-	中国産 白磁	皿	施釉	施釉	釉: 5Y7/2 灰白	胎土: 5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
52	4-1区	SD4004	-	西村産 須恵器	碗	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
53	4-1区	SD4004	-	土師器	碗	口縁: ヨコナ デ, 体: ナデ	ハケメ後ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
54	4-1区	SD4004	-	西村産 須恵器	碗	不明 (マメツ)	ハケメ	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
55	4-1区	SD4004	-	土師器	碗	高台: ヨコナ デ, 不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
56	4-1区	SD4004	-	土師器	碗	高台: ヨコナ デ, 他不明	ナデ	10YR8/2 灰白	7.5YR7/1 明褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
57	4-1区	SD4004	-	土師器	碗	体: 指オサエ後ナ デ, 高台: 横ナデ、 底: 型離れ後ナデ	板ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
58	4-1区	SD4004	-	瓦器	碗	体: 指オサエ、 底: ヨコナデ	ヘラミガキ	N5/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
59	4-1区	SD4004	-	亀山焼	甕	格子タタキ	同心円タタキ	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
60	4-1区	SD4007	-	西村産 須恵器	碗	回転ナデ	ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
61	4-4区	SD4010	-	土師器	足釜	口縁下: 指オサエ、 他: 不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
62	4-4区	SD4024	-	土師器	皿	底: 板状圧痕?、 他: 回転ナデ	回転ナデ	25YR6/6 橙	25YR7/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
63	4-4区	SD4025	-	土師器	杯	体上半: 回転ナ デ, 下半: ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
64	4-4区	SD4025	-	土師器	碗	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
65	4-4区	SD4021	上層	瓦器	碗	口縁: ヨコナデ、 指オサエ後ヘラミガキ	体: 指オサエ後ヘラミガキ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
66	4-4区	SD4021	上層	黒色土 器A類	碗	不明 (マメツ)	ヘラミガキ	5YR8/4 淡橙	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
67	4-4区	SD4021	上層	土師器	甕	口縁: ヨコナ デ, 指オサエ	ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
68	4-4区	SD4021	-	土師器	皿	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
69	4-4区	SD4021	-	土師器	小皿	口縁~体: 回転ナ デ, 底: 回転ヘ ラ切り後ナデ	回転ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
70	4-4区	SD4021	-	土師器	皿	口縁: 回転ナデ、 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
71	4-4区	SD4021	-	土師器	皿	口縁~体: 回転ナ デ, 底: 回転ヘ ラ切り	回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
72	4-4区	SD4021	-	土師器	皿	口縁: 回転ナデ、 ヘラ切り後板目圧痕	回転ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
73	6区	SD4021	-	須恵器	杯	口縁~体: 回転ナ デ, 底: ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

土器観察表3

観文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整			色調			胎土						法量 (cm)			
						外面	内面	内部	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)
74	44区	SD4021	-	土師器	碗	体：不明(マメツ)、高台：回転ナデ、底：型離れ・ナデ	不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	25Y6/1 黄灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.2	-	-	-
75	44区	SD4021	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	6.3	-	-	-
76	6区	SD4021	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	-	-
77	44区	SD4021	-	黒色土器A類	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y8/2 灰白	75Y4/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.4	-	-	-
78	44区	SD4021	-	中国産白磁	皿	口縁～体：施釉、底：無釉	施釉	釉：5Y8/2 灰白	胎土：25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	3.9	-	-	-
79	44区	SD4021	-	土師器	杯	底：ヘラキリ?、他：回転ナデ	回転ナデ	25Y6/1 黄灰	10YR7/2 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	10.0	-	-	-
80	44区	SD4021	-	土師器	碗	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ	回転ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
81	44区	SD4021	-	吉備系土師器	碗	口縁～体上半：回転ナデ、体下半：指オサエ、高台：回転ナデ、底：ナデ	板ナデ後ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/3 浅黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
82	44区	SD4021	-	西村産須恵器	碗	横ナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR8/2 灰白	25Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	16.2	-	-	-
83	44区	SD4021	-	瓦器	碗	体：指オサエ、底：ヨコナデ	ナデ後ヘラミガキ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	5.2	-	-	-
84	44区	SD4021	-	黒色土器A類	碗	底：ナデ、他：ヨコナデ	ナデ後ヘラミガキ	10YR8/2 灰白	N2/ 黒	-	-	-	-	-	-	-	-	5.6	-	-	-
85	44区	SD4021	-	瓦器	碗	指オサエ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	N7/ 灰白	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	5.8	-	-	-
86	44区	SD4021	-	山茶碗	碗	体：回転ナデ、底：回転糸切り	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	8.2	-	-	-
87	44区	SD4021	-	瓦器	碗	口縁～体：ヘラミガキ、底：横ナデ	ヘラミガキ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.0	-	-	-
88	44区	SD4021	-	瓦器	碗	体：指オサエ後ヘラミガキ、高台：横ナデ、底：ナデ	ヘラミガキ	N7/ 灰白	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	6.3	-	-	-
89	44区	SD4021	-	瓦器	碗	口縁、横ナデ後ヘラミガキ、体：指オサエ後ヘラミガキ、底：横ナデ	ナデ後ヘラミガキ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	15.6	5.3	-	-
90	6区	SD4021	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	14.7	-	-	-
91	6区	SD4021	-	須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底：回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	13.0	2.0	-	-
92	6区	SD4021	-	須恵器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	11.4	3.9	-	-
93	44区	SD4021	-	土師器	高杯	口縁：ヨコナデ、体：ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヨコナデ後ヘラミガキ	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	26.1	-	-	-
94	44区	SD4021	-	須恵器	平瓶	不明(自然釉)	不明(自然釉)	10Y3/1 オリーブ黒	10Y3/1 オリーブ黒	-	-	-	-	-	-	-	-	8.4	-	-	-
95	6区	SD4021	-	須恵器	平瓶	ヘラケズリ	ヘラケズリ	75Y6/1 灰	75Y4/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
96	6区	SD4021	-	土師器	飯蛸壺	指オサエ	指オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	75YR7/4 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
97	44区	SD4021	-	土師器	?	体：板ナデ、底：回転ヘラ切り	指オサエ後ナデ	25Y8/3 淡黄	25Y8/3 淡黄	-	-	-	-	-	-	-	-	4.0	-	-	-
98	6区	SD4021	-	須恵器	甕(転用甕)	格子タタキ後ナデ	同心円タタキ	N6/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 4

報文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)												
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)						
99	6区	SD4021	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
100	6区	SD4021	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N8/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
101	4-4区	SD4021	-	土師器	釜	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ 頸：ヨコナデ、体：同心円タタキ	不明(マメツ)	10YR7/3にぶい、黄橙	25Y7/3浅黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
102	6区	SD4021	-	須恵器	甕	口縁：ヨコナデ、体：不明(自然釉) 体上半：格子タタキ 後ナデ、下半：ナデ、底：不明(未調整)	板ナデ	N7/灰白	N8/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
103	4-4区	SD4021	-	須恵器	鉢	口縁：不明(マメツ)、体：指オサエ	不明(マメツ)	7.5YR5/3にぶい、褐	10YR7/2にぶい、黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
104	4-4区	SD4021	-	土師器	甕	指オサエ	不明(マメツ)	5YR7/6橙	10YR7/3にぶい、黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
105	6区	SD4021	-	土師器	甕	口縁：不明(マメツ)、体：ハケメ	不明(マメツ)	2.5Y4/1黄灰	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
106	4-4区	SD4021	-	土師器	甕	口縁：不明(マメツ)、体：指オサエ	不明(マメツ)	7.5YR7/6橙	10YR6/3にぶい、黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
107	6区	SD4021	-	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体：ハケメ	不明(マメツ)	10YR5/2灰黄褐	10YR5/1褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
108	4-4区	SD4021	-	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ	不明(マメツ)	5YR5/3にぶい、赤褐	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
109	4-4区	SD4021	-	須恵器	甕	平行タタキ	タタキ後ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
113	4-4区	SK4001	-	土師器	皿	回転ナデ	回転ナデ?	N5/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
114	4-4区	SK4001	-	瓦器	碗	ヨコナデ後へラミガキ	ヨコナデ後へラミガキ	N4/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
115	4-4区	SK4001	-	瓦器	碗	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ	不明(マメツ)	N4/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
116	4-4区	SK4001	-	土師器	甕	指オサエ後横ナデ	板ナデ	2.5Y6/3にぶい、黄	2.5Y6/3にぶい、黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
117	4-4区	SK4002	-	土師器	高杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/6橙	2.5YR6/8橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
118	4-4区	SK4002	-	瓦器	碗	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ	ヨコナデ後へラミガキ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
119	4-1区	SP4004	-	土師器	皿	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
120	4-1区	SP4004	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR7/2にぶい、黄橙	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
121	4-1区	SP4004	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR6/2灰黄褐	10YR6/1褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
122	4-1区	SP4006	-	瓦器	碗	口縁：横ナデ、体：指オサエ後へラミガキ、高台：横ナデ、底：ナデ	へラミガキ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
123	4-1区	SP4006	-	瓦器	碗	口縁：横ナデ、体：指オサエ後へラミガキ	へラミガキ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
124	4-1区	SP4007	-	灰釉陶器	碗	回転ナデ	回転ナデ、自然釉	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
125	4-4区	SP4016	-	土師器	皿	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
126	4-4区	SP4016	-	土師器	皿	口縁：回転ナデ、底：回転へラ切り	回転ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
127	4-4区	SP4017	-	瓦器	碗	高台：ヨコナデ、底：指オサエ	へラミガキ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
128	4-4区	SP4017	-	土師器	碗	回転ナデ、へラミガキ	回転ナデ、すず付着	N4/灰	N3/暗灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
129	4-4区	SP4018	-	土師器	皿	口縁：回転ナデ、底：不明(マメツ)	回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
130	4-4区	SP4018	-	土師器	鍋	口縁：不明(マメツ)、体：指オサエ	板ナデ	10YR5/1褐灰	10YR5/1褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表5

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調			胎土						法量 (cm)		
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)
131	44区	SP4021	-	瓦器	碗	不明(マメツ)	ハラミガキ	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	14.9	-	-	-
132	44区	SP4022	-	黒色土 器A類	碗	不明(マメツ)	ハラミガキ	5Y8/1灰白	N3/暗灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
133	44区	SP4024	-	土師器	鍋	口縁:横ナデ、体: 指オサエ後ナデ	不明(マメツ)	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	-	-	-	-	-	-	38.8	-	-	-
135	44区	SP4025	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	14.4	-	-	-
136	44区	SP4026	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y8/1灰白	25Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	15.9	-	-	-
137	44区	SP4027	-	土師器	皿	口縁:回転ナデ、 底:回転ヘラ切り	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	8.8	1.1	6.6	-
138	44区	SP4027	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
139	44区	SP4027	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y7/2灰黄	25Y7/2灰黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
140	44区	SP4027	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	16.1	-	-	-
141	44区	SP4029	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR8/3淡橙	N3/暗灰	-	-	-	-	-	-	13.7	-	-	-
142	44区	SP4030	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	12.8	-	-	-
143	44区	SP4030	-	瓦器	碗	口縁部:横ナデ後へ ラミガキ、体:指 オサエ(マメツ)	ハラミガキ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	-	-	-	-	-	-	16	-	-	-
144	44区	SP4033	-	瓦器	碗	ハラミガキ	不明(マメツ)	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
145	44区	SP4035	-	土師器	皿	底:ナデ?、他: 回転ナデ	回転ナデ	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	8.2	1.2	6.0	-
146	44区	SP4035	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
147	44区	SP4035	-	土師器	碗	底:ヨコナデ、 体:未調整	ナデ	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
148	44区	SP4035	-	須恵器	壺	口縁~体:回転ナデ、 底:回転ヘラ削り	口縁~体:回転ナデ、 底:指オサエ後板ナデ	7.5Y7/1灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	8.4	13.9	-	-
149	44区	SD4028	最上層	須恵器	杯蓋	口縁:回転ナデ、天 井下半:回転ヘラ 削り、上半:ナデ	ナデ	5Y6/1灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	16.2	3.2	-	-
150	6区	SD4028	上層	須恵器	杯	口縁~体:回転ナ デ、底:回転ヘ ラ削り後ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	13.0	4.1	9.2	-
151	6区	SD4028	上層	土師器	壺	体:不明(マメ ツ)、底:ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	8.8	-
152	6区	SD4028	上層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	13.7	-	-	-
153	6区	SD4028	上層	須恵器	杯	体:回転ナデ、底:ナデ	体:回転ナデ、底:ナデ	5Y7/1灰白	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	10.0	-
154	4区	SD4028	上層	須恵器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	13.4	-
155	6区	SD4028	上層	土師器	皿	口縁:回転ナデ、 底:ハラケズリ	回転ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	-	-	-	-	-	-	-	-	9.0	-
156	6区	SD4028	上層	土師器	高台付杯	横ナデ	不明(マメツ)	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	17.3	-
157	6区	SD4028	上層	須恵器	壺	高台内側:回転ナ デ、底:ハラミガキ	指オサエ後ナデ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
158	4区	SD4028	上層	須恵器	壺	体上半:回転ナ デ、下半:回転ヘ ラ削り、高台:回 転ナデ、底:ナデ	回転ナデ	N4/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	8.3	-
159	4区	SD4028	上層	須恵器	甕	口頸:横ナデ、 体:カキメ	口頸:横ナデ、体: 同心円タタキ	N8/灰白	5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	22.6	-	-	-

土器観察表 6

報文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)
160	6区	SD4028	上層	土師器	鍋	口縁：ハケメ後ヨコナデ、体：ハケメナデ	口縁：ハケメ後ナデ、体：ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	内部 10YR7/4にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	31.3	-	-	-
162	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	口縁：ハケメ後ヨコナデ、体：ハケメナデ、下半：ヘラ削り	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	10.2	-	-	-
163	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	口縁～体：回転ナデ、天井：ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1灰白	2.5Y6/1黄灰	-	-	-	-	-	-	10.5	3.1	-	-
164	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	回転ナデ	口縁：回転ナデ、天井：ナデ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	14.0	-	-	-
165	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	不明(自然釉)	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	13.6	-	-	-
166	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N3/暗灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
167	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、天井：ナデ、内半：回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	16.3	-	-	-
168	6区	SD4028	中層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
169	6区	SD4028	中層	須恵器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	12.8	-	-	-
170	6区	SD4028	中層	須恵器	鉢	ナデ	ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	8.0	-	-	-
171	6区	SD4028	中層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	14.8	-	-	-
172	6区	SD4028	中層	須恵器	杯	体：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
173	6区	SD4028	中層	須恵器	高台付杯	高台：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ後ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
174	6区	SD4028	中層	須恵器	高台付杯	体～高台：回転ナデ、底：不明(マメツ)	回転ナデ	2.5Y6/2灰黄	5Y4/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
175	6区	SD4028	中層	須恵器	高台付杯	体～高台：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ後ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
176	6区	SD4028	中層	須恵器	高台付杯	体～高台：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
177	6区	SD4028	中層	須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、天井：回転ナデ	回転ナデ	2.5Y5/1黄灰	7.5YR5/4にぶい褐	-	-	-	-	-	-	25.6	-	-	-
178	6区	SD4028	中層	須恵器	盤	体：回転ナデ、下半：回転ナデ、底：回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
179	6区	SD4028	中層	土師器	皿	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
180	6区	SD4028	中層	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
181	6区	SD4028	中層	土師器	皿	口縁：横ナデ、底：ヘラ削り	横ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
182	6区	SD4028	中層	土師器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：ヘラ削り	回転ナデ後ヘラミガキ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	18.8	-	-	-
183	6区	SD4028	中層	土師器	皿	回転ナデ	回転ナデ後ヘラミガキ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	-	-	-	-	-	-	19.7	-	-	-
184	6区	SD4028	中層	土師器	蜻蛉	ナデ	ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/3浅黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
185	6区	SD4028	中層	須恵器	甕	体上半：回転ナデ、下半：回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
186	6区	SD4028	中層	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1灰白	2.5Y6/1黄灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
187	6区	SD4028	中層	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 7

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整			色調		胎土						法量 (cm)									
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)					
188	6区	SD4028	中層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N8/灰白	N8/灰白	-	-	-	-	-	-	9.9	-	-	-	-	-	-	-	-		
189	6区	SD4028	中層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/1褐灰	10YR5/1褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
190	6区	SD4028	中層	土師器	甕	不明(剥落)	ハケメ	10YR6/2灰黄褐	10YR4/1褐灰	-	-	-	-	-	-	17.1	-	-	-	-	-	-	-	-		
191	6区	SD4028	中層	須恵器	甕	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	21.8	-	-	-	-	-	-	-	-		
192	6区	SD4028	中層	須恵器	横瓶	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	10.1	-	-	-	-	-	-	-	-		
193	6区	SD4028	中層	須恵器	横瓶	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	9.4	-	-	-	-	-	-	-	-		
194	6区	SD4028	中層	須恵器	甕	口縁:横ナデ、体: 平行タタキ	口縁:横ナデ、体: 同心円タタキ	N5/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-		
195	6区	SD4028	中層	須恵器	甕	横ナデ	横ナデ	5Y7/2灰白	7.5Y7/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
196	6区	SD4028	中層	須恵器	甕	口縁:横ナデ、体: 不明(自然釉)	口縁:横ナデ、体: 同心円タタキ	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	19.6	-	-	-	-	-	-	-	-		
198	6区	SD4028	下層	須恵器	杯蓋	口縁:回転ナデ、天 井;回転ヘラ切り 後回転ナデ	口縁:回転ナデ、天 井;回転ヘラ切り 後回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	13.3	-	-	-	-	-	-	-	-		
199	6区	SD4028	下層	須恵器	杯蓋	口縁:つまみ;回 転ナデ、天井;回 転ヘラ削り	口縁:つまみ;回 転ナデ、天井;回 転ヘラ削り	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
200	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	12.8	-	-	-	-	-	-	-	-		
201	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	12.9	-	-	-	-	-	-	-	-		
202	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	体:回転ナデ、 底:板ナデ	体:回転ナデ、 底:板ナデ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	8.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
203	6区	SD4028	下層	須恵器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	5Y5/1灰	-	-	-	-	-	-	15.1	-	-	-	-	-	-	-	-		
204	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	口縁~体:回転ナ デ、底:回転ヘ ラ切り後ナデ	口縁~体:回転ナ デ、底:回転ヘ ラ切り後ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	3.4	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
205	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	口縁~体:回転ナ デ、底:回転ヘ ラ切り後板ナデ	口縁~体:回転ナ デ、底:回転ヘ ラ切り後板ナデ	N7/灰白	N6/灰	-	-	-	-	-	-	3.3	6.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
206	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	体:回転ナデ、 底:板ナデ	体:回転ナデ、 底:板ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
207	6区	SD4028	下層	須恵器	高台付杯	口縁~高台:回転 ナデ、底:回転ヘ ラ切り後ナデ	口縁~高台:回転 ナデ、底:回転ヘ ラ切り後ナデ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	12.6	3.9	8.0	-	-	-	-	-	-	-	
208	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	口縁~高台:回転 ナデ、底:回転 ナデ	口縁~高台:回転 ナデ、底:回転 ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	12.8	4.3	8.8	-	-	-	-	-	-	-	
209	6区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁~体:ナデ後へ ラミガキ、底:へ ラ削り後へラミ ガキ	口縁~体:ナデ後へ ラミガキ、底:へ ラ削り後へラミ ガキ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	10.3	2.9	6.9	-	-	-	-	-	-	-	
210	6区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁~体:回転ナ デ、底:へラ削り 後へラミガキ	口縁~体:回転ナ デ、底:へラ削り 後へラミガキ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	12.8	3.9	9.5	-	-	-	-	-	-	-	
211	6区	SD4028	下層	土師器	杯	横ナデ	横ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	-	-	-	-	-	-	15.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
212	6区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁:ヨコナデ、 体:ハケメ、底: 型離れ後ナデ	口縁:ヨコナデ、 体:ハケメ、底: 型離れ後ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	12.6	-	8.5	-	-	-	-	-	-	-	
213	6区	SD4028	下層	土師器	杯	ナデ	板ナデ	2.5Y5/3黄褐	2.5Y5/3黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
214	6区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁:回転ナ デ、体:へラケ ス後へラミガキ	口縁:回転ナ デ、体:へラケ ス後へラミガキ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	13.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 8

報文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)					
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)
215	4区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：手持ちへら削り	回転ナデ	25YR6/6 橙	25Y7/3 浅黄	-	-	-	-	-	17.4	5.4	12.9	-	-	-
216	6区	SD4028	下層	土師器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：へら削り	回転ナデ後へらミガキ	5YR6/6 橙	25YR5/6 明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
217	6区	SD4028	下層	土師器	皿	口縁：横ナデ、底：へら削り	横ナデ後へらミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	20.8	-	18.3	-	-	-
218	6区	SD4028	下層	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	20.7	-	-	-	-	-
219	6区	SD4028	下層	須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、底：へら削り	口縁：回転ナデ、天井：ナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	23.0	-	-	-	-	-
220	6区	SD4028	下層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
221	6区	SD4028	下層	須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底：へら削り	回転ナデ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
222	6区	SD4028	下層	須恵器	鉢	口縁～体：回転ナデ、底：へら削り	口縁～体：回転ナデ、底：ナデ	2.5Y4/1 黄灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	18.6	9.8	12.8	-	-	-
223	6区	SD4028	下層	須恵器	鉢	口縁～体：回転ナデ、底：へら削り	口縁～体：回転ナデ、底：回転ナデ後ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	20.0	6.0	11.0	-	-	-
224	6区	SD4028	下層	須恵器	平瓶	回転ナデ	口縁：回転ナデ、底：不明(自然釉)	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	7.7	-	-	-	-	-
225	6区	SD4028	下層	須恵器	平瓶	不明(自然釉)	不明(自然釉)	N6/ 灰	7.5Y2/1 黒	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
226	6区	SD4028	下層	須恵器	高杯	回転ナデ	体：回転ナデ、底：回転ナデ後ナデ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
227	6区	SD4028	下層	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
228	6区	SD4028	下層	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	8.8	-	-	-
229	6区	SD4028	下層	土師器	高坏	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
230	6区	SD4028	下層	須恵器	甕	口縁：回転ナデ、底：平行タタキ後カキ目	口頸：回転ナデ、体：同心円タタキ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	18.4	-	-	-	-	-
231	6区	SD4028	下層	須恵器	横瓶	平行タタキ後カキ目	同心円タタキ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
232	6区	SD4028	下層	土師器	把手	指オサエ	-	10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
233	6区	SD4028	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体：ハケメ	口縁：ハケメ、体：板ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
234	6区	SD4028	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体：ハケメ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体：板ナデ	N3/ 暗灰	10YR5/2 灰黄褐	-	-	-	-	-	28.8	-	-	-	-	-
235	6区	SD4028	下層	土師器	瓶	口縁：ヨコナデ、体：ハケメ	口縁：ハケメ後ナデ、体：ハケメ後ナデ、下半：へら削り	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	24.1	-	-	-	-	-
236	6区	SD4028	下層	土師器	飯蛸壺	指オサエ	指オサエ	10YR6/2 灰黄褐	10R3/4 暗赤	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
237	6区	SD4028	下層	土師器	飯蛸壺	ナデ	指オサエ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
238	6区	SD4028	下層	製埴土器	-	指オサエ	不明	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
239	6区	SD4028	下層	ふいご羽口	-	指オサエ	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
240	4区	SD4028	最下層	須恵器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：回転へら削り	回転ナデ	N4/ 灰	5Y4/1 灰	-	-	-	-	-	13.6	-	-	-	-	-
241	4区	SD4028	最下層	土師器	甕	口縁：ハケメ後口縁～頸上端ヨコナデ	口縁：ハケメ後端部：ヨコナデ、胴：板ナデ	2.5Y4/1 黄灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	18.6	-	-	-	-	-
242	6区	SD4028	流路1	須恵器	高台付杯	体～高台：回転ナデ、底：ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/2 灰黄	-	-	-	-	-	-	-	9.2	-	-	-

土器観察表 9

観文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土						法量 (cm)					
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)
243	6区	SD4028	流路1	須恵器	高台付杯	体~高台:回転ナデ、底:回転ナデ後ナデ	体:回転ナデ、底:回転ナデ後ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	10.9	-	-	-	
244	6区	SD4028	流路1	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y4/1灰	2.5Y5/1黄灰	-	-	-	-	-	-	-	11.9	-	-	-	
245	6区	SD4028	流路1	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	14.2	-	-	-	
246	6区	SD4028	流路1	須恵器	皿	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	2.5Y6/1黄灰	-	-	-	-	-	-	-	20.8	-	-	-	
247	6区	SD4028	流路1	須恵器	壺	不明(自然釉)	回転ナデ	7.5Y4/2灰オリーブ	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
248	6区	SD4028	流路1	土師器	飯蛸壺	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
249	6区	SD4028	流路1	土師器	甕	口縁:ヨコナデ、体:ハケメ	口縁:ハケメ後ナデ、体:ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	-	-	-	-	-	-	-	31.3	-	-	-	-
250	6区	SD4028	流路2	土師器	皿	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
251	6区	SD4028	流路2	須恵器	甕	不明(自然釉)	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	12.8	-	-	-	-
252	6区	SD4028	流路2	須恵器	甕	口縁:横ナデ、体:平行タタキ後カキ	横ナデ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	26.0	-	-	-	-
253	6区	SD4028	流路3	須恵器	高台付杯	体~高台:回転ナデ、底:回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	10.6	-	-	-	-
254	6区	SD4028	流路3	須恵器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	17.0	-	-	-	-
255	6区	SD4028	流路3	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1灰	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
256	4区	SD4028	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	口縁:回転ナデ、天井:ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	13.8	-	-	-	-
257	4区	SD4028	-	須恵器	杯	底:ナデ、他:回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	10YR5/1褐灰	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	-	-	-
258	4区	SD4028	-	須恵器	高台付杯	体~高台:回転ナデ、底:ナデ	回転ナデ	5Y4/1灰	5Y4/1灰	-	-	-	-	-	-	-	8.8	-	-	-	-
259	6区	SD4028	-	土師器	皿	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
260	4区	SD4028	-	土師器	皿	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	19.6	-	-	-	-
261	6区	SD4028	-	須恵器	壺	体:ナデ、底:ヘラ削り	回転ナデ	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
262	6区	SD4028	-	土師器	把手	指オサエ	-	5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
263	6区	SD4028	-	土師器	甌?	指オサエ	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
264	4区	SD4028	-	土師器	甕	口縁:ヨコナデ、体:ハケメ	口縁:ハケメ、体:ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	5YR6/6橙	-	-	-	-	-	-	-	26.4	-	-	-	-
265	6区	SD4028	-	須恵器	壺	口縁:ヨコナデ、体:平行タタキ後カキ	回転ナデ	N6/灰	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	16.1	-	-	-	-
266	6区	SD4028	-	土師器	鉢	横ナデ	横ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	-	-	-	-	-	-	-	33.7	-	-	-	-
268	6区	SD4028	-	須恵器	甕	平行タタキ	平行タタキ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
328	6区	SD4030	-	須恵器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	11.1	-	-	-	-
329	6区	SD4030	-	須恵器	高台付杯	体~高台:回転ナデ、底:ナデ	回転ナデ	N4/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	8.8	-	-	-	-

土器観察表 10

報文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調			胎土					法量 (cm)							
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)		
330	4区	SD4030	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
331	6区	SD4030	-	須恵器	壺	回転ナデ	体：回転ナデ、底：ナデ	7.5Y4/1灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	9.0	-	-	-	-			
332	6区	SD4030	-	須恵器	甕?	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/3にぶい褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
333	4区	SD4030	-	土師器	鍋	口縁：横ナデ、体：ハケメ	口縁：ハケメ後横ナデ、胴～体上半：ハケメ、体下半：指オサエ後ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
335	4区	SB4003	-	須恵器	杯蓋	口縁～体：回転ナデ、天井：回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	4.1	-	-	-	-			
336	6区	SB4002	-	弥生土器	甕	不明(マメツ)	指オサエ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	粗・少	無	-	-	-	5.0	-	-	-	-	-			
337	4区	SB4002	-	壁土	-	-	-	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.4		
338	4区	土器溜り	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
339	4区	土器溜り	-	土師器	甕	ナデ?	指オサエ後ナデ?	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
340	4区	土器溜り	-	須恵器	甕	体：平行タタキ後カキ目、底：カキ目	同心円タタキ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
341	4区	SD4019	-	弥生土器	甕	ヨコナデ	不明(マメツ)	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	中・少	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
342	4区	SD4032	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/1灰白	10YR8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
343	4区	遺構外	-	中国産白磁	碗	施釉	施釉	7.5Y7/2灰白	7.5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16.4	
344	4区	遺構外	-	須恵器	提瓶	カキ目	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
345	3区	遺構外	-	ふいご羽口	-	-	-	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/8黄橙	粗・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
353	5区北	SD5001	下層	土師器	碗	高台付近：横ナデ、他は不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	6.4	-	-	-	-	-	-	
354	5区南	SD5001	下層	磁器	碗	施釉	施釉	7.5Y8/1灰白 細：透明細	7.5Y8/1灰白 胎土：10YR8/1灰白	-	-	-	-	-	4.3	-	-	-	-	-	-	-	
355	5区南	SD5001	下層	土師器	甕	ハケメ	不明(マメツ)	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
356	5区	SD5002	-	土師器	杯	底：回転ヘラキリ、他：回転ナデ	不明(マメツ)	5YR6/6橙	5YR6/6橙	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
357	5区	SD5002	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/3浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	-	-	-	-	-	-	6.4	-	-	-	-	-	-	
358	5区南	SD5002	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.7
359	5区	SD5002	-	須恵器	壺	体：回転ナデ、底：不明	回転ナデ	N5/灰	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	9.0	-	-	-	-	-	-	-
360	5区南	SD5002	-	須恵器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	細・少	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17.0
361	5区南	SD5002	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y5/1黄灰	5Y5/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27.6
363	5区	SD5004	-	須恵器	皿	体：回転ナデ、底：回転ヘラキリ後ナデ	底中央：ナデ、他：回転ナデ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	13.0	-	-	-	-	-	-	-
364	5区	SD5004	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	8.9	-	-	-	-	-	-	-
365	5区	SD5004	-	土師器	甕	不明(マメツ)	ハケメ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
366	5区	SD5004	-	ふいご羽口	-	-	-	N3/暗灰	5YR6/3にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
367	5区南	SD5007	上層	土師器	杯	体：回転ナデ、底：不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	細・少	細・少	-	-	-	-	7.1	-	-	-	-	-	-	-
368	5区南	SD5007	上層	土師器	碗	体～高台外：回転ナデ、他：不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	-	-	-	-	-	-	8.3	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 11

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土						法量 (cm)				
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)
369	5区南	SD5007	上層	須恵器	高台付杯	底内側：ナデ、 他：回転ナデ	回転ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	-	-
370	5区南	SD5007	上層	須恵器	杯	体：回転ナデ、底：回 転ヘラ切り後ナデ	体～底外半、回転ナ デ、底内半、ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	7.1	-	-	-
371	5区南	SD5007	上層	須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底： 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	10.3	-	-	-
372	5区南	SD5007	上層	土師器	かまど	指オサエ	指オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
374	5区北	SK5002	-	須恵器	杯蓋	天井：回転ヘラキ リ後ナデ、体：回 転ヘラケズリ	ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
375	5区	SK5003	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	19.8	-	-	-
376	5区北	SK5003	-	亀山焼	甕	格子タタキ	不明(マメツ)	N5/ 灰	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
377	5区南	SX5007	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	-	-	-	-	-	-	-	6.8	-	-	-
378	5区南	SX5007	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	6.2	-	-	-
379	5区南	SX5008	上層	龍泉窯 青磁	碗	施釉	施釉	釉：2.5GY7/1 明 オリーブ灰	胎土：N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
380	5区南	SX5008	上層	土師器	皿	底：不明(マメ ツ)、他：回転ナデ	回転ナデ後ヘラミガキ	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
382	5区南	SX5008	上層	ふいご 羽口		不明(マメツ)	不明(マメツ)	N6/ 灰	7.5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
384	5区南	SX5008	上層	須恵器	甕	口縁：横ナデ、体： 平行タタキ後ナデ	口縁：横ナデ、体：ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	24.2	-	-	-
385	5区南	SX5008	下層	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	N5/ 灰	5GY6/1 オリーブ灰	-	-	-	-	-	-	-	14.2	-	-	-
386	5区南	SX5008	下層	土師器	鉢	口縁：ヨコナデ、 体：指オサエ	ヨコナデ	N4/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
387	5区南	SX5008	下層	須恵器	甕	平行タタキ	同心円タタキ後ナデ	N6/ 灰	5B6/1 青灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
388	5区南	SX5008	下層	土師器	足釜	口縁：不明(マメツ)、 体：ハケメ後指オサエ	ハケメ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	26.4	-	-	-
389	5区南	SX5008	下層	土師器	鍋	口縁：横ナデ、体： 指オサエ後ナデ	ハケメ	10YR6/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	29.6	-	-	-
394	5区南	SX5009	-	須恵器	杯蓋	口縁～天井下半、 回転ナデ、天井上、 半：回転ヘラ削り	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	14.4	-	-	-
395	5区南	SX5009	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	-	-	-	-	-	-	-	11.5	-	-	-
401	5区南	SD5003	上層	土師器	杯	体：回転ナデ、底： 回転ヘラキリ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	7.3	-	-	-
402	5区南	SD5003	上層	土師器	杯	体：回転ナデ、底： 回転ヘラキリ後板ナデ	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	8.4	-	-	-
403	5区南	SD5003	上層	西村産瓦 質土器	碗	回転ナデ	板ナデ	N8/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	15.8	-	-	-
404	5区北	SD5003	上層	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(茶色付着物)	2.5Y8/1 灰白	2.5Y4/1 黄灰	-	-	-	-	-	-	-	14.8	-	-	-
405	5区北	SD5003	上層	土師器	碗	回転ナデ	ヘラミガキ?	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	6.0	-	-	-
406	5区北	SD5003	上層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N4/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	15.8	-	-	-
407	5区北	SD5003	上層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N4/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	9.8	-	-	-
408	5区北	SD5003	上層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
409	5区南	SD5003	上層	須恵器	壺	不明(自然釉)	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
410	5区南	SD5003	上層	?	?	回転ナデ	不明(破損)	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 12

報文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土						法量 (cm)						
						外面	内面	外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)	
411	5区南	SD5003	下層	瓦器	碗	回転ナデ後ハラミガキ	回転ナデ後ハラミガキ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	14.9	-	-	-	-		
412	5区南	SD5003	下層	黒色土器A類	碗	ヨコナデ	ハラミガキ	25Y8/1 灰白	N3/ 暗灰	-	-	-	-	-	-	-	6.7	-	-	-		
413	5区南	SD5003	下層	須恵器	壺蓋	回転ナデ	ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
414	5区南	SD5003	下層	須恵器	杯蓋	口縁: 回転ナデ、天井: 回転ナデ 回転ハラ切り後ナデ	回転ナデ	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	-	-	-	-	-	-	14.7	-	-	-	-		
415	5区北	SD5003	下層	須恵器	?	回転ナデ	回転ナデ	25Y7/1 灰白	25Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	22.9	-	-	-	-		
416	5区南	SD5003	下層	須恵器	甕	横ナデ	横ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
417	6区	SD5003	-	土師器	皿	口縁: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り後板状庄痕	口縁: 回転ナデ、底: ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	6.0	1.0	-	-	-	-	
418	6区	SD5003	-	土師器	皿	底: 回転ハラ切り、他: 回転ナデ	板ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	-	-	-	-	-	-	7.3	0.9	-	-	-	-	
419	6区	SD5003	-	土師器	皿	口縁: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り後ナデ	口縁: 回転ナデ、底: ナデ	25Y7/2 灰黄	25Y4/1 黄灰	-	-	-	-	-	-	7.2	1.1	-	-	-	-	
420	6区	SD5003	-	土師器	杯	体: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り	回転ナデ	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	8.0	-	-	-	-	
421	6区	SD5003	-	土師器	杯	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	10.2	-	-	-	-	-	
422	5区	SD5003	-	土師器	杯	口縁~体: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り	口縁~体: 回転ナデ、底: 不明 (マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	11.3	3.1	-	-	-	-	
423	6区	SD5003	-	土師器	杯	体: 回転ナデ、底: 不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	75YR7/4 にぶい黄橙	75YR7/4 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	9.9	-	-	-	-	
424	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁~体: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り後ナデ	口縁~体: 回転ナデ、底: 不明 (剥落)	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	10.8	2.5	-	-	-	-	
425	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁~体: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	11.4	2.9	-	-	-	-	
426	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁~体: 回転ナデ、底: 回転ハラ切り	回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	12.1	-	-	-	-	-	
427	6区	SD5003	-	黒色土器A類	碗	不明 (マメツ)	ハラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	N3/ 暗灰	-	-	-	-	-	-	-	5.0	-	-	-	-	
428	6区	SD5003	-	黒色土器A類	碗	高台外面: ヨコナデ、他: 不明 (マメツ)	ハラミガキ	N3/ 暗灰	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	6.4	-	-	-	-	
429	6区	SD5003	-	黒色土器A類	碗	回転ナデ	ハラミガキ	25Y8/2 灰白	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	5.9	-	-	-	-	
430	6区	SD5003	-	土師器	碗	高台: 回転ナデ、底: ナデ	ハラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	5.9	-	-	-	-	
431	6区	SD5003	-	土師器	碗	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR5/1 褐灰	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	7.8	-	-	-	-	
432	6区	SD5003	-	土師器	碗	高台: 不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	25Y8/2 灰白	25Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
433	6区	SD5003	-	土師器	碗	体: 指オサエ後ハケメ? 高台: 回転ナデ、底: ナデ	ナデ	25Y8/1 灰白	25Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
434	6区	SD5003	-	中国産白磁	碗	回転ハラケズリ	施釉	釉: 5Y7/2 灰白	胎土: N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	6.9	-	-	-	-	
435	6区	SD5003	-	中国産白磁	碗	施釉	施釉	釉: 25Y8/2 灰白	胎土: 10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
436	5区	SD5003	-	土師器	壺	口縁~体: 不明 (マメツ)、底: 回転ハラ切り	口縁~体上半: 回転ナデ、他: 不明 (マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	4.1	4.4	4.7	-	-	-	-

土器観察表 13

観文番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整			色調				胎土						法量 (cm)				その他 (cm)			
						外面	内面		外部	内部	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)					
437	5区南	SD5003	-	土師器	甕	不明(マメツ)	ヨコナデ	75YR6/4にぶい橙	10YR5/2灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
438	6区	SD5003	-	土師器	甕	不明(ナデ?)	板ナデ	N4/灰	25Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
439	6区	SD5003	-	土師器	甕	体：ナデ後平行タタキ、底：不明(マメツ)	ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
440	6区	SD5003	-	中国産白磁	椀	回転ヘラケズリ	施軸	軸：5Y7/2灰白	胎土：N8/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
441	6区	SD5003	-	土師器	足釜	口縁：ハケメ後横ナデ、体：ハケメ、底：格子タタキ	指オサエ後板ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
442	6区	SD5003	-	土師器	足釜	口縁：横ナデ、ツバ：ハケメ、体：指オサエ後ハケメ、底：格子タタキ	ハケメ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
443	6区	SD5003	-	土師器	杯	回転ナデ	板ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
444	6区	SD5003	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR7/3にぶい黄橙	25Y7/2灰黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
445	6区	SD5003	-	土師器	杯	底：回転ヘラケズリ後ナデ、他：不明	不明(マメツ)	75YR8/3浅黄橙	75YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
446	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁：回転ナデ、底：回転ヘラケズリ後ナデ	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
447	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：回転ヘラケズリ後ナデ	不明(マメツ)	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
448	6区	SD5003	-	土師器	杯	口縁～体：回転ナデ、底：ナデ	不明(マメツ)	25Y8/2灰白	25Y8/2灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
449	5区	SD5003	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
450	5区南	SD5003	-	ふいご羽口	-	-	-	5Y5/1灰	75YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
453	5区南	SD5005	上層	土師器	皿	体：回転ナデ、底：回転ヘラケズリ後ナデ	ナデ	75YR7/6橙	75YR8/4浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
454	5区南	SD5005	上層	土師器	杯	体：回転ナデ、底：回転ヘラケズリ後ナデ	体：回転ナデ、底：ナデ	5YR6/6橙	10YR8/4浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
455	5区南	SD5005	上層	土師器	杯	体：回転ナデ、底：回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
456	5区南	SD5005	上層	須恵器	皿	体：回転ナデ	回転ナデ、底：ひだすきあり	25Y8/1灰白	25Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
457	5区南	SD5005	上層	須恵器	壺蓋	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/1褐灰	75Y5/1灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
458	5区南	SD5005	上層	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	75Y7/1灰白	75Y7/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
459	5区南	SD5005	上層	瓦器	皿	口縁：ヨコナデ、体：指オサエ	ヨコナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
460	5区南	SD5005	上層	土師器	台付杯	回転ナデ	ナデ	5YR5/8明赤褐	5YR5/8明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
461	5区南	SD5005	上層	土師器	台付杯	高台：回転ナデ、他：不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
462	5区南	SD5005	上層	須恵器	壺	ヨコナデ	不明	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
463	5区南	SD5005	上層	須恵器	円面硯	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
464	5区南	SD5005	上層	土師器	羽釜	口縁：ハケメ後ヨコナデ	板ナデ後ヨコナデ	75YR5/4にぶい褐	75YR4/3褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
465	5区南	SD5005	上層	土師器	羽釜	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	75YR4/4褐	5YR4/4にぶい赤褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
466	5区南	SD5005	上層	須恵器	甕	平行タタキ後ナデ	同心円タタキ後ナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 14

報告番号	地区名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					質量 (cm)					
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)
467	5区南	SD5005	上層	須恵器	壺	格子タタキ後横ナデ	指オサエ後横ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
468	5区南	SD5005	上層	須恵器	壺	不明 (自然釉)	回転ナデ	N7/ 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
469	5区	SD5005	下層	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
470	5区南	SD5005	下層	土師器	杯	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
471	5区南	SD5005	下層	瓦器	碗	高台 : ヨコナ デ、他 : ナデ	ナデ後ヘラミガキ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
472	5区	SD5005	下層	黒色土 器A類?	碗	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	5YR6/6 橙	7.5YR5/2 灰褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
473	5区	SD5005	下層	須恵器	杯	体 : 回転ナデ、底 : 回 転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
474	5区南	SD5005	下層	土師器	甕	口縁 : ハケメ後ヨ コナデ、頸 : 指 オサエ後ナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
475	5区南	SD5005	下層	須恵器	甕	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/1 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
476	5区	SD5005	下層	須恵器	甕?	格子タタキ	平行タタキ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
477	5区南	SD5005	最下層	土師器	碗	高台 : 回転ナデ、 他不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	7.5YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
478	5区南	SD5005	最下層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
479	5区南	SD5005	最下層	土師器	高杯	ヘラケズリ後へ ラミガキ?	不明 (マメツ)	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
480	5区南	SD5006	-	土師器	碗	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	7.5YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
481	5区南	SD5006	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y5/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
482	5区南	SD5006	-	須恵器	壺	格子タタキ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
483	5区北	SD5008	上層	瓦器	碗	体 : 指オサエ後ヘラ ミガキ、高台 : 横ナ デ	ヘラミガキ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
484	5区南	SD5008	上層	土師器	碗	高台外面 : ヨコナ デ、他不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	7.5YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
485	5区南	SD5008	上層	土師器	碗	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
486	5区南	SD5008	上層	土師器	碗	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
487	5区南	SD5008	上層	土師器	杯	体 : ナデ、底 : 回 転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
488	5区南	SD5008	上層	須恵器	杯蓋	口縁~体 : 回転ナ デ、天井外半 : 回転 ヘラ削り、内半 : 回 転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	10Y5/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
489	5区南	SD5008	上層	須恵器	杯蓋	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
490	5区南	SD5008	上層	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
491	5区南	SD5008	上層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
492	5区南	SD5008	上層	須恵器	甕	口縁 : 回転ナデ、体 : 格子タタキ? 後ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
493	5区南	SD5008	上層	須恵器	甕	体 : 回転ナデ、底 : ヘラ削り?	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
494	5区南	SD5008	上層	須恵器	甕	タタキ目?	当て具痕?	7.5Y8/1 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
495	5区南	SD5008	上層	土師器	甕	不明 (マメツ)	不明 (マメツ)	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

土器観察表 15

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整			色調		胎土						法量 (cm)		
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)
496	5区南	SD5008	上層	土師器	甕	口縁上端:横ナ テ、下部:ハケ メ、体:ハケメ	口縁:ハケメ、 体:板ナテ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	36.8	-	-	-
497	5区南	SD5008	上層	ふいご 羽口	-	-	-	7.5GY3/1 暗緑灰	7.5YR7/6 橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
498	5区南	SD5008	上層	須恵器	杯	ナテ	ナテ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
499	5区南	SD5008	上層	不明	不明	不明(マメツ)	不明(マメツ)	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
504	5区南	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナテ、 底:回転ヘラ切り	回転ナテ	10YR7/2 にぶい、黄橙	10YR7/1 灰白	-	-	-	-	-	11.6	3.0	7.1	-	-
505	6区	SD5008	-	吉備系 土師器	椀	体:ナテ、底: 回転ナテ	ナテ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
506	6区	SD5008	-	土師器	杯	体:回転ナテ後ナ テ、底:回転ヘ ラ切り後ナテ	回転ナテ後ナテ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	7.6	-	-
507	5区南	SD5008	-	須恵器	高杯	回転ナテ	回転ナテ	5Y5/1 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
509	6区	SD5008	-	土師器	椀	体:不明(未調 整?)、他:回転ナ テ	口縁ハケメ、体 ヘラミガキ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	14.8	-	-	-	-
510	6区	SD5008	-	西村産 須恵器	椀	指オサエ後ヘラミガキ	回転ナテ後ヘラミガキ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
511	6区	SD5008	-	土師器	皿	口縁:回転ナテ、底: 回転ヘラ切り後ナテ	回転ナテ後ナテ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	6.7	1.4	5.2	-	-
512	6区	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナ テ、底:回転ヘ ラ切り後ナテ	回転ナテ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	10.9	2.9	7.2	-	-
513	6区	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナテ、 底:回転ヘラ切り	口縁~体:回転ナ テ、底:ナテ	10YR8/2 灰白	2.5Y5/1 黄灰	-	-	-	-	-	11.0	3.3	6.8	-	-
514	6区	SD5008	-	中国産 白磁	椀	施釉	施釉	釉:5Y7/2 灰白	胎土:5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
515	6区	SD5008	-	東播磨 須恵器	鉢	ヨコナテ	ヨコナテ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
516	6区	SD5008	-	中国産 白磁	椀	下端無釉	施釉	釉:5Y7/2 灰白	胎土:N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
517	6区	SD5008	-	土師器	椀	高台:回転ナテ、体: 指オサエ、底:ナ テ	ナテ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	5.4	-	-	-	-
518	6区	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナテ、 底:不明(マメツ)	口縁~体:回転ナテ、 底:不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	10.9	2.5	6.9	-	-
519	6区	SD5008	-	土師器	杯	体:回転ナテ、底:回 転ヘラ切り後ナテ	回転ナテ	10YR7/3 にぶい、黄橙	10YR6/3 にぶい、黄橙	-	-	-	-	-	6.5	-	-	-	-
520	6区	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナ テ、底:回転ヘ ラ切り後ナテ	回転ナテ	10YR7/2 にぶい、黄橙	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	10.8	3.0	6.2	-	-
521	6区	SD5008	-	土師器	杯	口縁~体:回転ナ テ、底:回転ヘ ラ切り後ナテ	口縁~体:回転ナ テ、底:ナテ	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	11.9	3.1	7.4	-	-
522	6区	SD5008	-	須恵器	杯	回転ナテ	回転ナテ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
523	6区	SD5008	-	土師器	皿	ヘラケズリ後 ヘラミガキ	不明(マメツ)	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	-	-	-	-	-	-	-	11.2	-	-
524	6区	SD5008	-	土師器	杯	回転ナテ	回転ナテ	10YR7/3 にぶい、黄橙	7.5YR7/4 にぶい、黄橙	-	-	-	-	-	10.2	-	-	-	-
525	6区	SD5008	-	土師器	皿	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	9.7	-	-	-	-

土器観察表 16

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					質量 (cm)				
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)
526	6区	SD5008	-	陶器	碗	回転ヘラケズリ	施軸	釉: 5Y6/3 オ リープ黄	胎土: 7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
527	6区	SD5008	-	須恵器	杯蓋	不明(自然釉)	回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
528	6区	SD5008	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
529	6区	SD5008	-	土師器	飯前壺	指オサエ	-	10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
530	6区	SD5008	-	土師器	鉢	指オサエ	指オサエ後ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	5.8	-	-	-
531	6区	SD5008	-	亀山焼	甕	口縁: 格子タタキ後ハ ケメ, 体: 格子タタキ	口縁: ハケメ, 体: 同心円タタキ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
532	6区	SD5008	-	土師器	鍋	口縁: 横ナデ, 下 部: 指オサエ後ハ ケメ, 体: 指 オサエ後ハケメ	口縁: ハケメ, 体: 不明(マメツ)	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
533	6区	SD5008	-	ふいご 羽口	-	-	-	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
534	6区	SD5008	-	ふいご 羽口	-	-	-	N5/ 灰	5YR5/1 褐灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
545	5区北	SK5004	-	土師器	皿	口縁: 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	1.4	6.6	-	-
546	5区北	SK5004	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	7.7	-	-
547	5区北	SK5004	-	土師器	足釜	ナデ	ナデ?	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
548	5区北	SK5005	-	須恵器	杯	体: 回転ナデ, 底: 回転ヘラキリ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	-
550	5区北	SK5007	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y8/1 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
551	5区北	SK5007	-	黒色土 器A類	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	9.9	-	-
552	5区北	SK5007	-	瓦器	碗	指オサエ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
553	5区北	SK5007	-	瓦器	碗	ヘラミガキ	ヘラミガキ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
554	5区北	SK5007	-	瓦器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
555	5区北	SK5007	-	?	?	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
556	5区北	SK5007	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	15.4	-	-	-
557	5区	SK5010	-	土師器	皿	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	10YR8/4 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	13.6	-	-	-
558	5区	SK5010	-	土師器	高杯	ヘラミガキ	不明(マメツ)	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	-	-	-	-	-	-	-	18.2	-	-
559	5区北	SK5001	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
560	5区	SK5017	-	土師器	杯	体: 回転ナデ, 底: 不明(マメツ)	回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	4.8	-	-
561	5区	SK5017	-	須恵器	壺	ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	6.4	-	-
562	5区南	SD5009	-	須恵器	高台付 杯?	回転ナデ	ナデ	10Y7/1 灰白	7.5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
563	5区南	SD5009	-	須恵器	甕	ヨコナデ	不明(自然釉)	5P4/1 暗紫灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
564	5区南	SP5007	-	土師器	杯	体: 回転ナデ, 底: 回 転ヘラ切り後ナデ	不明(マメツ)	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
565	5区	SZ5013	-	須恵器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	7.5	-	-
566	5区	SD5020	-	弥生土器	高坏	板ナデ	不明(マメツ)	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐	-	-	-	-	-	-	5.1	4.6	-	-
567	5区	SD5020	-	弥生土器	甕	不明(マメツ)	不明(欠損)	2.5Y7/3 浅黄	-	-	-	-	-	-	-	-	6.9	-	-
568	5区南	遺構外	-	土師器	甕	不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	-	-	-	-	-	-	13.1	-	-	-
569	5区南	遺構外	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	11.3	-	-

土器観察表 17

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土						法量 (cm)			その他 (cm)		
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)		幅 (cm)	厚 (cm)
570	5区南	遺構外	-	須恵器	杯	口縁~体:回転ナデ、 底:回転ヘラ切り	口縁~体:回転ナ デ、天井:ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	中・少	11.3	3.3	5.8	-	-	-
571	5区南	遺構外	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-
572	5区南	遺構外	-	須恵器	壺	体:回転ナデ、 底:未調整	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	細・少	-	-	9.8	-	-	-
573	5区南	遺構外	-	土師器	杯	口縁:轆ナデ、 体:指オサエ	板ナデ	25YR5/6明赤褐	10YR7/4にぶい黄橙	-	-	-	-	-	中・多	13.2	-	-	-	-	-
574	5区北	遺構外	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	細・少	18.7	-	-	-	-	-	
575	5区北	遺構外	-	土師器	皿	体:ナデ、底:回 転ヘラキリ	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	7.5YR8/4浅黄橙	-	-	-	-	中・多	-	-	4.8	-	-	-	
576	5区北	遺構外	-	土師器	椀	不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	4.9	-	-	-	
577	5区南	遺構外	-	土師器	椀	体:不明(マメツ)、 高台:回転ナデ、底: 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	-	-	-	-	細・少	-	-	8.3	-	-	-	
578	5区北	遺構外	-	土師器	台付杯	体~高台:轆ナ デ、底:ナデ	不明(マメツ)	10YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	細・多	-	-	-	-	-	-	
579	5区北	遺構外	-	須恵器	円面硯	回転ナデ、透 孔:ヘラケズリ	回転ナデ	N4/灰	N6/灰	-	-	-	-	細・少	17.4	-	-	-	-	-	
580	5区北	遺構外	-	須恵器	円面硯	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	細・少	-	-	15.8	-	-	-	
581	5区南	遺構外	-	須恵器	搦鉢	口縁~体:回転ナ デ、底:ヘラ削り	回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	-	-	-	-	中・少	15.6	15.6	9.2	-	-	-	
582	5区南	遺構外	-	須恵器	甕	口頸:ヨコナ デ、格子タタキ	口頸:回転ナデ、 体:格子タタキ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	-	-	-	-	中・少	23.4	-	-	-	-	-	
586	6区	SK6001	-	弥生土器?	壺	口縁:ヨコナ デ、頸:板ナデ	口縁:ヨコナ デ、頸:一部板ナデ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	細・少	細・少	無	細・少	-	5.0	-	-	-	-	-	
587	6区	SK6001	-	須恵器	皿	体:回転ナデ、底: 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	N8/灰白	N8/灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	11.0	-	-	-	
590	6区	SK6004	-	須恵器	杯蓋	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N5/灰	-	-	-	-	中・少	12.1	-	-	-	-	-	
591	6区	SD6004	-	土師器	椀	回転ナデ	不明(マメツ)	7.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	細・少	-	-	7.1	-	-	-	
592	6区	SD6004	-	須恵器	杯	体:回転ナデ、底: 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	6.8	-	-	-	
593	6区	SD6004	-	土師器	杯	体:回転ナデ、底: 回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	細・少	-	-	7.1	-	-	-	
594	6区	SD6004	-	土師器	椀	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	-	-	-	-	細・少	-	-	8.0	-	-	-	
595	6区	SD6004	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	5YR6/6橙	5YR6/6橙	-	-	-	-	細・少	-	-	7.1	-	-	-	
596	6区	SD6004	-	土師器	皿	不明(マメツ)	不明(マメツ)	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	-	-	-	-	細・少	10.7	2.2	5.6	-	-	-	
597	6区	SD6004	-	陶器	皿	無釉、回転ナデ	施釉	釉:2.5Y6/6明黄褐	胎土:N7/灰白	-	-	-	-	無	-	-	-	-	-	-	
598	6区	SD6004	-	須恵器	壺	体:格子タタキ、 底:不明(マメツ)	板ナデ	N6/灰	5PB5/1青灰	-	-	-	-	細・少	-	-	8.1	-	-	-	
599	6区	SD6004	-	須恵器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ	N4/灰	N5/灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
600	6区	SD6004	-	土師器	かまど	ハケメ	不明(マメツ)	10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
601	6区	SD6004	-	須恵器	甕	頸:ヨコナデ、 胴:格子タタキ	頸:ヨコナデ、 胴:同心円タタキ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	-	-	
610	6区	SE6001	-	亀山焼	甕	格子タタキ	同心円タタキ後ナデ	N3/暗灰	N2/黒	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	-	-	
611	6区	SE6001	-	須恵器	鉢	体:ナデ? 底:板ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	11.3	-	-	-	

土器観察表 18

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)					
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)
612	6区	SD6003	-	須恵器	杯蓋	口縁～天井下半； 回転ナデ、天井上 半；回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	7.9	-	-	-	-	
613	6区	SD6003	-	須恵器	杯	体；回転ナデ、底；回 転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	8.0	-	-	-	
614	6区	SD6003	-	須恵器	杯	回転ナデ、底；回 転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	8.4	-	-	-	
615	6区	SD6003	-	須恵器	高台付杯	口縁～体上半；回転 ナデ、体下半；回転 ヘラ削り後ナデ、高 台～底；回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	13.8	3.6	10.1	-	-	-
616	6区	SD6003	-	須恵器	高台付杯	体～高台；回転ナ デ、底；ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	5Y6/1灰	-	-	-	-	-	-	11.0	-	-	-	-
617	6区	SD6003	-	須恵器	高台付杯	体～高台；回転ナ デ、底；回転ヘラ 削り後ナデ	ナデ	N8/灰白	N8/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
618	6区	SD6003	-	須恵器	高台付杯	体；ナデ、底； 回転ナデ	ナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
619	6区	SD6003	-	須恵器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
620	6区	SD6003	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
621	6区	SD6003	-	須恵器	高杯	杯；不明、脚；回転ナ デ	杯；不明、脚；回転ナ デ	N6/灰	N5/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
622	6区	SD6003	-	須恵器	壺	ナデ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
623	6区	SD6003	-	須恵器	高杯	口縁～体；回転ナ デ、底；回転ヘラ 削り後回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	13.3	-	-	-	-	-
624	6区	SD6003	-	須恵器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	-	-	-	-	-	8.2	-	-	-	-
625	6区	SD6003	-	土師器	高杯	杯；不明(マメツ) 脚；上半；回転ナ デ、下半；回転ナ デ	杯；不明(マメツ)後 ラミ ガキ、脚；指オサエ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
626	6区	SD6003	-	土師器	蛸壺	指オサエ	指オサエ？	5YR7/8橙	5YR7/8橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
627	6区	SD6003	-	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
628	6区	SD6003	-	須恵器	壺	上半；ナデ、下 半；板ナデ	ナデ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
629	6区	SD6003	-	土師器	甕	指オサエ後ナデ	ハケメ後ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
630	6区	SD6003	-	土師器	甕	頸；ナデ、体；ハケメ	板ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
631	6区	SD6003	-	土師器	甕	ハケメ	不明(マメツ)	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	-	-	-	-	-	18.1	-	-	-	-	-
632	6区	SD6003	-	土師器	甕	指オサエ	指オサエ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
633	6区	SD6003	-	土師器	鍋	口縁；ヨコナ デ、体；ハケメ	口縁；ハケメ 後ヨコナ デ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	-	-	-	-	-	35.5	-	-	-	-	-
634	6区	SD6003	-	須恵器	甕	口縁；横ナデ、体； 格子タタキ	口縁；横ナデ、体； 同心円タタキ	N6/灰	N6/灰	-	-	-	-	-	20.4	-	-	-	-	-
637	6区	SP6008	-	土師器	碗	高台；回転ナデ、 底；不明(マメツ)	不明(マメツ)	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
639	6区	遺構外	-	土師器	皿	口縁；回転ナデ、 底；静止糸切り	回転ナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	-	-	-	-	-	7.0	1.6	4.4	-	-	-
640	6区	遺構外	-	土師器	杯	口縁；横ナデ、体； ナデ	回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	-	-	-	-	-	10.1	-	-	-	-	-
641	6区	遺構外	-	土師器	杯	体；不明(マメツ)、 底；回転ヘラ削り	不明(マメツ)	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	-	-	-	-	-	-	7.2	-	-	-	-

土器観察表 19

観文 番号	地区 名	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎土						法量 (cm)			
						外面	内面	外部	内部	石英 長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)
642	6区	遺構外	-	瓦器	碗	指オサエ	ヨコナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
643	6区	遺構外	-	土師器	碗	不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	-	-	-	-	-	-	-	7.1	-	-
644	6区	遺構外	-	須惠器	杯蓋	口縁: 回転ナデ、体: 回転ヘラケメリ	回転ナデ	7.5YR7/1 明褐灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	13.7	-	-
645	6区	遺構外	-	須惠器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	4.0	10.0	-
646	-	遺構外	-	須惠器	高台付杯	体~高台: 回転ナデ、 底: 回転ヘラ切り	不明(マメツ)	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	10.8	-	-
647	6区	遺構外	-	須惠器	皿	口縁: 回転ナデ、底: 回転ナデ後ナデ	回転ナデ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	17.6	-	-
648	6区	遺構外	-	須惠器	高台付杯	回転ナデ	回転ナデ	N4/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	11.0	-	-
649	6区	遺構外	-	須惠器	高台付杯	回転ナデ	体: 回転ナデ、底: ナデ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	12.8	-	-
650	-	遺構外	-	須惠器	高台付杯	体~高台: 回転 ナデ、底: 回転 ヘラケメリ後ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	-	-	-	10.6	-	-
651	6区	遺構外	-	須惠器	高台付杯	回転ナデ	不明(マメツ)	2.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	11.8	-	-
652	6区	遺構外	-	土師器	杯	不明(マメツ)	不明(マメツ)	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にふい橙	-	-	-	-	-	-	-	18.0	-	-
653	6区	遺構外	-	中国産 白磁	碗	施釉	施釉	釉: 7.5Y7/1 灰白	胎土: N8/ 灰白	-	-	-	-	-	-	無	14.6	-	-
654	6区	遺構外	-	須惠器	杯	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	10.6	-	-
655	6区	遺構外	-	須惠器	高杯	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	8.8	-	-
656	6区	遺構外	-	須惠器	壺	回転ナデ	回転ナデ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
657	-	遺構外	-	須惠器	甕	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	21.8	-	-
658	6区	遺構外	-	須惠器	甕	口頸: 横ナデ、体: 格子タタキ後ナデ	口頸: ナデ、体: 同 心円タタキ後ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
659	6区	遺構外	-	須惠器	壺	回転ナデ後ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 瓦観察表1

報文 番号	地区 名	遺構名	層位	器種	調整			色調			胎土			法量 (cm・g)					
					凸面	凹面	側面	端面	凸面	凹面	白色粒	黒色粒	灰色粒	全長 (残存長) (cm)	狭端幅 (残存幅) (cm)	広端幅 (残存幅) (cm)	厚さ (cm)	段	重量 (g)
2	5区南	包含層	2a層	丸瓦	不明(マメツ)	布目、糸切り	不明(マメツ)	-	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・少	無	無	12.0	7.0	-	1.4	-	173.1
14	4-1区	SD4005	-	平瓦	ナデ	布目後ナデ	ナデ	-	N5/灰	N5/灰	中・多	無	無	8.8	4.4	-	1.8	-	68.4
15	4-1区	SD4005	-	平瓦	不明(マメツ)	布目	-	10YR6/1 縄灰	10YR6/1 縄灰	中・少	無	無	5.5	5.3	-	1.8	-	40.7	
16	4-1区	SD4005	-	平瓦	不明(マメツ)	布目	-	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	細・多	無	無	6.0	4.8	-	1.5	-	39.1	
17	4-1区	SD4005	-	平瓦	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・多	無	無	7.8	6.9	-	1.9	-	150.7	
18	4-1区	SD4005	-	丸瓦	縄目タタキ 後ナデ	ナデ後ヘラケズリ	ナデ	前 端：ナデ	5Y6/1灰	N5/灰	中・少	中・多	無	無	7.2	5.8	-	2.2	131.2
21	4-3区	SE4001	3層	平瓦	ナデ	ナデ	-	10BG5/1 青灰	10BG5/1 青灰	中・多	無	無	7.7	6.8	-	1.9	-	110.5	
28	4-3区	SE4001	3層	平瓦	ナデ(面取り状)	糸切り	-	N4/灰	N4/灰	細・少	無	無	(3.2)	(3.7)	-	1.6	-	21.0	
32	4-3区	SE4001	3層	平瓦	縄目後ナデ	布目、ヘラケ ズリ後ナデ	ナデ	-	N4/灰	N7/灰白	中・少	無	無	25.6	8.1	-	2.1	-	594.0
33	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	縄目タタキ後ナデ	布目後ナデ、ヘ ラケズリ	-	-	N4/灰	N5/灰	中・少	無	無	8.6	5.6	-	1.8	-	151.0
34	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	縄目タタキ後ナデ	布目、タタ キ後ナデ	ナデ	-	N5/灰	N4/灰	細・少	無	無	(9.7)	7.8	-	2.1	-	201.5
35	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	縄目タタキ後ナデ	糸切り後布目、 玉縁部は布目 のみ	-	-	N4/灰	N5/灰	無	無	中・多	無	11.1	-	2.2	-	440.5
36	4-3区	SE4001	3層	丸瓦	板ナデ	布目後ナデ	ナデ	-	N4/灰	N4/灰	中・少	無	無	(7.1)	8.5	-	4.6	-	168.5
37	4-3区	SE4001	3層	平瓦	糸切り後ナデ	糸切り後ナデ	ナデ	-	5Y7/1灰白	5Y6/1灰	無	無	細・少	無	(9.0)	-	1.3	-	83.5
38	4-3区	SE4001	3層	平瓦	ナデ	糸切り後ナデ	ヘラキリ後ナデ	前 端：ナデ、 面取り	N5/灰	N4/灰	中・少	無	無	(16.6)	(12.0)	-	2.0	-	623.5
40	4-2区	SX4002	-	平瓦	ヘラケズリ	ナデ	-	-	N5/灰	N5/灰	中・少	無	無	4.6	6.0	-	2.0	-	79.8
44	4-4区	SX4004	-	丸瓦	縄目タタキ後ナデ	ヘラケズリ	-	-	N7/灰白	N7/灰白	中・少	中・少	無	(4.5)	(6.7)	-	1.3	-	67.0
110	6区	SD4021	-	平瓦	格子タタキ	布目、側縁： ヘラキリ	ヘラキリ	前 端面：ヘラキリ	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y7/2 灰黄	中・少	無	無	11.2	6.2	-	1.9	-	182.7
111	4-4区	SD4021	-	丸瓦	-	布目	ヘラキリ	広 端面：不明(マ メツ)、狭端面： 不明(マメツ)	10YR8/2 灰白	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少	無	無	29.2	-	14.9	2.3	-	1438.5
112	4-4区	SD4021	-	丸瓦	ヘラケズリ	布目	ヘラキリ	-	N6/灰	N7/灰白	中・少	中・少	無	7.5	6.1	-	1.4	-	125.7
134	4-4区	SP4024	-	平瓦	縄目タタキ	布目、側縁： ケズリ	布目後ケズリ	ナ デ及びケズリ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	細・多	中・少	無	17.0	13.3	-	2.5	-	673.5
161	6区	SD4028	上層	丸瓦	ナデ	布目	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・少	無	無	6.2	3.3	-	1.9	-	86.9
197	6区	SD4028	中層	丸瓦	ナデ	布目	ヘラキリ	前 端：ヘラキリ	5YR8/4 にぶい橙	5YR8/4 淡橙	中・少	無	無	26.8	-	10.0	2.0	-	584.4
267	6区	SD4028	-	平瓦	ナデ	布目	-	-	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・少	無	無	5.1	5.0	-	1.2	-	32.4
346	4-1区	遺構外	-	平瓦	不明	ナデ	-	-	7.5Y5/1灰	7.5Y4/1灰	中・多	中・少	無	6.5	7.2	-	2.3	-	100.7
347	4-1区	遺構外	-	平瓦	不明	糸切り?	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・少	無	無	8.8	5.8	-	2.2	-	52.0
348	4-1区	遺構外	-	丸瓦	縄目タタキ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	-	7.5 Y 7/1 灰白	7.5 Y 6/1灰	細・少	細・少	細・少	5.2	3.0	-	1.5	-	30.9

瓦観察表 2

報文 番号	地区 名	遺構名	層位	器種	調整				色調				胎土				法量 (cm・g)			
					凸面	凹面	側面	端面	凸面	凹面	白色粒	黒色粒	灰色粒	全長 (残存長) (cm)	狭端幅 (残存幅) (cm)	広端幅 (残存幅) (cm)	厚さ (cm)	段	重量 (g)	
349	4-1区	遺構外	-	平瓦	縄目タタキ	布目	-	-	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	中・少	無	無	11.9	11.5	-	23	-	402.5	
351	5区南	SD5001	上層	平瓦	縄目タタキ	不明(マメツ)	-	-	10YR7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	中・少	無	無	5.4	5.8	-	1.7	-	52.8	
352	5区南	SD5001	上層	平瓦	縄目タタキ	不明(マメツ)	-	-	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	細・少	無	無	7.5	7.4	-	2.1	-	120.3	
362	5区南	SD5002	-	平瓦	ナデ	布目、糸切り	-	-	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	中・少	無	無	10.5	10.8	-	1.8	-	255.0	
373	5区南	SD5007	上層	平瓦	格子タタキ	布目	-	-	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	中・少	無	粗・少	8.0	9.1	-	1.5	-	131.7	
381	5区南	SX5008	上層	平瓦	不明(欠損)	布目	-	-	N5/ 灰	7.5Y7/1 灰白	細・少	無	無	2.1	2.4	-	0.6	-	2.5	
383	5区南	SX5008	上層	丸瓦?	不明(マメツ)	布目	-	-	N3/ 暗灰	N4/ 灰	中・少	無	細・少	3.2	1.9	-	1.2	-	6.0	
390	5区南	SX5008	下層	平瓦	格子タタキ	布目後ナデ	-	-	2.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	細・少	無	無	7.7	4.1	-	1.5	-	64.2	
391	5区南	SX5008	下層	平瓦	ナデ	布目	-	-	7.5YR6/6 橙	10YR6/6 明黄褐	細・少	無	無	6.5	5.3	-	2.5	-	77.2	
392	5区南	SX5008	下層	平瓦	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	-	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	中・多	無	無	7.7	11.1	-	1.8	-	176.1	
393	5区南	SX5008	下層	平瓦	縄目タタキ	布目	-	前表面：わら庄痕 前表面：不明 (マメツ)	N6/ 灰	N7/ 灰白	細・少	無	無	6.5	8.5	-	2.3	-	141.7	
396	5区南	SX5009	-	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	N5/ 灰	N5/ 灰	細・少	無	無	6.3	8.7	-	1.5	-	124.9	
397	5区南	SX5009	-	丸瓦	縄目タタキ	布目	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・多	無	無	7.7	6.6	-	1.8	-	102.2	
398	5区南	SX5009	-	平瓦	板ナデ	布目後ナデ	-	-	N5/ 灰	N6/ 灰	粗・少	中・少	無	9.0	9.1	-	2.0	-	171.7	
451	6区	SD5003	-	平瓦	縄目タタキ	布目	-	布目	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・少	無	無	6.9	4.6	-	2.3	-	87.1	
452	6区	SD5003	-	平瓦	ナデ	ハラミガキ	-	-	N4/ 灰	N4/ 灰	細・少	無	無	8.6	10.8	-	1.9	-	196.0	
500	5区南	SD5008	上層	平瓦	縄目タタキ	布目	-	前表面：不 明(マメツ)	10YR8/2 灰白	N7/ 灰白	中・少	無	無	10.9	10.2	-	1.8	-	225.5	
501	5区南	SD5008	上層	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	細・少	無	無	3.9	1.9	-	1.2	-	24.0	
502	5区南	SD5008	上層	丸瓦	ナデ、御縁： ハラケズリ	布目後ハラケズリ	-	-	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	中・少	無	細・少	7.8	2.1	-	1.4	-	67.0	
503	5区南	SD5008	上層	丸瓦	ナデ	布目	-	前表面：ハラキリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	粗・少	無	無	9.4	6.0	-	1.5	-	111.0	
508	6区	SD5008	下層	平瓦	格子タタキ	ナデ、御縁：ハ ラキリ後ナデ	-	ハラキリ	7.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	細・少	無	中・少	5.7	6.8	-	2.0	-	96.2	
535	6区	SD5008	-	平瓦	平行タタキ?	布目	-	-	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y8/1 灰白	中・少	無	無	9.2	9.1	-	2.0	-	211.4	
536	6区	SD5008	-	平瓦	格子タタキ	布目	-	-	N7/ 灰白	2.5Y6/1 黄灰	中・多	無	無	11.0	10.5	-	2.6	-	348.5	
549	5区北	SK5005	-	平瓦	格子タタキ後ナデ	布目後ナデ	-	-	7.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	中・多	中・少	無	6.2	8.8	-	1.4	-	119.2	
583	5区	遺構外	-	平瓦	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	-	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	中・多	無	無	6.5	6.3	-	1.5	-	83.5	
584	5区北	遺構外	-	丸瓦	板ナデ	布目	-	-	5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	中・少	無	細・少	5.3	3.1	-	1.6	-	30.0	
588	6区	SK6001	-	丸瓦	不明(マメツ)	布目	-	-	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・少	中・少	中・少	8.6	9.0	-	2.5	-	187.8	

瓦観察表 3

報文番号	地区名	遺構名	層位	器種	調整			色調		胎土			法量 (cm・g)						
					凸面	凹面	側面	端面	凸面	凹面	白色粒	黒色粒	灰色粒	全長 (残存長) (cm)	狭端幅 (残存幅) (cm)	広端幅 (残存幅) (cm)	厚さ (cm)	段	重量 (g)
589	6区	SK6003	-	平瓦	縄目タタキ	不明(マメツ)	不明(マメツ)	-	7.5YR6/1 褐灰	5Y7/1 灰白	中・少	細・少	無	7.3	9.3	-	2.5	-	156.9
603	6区	SD6005 ・SK6004 ・SD6006	-	平瓦	縄目タタキ	不明(マメツ)	前表面：ヘラキリ	-	10YR7/3 にぶい、黄橙	2.5Y7/2 灰黄	中・少	無	無	11.7	9.4	-	2.0	-	280.5
604	6区	SD6005 ・SK6004 ・SD6006	-	平瓦	格子タタキ	ナデ	ヘラキリ	-	N7/ 灰白	N7/ 灰白	細・少	中・少	無	9.5	8.0	-	2.4	-	197.7
605	6区	SD6005 ・SK6004 ・SD6006	-	丸瓦	ナデ	布目	ナデ、胴縮凹 面側縁：ナデ	-	N7/ 灰白	N7/ 灰白	中・少	細・少	無	7.1	6.9	-	3.0	-	196.3
635	6区	SD6003	-	丸瓦	ナデ	布目	不明(マメツ)	-	N7/ 灰白	N8/ 灰白	中・少	中・少	中・少	(11.3)	(10.0)	-	1.6	-	258.0
660	6区	遺構外	-	丸瓦	不明(マメツ)	糸切り	前表面：不 明(マメツ)	-	2.5Y8/2 灰黄	2.5Y8/2 灰白	中・多	無	中・少	8.0	6.0	-	1.5	-	191.4

表 7 木器観察表 1

報文番号	地区名	報告遺構名	報告層位	器種	法量 (cm)					材質		
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)	材質
269	6区	SD4028	中層	丸棒	-	-	-	6.1	-	0.7	-	トネリコ節
270	6区	SD4028	中層	丸棒	-	-	-	5.2	1.9	0.7	-	ヒノキ
271	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	6.6	0.8	0.6	-	ヒノキ
272	6区	SD4028	中層	割れた破片	-	-	-	11.0	0.7	0.4	-	ヒノキ
273	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	15.2	0.9	0.6	-	アスナロ
274	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	11.9	0.8	0.7	-	アスナロ
275	6区	SD4028	中層	角棒	-	-	-	7.9	1.2	0.6	-	ヒノキ
276	6区	SD4028	中層	削片	-	-	-	6.6	3.2	0.4	-	ヒノキ
277	6区	SD4028	中層	薄板状(加工痕有) 板材	-	-	-	10.9	2.9	0.5	-	ヒノキ
278	6区	SD4028	中層	板材加工痕有	-	-	-	13.7	2.5	1.2	-	アスナロ
279	6区	SD4028	中層	ヘラ状	-	-	-	11.5	2.0	0.7	-	アスナロ
280	6区	SD4028	中層	角材削片	-	-	-	8.2	1.9	0.7	-	サカキ
281	6区	SD4028	中層	斎串	-	-	-	4.3	1.7	0.3	-	アスナロ
282	6区	SD4028	中層	板材	-	-	-	3.9	2.4	0.1	-	ヒノキ
283	6区	SD4028	中層	斎串	-	-	-	12.6	3.1	0.3	-	ヒノキ
284	6区	SD4028	中層	斎串	-	-	-	12.2	2.1	0.2	-	ヒノキ
285	6区	SD4028	中層	曲物底板	-	-	-	25.0	6.1	0.75	-	ヒノキ
286	6区	SD4028	中層	曲物底板	-	-	-	31.7	3.2	0.6	-	ヒノキ
287	6区	SD4028	中層	板材	-	-	-	55.9	8.3	3.3	-	ヒノキ
288	6区	SD4028	中層	先端加工木	-	-	-	179.5	11.8	8.0	-	クスギ
289	6区	SD4028	中層	先端加工木	-	-	-	213.6	-	14.5	-	クスギ
290	6区	SD4028	中層	木礎?	-	-	-	89.1	7.7	4.3	-	コナラ重属
291	6区	SD4028	中層	木礎	-	-	-	134.2	27.6	17.4	-	コナラ節
292	6区	SD4028	中層	木礎	-	-	-	134.2	27.6	17.4	-	コナラ節

木器観察表 2

報文番号	地区名	報告遺構名	報告層位	器種	法量 (cm)						材質	
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)		その他 (cm)
293	6区	SD4028	下層	斎串	-	-	-	11.1	2.0	0.3	-	ヒノキ
294	6区	SD4028	下層	板材	-	-	-	13.3	1.5	0.2	-	ヒノキ
295	6区	SD4028	下層	板材	-	-	-	6.4	2.2	0.2	-	ヒノキ
296	6区	SD4028	下層	斎串?	-	-	-	10.8	1.1	0.2	-	モチノキ属
297	6区	SD4028	下層	板材	-	-	-	10.1	2.6	0.1	-	ヒノキ
298	6区	SD4028	下層	斎串	-	-	-	13.6	1.6	0.3	-	ヒノキ
299	4-4区	SD4028	下層	斎串	-	-	-	21.2	2.1	0.3	-	ヒノキ
300	6区	SD4028	下層	斎串	-	-	-	25.7	2.0	0.4	-	ヒノキ
301	6区	SD4028	下層	板材	-	-	-	21.3	1.7	0.9	-	ヒノキ
302	4-4区	SD4028	下層	木簡	-	-	-	14.7	3.3	0.3	-	針葉樹 (ヒノキ?)
303	6区	SD4028	下層	木簡	-	-	-	7.8	4.3	0.4	-	針葉樹 (ヒノキ?)
304	6区	SD4028	下層	薄板材	-	-	-	9.8	2.4	0.2	-	ヒノキ
305	6区	SD4028	下層	木錘	-	-	-	13.5	7.2	6.5	-	ヒノキ科
306	6区	SD4028	下層	火鑽臼	-	-	-	27.2	2.3	2.1	-	モチノキ属
307	4-4区	SD4028	下層	先端加工材	-	-	-	17.8	6.1	4.7	-	モチノキ属
308	6区	SD4028	下層	丸棒	-	-	-	39.5	-	1.8	-	クマヤナギ属
309	4-4区	SD4028	下層	枝払い (杭)	-	-	-	48.3	-	3.0	-	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
310	6区	SD4028	下層	切断片	-	-	-	5.8	-	3.4	-	コナラ属クスギ節
311	4-4区	SD4028	下層	杭状	-	-	-	13.4	-	3.2	-	サカキ
312	6区	SD4028	下層	不明	-	-	-	9.6	4.8	1.1	-	ヒノキ
313	6区	SD4028	下層	板材	-	-	-	6.4	1.8	0.9	-	アスナロ
314	6区	SD4028	下層	削片	-	-	-	4.3	2.9	0.4	-	サクラ属
315	6区	SD4028	下層	角材	-	-	-	86.9	8.4	6.9	-	針葉樹 (ヒノキ?)
316	4-4区	SD4028	下層	板材	-	-	-	5.0	0.9	0.4	-	アスナロ
317	6区	SD4028	下層	角棒	-	-	-	8.7	0.9	0.7	-	ヒノキ
318	6区	SD4028	下層	ヘラ状木器	-	-	-	7.1	2.1	1.1	-	ツバキ属
319	6区	SD4028	下層	先端加工木	-	-	-	23.9	-	1.5	-	アカメガシワ
320	6区	SD4028	下層	先端加工 角棒	-	-	-	25.7	1.4	1.0	-	ヒノキ
321	6区	SD4028	下層	先端加工棒	-	-	-	6.5	-	1.3	-	アカメガシワ
322	6区	SD4028	下層	先端加工棒	-	-	-	11.3	-	1.2	-	アカメガシワ
323	4-4区	SD4028	下層	先端加工棒	-	-	-	69.0	-	1.9	-	サカキ
324	6区	SD4028	下層	鞘板材	-	-	-	81.2	14.2	4.6	-	ヒノキ
325	4-4区	SD4028	-	棒状斎串	-	-	-	12.4	1.0	0.7	-	ヒノキ
326	4-4区	SD4028	-	柄	-	-	-	14.4	-	2.6	-	アカガシ亜属
327	6区	SD4028	-	斎串	-	-	-	-	1.85	0.38	-	ヒノキ
334	6区	SD4030	-	角材	-	-	-	6.5	3.7	1.7	-	ヒノキ
399	5区	SX5010	-	下駄	-	-	-	11.0	6.9	3.3	-	マツ属複雑管束亜族
400	5区	SX5010	-	漆器椀	-	-	-	-	-	-	-	ツバキ属
537	6区	SD5008	-	不明	-	-	-	6.3	4.1	1.1	-	ヒノキ
538	6区	SD5008	-	箸状木器	-	-	-	3.2	-	0.5	-	スタジイ
539	6区	SD5008	-	曲物側板	-	-	-	4.7	1.7	0.3	-	ヒノキ
540	6区	SD5008	-	曲物側板	-	-	-	4.3	1.95	0.3	-	ヒノキ
541	6区	SD5008	-	曲物側板	-	-	-	11.0	2.9	0.3	-	ヒノキ

木器観察表 3

報文番号	地区名	報告遺構名	報告層位	器種	法量 (cm)							材質
					口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)	
542	6区	SD5008	-	板材	-	-	-	10.3	16.2	2.3	-	ヒノキ
543	6区	SD5008	-	布巻具	-	-	-	24.8	3.3	2.5	-	モミ属
544	6区	SD5008	-	板材	-	-	-	32.7	10.2	2.6	-	ヒノキ
585	6区	遺構外	-	角材 (先端加工)	-	-	-	49.0	43.0	2.9	-	アスナロ
606	6区	SD6006	-	曲物底板	-	-	-	13.2	2.2	0.6	-	ヒノキ
607	6区	SD6006	-	齋串	-	-	-	10.8	1.7	0.2	-	ヒノキ
608	6区	SD6007	-	杭	-	-	-	75.5	-	7.8	-	エノキ属
636	6区	SD6008	-	曲物側板	-	-	-	13.3	0.9	0.3	-	ヒノキ
609-1	6区	SE6001	-	曲物側板	-	-	-	-	-	1.3	-	針葉樹 (ヒノキ?)
609-2	6区	SE6001	-	木釘	-	-	-	1.1	-	0.5	-	樹種不明
609-3	6区	SE6001	-	木釘	-	-	-	1.1	0.7	0.4	-	樹種不明

表 8 石器観察表 1

報文番号	地区名	報告遺構名	報告層位	器種	材質	法量 (cm)							重量 (g)
						口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	その他 (cm)	
6	4-4区	包含層	5層	石鏃	サスカイト	-	-	-	2.2	1.7	0.3	-	0.7
350	5区南	SD5001	-	石鏃	滑石	-	-	-	-	-	-	-	1600
638	6区	SD6013	-	石槍丁	サスカイト	-	-	-	8.6	4.1	1.3	-	48.2
661	5区	遺構外	-	石鏃	サスカイト	-	-	-	3.3	1.6	0.3	-	1.7
602	6区	SD6004	-	石帯	サスカイト	-	-	-	2.9	1.9	0.6	-	6.5

写真図版



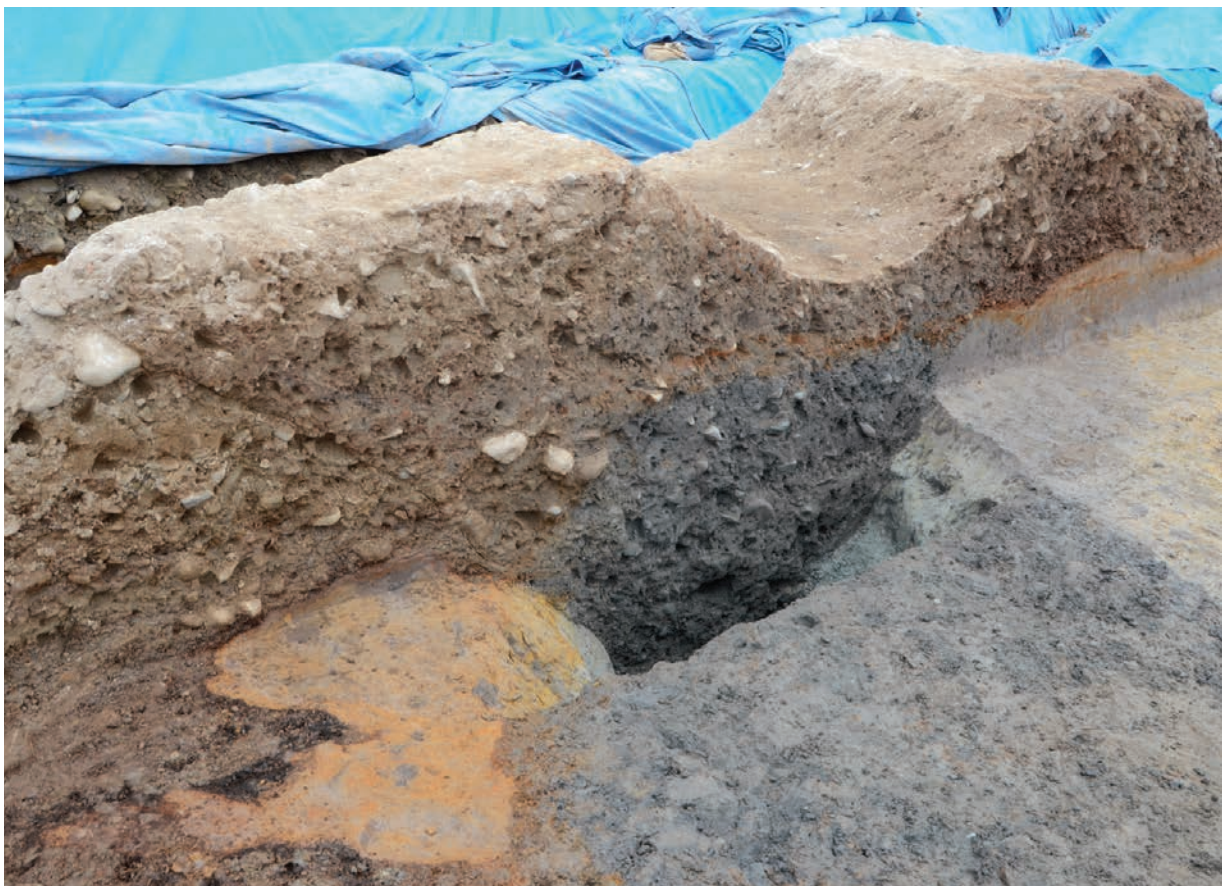
調査地遠景（南から）



6区 3面全景（直上から）



6区 3面全景（南から）



6区 SD4028 土層断面（南東から）



6区 調査区西壁 (SD4028 部分)



SD4028 木簡出土状況



SD4028 木製品出土状況



SD4028 木簡出土状況2



SD4028 土師器出土状況

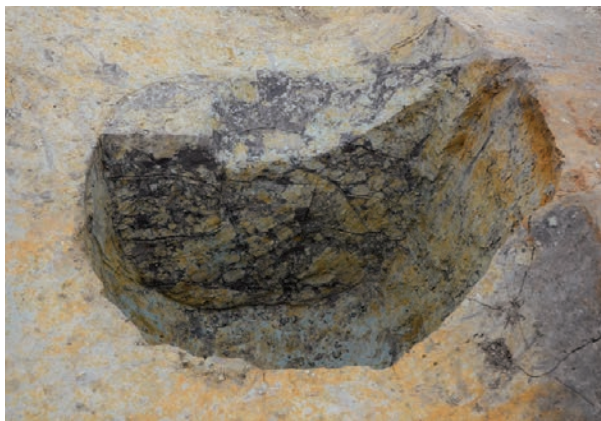


6区 SD5030、SP6003 検出状況（南から）



4区 SB4002、SB4003 検出状況（北から）

図版5 遺構写真5



SP6003 断面



SP4053 検出状況



SP5008 断面



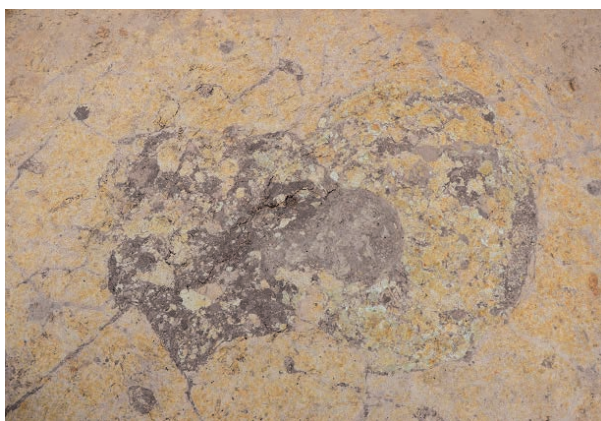
SP4053 断面及び遺物出土状況



SP4056 断面



SP5056 検出状況



S04044 検出状況



SD4019 断面



4-2区 1面完掘状況（南から）



SE4001 検出状況



SE4001 断面



SD4005 SD4006 完掘状況



SD4017 断面



SD4004 断面



4区 土器溜り検出状況



5区 1面完掘状況（東から）



SX5008 断面



SD5003 下層足釜出土状況



SD5003 完掘状況



5区 2面完掘状況 (南から)



SZ5001 検出状況



SZ5002 検出状況



SZ5013 土器出土状況



5区 畦畔検出状況



4区 SD4021 柱穴群完掘状況（北から）



SD4021 完掘状況



4区 SD4021 断面



SD4030 断面



SD4031 断面



SD5008 完掘状況 (南から)



SD5009 断面 (西から)



SD5008 縦断面



SD5008 断面 (南から)



SD5008 底面の状況



SD5008 土器出土状況



5区 2面北半 完掘状況



5区 3面完掘状況



5区 3面完掘状況（遠景）



5区 3面南側 遺構検出状況（東から）



6区 1面完掘状況



6区 西壁土層



6区 北壁土層



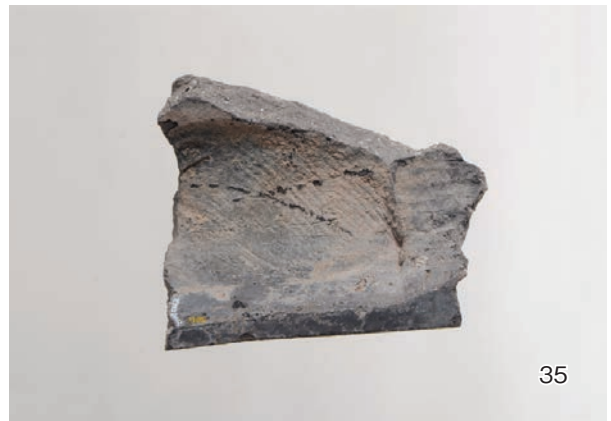
5区 西壁土層



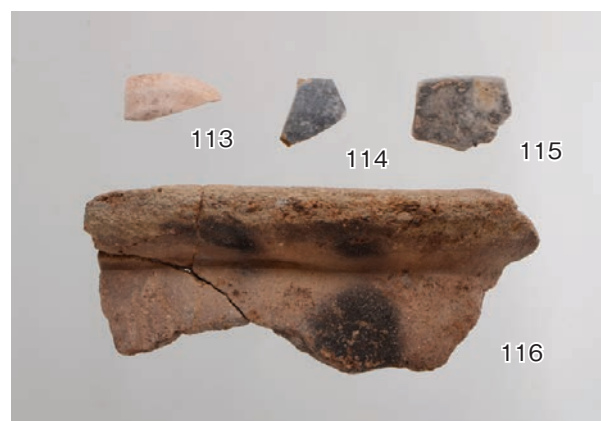
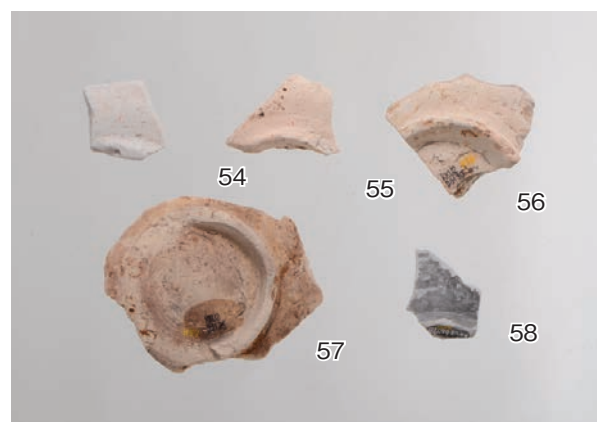
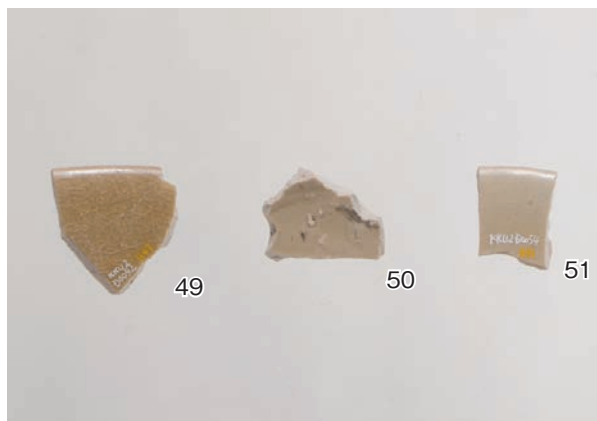
5区 西壁土層2

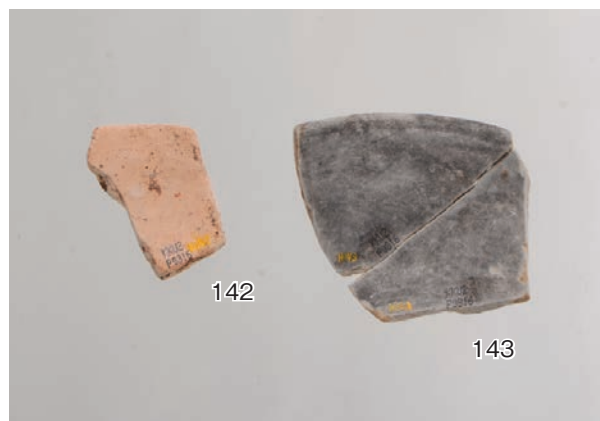


SD4028 出土木簡 302, 303 (赤外線写真)



図版 17 出土遺物写真 3







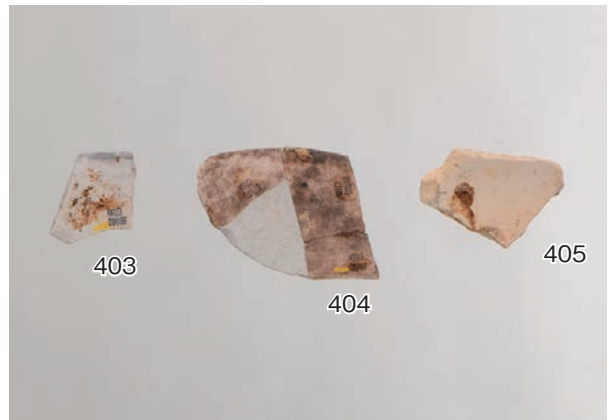
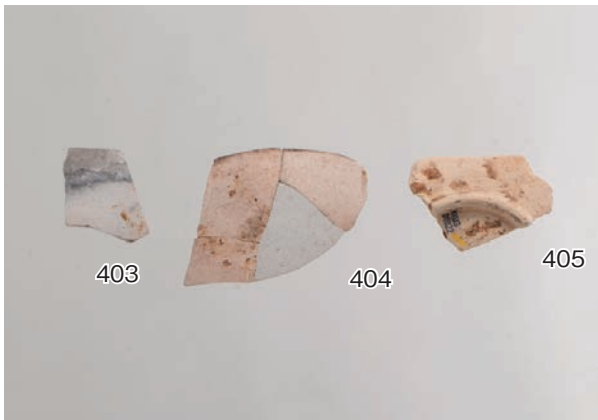


図版 21 出土遺物写真 7

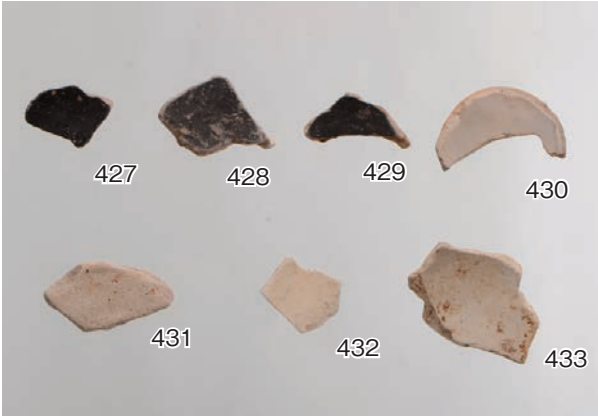




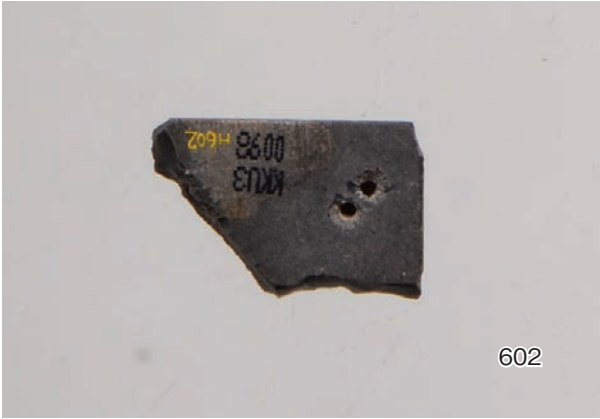




図版 25 出土遺物写真 11









299



298



293



304



303



284



327



305



302



281



295



296



272



297



278



300



307



285



543



306



308



399



544

報告書抄録

ふりがな	きしのうえいせき							
書名	岸の上遺跡 I							
副書名	国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	第 6 冊							
編著者名	竹内 裕貴							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	2019 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
きしのうえいせき 岸の上遺跡	香川県丸亀市飯山町 川原	2021		34° 25' 13"	133° 85' 20"	2014.11 ~ 2015.6	2225m ²	国道 438 号線 改築事業
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	土坑・溝・井戸・柱穴		土器・鉄製品・木製品・ 瓦		木簡などを含む古代の大 規模な溝。古墳時代の総 柱建物と、それらを囲む 溝。	
要約	旧河道に挟まれた微高地上に遺構が形成され、弥生時代以降の生活痕跡が確認できる。特筆すべき成果として、古墳時代後期の 2 × 3 間の総柱建物が 2 棟並んだ状態で検出された。同時期の県内の事例を見ても規模、配置や付属施設の点で突出する。また、古代には遺跡北端で大溝が検出される。7 世紀末～8 世紀の遺物が多く出土し、県内でも珍しい古代の文字資料である木簡をはじめとした多くの木製品が出土した。そのほか、官衙の存在を示唆するような遺物も多く出土している。							

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第 6 冊

岸の上遺跡 I

2019 年 3 月 18 日

編集 香川県埋蔵文化財センター

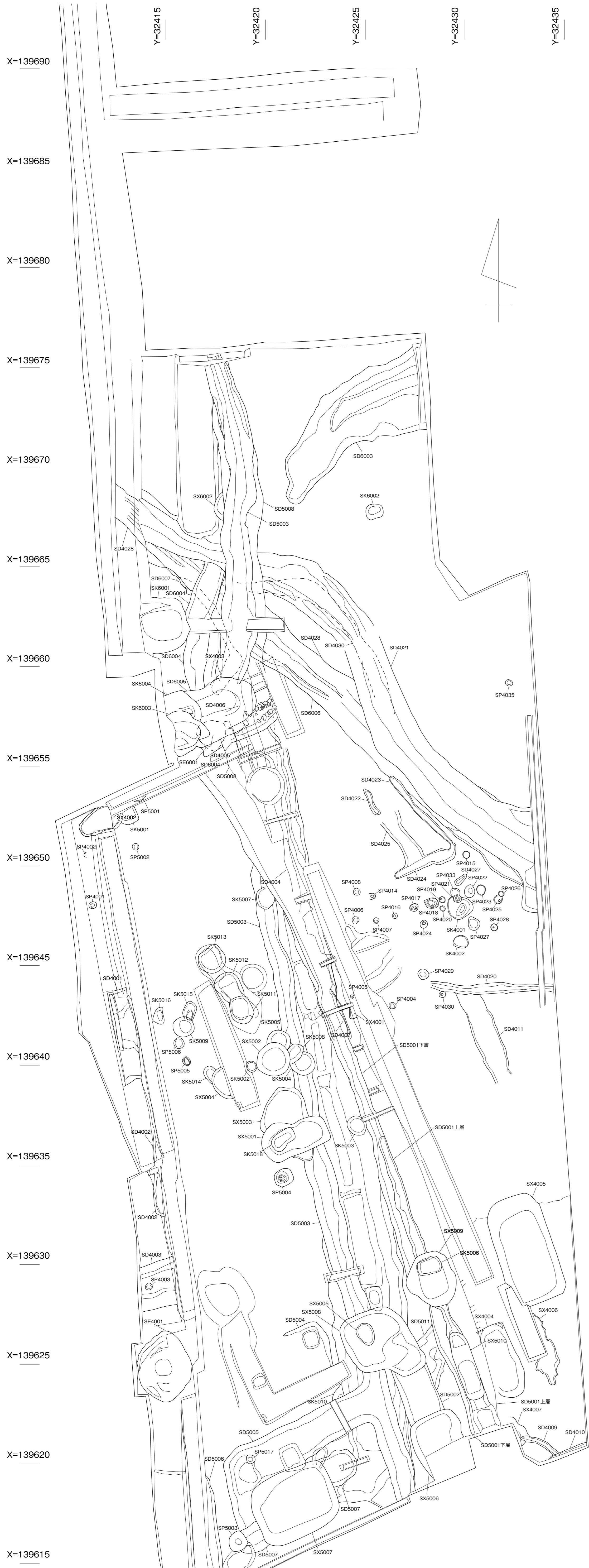
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷株式会社



付図1 岸の上遺跡I 1面平面図



付図2 岸の上遺跡Ⅰ 2面平面図



付図3 岸の上遺跡 I 3面平面図